

ユリイカ

Eureka,

エクスタシス

青龍 éκστασις;

しやりふかふ

つーか、バス停で、ほんやり。R a d が耳に、i P O D n a n o .

知らなだれかの『ぶろっ』。

ケータイでこれ見てた。

.+.。ooo。 ∈ ・♥≡ B'' .+.。ooo。 ∈ ・♥≡ B'' .+.。ooo。。

(*♣\$)!

あ t=U のぶろっ t=" おー(∀)!

トも t=" ちわ (ゝ♣・○)*:.。☆..。

ゆ L1 汰ノ い U のソリや t=あノ(ω)

こんぐら L1 力な(◆、V°)*.

どω②絡ωでくでるト嬉 U L1 でっ(*●♣∀く\$)◆◆

L1 ッぱ L1 t=いッ U 乙ル力ら(° ♣ °)

Σ (Pq ∃ Δ ∫ o○*)*° / へ★〃

乙力 絡み矯正だ ∃ *藁(*凹 Qωo ♣*)◆

柿仔 ∃ □ d・3°)◆。+

ス t=あーッ(\$∀)a

.+.。ooo。 ∈ ・♥≡ B'' .+.。ooo。 ∈ ・♥≡ B'' .+.。ooo。。

字のらわつ？ いみナイ。

イミなんて、
無味乾燥^{ムミカンゾ}。

トカゲの皮膚ちゃん。
ひび乾いた、カウカウの。

リアる…

テか、

バスが

あたしの

マエに、

とまっ

た、

つつうー
コトだ
おー。

Eureka, 青龍 ἐκστασις; 1

Act 1.

As Of Now

✧ Reality is only interpretation ✧

Act 1. *As Of Now* † Reality is only interpretation †

1 ☆あたし☆

ぶしゅっー(ぶすぶすぶすーっっっ……)。^{バス}*Bus*の^{エア}*'Air Brake*。^{マシン}*MACHINE*
の無機質^{ムキシツ}ナおと。レクイエムにしか、キこエない。^(°ω°)

ドアーが、ひろく。ステップが、ある。*All hope abandon, ye who
enter here.*

あがるノ？

はあ。

ケド、あガッタよ。えらべナイじゃん。あハは。あがんナかつ
ラ、乗れ^のネーし。あがつ^テカラ、ここにイル、いまが、ある。それ
ダケシカナイ、世界^{せかい}。

血^ちも、涙^{なみだ}も、ナイ。

わかってルよ。わーってつケド、
わかるつて、なんのコトなの？
ケータイを、タップ。ちゅーガクの、
……タタかれテるし。(・_・) ウラサイト、
っーか、
見ル。
またかよ。

ユリイカ キメーよ、くんじゃねー

[匿名さん] 12/09 02:12

ブサのくせに自己中 死

[匿名さん] 12/09 02:15

あたし、ユリイの友だちだけとおさあ、
カノジョ、もおサイトは見ないから

[匿名さん] 12/10 09:52

↑自作自演 乙かれ

[匿名さん] 12/09 09:55

プッ

[匿名さん] 12/09 10:02

ムカつくんだよ、ダレだか、わーってんだから
ナ～

[ユリイのトモダチ] 12/09 15:43

↑プッ で？

[匿名さん] 12/09 15:59

と、自演魔が申しております ワワワ

[匿名さん] 12/09 15:59

メンドクせー……

見^みなきや、イーとか、説^{せつとくりよく}得力^{とく}ねーカラ。

バカじゃね？ タタかれたコトねーやつのセリフ。説^{せつとくりよく}得力^{とく}ねーカラ。サイトで、たたかれてカラ、エラソーに説^{せつきよう}教^{きやう}しろ、つーの。

見^みナイことはできるケド、氣^きにシないコト、できねーんだから、同^{おな}じじゃなくね？

あーあ、死^しんぢやいテーなあ（笑^{わら}）。

てか、タッチパネルを、タップして、スクロール。

AN^あKA^んちゃんのホムペ、ひらく。ブ^みログ、見る。

彼女^{かのじよ}のコト、ぜんぜん、知^しンねー。ケド、好^すき♡

ほんとーに、女^{おんな}の子^こか、どおーかも、わかんねー、ネカマかも、だケド、どおダツて、いーよ。あたまいーいカラ、スキ。いちおー、

14 サイで、中^{ちゆう}2で、あたしと同^{おな}じだあー。

「おはゆー♪

みのナ、元気してるン？

月曜、ガッコ、メンドいネー

わたり、L1マ起きたわ？

ちよーフラれて病んでルよー

12/11 7:09 」

そーそー。

ナンでさ、モテる女と、おんなモテねー女おんなってのが、あるワケ？ ちよ

ームカつくんだけど。

ンなこといつでも、しょーがない。それが、ゲンジツ。はあ。

不公平じゃなくね？

差別じゃん。差別だおね？

ヨる人で、日ごろ、ただしいコトしてても、彼氏できるわけじゃ

ねーし。意味ナイじゃん、正義っつーモン。

だいたい、魅力☆って、なんなの？

微笑みをたやさず、あかるく、ポジティブなら、男の子にわ、み

りょクある女、っつーわけでもねーし。

あー、うぜー。

そーダトしても、生まれつきそおゆう性格じゃないコは、生まれ

つきそおーゆ性格の子にくらべて、2バイ努力が、ひっよーで、

不公平じゃなくね？

ダルいことゆわれたくなイから、さきにゅーケドさー、ごい不

公平だよ。

人間って、ぜったい、平等になれナイ。

こーゆーと、平等びようどうツテ意味いみわ、そーゆーコトじゃナインだよねー
とか、めんどくせーコトゆわれるケド、んなのキレイゴトにしか、
きこえねーカラ。

現実げんじつに不平等ふびようどうを感じかんてンダカラ、不平等ふびようどうナンだよ。ナノに、ぢや
ナイ、ゆわれたつて、うつぜーよ、それが実存じっぞんだろーがよ！

実存じっぞんは、本質ほんしつに先行せんこうすンだろ？

ヒガみだお。

わりーか？

イヤねーのカよ、つか、

ナンデ、んな、めんどくせールールなわけ？ やってらんねーし。

グダグダいつてゐるあいだに、ガツコ着ついた。

校門こうもん、すごく高くそびえて見えるみ。

イスラエルの民たみが見た、バビロンのイシュタル門もんみたい。

っーか、地獄門じごくもんみたいに見えるみ。

2 あたし in 人気サイト REAL WORLD

ガッコー、やっと終わった。ホッ あたし、遠距離通学ナンデ、帰りには、いつも独り夕方。帰り道って、なんか素になる。冬の夕日、カナシイ、とか。

ANKAのこととかが、ヒトゴトじゃなくなったのわ、昨日カラ。コウキくん……あーあ。

トモダチから、彼のアドきいたところまでは、ヨかったんだよなー。

メール「きゅーにゴメン。ユリイカだよ。きいてもらエルだけでいいんだ。お願います…」って、よび出した。ケド、会ったら……

「カンちがいすんなよ。キヨミミねーカラ、オレ」

スゲー。まち？ いきなりかよ。話くらい、きいてくんナイの？

あたし、ガクゼン。フラれるかも、とわおもってたけどさー。

最^{さい}アクだよ。ドンナ顔^{かお}して、ガツコ来^くればいいのよおー、って、おもいながらも、今日^{きょう}来^きたけどさー。休^{やす}みたかったおー。

授^{じゅ}業^{ぎょう}なんか、いつナニが、終^おわったか、おぼえてねー。終^{しゅう}業^{ぎょう}のチ

ヤイムも氣^きがつかなかった。

ただ、オートマチックにしくして、教^{きょう}室^{しつ}出^でたダケ。記^き憶^{おく}ナシ。

帰^{かえ}り道^{みち}も、ナンも、見^みえテなかつた。正^{せい}門^{もん}出^でてから、バスの

電^{でん}車^{しゃ}に乗^のって、また、バス乗^のって、降^おりたハズなんダケド、とちゅ

ーの風^{ふう}景^{けい}も、ナンも、見^みえてナカつた。

もー、わすれよー。それっきやねーよ。ハア

ケータイ片^{かた}手^てで、ボーつと、サイト見^みル。……タタきのレスふえ

てるし。どーせ、あたしやー、性^{せい}格^{かく}わりーし、ブサイクだお。だか

ら、モテねーんだよ。

とーとつに、激^{げき}情^{じょう}に、襲^{おそ}われた。コイツらの家^{いえ}のドア突^つきやぶツ

テ、ガソリンまいて、焔^ひイツケテ、大^{おお}笑^{おわ}いシテヤリタイ(笑)。

ドす黒イ噴煙^{ぐろ ふんえん}みたく、嵐^{あらし}の雲^{くも}のよーナ、凄^{すさ}まジイ怒^ど氣^きが、逆^{ぎやく}流^{りゅう}シテ、あたまのてっぺん、やぶッテ、噴^ふき上^あがる。

涙^{なみだ}が、あふれそーになった。

ナンデ、こんなに哀^{かな}しいのに、このあたしを、タタクのよ？
酷^{ひど}すぎジャンくわ。

ヒトイよーっ！

ナミダこらえて、街^{まち}を、なんモカンも、ぶちこわしたイきぶんで、歩^{ある}いているうちに、どうにもなんナイ、現^{げん}実^{じつ}のせい^{せい}で、やがて、シリアスナ、きぶんに、なつてくる。家^{うち}に着^つく。

かちゃ！ バタン！

玄関^{げんかん}に、靴^{くつ}、脱^ぬぎすてる。

「おかえりなさい」

あたし、ムシして、階^{かい}段^{だん}を、上^あがる。

「クリームサンド、買^かっておいたから」

「イラねー」

2階にあるじぶんの部屋の鍵しめて、号泣した。クダうねー。ゼンブくだうねー。

「ユリイカちゃん、ご飯よ」

ムリっ！ あんたら、幸せで、ナンも、わかつちやいねー。あの^{ひと}人たちにや、なんも、わからねーよ。

あたし、独り^{ひと}ダ……………

ともだちも、恋^{こい}も、ギャルも、ムナシイな。

0時^{れいじ}くらい、ケータイを、手^てにした。

ANKAちゃんに、ナンカ、書きこもーカナ、っておもって……

このままじゃ、ちょーまちやばいし。

ホムペ、ひらく。

新しい書きこみが、あつた。
あたかも

カノジヨの。

「ダレカ、わたしといつしよにいこ

りあるに叛^{ソム}コーうよ

ダルすぎル

ぢやなくナイ？

わたし、あたら^{わーるど}うー世界に

ふみこモーとひてンだあ

12/11 11:23 ー

あたし、そッコー、レスして、

「イミフ

それッテ、ドコ？

あたし、いきたーい

ふうれタあー（笑）

12/12 0:11 」

すぐに、ANKAの、書^かきこみが、

「いいヨ

ッれてッテあげル

モバゲーぢやない

ッの百^{ひゃくまんぼい}萬倍すごいよ

<http://www.realworld.com>

來^きなさい

12/12 0:54 』

モバゲーじゃナイ、って、どーゆーコト？

っーか、あたし、モバゲーの、きぶんじゃないんだケド……

「でも、ANKAちゃんを信^{しん}じよお。ほかに、選^{せん}択^{たく}肢^し、ねーし」

あたし、まちで現^り実^{ある}へ、復^ふ讐^{くしゅう}しタイ。りあるを、コロしたい。

貼^はってあつたURLに、アクセス。サイトが、立^たち上^あがった。

へえー、こんなの、あるンだぁ……

まばゆい 虹^{レインボー} カラーや、プラティナや、ゴールドの、つぶつぶが、

チラチラゆれながら、きらめく背^{はい}景^{けい}。

ふしぎな音^{ミュージック}樂^クが、ながれテルウ……

REAL WORLD だって……。りある・わぁーるど？ 外^{がい}国^{こく}のサ

イト？ なんか、キンチョーするおー。しっかりしよお。まぢに、

なんなくっちゃっ!?

ENTRE の文字が、あつた。あたし、タップする。

ID とパスワードの、入力画面が、立ち上がる。

新規のばあいは、どーしたらいいの？ こまったー。あたし、説

明の英文（たぶん、英語・・・）、読めない・・・。

もつと、よく見ると、画面の上に、言語の選択が、あつた。国名と

国旗のアイコンが、たくさん、ならんでいる。

あつた、あつた、Japanese……

それ見て、まずは、登録画面に移行。

入力項目わ少ない。アドレス、4文字、8文字のパスワード。パ

スの文字わフォントとか、えらべた。絵文字や、画像もOK！ か

なりたのしい。あたし、そーとー変なのにしたおー。うフ。

ハンドルネームわ、Eureka じゃ、いいや。

で、それからあ……、これ、なに？

ひとみにんしょう
瞳認証！

そーそ、あたしのケータイ、できるんだよ、これ。アイコンを、タップ。自動的にカメラうごいて。パチリ。

これでダメ？　すごい、かんたん。

でもって、さっきの **ENTRE** 画面にもどって、ID（メアド）& パスワードを、入力。
にゆうりよく

あー、すんごおい。

『世界』が、あらわれた。あたしの眼を、さいしよに奪ったのは、見たこともない蒼さの、空だ。
せかい　あお　そら

蒼く燃えて、かがやくみたいなのに、澄み切っていて、しずかで、深くて、吸いこまれそう……。まっ蒼だ。
あお　も　す　さお　き

そして、古い街なみが……
ふる　まち

やさしい、あたたかみのある、レンガいろの屋根。やわらかな、黄白色の壁。パステルカラーのバルコニー&窓わく。白い洗濯ものが、ゆれてる。さまざまなタイプの人々が、歩いている。
おうはくしよく　かべ　あんどうまど　しろ　せんたく　ひとびと　ある

むかしのイギリス、ビクトリア朝時代のジェントルマン。中世ド
イツの農民のような人。一九二〇年代のシカゴのギャングみたいな、
ストライプのスーツ、バレンチノの帽子。ロシアの祭礼僧みたいな、
絢爛な貫頭衣に、長い白鬚の老人。ツノが、生えて、毛むくじや
で、翼の生えた人。アンドロイドや、異星人みたいなキヤラも。

藁をつんだ荷車を牽くロバや、瀟洒な馬車を牽いて、誇らしげに、
ひづめの音をひびかせる茸毛の馬。龍騎兵の乗った威風堂々の騎馬。
木製の車輪の馬車が、カタコトカタコト音をさせていきかう。

タープをはった露店に、いろあざやかな野菜、オリーブオイルの
樽、スパイスのつまった麻袋、鍛冶屋のまえに金鎚の看板、皮なめ
し職人、パイプを吸う。船荷を背負う人夫が、大樽の上で、腕相撲。
羊毛のつまった袋が、つまかさねられ商店。肉屋の軒下にぶら下が
ったソーセージ…

大きなハムが、口をひらいて、吹き出しに「ここをクリック。僕

のプロフを見てね」って書いてある。こ、これ、アバター？ 変わったヒトだー……

でも、ともかく、すごい。ちがう世界みたい。

すべてが、真実みたいにかがやいている。あざやかで、深く、くつきりとして。真実だ……

カフェのテラスのテーブルに人が、あふれ、みんな、たのしそう
だ。まるで、すべて、サーカスみたい。だって、広場じゃ、大道芸人
のジャグリング、ピエロのパントマイムに、ジプシーの占い師、炎
の剣を呑む人 e t c

あれ？

中空に架かるように、半透明のメニューが、泛かび上がってる……

すごい、たくさん。へへ、日本語だから、だいじょーぶ（たぶん）。

でも、メニューから、なにをえらんで、なにをしたらいいのか、
ぜんぜん、わかんない。

ここからさき、どーしたらいいのか、ぜんぜん、わかんない。

ANKAちゃんに、きかなくちゃ。でも、彼女に連絡するには、ホームペにカキコするしかないんだけど、いったん、これ、終了しなくちゃ、ダメかしら。

めんどイなー。

って、おもっていたら、「メンバーズ（ハンドル・ネーム）」つてのが、眼につく。これをタップ。

出たー、ずらっと、ならぶハンドル・ネームの列。

ひやあり、すごい数。あつた、あつたよ、おもったとおりだ、A

NKAって、あつたよ。あたしは、まよわず、タップ！ おりやつ！

すると、半透明な、Accept（受諾）の文字が、泛かび……

おわああつ！？

画面に、赤いちぢれ髪がみの、女おんなのコが！出て来たで き。

元気げんきのあふれてる、くりくりした眸ひとみで、ようすをうかがうような、

おもしろがっているような、かしこそーな表情ひょうじょう。

とツても生意気なまいきそー。それでいて、どことなく、おとなっぽい顔かおだ。

もしかして、このキャラが、ANKAちゃんのアバター？ イメ

ージちがうけど、アバターだから、リアルANKAに似にているとは、

かぎらないか……

アバターが、しゃべる。

「来たね、ユリイカ。すぐ、わかったよ。」

待まってたわ。

はじめまして、だよね？

こういうかたちで会あうの、はじめてだから。

わたしが、ANKAよ。リアル・ワールドへ、ようこそ。ここが、

眞実^{しんじつ}の世界^{せかい}への入り口^{ぐち}よ」

あたしは、小型^{こがた}マイク&イヤホン^を、ケータイに差しこむ。

「これでいいのかな、ANKAちゃん、きこえる？」

「きこえるよ、ユリイカ。

そうそう、このまえ、確認^{かくにん}しなかったけど、あんたのケータイつて、SuperHyp-iz27（スーパー・ハイプ・イージー・ニイナナ）だったよね？

OK、それなら、だいじょうぶ。

じゃ、あとは、明日^{あす}までにTrans Sky-High っていう、アプリをダウンロードしてくれるかな。フリー・ソフトだから。ポータル・サイト（Yahoo!とか、Google とか）の検索^{けんさく}で、すぐさがせるよ。

これがあれば、メモリが小さくとも、100テラなみにあそべる。

でも、それだけじゃない。まだ、あんたには、よいいしてもらい

たいものがあるんだ。

しんぱいないよ、ぜんぜん、かんたんだから。メニューのなかに、グズツてのがあるでしょ？　そこ、タップして」

した。

「でね、こんどは、オプション・アタッチメントつて、ゆーのがあるから、そこを」

した。

「H M ー（ヘッド・マウント・インタラクティブ・インターフェイス）つての、あるでしょ。

それを買（か）いものカゴに入（い）れて。

で、あとは、あんたの住所（じゅうしょ）とか、入力（にゅうりょく）しといて。いま、深夜（しんや）だから、着（つ）くのは、明後（あさ）日（あ）ね。

支払（しはらい）方法は着（ちやく）払い（はらい）をえらんでおくのよ。クレジット・カードつて、持（も）ってないでしょ？　料（りょう）金（きん）表（ひょう）があるから、それ（み）見て、お金（かね）よう

いしといてね。

日本にも、RWと提携した会社が販売してるから、できるのよ」

「へえ、ANKAちゃん、なんでそんなこと、よく知ってるの？（やつぱ、ネカマのオヤジか？）」

「あんたが知らなさすぎるわ。」

知識はアイテムよ。

なんのアイテムもなくって、無防備な、素ツ裸の状態で生きていこうとする人の、気が知れないわ。

それじゃあ、カモられるために生まれてきたようなもんよ。

1人の人間が素手で、十数人の敵と闘うのって、むずかしい。マ

シガンがあれば、百人を相手にできるかもしれない。でも、智慧

と知識とがあれば、百万人の敵にだって、勝てるのよ。

ついでに、教えとくけど、このRW (REAL WORLD リアル・ワ

ールド) って、もともとは、MIT (マサチューセッツ工科大学)

ふたりの大学院生が、遊びでつくったMUD（マルチ・ユーザ・ダンジョン）だったのよ。世界中のユーザーと、プレイできる、インターネット・ゲーム。

サイバー・スペースのなかで、じぶんの好きなキャラになって、バーチャル・リアリティの世界を舞台に、自由自在に活動して、いろいろな国の人たちとバトルしたり、競いあったり、コミュニケーションしたりできる。

で、人気ありすぎで、ビジネスになるってわかった2人が会社を立ち上げ、本格的に活動して、いまみたいに、世界でも、有数のネットワーク・ゲームになった、つつーわけ」

「そんなの知らなかったよお。」

有名なんだ」

「そーとーね。」

さあ、ともかく、いろいろじゅんびするわよ。で、H M ー が着く

までは、フツのケータイ画面で、がまんしてね」

「それって、どういうこと？」

貯金ちよきんあるから、お金かね払うのは、なんとかするけど、なんにつかうもんなの？」

「そのものが着ついてから、説明せつめいするわ。じやないと、レクチャーめんどくさいから。」

サイバー・スペースに入るはいための、ドアだとおもってれば、いいわよ」

「ぜんぜん、わかんないよ」

「いいから、あんたも、アバターつくるのよ。わたしが、教おしえてあげるから。ゆうとおりにしてくれる？」

あたし、じぶんのアバターをつくることになった。さいしょ、じぶんとは、ぜんぜん、ちがうタイプの、長身ちようしんでクールな、かつこいい女おんなをつくったのに、

「だめだね。あんた、そんな大人おとなじゃないでしょう。

会あったことなくとも、それぐらいわかるよ。

少すこしくらいなら、美び化かしても、いいけど、それ、やりすぎ。アバ

ターは、あんた似ににしろって。

現げん実じつ逃とう避ひはN Gだからね」

「それ、いつてること、矛盾むじゆんしてないの、ANKAちゃん」

そういいながら、リアルANKAちゃんも、このアバターみたいな感かんじなんだ、って考かんがえた。

「あー、あと、そのANKAちゃんっての、やめてくんない。AN
KAで、いいよ。なんか、めんどくさいし」

「わかったよ。じゃあ、ANKA、現げん実じつに叛そむくのに、なんで、現げん実じつに
似にせなきや、なんないの？」

「逃とう避ひすんのと、捨すてるのって、ぜんぜん、ちがうよ。

じゃあ、衣い装しょうとか、テキトーに、えらんでくれるかな」

あたし、しかたなく、長い茶髪で、あごの小さい丸顔の、唇のつき出た、胸のない、1人の女の子をつくった。

けど、眼は少し大きめで、まつ毛はかなり長めに反らせる（笑）。

「へえー。まじで、こうなんだ。

意外に可愛いじゃん。

なんでフラれちゃったの？」

「……………」

「あ、ごめん。

そーそー、今日は、ずいぶん、おそくなっちゃったねー。また明日、会おう。

おなじくらいの時間でいいよ。つか、時間はあまり気にしなくていい。

ここでは時間なんて、なんのカンケイもないの。

じゃーね。待ってるから」

つぎの日、あたしは、ずっとぼんやりしてた。

コウキくんが、友だちと、教室で笑ってる。

アイちゃんは、となりのクラスの女の子どうし、廊下で、しゃべってる。

距離はあるけど、きっと、おたがい意識してンだろーな……。

なんて、妄想する。

あたまんなかは、コウキくんとのあいだに、いままでにあった、いくつかの場面をくり返し考えてる。考えが止まんない。

そうやって、哀しみに、どつぷり浸かりながら、なんどもおもいだして、せつない感傷に溺れながらも、コウキくんが、じつは、あたしのコト好きだったつー事実がどこかにかくされてないかとか、さがしたりしてる。

ウケイレられナイ現実げんじつを、うけいれマイと、ひっしに抵抗ていこうしてる。
って、じぶんでも、わかつてる。ムダだし、じぶんにとって、よく
ない。

でも、どうにも、止とめらんない。

感傷かんしょうにふけていると、少し救すこわれたような、解放かいほうされたような
きぶんになる。つらいけど、甘いあませつなさの、びみよこころな心地よさ
が、わずかにいたみをやわらげてくれる。

だから、止やめられない。

けど、けつきよく、考かんがえが同じおなところを、グルグルして、身みもだ
えしてるだけだ。あたし、現実げんじつを受けとめられない。受けとめられ
なくて、同じおなところを、いったり来きたりしているだけなんだ……

なんで、こうなの？

あたしは、こうなりたくない。

なのに、あたしの気持きもちちがちつとも、いゆうこときいてくンない。

こんなで、成長せいちょうできるのかしら……

眼めのまえにある現実げんじつが画像がぞうみたく感じかんられる。塩気しおけのない、味の

うすいスープみたいに。

セロハンの影絵かげえみたいに、半透明はんとうめいな感じかんで。

こんなの、ぜんぶ、おかしいよ。

これが人生じんせいなの？　こんなの、あたしの人生じんせいじゃないよ。

もお、これから、どんなことがあっても、ほんとうの喜びよろこも、幸しあわ

せも、ありえない気がきする。

もしかしたら、これって、たとえば、コウキくと、つきあってい
たとしたって、同じおななのかもシンない。

なんか、そんな気がきしてきた。

けど、シなの、どおでもいい。ダるイ。

1日いちにちがちよー長いながよおー。

なんか、告白こくはくして以来いらい、あとになればなるほど、つらくなってい

く気がする。

元気のない、鬱のあたしに堕ちて、わるいことしか考えられなくなってきたる。

妄想が、暴走して、あたしを、ひきずりまわしてる！

妄想のなかのあたし、コウキくんや、アイちゃんにむかって、世のなか、どんだけ不公平かを、切々と、うったえてる。2人のこと、サイトに書きこんで、復讐してる。コウキくんは、残酷でイジワルな態度してる。2人に、あたしの病んだすがたを見せて、同情ひき出そうとか、してる。

あたし、すげえーめんどくせーやつになってる。わかっているけど、止まんナイ（笑）。

これがほんとの、あたしなんだよ。もおー、やめよーよ、ギャルじゃないのに、ギャルぶるのわ。あー、じぶんに戻ると、コドクだ。ぜんぶ、まやかしの、つくりモンだったんだ。ただ、ゴマかしてた

ダケ。

教室きょうしつでも、あたし、だれとも話はなさない。はやく家いえに帰かえって、AN

KAに会あいたい。RWへ、逃にげるこりある・わーどとしか考かんがえられない。

あそこにいるときだけ、じぶんだ。ここにいるのって、ただの影かげ。

授業じゅぎょうなんか、きいてないし、先生せんせいの注ちゅう意いも、クラスメートのお

しやべりも、感かんじナイ。

あたし、死しねばいいのかな。

サイトのたたき、あいかわらずだし。

タタかれてるってことが死しにやすくしてくれているみたな気きがする（けどさ、フラれたことにくらべれば、真りある実じじゃない）。

んなことで死しぬべきじゃないのわ、わあーつてる。いーいじゃん。

真しんじつ実じつなんてないんだし？ って、Devil Sideナ、あたし。

やつと、ガッコが終おわった。

帰かえる。

夜、じぶんの部屋。

あかりをおとして、ケータイ、にぎってる。

いつもどおりなんだけど、今日は、なんだか、神秘的な、気雰。
ふしぎな秘儀に、参入するみたいな、感じ。

アクセスする。

「来たね、ユリイカ。」

今日は、イデア・アースにいくよ」

「イデア・アース？」

「Iδ&α（イデア）って古代ギリシア語なんだ。むつかしい言葉だから、いまは説明しないけど、Iδ&α Earth っていうのは、理想の大地っていう意味だよ。」

みんな、I E って、よんでるわ。

ゲートってゆう、アイコンがあるでしょ」

たしかに、ある。タップしてみた。画面がめんにおさまらないくらい、
たくさんアイコンがあらわれる。スゴっ！

「それ、ぜんぶ、ユーザーたちがRWのなかにつくったワールドだよ。」

わたしのいつてる意味いみ、わかる？」

「ぜんぜん」

「たとえばさー、サイトのなかに、自由じゆうにスレッド立たてられるサイトとかあ、あるつしよー。あれと、同じ感覚おな かんかくよ。」

RWのなかに、RWみたいな、バーチャル・リアリティの世界せかいが
つくれるのよ。そーゆーサイトなの。

だから、技術ぎじゆつと知識ちしきのあるユーザーたちが、オリジナルのRWを
つくってる。RWのなかに、いっぱい、RWがある。

これが、ぜんぶ、そう。

アルファベット順じゅんだから、Iでさがして」

「え、どれ？ わかんねーよ、ANKAってば！」

あつ。…あつたよ、Isa EARTH. これか。かんたんじゃん。

よし。

出でたあ。わあー。

むかしのヨーロツパの、お城しろの門もんみたい。中世ちゆうせいゴシックとか、バロックとかの建築けんちくって、じつは、ちよつと好きすかも。

でも、ふつうじゃない。魔法まほうの世界せかいの入り口ぐちみたい。

だって、石壁いしかべが金きんいろのパウダー地じでかがやいているし、聖句せいくのしるされたクリムゾンレッドの帯おび（巻き物スクロール）というのが正しいらしい）
がついてるし…

アーチ門もんの上に、浮き彫りうえになった紋章もんしょうがある。ヘビと鷹たかとライオンと翼つばさのある大きな角おおの牛つのがからんだ意匠いしょう。わ。かつこいいー。

なんか、ワクワクするよ。

「じゃあ、つぎ。ENTERをタップして」

「わかるよ、それぐらい。少し見とれてただけじゃん。ぷいッ」

「いいね。元気になったじゃん。」

でもね、わたしの話をよくきいて。

タップしたあと、JOIN（加入）とMEMBERSの2つのアイコンが出るから、あんたはJOINをえらんで。

そこは、ご新規さんの場所だから、わたしは、入れない。

あんたは、そこで新規登録をして、そのあと、じぶん独りで考えて、IEのなかで生きるための初期設定をえらばなくちゃならないのよ」

「生きるための初期設定って、たとえば？」

「初期設定ってね、ようは、スタートラインに立つための、出発のじゅんびなの。」

IEの世界では、『クドク』ってゆう、ポイントをつめば、レベ

ルが上がって、ステータスや、アイテムや、フォース（力）がそなわるわ。

でも、さいしよは、スタートのときにもらえる500イミオンの所持金のはんいで、装備をそろえなくちゃ、いけないのよ。

これが初期設定の1。

それから、もう1つ。装備と同じくらいだいじな、いいえ、いちばん、だいじなことがあるわ。

初期設定の2。基本キャラの設定よ。

IEで生きるじぶんのアバターのキャラを設定しなくっちゃいけないのよ。

設定すると、性格や行動や運命が影響される。

どういうふうに、成長していくかが決まるの。

どお？ IEでは、じぶんを、えらべるのよ。

現実世界では、じぶんがどんなキャラで生まれるか決められない

でしよう？

それって、不当だと、おもわない？

少なくとも、わたしたちは、それが不当だと、感じるようにつくられてるわ。そう感じるようにつくられているのに、決められないのよ。

いつてること、わかる？

いじわるでしかないわ。すんぐおい不当よ。けど、I Eは、ちがう。それが自由と平等だわ」

「まち？ でも、ムリだよ、あたし。決めらんない。まだ、なんにも、わかんないもん」

「人生なんて、みんな、そーじやん？」

かるくゆーよな。

「学校卒業したら、世のなかのこと、なんも、わかんなくても、就職えらばなきや、なんないでしょ？ それと、同じ。」

就職しゅうしょくえらぶとき、ほんとうに正しい選択せんたくしてる人ひとなんか、いや
しないわ。

だれにも、結末けつまつは見えてないんだからさー」

「でも、シューシヨクって、まだ、ずいぶん、さきの話はなしだよね……」

「すぐよつ、のんきね。」

いつでも、戦闘せんとうモードで、いなくっちゃ！

そうでなきや、おもしろくないし。

さあ、そんなことより、出発しゅつぱつのための最低限さいていげんの装備そうび！ まさか、

あんたも、裸はだかでIEのなかに、飛び出としたくはないでしよ。

でも、ぜんぶで、500イミオンだからね。

装備そうびをそろえるためだけに、ぜんぶ、つかっちゃ、ダメ。はじめ

の生活費せいかつひも、のこしとくんだよ。いい？

かぎられたお金かねのなかで、えらぶんだよ」

「しつけー」。

んな、なんども、いわなくとも、意味わかるよ。

でも、だいたい、いくらぐらいまで、つかってだいじょぶなの？」

「だからっ、それは、じぶんで、考えるの！」

ただ、はつきり、いっとくけど、さいしょの、最低限の装備に、なにをえらぶかで、スタートのつらさ、そーとー、ちがうわ。よく考えてね。

IEのスタート時じつて、かなり過酷かこくな状況じょうきょうのはずだから、選択せんたくを誤あやまると、ひどいめに遭あうよ」

「ええー！ まぢで？ でも、ケータイで、なんで、そんな、怖いことになるの？」

「H M ー がくればわかるわ！」

今日のところは、設定せっていをすませるだけにしておいて。

どっちにしろ、設定せっていが終おわっても、H M ー がなくちゃ、スタートしないし。

よーするに、H M ー がなくっちゃ、参加できないのよ。

H M ー が来たら、I E の入り口で、また、会おう。

じゃー、がんばって」

「えーっ、ちよっと、待ってえ！」

「くれぐれも、金額のはんい内で、やるのよっ！」

しつけー。

あーん、しょーがない。やるっきやないってことね。あたし、と

にかく、ENTRE をタップした。画面が変わる。

すぐく、リアルな、バーチャル世界だった。

ほんとに、CG かよ？って感じの。

まるで、月面のような、音のない、微動もしない、世界。

小さなケータイの液晶パネル・モニターなのに……あたしを吸い

こんで、圧倒する、星のちる、巨大な宇宙空間。

地平線には、青くかがやく地球が見えている。

砂地すなちのような、白しろっぽい地面じめんに、起伏きふくがあつて、闇やみに白しろく泛うかび上あがる砂漠さばくみたい。

あたしの眼めのまえには、大おおきな建物たてもものの土台どだいみたいなものがある。よく見みると、それ、とてつもなく、大おおきな文字もじだ。魔法まほうの呪文じゅもんみたいな文字もじだ。きつと、1文字もじが数百すうひやくメートルぐらいあるにちがいない。

メニューのアイコンが空中くうちゅうにならんでなきや、怖こわいくらい。これ、50インチ画面がめんで見みてみたいなあ。

JOINを、タップした。また、画面がめんが変かわる。
暗くらい場所ばしょだ。

ぼんやりと、見みえてきたのは……

四角しかくい石いしをつみ上げてつくった、ものすごく大おおきな建物たてももののなかに、あたし、いた。

上うえのほうは、うす暗ぐらくなっちゃって、天井てんじょうなんか、見みえない。暗あん

鬱^{うつ}だ。篝火^{かがりび}が燃^もえて、照^てらされる石^{いし}の床^{ゆか}。こういうの、広間^{ひろま}つてい
うのかな？

ケータイの画面^{がめん}なのに、かすかに煙^{けむり}の匂^{にお}いが感じ^{かん}られるくらい、
リアルだよ。

中央^{ちゆうおう}に、大きな盤^{おおばん}があつて、炎^{ほのお}があがつている。祭壇^{さいだん}っぽい。

そのむこう、とおくにある正面^{しょうめん}の台座^{だいざ}には、王^{おう}の席^{せき}があるけど、
だれも、坐^{すわ}っていない。

背^せもたれのうしろの、両^{りやう}わきに、篝火^{かがりび}が燃^もえあがつているだけ。

長い壁^{ながかべ}には、槍^{やり}や楯^{たて}、戦旗^{せんき}や柄^えの長い斧^{ながおの}、タペストリー。大きな
古い肖像画^{しょうざうが}がたくさん、ならんでいて、こちらをにらむ。

王座^{おうざ}に欄^{らん}が2つ、ならんでいる。

IDとパスワードを、入^いれる欄^{らん}だ。

どこの国^{くに}の文字^{もじ}でもいいから、半角小文字^{はんかくこもじ}と半角数字^{はんかくすうじ}で、IDを
決められる。パスはRWと同じで、画像^{がぞう}OKだった。

あたし、じぶんで画像を編集してつくった。

ふた 2つの項目の設定が終わると、中央にある祭壇の炎の上に、半透明のボードが浮かび上がってきた……

いちばん上に、あたしのIDがあって、下に、characterの欄がある。

キャラの欄を、タップ。5つの選択肢が半透明になって、あらわれる。明滅した。

『**軍武力** **聖性** **叡智** **運命** **平和**』

なんだか、よくわからない。翻訳ソフトのせいかな？ キャラクターで「運命」って、どーゆーキャラよ。カーソルを、そこに、おいてみる。

説明が浮かび上がる。

「運命を肯定し、運命を愛する者。聖性と叡智とをかねそなえるが、軍武力に乏しい。こころは平和である」

へー。意外に、いーじゃん。

でも、「叡智」にしよう。ANKAが知識は武器だ、って、イッてたもおん。あれ？ 知識と叡智って、同じようなもんだよね？

はい、はい、それで、次はEquipment and Wearか………これが装備かな。タップ。

いろいろな品名が出てくる。やっぱ、そうだわ。さて、どーしよ。

だいたい、寒いか、暑いかも、わかんないんだよねー。んー。暑けりやあ、脱ぎやいい、って、いうし。

暑い場所での装備と、寒い場所での装備の、両ほうそろえると、かなり高くなりそおーね。ってことは、寒冷地仕様でいくか………

うーん、寒冷地仕様って、荷物になるよなあ。でも、しかたないよなあ。うーん。

決めるつきやない。2つ、いっぺんにわ、物理的にも、ムリだし。い。おおし、決めたあ。

かんれいちしょう
極寒地仕様だあ。

じゃ、アウターが通気性つうきせいのある防水ぼうすいで、インナーが毛皮けがわの防寒着ぼうかんぎ。
靴くつはブーツのしよ。帽子ぼうしも買かおう。いちおう、マフラーも。じゃあ、
これと、あれと、それと、かれと、これと……。んー、やつぱ、
けっこう、かさばるなあ。

これ、見みこみちがいあつで、暑あつかったら、まち死しぬわ。

そんなときや、捨すてるしかないのね。いいのかなー、エコじゃない
けどなあー。

あ、これ、おもしろい、超軽量ちようけいりようかいろう懐炉かいろうだつて。

燃料ねんりようつきだよ。30イミオン？ 高たかっ！ いやーでも、ちよつと、

ほしいよー。あたし、ちよー寒さむがりだし。なんか、かつこいーし。
よし。

ぜんぶで、282イミオン！ もしかして、あんがい、いーセン？ あ
たしって、すごいかも！ キヤー。

おーし、じゅんび、できましたーっ！

ん？　なんか、メッセーじが^で出てきた。

「H M ー ー^{ハミ}着用^{ちやくよう}の上^{うえ}、入場^{にゆうじよう}せよ」

まだだっ、っーの。

ぢやあ、今日^{きよう}はここまでえ。

翌朝^{よくあさ}。

あいかわらず、つらいわ、教室^{きようしつ}。すげー。

まぢ、ありえない……

っテ、いえるぐらいの、元氣^{げんき}がもどってきた、氣^きがする。R W の

おかげか？　しかし、完治^{かんち}には、まだ、ほどとおい。

冬^{ふゆ}の朝^{あさ}に独特^{どくとく}の、ここえた空氣^{くうき}って、教室^{きようしつ}のざわめきがよくひび

く。

あたし、ぼんやり机つくえにむかって、坐すわってるン。あーあ。

学校がっこうはアキイの世界。たとえ、いまは、よくても、明日あすには転落てんらく

する。いつも悪意アクイがひそんでいて、なかよしも、あてにない。

気をゆるせない。接客業せつきやくぎようにちかい。機嫌きげんわるくても、おちこんで

いても、あかるく笑顔えかお。しなきや、サイトで、たたかれまくり。ボ

コスカボコスカッ。はあ。

あたしのばあい、もうおそい。すでに、たたかれまくりだもん。

運命うんめいなんて、だれが愛あいせるンだよ？ そんな人ひとがいたら、見てみた

い。

痛みいたは、どう？ だれも、きいてくれないから、じぶんできく。

痛いイタよ。すごく痛いいた。ちよー痛いイタよ。

どんだけ、いえば、いいの？ いったら、ゆるしてくれるの？ ど

ーせ、ゆるしてなんか、くれないんでしょ？ どうにもしてくれな

いんでしょ？ たすけてなんか、くれナイんだよね？ どおーにも

なんないんだよね？　いったい、なんなの！

って、ヒステリックになっても、意味ない。なんで、現実^{げんじつ}って、こんな仕様^{しやう}なの？　なんで！　なんで！　なんでーっ、って、百万^{ひやくまん}回^{かい}くらい、ききたいわ。

どうでもいいから、はやく家^{うち}に帰^{かえ}して。はやく夜^{よる}になつて。はやくあたしになりたい。なのに、まだまだ、午前^{ごぜん}10時^じ。拷問^{ごうもん}のように長い^{なが}わ、今日^{きよう}も。

あたし、胸^{むね}イタみながらも、コウキくんの声^{こえ}や、うごきを感じる^{かん}ると、眼^めで追^おわずにいられない。いろんなこと、妄想^{もうそう}する。

まちストーカー。いけないって、わかっていても、止^とめられない。まじ、こころがはげしくさいなまれるから、止^とめられない。お願い^{ねが}い、だれかたすけて！　だれでも、いいから、たすけてよ！

授業^{じゆぎやう}とか、どーでも、いい。昼^{ひる}の休憩^{きゆうけい}なんか、いらないつつーの。弁当^{べんとう}なんか、食^くいたかねーよ。教科書^{きょうかしょ}も出^ださないで、ケータイ

でネット見てる。先生せんせいが怒おこって、教室きょうしつから、つまみ出だしてくれれば、いい。泣ないたふりして、家うちに帰かえってやるわ。どーせ、すべて、かたちだけ。つくりモンなんだから。どーでもイイ。

午後ごご…。

もー、ムリっ、って、おもっても、現実げんじつは、ちつとも、ゆるしてくんない。時計とけいの秒針びようしんがせせら笑わらうような表情ひようじようで、のんびり、ゆっくり、うごく。

テメー、ざけんなよ。まだ、2ふたつも、授業じゆぎようあんのかよ。コロす気きかよ？ 情状酌量じようじようしやくりようとかナイの？ ありえナインダケど？ ジョーダンぢやねー、こーなっタラ、生存せいぞんかけた闘たたかいだあつ！？……………

☆×・・？ ♪ (^0^)
♡ ♡ ♡ 灑 ♡
▼ π 6 ♡ 屍 ♡ + ○ Z love B ∴ * ◇ ∴

こな雪舞ゆきまう、帰かえり道みち。家うちにやつと着ついて、じぶんの部屋へやで、ぼおー

つとしてると、車くるまの停とまる音おとがした。来きタアー。

H M ーの箱はこ、おもったより小ちいさく、あけて出でてきたものは、

「なんじゃ、こりやあー」

わああ。なんだか、アールヌーボー調ちよう？ ティアラみたい。

あれ、コードがついてる。そういうことか。ケータイに、つなぐ。

「これでいいのかなあ……」

すると、ケータイがかってにうごいて、「インストールしてよい
か？」だって。

あたし、ダウンロード、つてところを、タップ！ ダウンロードが
はじまる。終おわった。

ぢやあ、いくか、わあーるどへ!?

いちおー、ANNAのホムペに、書かきこみしておく。

あたしさー、これからいくからー、つて。

R Wを立たち上あげ、I Eのゲートを“くぐる”。

『H M ー、つかいますか?』の表示。決まってるじゃん。あたし、タツプ!?

なんか、注意書きが出てくる。メンドイので読まない。つぎ、いく。おおーッ!

なんにも、見えなくなる。まっ暗だっ! 意識がひっくり返って、べつの世界に、いったような感覚。いやだ、たいへん、こわい、ヤバいっ!

え?

光が見えはじめた。

あ、あぁーっ! きゃあぁーっ!

こんどは、スゴイまぶしきで、眼があげらんねー。

光の氾濫のなかで、だんだん、モノがかたちをあらわしはじめる。

え、わかんない。どーゆーこと、これ!

信じらんナイ! なんなの、ここ! ナンデ、あたし、ここにい

ンの！

っーか、ってか、ってゅーかあ！

あたしは、IEのなかにいた！

まちで、あたし、ここにいます。じっさい、現実げんじつにいた。胸壁きょうへきのあ
る黄金おうごんの城壁じょうへきと、紋章もんしょうのある城砦じょうさいの門もんを……見上みあげている！

でも、どーゆーことなのッ！ これ、HMハミのせいなの？

ANKAのアバターがあらわれた。現実げんじつの存在そんざいとして、あたしに
むかって、歩あゆみよつて来る。あたし、怖こわくなって、あとずさりした。

「来たきね、ユリイカ。待まってたよ」

「ANKAなの？ すごい、あたし、どおなっちゃったの？ これ
って、ぜんぜん、わかんないんだけど、どーゆーことなの！」

「HMハミは来たき？」

「来たきよ、でも」

「じゃあ、あんたも、いまは、バーチャル・リアリティのなかにい

るのね、あんたのアバターになって。あんたは、いま、じぶんのアバターになって、ここにいるのよ。わかる？」

「わかんないよーお（涙）」

「泣くな。」

H M I I はね、インタラクティブ・インターフェイスなの」

「はう？」

「いーカラ、きけ（笑）。

あんたは、いま、I E 世界をバーチャル・リアリティ体験しているのよ。わかる？」

「わからんわい」

「現実ってーのは、脳内で製作されてんだよ。」

眼で見たり、耳できいたりしたもののって、神経をつたわって、脳におくられ、脳内で合成されて、画像や、音になるんだよ。それが

ふつー、『体験』って、よばれているものなんだ。

RWのサイトがおくってくる視覚データ・聴覚データ・触覚データ・嗅覚データ・味覚データの情報を、ちよくせつ、HMIが脳へおくってくるのよ。

つまり、眼・耳・皮膚・鼻・舌とおさないで、情報が入ってくる

HMIって、そういうふう^{じょうほう}に情報をおくる装置^{そうち}なの。じつさいには、存在^{そんざい}しないものが脳^{のう}のなかで、現実^{げんじつ}としてあらわれるのは、そのせいなのよ。人工^{じんこう}的につくられた『体験^{たいけん}』よ。

ここまでは、わかる？」

「…なんとなく、わかったけど、よくわかんない」

「ぜんぜん、わかってないっしょ！」

ねー、たとえばさー、いま、あんたの眼^めのまえにさ、リンゴがあるとするとするじゃん」

「うんうん」

「そのとき、リングに光があたってるって、想像してみて。

で、光は反射するじゃん。

その反射した光が眼球のなかにある網膜にあたるのよ。あたる

と、その刺激が情報データになるのよ。

そして、神経をつたわって、脳へおくられる。

すると、脳が情報を処理して、画像をつくると……

あーら、ふしぎ！ リングが見えているじゃない！ って感じに

なる、つーわけよ」

「最後が……ちよつと、ややこしかった……かな？」

「だからさー、じっさいに、テーブルの上にあるやつとは、べつもののなの、わたしたちの見てるリングは。わかるっしょ？」

「んー。ま、ゆわれてみれば、そーかなあ的な……」

「わかったのかなー？ まー、いや。」

ともかく、すべての音や、においや、手ざわりや、味なんかも、脳

がそーゆー感じかんで、つくってるのよ」

「へー」

「それだけじゃないわ。

おなががすくのは、胃いがキューキューしているからだって、おも
ってるかもしれないけど、ちがうわ」

「へー」

「じっさいは、脳のうのなかでつくられてるのに、あたかも、胃いでそれ
が起おこってるよーに、錯覚さっかくさせてるのよ。

痛いたみも、そう。

すべて脳のうにあるわ。脳のうがつくる幻覚げんかくなのよ」

「ゲンカクっ！」

「とーぜん、幻覚げんかくだよ。

脳のうに着つくまえは、いろでも、かたちでも、かおりでも、味あじでも、
においでも、なんでもないんだからさ。

ただ、無味乾燥な、電気っぽい信号でしかないのよ」

「信号？」

「まー、そんなもんよ。」

なんだって、そうでしょ？

データって、みんな、信号のかたちでつたえられるじゃん。電話だって、そうじゃん」

「そうだったんだ…」

「……。と、ともかく、すべては信号で、おくられるデータなの。だから、H M ーで、ちよくせつ、脳に入力してやれば、眼で見なくても、手でふれなくても、鼻でかなくても、耳できかなくても、舌でなめなくても、見たり、かいだり、きいたり、味わったりすることができ、ってこと。」

じっさいには、存在しない現実を『体験』できるってことよ。

だから、あんたに、いま、ここにいるのよ」

「気のせいか、わかったきぶんになってきた」

「ほんとかよ。」

じゃあ、ともかく、いこう。歩きながら、話そうよ」

あたしたち、城門の扉のまえまで、歩いた。ふしぎにおもった。

「ねえ、あたし、いま、じぶんのアバターになってるんだよね。」

だから、あたしが歩こうとおもえば、歩くし、右にいこうとおもえば、いくし、右手をふろうとおもえば、ふれるし、つかめるし、あたりまえつちや、あたりまえなんだけど、やっぱ、ふしぎな気がするって、変かな？」

「ヘンじゃないよー。意外に、かしこいじゃん。」

そーだよ。ふしぎだよ。

じゃ、教えてあげる。H M I がね、あんたの脳にある脳神経細胞のインパルスを読みこんで、アバターを自由にうごかしてるのよ」

「ぜーんぜん、わかんないんだけど」

「インタラクティブ、ってのはね、そうほうこう双方向、って、いみ意味よ。つていっても、わかりにくいよね。

たとえば、いま、アバターの見たりきいたりしている情報じょうほうを脳のうにおくりこんで、バーチャル・リアリティをみ観せてるわけでしょ。

ぎやく逆に、のうあなたの脳から、じょうほう情報をおくって、アバターをうごかすこともできるのよ」

「ほわー」

「あんたがあたまでかんが考えただけで、そうさなんの操作もしなくても、アバターを自由じゆうにうごかせるってわけよ」

「おもしろそー」

「もう、体験たいけん中ちゆうだろ（笑）」

てんさい天才的な人は、かんが考えられないようなはやさで、ふくざつ複雑な超絶ちようぜつの体技たいぎをするんだよ。そういう人は、ひと戦闘系せんとうけいゲームでも、アイテムをあまじゆんすいりつかわない。純粋じゆんすいに、ぎりよう技量で闘たたかうバトルを好むこのよね」

「えー、ここでも、才能さいのうなおく」

「しょうがないよ。」

じぶんでは、現実げんじつにできない、やったこともないうごきを、キラにさせるために、その命令めいれいを、じぶんの脳のうでつくり出ださなくちゃ、いけないわけだから、センスってゆーか、才能さいのうの差さが出でちゃうんだよ」

「ねえ、いま、あたしたちって、フツーに、しゃべってンじゃん。

これも、そうなの？」

「そーだよ。」

ユーザーの脳のうの活動かつどうを讀よみとって、アバターをしゃべらせるようにするのって、かなり難題なんだいだったみたいね。

あたまのなかで、しゃべったセリフを、ぜんぶ、アバターにしゃべられちゃ、こまるでしょ。ユーザーがあたまのなかで、じぶんだけに語かたってるのと、ふつうの会話かいわとを、区別くべつしなくっちゃ、なんな

いからね。

それって、すごく、たいへんなことだったらしいよ。

だってさ、H M ー が読みとるのは、どちらも、同じような脳内の信号でしかないんだからさ」

「まぢ、すごい」

「脳神経細胞のネットワークを走る電気的現象の、びみよーなちがいを区別するのよ。それによつて、ユーザーの感情を読んで、アバターに反映するのよね。」

ゲームの奥も深くなつていくよ」

「うんうん。なんとなく、わかる」

「それから、あんたの手首、見て。」

ほら、ホルダーにおさまったケータイがあるでしょう。

わたしたちは、いま、現実のケータイが見えないから、ケータイを操作したいときは、それをつかうの。アイコンみたいなものね。

プレイ中に、サイトの外にあるアプリケーションのダウンロードが可能なんだよ」

「へー」

あたし、じぶんの左腕を見た。

F1マシンみたいにアグレッシブな、チタン製の流線形ホルダー（Aero Jacket エアロ・ジャケット、っていうらしい）に装甲された、あたしの Super:Hyp - iz27 がおさまっている。

「これって、けっこう、だいたいなことだよ。

だって、この装置がなきゃ、バーチャルな世界に入ったとたんに、ケータイの操作ができなくなっちゃうんだからさ。

IEを退場するときとか、ケータイを操作しなきゃならないときに、ぜったい、ひつようなの」

「ふんふん、これね。わかったよ」

扉のまえで、あたしたちは、止まった。

アラビア文字？

眉を持ち上げ、あたしたちをぎろりと見下ろし、

「これよりさきは、ルールなき非情の現実世界とは、まったくちがう世界。」

真実と正義を胸に抱くことこそが幸福になるための、唯一の手段である世界。

すなわち、真の世界。

この門をくぐる者は、こころ正しくあれ。

よって、『自らを、睿らかにせよ。

真実は、自らを、自ら睿らかにする。

汝は、汝をもちい、汝じしんを、しめせ』

すなわち、IDとパスワードとを晰らかにせよ」

……は……はあ？

あたしは、どうするのかわかんなくて、ANKAの顔を見る。

かのじよ
彼女わ、

「ちよつと待つて、ユリイカ！

そのまえに、持つてゐる装備をつけて。ぜんぶね。

このさががどうなつてゐるか、わかんないのよ」

そんなあ……、ちよー不安になるんですけどおー。

つてのは、さておき、急いで、身につけた。ぜんぶ。

超軽量懐炉は信じられないくらい、かるいけど、かさばりぐあ

いがハンパじゃねー。

ちよー着ぶくれだ。

奇妙な生きものに、なっちゃった……

「これでいいのかなー、ANKA」

「す、すごいね、それ。

あんたがそこまで、やるとは……想定してなかったわ」

「大は小をかねる、つて、ゆーじゃん」

「ちよつと、ちがうけど、まあ、ギリギリ意味、わかったわ。

じゃあ、いいよね。いくよ」

「だから、どうやるのよ」

そのとき、とーとつに、門衛がくり返す。

「IDとパスワードとをしめせ。

さあ、『自らを、あらわしめよ』

されば、IEの1つの天、4つの海、5つの大陸への道がひらかれるであろう」

「いいわ」

ANKAは、こたえた。左手首のケータイを、右手の指で、タツプ。

空中に、半透明の、古びて、すりきれた羊皮紙が泛かんた。

古代ギリシア文字のID。

甲骨文字と、梵字（サンスクリット文字）と、楔形文字と、古代

エジプトの ヒエログリフ hieroglyph とで 構成された、パスワードがしるされてる。

ANNA も、ヘンだわー。

もんえい 門衛がいう、

「ひかり 光によって、すなわち、あき 睿らかに かくにん 確認した。正義によって、なんじ 汝は、
そんざい 存在する。いま、せいめい 生命が やど 宿った。いけ。げんじつ 現実のなかへ」

そんだけカヨ？ あたしも、まねする。

ちなみに、あたしのパスワードは ほんあみぎれ 本阿弥切ふうの、かな文字。台
紙は、とーぜん、わし 和紙だ。ヘンでしょ？（笑）

もんえい 門衛が よろい 鎧から、きん 金の くさり 鎖のついた きん 金の かいちゆうどけい 懐中時計をとり出した。似あ
わねー！

しかも、もじばん 文字盤がふくざつな てんもんどけい 天文時計だ。

たいよう 太陽や、つき 月や、かせい 火星や、すいせい 水星や、もくせい 木星や、きんせい 金星や、どせい 土星の表示が
こうどうじゅうにきゅう 黄道十二宮の せいざ 星座のうごきが ひょうじ 表示されている。

あたし、ふたご座 びと なんてただけど、いま、ほし 星の いち 位置って、どうなのか

な…：

「汝らが入場する I E の設定時刻は、午後 7 時 40 分。

その時点からの、スタートとなる」

門衛は、扉のむこうへ、もどって、消えた。

あたしたちも、追うように、そこへ、扉のむこうへ、すすむ。
入った。

一瞬、眼のまえに、半透明のボードがあらわれ、

A N K A

クドク (Q D Q) ・ポイント 2

ユリイカ

クドク (Q D Q) ・ポイント 2

すぐに、消えた。まっ暗だ。それだけじゃないっ！

ふおおわわあーっ！

吹雪だよおおおおっ！。

3

理想の世界かよ？

しかも、うわああああー、すごい猛吹雪ッ！ まっ暗、なんも、
見えねーっ。

めちやめちや顔に、氷雪の粒が撃ちこまれる。い、痛えーよお！
あ、ANKAも、見えない。あたし、はやくも左手首のSuper:Hyp
-iz27でESCしそうになった。だってーっ、すんげえ寒いッ！ 音
も、もんのすんげえーしッ！ こ、怖いよーっ！

「ユリイカ、わたしにつかまって」

ANKAの声がする。声のするほうへ、手を伸ばした。手があつ
た。ANKAの手が見つかった。がしっ。つかまえる。

「なんなの、いきなり、これって」

「こういうもんなのよ！

スタートって、かならず、北きたから、北大陸ノルデから、はじまるのよっ」

「な、なんで、南みなみじゃいけないわけっ—？」

「んなこと、ゆってるばあ—いじゃないよっ。いいから、手離てはなすんじゃないよ、ユリイカ！」

「ANKA、怖こわいよお！ 死しんじやうよー」

「ばか、そんなこと、いってんじやないの、しっかりつかまってえ！」
そういつてるANKAも、けして、だいじようぶじゃなかった。

「ねえ、どっちにいったら、いいか、わかってんの、ANKA」

「わかるわけないじゃん、テキト—よ」

「やだよ、そんなの、帰かえる、まち怖こわい！」

「なにいつてんの、人生じんせいなんて、そんなもんじやない」

かるくゆ—よな—、そ—ゆ—セリフ……。しかし、寒さむさハンパ

じゃない。あたし、懐炉かいろがあるから、がまんでできるけど、ANKA死しんじやうんじやないの、リアルに！

「やっぱ、ヤバイよ。ANKA、だいじょうぶなの」

「わたし、2月生まれだよっ！」

「じょーだんいつてるばあいじゃないよ、これ、マイナス30度とか、40度って世界じゃなか」

「ばかね、わたしたちのほかに、なん十万人も、ユーザーがいたのよ。」

「できるわ、冷静に考えなさい」

「考えられんわ。しゃべるにも、口のなかが凍りそう。ってゆーか、まつげとか、すでに、凍ってる気がする。パリパリした感じで重くて、うっとーしいよ。それ以前に、雪つぶてで、眼があけらんないお。」

ANKAが、

「風が来る方角が北かな」

「だから、なんなの？ 地理がわかんないのに、方角わかって、

意味ないじゃん」

「北とは、かぎらないわね」

「そうじゃなくって」

「だまって。」

これは、さいしよの試練なのよ、つまり、進行方向に、困難があるはずだわ。

そんなら、風がふいてくる方角がいくべき方角なのよ！」

「待ってよお、風むきつて、けっこう、さつきから変わってるよつ。」

そんなに、一定じゃないみたいなんだけどお！」

「意外に、冷静じゃん」

「いま、ほめられても、ぜんぜん、うれしくなーいつ。それより、なんとかしようよ！」

雪に穴ほって、朝を待つ、って、ダメなの？」

「よく考えてごらん。湿度が低いでしょ？ 凍てついた氷雪よ。雪

はさらさらして、ふき上げられるから、たいしてつもってはいないはずだわ。ムリよっ」

「でも、どこへ、いけばいいのよ。」

いきさきも、決ま^きってないし、そもそも、方角^{ほうかく}も、わかってないし、どーすんのよお」

「だまってよ、いま、考^{かんが}えてんじやない」

「はじめに考^{かんが}えトイてよー」

「ばか、こーゆーゲームなのよ」

「知^しらねーよっ」

「ケンカしないで、クドク・ポイントさがるよ」

「カンケーねー、もーヤダ、帰^{かえ}るっー」

「待^まってよ」

「やだ！」

「現実世界^{げんじつせかい}に、また、もどるのかよ！」

…：…そっか。

もどりたくない。

あたしをたたくサイトがある世界。^{せかい} コウキくんとアイちゃんとか
ラブラブな世界。^{せかい} なにもない、物理的^{ぶつりてき}な乾^{かわ}いた世界。^{せかい}

それに、どーせ、ここでのことは、幻影^{まぼろし}なのよ。そーよ。

ケータイで、あたしのクドク見た^み。QQ…だ。やばい。まえむ
きに、なんなくちや。

「でも、リアるに寒^{さむ}いよ」

「脳^{のう}がつくった表象^{フアンタジー}よ、どーってことないわっ」

「そーなんだけど、で、でも、寒^{さむ}いよ、まちで。どーすんのよお！」

「考^{かん}えるのよ、考^{かん}えるの！ 叡^{えいち}智^ちを、こころで強^{つよ}く求^{もと}めて！」

「できねーよお、寒^{さむ}すぎる、ひやあぁー」

すさまじい風^{かぜ}のせいで、氷雪^{ひょうせつ}がほっぺをムチのように、切^きる。か

らだがちぢこまる。さぶーいよおー。

「ここはね、現実げんじつとちがつて、意味いみのある世界せかいなのよ。

現実げんじつって、よい人ひとも、わるい人ひとも、意味いみもなくこごえさせるわ。

でも、ここは、ちがう。こごえさせるときには、こごえさせなく
つちや、ならない意味いみがあつたのよ」

「イミって、なによ。あたし、まえから氣きにイんないンだけどさー、
イミって、くだらねーよ」

「うっさい、考かんがえてンのよっ」

「はやく考かんがえなさいよ」

「ちよつと、待まってよ。あんた、風かぜむきが一定いっていじゃないって、いつ
たよね？」

「かもねっ、ひや、ひやぶひい」

「とうぜん、そうなんだわ」

「なにがよ？」

「まっすぐな道みちなんて、ないわ。道みちって、まがつたり、まっすぐだ

ったりすンのよ」

「それがなんなのっ？」

「だから、風^{かぜ}にむかうのよっ！ やはり、困難^{こんなん}のあるほうへ、いくべきなのよ。ぜったい、正解^{せいかい}のはずだわ！」

風^{かぜ}がみちびくってこと……？ もー、それでいいよおー。

風^{かぜ}にむかって、すすんだ。風^{かぜ}むきが変^かわると、歩^{ある}くむきを変^かえた。

しばらく、そうやって、すすんだ。QDQ:2にもどっていた……

「あれ？」

「えー、そんなー。ANKA」

「考^{かん}えかた、まちがってたのかナあ……」

眼^めのまえに、ごつごつした岩^{いわ}の絶壁^{ぜつぺき}。ここに来^きる寸前^{すんぜん}まで、気がつか^きなかった。まっ暗^{くら}だし、まともに顔^{かお}を上げ^あてらんかったせいだ。

ほぼ90度^ど、ほとんど、雪^{ゆき}をかぶ^かっていない。まっ黒^{くろ}い巖^{いわ}の壁^{かべ}。

いかめしい無表情^{むひょうじょう}ナしかめっツラで、あたしたちを見^み下^おろして
るみたい。コワイ。

「ひき返^{かえ}そう、ANKA」

半泣^{はんな}きで、あたし、さけんだ。

「そんなはずない。まちがってないわ。

わたしたちは、正^{ただ}しいのよ」

彼女^{かのじょ}は、あたしの手^てをふりほどき、岩壁^{いわかべ}をたたいて、雪^{ゆき}をはたき
おとした。

「あ！」

へたくそな、へんてこりんな絵^えと、文字^{もじ}。それが深^{ふか}く彫^ほられてい
た。

文字^{もじ}はアルファベット。たぶん、英語^{えいご}だ。よく眼^めにする文字^{もじ}なん
で、あたしにも、なんとなく読^よめる。

：…けど、なんだ、この、ぐにやぐにやな絵^えわ!? こっちほうは、

さっぱりわかんえーよ！

「アルファベツトは、エスプレッソ (espresso) ……ね」

A N K A が かんが 考えこみながら、いった。

「わかるよ、でもさー」。

なんで、エスプレッソなの？ わかんないよ、A N K A ！」

…もちろん、の 飲みものだってことはわかってる。けど、いま、

それになんの意味が い あんのか、

ぜんぜん、わからないよっ！

「意味が い あるはず。考え かんが ましう」

「イタ寒 さむ くて、ナンも、考え かんが らんねーよ」

A N K A は、じっと、考え かんが てる。はやく、なんとかしてよー。

「コーヒーのエスプレッソのはずない。それじゃ、意味 い がない。

だから…」

「だから、なによー」

「急行列車よ。
きゆうこうれつしや

エスプレッソには、その意味があつたわ！」
いみ

「列車？ どこに、あんのよ、そんなもん！」
れつしや

「この絵がもう1つのヒントよ。これ、鳥に見えるわ」
え

「でえ？」

鳥がなんの意味なのよー。
とり

だいいち、鳥に見えねーんだけどおー」
とり

「鳥よ。
とり

大昔の中国の漢字。甲骨文字よ。
おおむかし　ちゆうごく　かんじ　こうこつもじ

見た感じは、字ってゆーか、絵にちかい。鳥には靈魂の意味もある、
み　かん　じ　　じ　　え　　とり　　れいこん　いみ

る、ってきいたことけど…

それがなにか関係するのかなあ、…うー、さぶイわ
かんけい

「この、←（やじるし）みたいなヘンな絵が…鳥？」
え　　とり

甲骨好きだったんだけど、気がつかんかったー」
こうこつす　　き

「わ！」

「なによ、びっくり顔がおになつてさー」

「あんた、いま、じぶんがなにいったか、わかってないの！　そうよ、それよ、矢やじるしだわ。」

この矢やじるしが指さすほうへ、いけばいいのよ！」

「あー、そーいわれると、そー見みえるねっ、ぶるるっ」

「しかも、ほら。矢やじるしの指さすほう、登のぼり坂ざかになつてるし、風かぜもそっちのほうから、ふいているし。」

つまり、困こん難なんがある方向ほうこうだわっ」

「な、なるほど。でも、わかつて、うれしくない。また、風かぜにむかつて、すすむのね。ぐすん」

ふたたび、あたしたちは、歩あるく。

風かぜが変かわるたびに、むきを変かえた。

顔かおに、痛いたく、冷つめたく、たたきつける。

かたくて、こまかい氷雪。ひようせつ

闇に、眼がなれて、雪がよく見えるように、なってきた。木こ立も、さつきより、よく見えている気がする。だち

「なに、あれ？」

ANKAが指さすところを見た。なにか、黒いものがうごいてる。ゆび

「カラスだ！」

「そうよ、鳥だわっ！」とり

ANKAが走りよる。怖くないの？はし

「見て、ユリイカ。脚を折られてる！」み

そういいながら、ANKAは、小枝を折れた脚の添え木にし、ハ
ンカチーフを出して、しぼる。だ

力を失っていたカラスは抵抗もしない。おとなしく、されるが
ままになっていた。ちから

けど、双眸がするどいよ…そうぼう

「さあ、これで、いいわ」

ANKAがそういうと、カラスはいちどだけ、アーと鳴いた。そして、いきなり飛び上がり、木の枝に生えたパレス・アテナの胸像のあたまに、とまる。

あれ？

カラスを眼で追っていて、はじめて気がついた。

胸像のわきに、パンクふうの男が坐ってた。1977年のジョニー・

ロットンふう、寝ぐせのよいな金髪のスパイクーヘア。丸い小さなサングラスに、やぶれを安全ピンで留めた長そでTシャツ、南京錠のネックレスに、鉾つきリストバンド、ピアスも安全ピンだ。

つか、寒くねーの？

カラスが囁れた鳴き声を上げる。吹雪に、かき消された声で、

「ネヴァー・モアー。『午前5時 セ・リイヤ村発 シーレオーノ

行』。ネヴァー・モアー」

そのさびしく、悲しげな鳴き声に、あたし、まち怖くて泣いた。

パンク男が哄笑する。

A N K A があたしをしかった。

「泣くな！ きいてた？ これよ。」

『午前5時 セ・リイヤ村発 シーレオーノ行』よ！

わかる？

これに、乗らなくっちゃ。

これで、いくべき場所へ、いくんだわ」

「そうさ。」

どっちにしろ、それしかないだろ」

ジョニーもどきがあざけるように、そう喚いた。

「5時までなんて、明日、学校、いけなくなっちゃうよ。」

だいたい、いくべき場所って、どこのこと？」

「ばか。もどったとき、時間なんか、ほとんど、経ってないわ。時間

も、脳内のうないでつくられているのよ。

ってゆーか、あんた、さいしよに、いくべき場所ばしよを知らないの？

ったくう、注意書ちゅういきも、説明せつめいも、読よんでないのねー」

……はい。

パンクふうが爆笑ばくしょうし、枝えだから墜おちる。ANKAは、そんなの氣きにとめない。

「IEで時間じかんをすごしても、もどるときには、入はいったときと同じく
らいの時刻じこくにもどれるのよ。

ともかく、いまは、これ以上いじょう、説明せつめいはしてらんない！

説明せつめいなら、わたしが読よんでるから、だいじょうぶよ。

さ、ともかく、風かぜにむかっていくよ！ いいね！」

「そうさ、それしかない。

あたまで考かんがえたってダメさ。考かんがえて、なんだあ？ 俺おれあ、おバ

カだからさー。

あはは、あはは、あははははっ」

雪まみれで、起き上がったパンクが嗤いながら、そういう。

あたしも、シカトした。

「ANKA、もう少し、くつついて歩こう。あたしのほうがあったかいからさ！」

「いいから！　いくのよ」

金パツがあたしたちを見おくって、手をふる。

「あはは、あははは、がんばれよ。俺あ、ハロー蜜斗ってんだ。ここじゃ、有名だぜ。ハハ、いくんだ、それっきやねー、なんもねー、色即是空さ。ぎやうてい、ぎやうてい、あハハハ！」

「ちやあナー」

なんなの？

雪をふみしめ、歩く。風のせいで、すすみにくい。ふんばる。く

いしばる歯がガタガタ震え、うまくかみあわさらない。

けど、変なことに、気がついた。

「ねえ、ANKA、あたし、すごい空腹なんだけど、なんでかしら。
さつき家で、いっぱい、ご飯食べたばかりなのに」

「すべてがゼロから、はじまるのよ。とーぜん、さいしよは、な
ンにも食べてない状態から、はじまるのよ」

「さいあくーう！」

「空腹も、脳でつくられるって、いったでしょう。いまが実践学習
ね」

「ゼロからって、そんなとこまで、やるんだあ。こまかいっつか、
きっちりしてんねー」。

てか、経験って、ほんとに、事実にカンケイなく、つくられたも
のなんだねー。

でも、ハダカの出発じゃなくて、よかったわ。防寒具はゆるされ
てるから」

「そーでもないよ。夏服なつふくで来る人間にんげんだって、たくさん、いるらしいから。そういう人は、即リタイアソク。」

あんたの、知恵ちえの勝利しょうり、ってことよ」

「ANKAは、なんで、冬の装備ふゆ そうびだったの？」

「事前調査じ ぜんちようさ」

「ひどーい、なんで、教えてくんなかったのお！」

「それじゃ、ゲームにならないわ。でも、ヒントはあげたはずよ。」

ほんと、違反いはんなんだからー。

ねえ、ちなみに、あんた、キャラクター、なに、えらんだの？」

「キャラ？ あー、あれよ、えいち？」

「エイチ？ あ、叡智えいちね。」

その影響えいきよう、あるのかもね、あんたが正しい選択ただ せんたくをしたのは」

そうか。

でも、考えてみれば、ANKAのおかげ。あたし、ぜんぜん、自ジ

立リッしてない。

「知恵ちえが武器ぶきだって、教おしえてくれたからだよ」

「そうでもない。」

きく耳みみがあったからよ。それも、だいじなこと。

うぬぼれちゃ、ダメ、つてことよ。

他人たにんの意見いけんに、かんたんに、左右さゆうされちゃうのも、ムノウだけど

ねー」

「ANKAから、そういうこと、きくとは、おもわなかったわ」

「どういう意味いみ? わたしだって、他人たにんの意見いけん、きくわよ。

だれだって、さいしよは、だれかにたよるものなのよ。

赤あかちゃんちゃんは、1人ひとりでは、生いきていけないわ」

つて、いつているうちに、森もりをぬけて、登のぼりはじめている。なに

も、風かぜをさえぎるものがなく、雪ゆきはカミソリだ。

あっちこっちから、ふいてくる風かぜで、あたしも、ANKAも、も

う、しゃべってなんか、いられない。斜面しゃめんの角度かくどが、さらに、きつ
くなつた上うえに、岩いわだらけに変わかわつた。

これ、登のぼるのっ？ ……なんて、もう、きかない。きくゆとりが
ない。

けど、あたしにも、ANKAにも、これなんだっていう実感じっかんがあ
つた。あえて、困難こんなんな道をえらぶのが正解せいかいなんだっていう感覚かんかくをつ
かんでいた。

けど、ハンパじゃない。すすむほど、ハードさが増ます。ケータイ
を見ると、あたしたち、出発しゅっぱつしてから、まだ、30分ふんくらいだ……

信じしんじらない！ ちょー疲れつかれまくり、へロへロで、足震あしふるえてるし、
息いききれてるのに！

「ANKA、少し休やすもうよ、あんた、もう、限界げんかいっぽいよ」
弱々よわしい眼めで、ANKAがあたしを見たみ。あたし、ぞっとした。

ANKAがこんなふうになるなんて……

「そうね。少し休もうか、ユリイカ」

あたしたちは、岩陰の雪を少しどけて、そこに、2人でくつついで、丸まった。さ、さ、さ、さ、さ。あたし、じぶんの上着を、ANKAに着せた。懐炉があるから、上着なくても、あたしは、だいじよーぶだったから。

ANKAは、さいしよ、拒否したけど、抵抗する気力も、すでに、うすれているようだった。

「いいわよ、しかたないね。でも、それは、あんたにとって、いいことよ。」

この世界では、他人のために、じぶんを犠牲にすると、クドクになつて、かならず実るから。現実とは、ぜんぜん、ちがうのよ。

正しい行為がむくわれる、かならず」

見ると、たしかに、あたし、QDQ:3になつてゐる……

あたしたちは、歩いた時間よりも、はるかに長い時間、休んだ。

震えが止まらない。空腹だし、手足の感覚もない。意識、もうろうだった。

疲れ切ったあたしのあたまのなかに、コウキくんのすがた。ぼんやり、泛かぶ。そして、笑うアイちゃんの顔が……。

あたしの眼に、うつすら涙がこみ上げて、頬の上で、凍って、かたまる。

それを手ではらった。元氣を出そう、っていうか、いま、眼のまえの事実を見るんだよ、ユリイカ。友だちが死にそうじゃないか。

「ねえ、ANKAったら、こういうときって、眠っちゃ、いけないんだよね？」

「そうだよ、ユリイカ。眠らないで、死ぬわ。」

もし、あんたが死んじゃったら」

そういうANKAのほうが眠りそうだった。あたし、ANKAにむかって、ゆり起すように、

「ねえ、なに？　あたしが死んだら、なんなの？」

「ふふ。」

あんたが死んだらね……なんでもないよ。だって、そんなことありえないもの。

わたしが、ぜったい、死なせやしないよ」

キミのほうがヤバそうだよ。

「ほらあ、ANKA、寝ちゃダメ、ダメだったら！」

「わかってるよ、ちょっと、眼をつぶらせて」

「ばかあ、それがだめなんじゃないか！」

あたし、ANKAをひっぱたいた。

「ありがとう。でも、だいじょうぶ、眠らないよ」

ぜんぜん、眠りそうじゃなか。

「ねえ、ANKA、話してよ、あたし、説明読んでないからさ。」

これから列車に乗って、あたしたち、どこへいくの？」

A N K A が力なく、微笑む。

「学校だよ。」

この世界で生きるルールや、能力をやしなうための、ほんとうに
ひつような知識をえるための、学校。

アカデミア、って、いうんだ」

「そーなんだ。どういう学校なの。ハリー・ポッターの学校みたい
なとこかな」

いっしょうけんめい、あたしは、話題をつなこうとする。

けど、A N K A のこたえ、チグハグだった。

「あー、そうだ。わすれてたよー。」

ねえ、わたしのバッグのなかを見て。食べ物があるはずよ。底の
部分のひもをひっぱると、あったまるやつ。

そう、それ。2人で、わけて食べよう」

あたし、食糧のよいままで、考えてなかった。智慧って、だい

じ！

「あ、あった、あったよ、缶詰^{かんづめ}。」

おもしろい、こんなに、かるい缶詰^{かんづめ}って、あるんだ。うれしい、
ビーフ・シチューよ、しかも、2人^{ふたり}ぶん。

：あ、このひもね」

ひっぱった。すぐあったまる。食^たべた。

「きやあ、ANKA、あったかいよお。ありがとう。すごい、おいしいよ。手^てが、手^てがあったまって、痛^{いた}いくらい」

「そう。よかった」

「うん、すつげえ、うれしい」

食^たべ物^{もの}、もらうってことが、こんなに、うれしかったことはなかった。こんなにも、ありがたいとおもったことは、いままでになかった。

ふと、気^きがついて、手^てをとめた。

「ANKA、いいの？　ほんとは、これ、あんたのだよ」

「ばかいわないで。1人^{ひとり}じゃ、おいしくないわ。ふふ。わたしにも、クドクつませてよ」

そっかー。ぢゃー、えんりょなく……食^たべたら、元^{げん}気^きになった。

ANKAも、QDQ…3になってる。

あたしは、ANKAと、ずっと、話^{はな}しつづけた。女^{おんな}どうしだから、できる技^{わざ}。

「さあ、ユリイカ、もう、午^ご後^ご9時^じ半^{はん}よ。いかなくっちゃ。がんばろ」

ふんばって、立^たち上^あがる。

うらあつ。

か、からだ、重^{おも}い。

体^{たい}重^{じゅう}のせいでも、装^{そう}備^びのせいでもない。

疲^{つか}れてるんだ。まちで。

でも、歩いた。^{ある}

言葉でいうのは、^{ことば}かんたん。だけど、実行するの^{じつじやう}は、ぜんぜん、かんたんじゃない。瞬間^{しゆんかんでき}的には、がんばろー、って燃^もゆる。

けど、雪風^{ゆきかぜ}にぶたれて、凍^こえて、くたびれて、10秒^{びやう}後に、もう、いや、って、さけびたくなる。意志^{いし}って、いったい、ナンなの？

でも、歩^{ある}くしかない。

歩^{ある}いた。

お家^{うち}に帰^{かえ}りたいよ。でも、歩^{ある}いた。

なんとも、さけべ、ユリイカ。ともかく、歩^{ある}け。それしかない。

歩^{ある}く。もう、へとへと。歩^{ある}く。もー、だめ。ムリっ！ 歩^{ある}く。さぶ

い、死^しんぢやう。歩^{ある}く。足^{あし}がうごかない、疲^{つか}れた。歩^{ある}く。もう、い

いよ、たおれよう。歩^{ある}く。なにをほざいてもいいから、歩^{ある}け。歩^{ある}く。

選^{せん}択^{たく}肢^しはない。歩^{ある}く。たとえ、理^り不^ふ尽^{じん}であつても、ほかに道^{みち}はない。

歩^{ある}く。歩^{ある}くしかない。

あれ？

「望^{のぞ}み抱^{いだ}くがゆえ、人^{ひと}は、絶^{ぜつ}望^{ぼう}に墮^おちる。

真^{しん}に生^{せい}を諦^{あきら}めた者^{もの}は、あえて死^しを望^{のぞ}まない」

フードつきのマントをはおった人^{ひと}がこの猛^{もう}吹^ふ雪^{ぶき}のなかにいた。

あたまにも、肩^{かた}にも、雪^{ゆき}をつもらせて、なかば埋^うもれ、しずかに歌^{うた}っている。

廢^{はい}墟^{きょ}になつた古い教^{きょう}会^{かい}できく、亡^{ぼう}霊^{うれい}の讃^{さん}美^び歌^かのような、幽^{かす}かな玄^{くら}いしらべだった。

あたしたち、立^たち止^どまった。

A N K A が説^{せつ}明^{めい}している、

「この人^{ひと}は、自^じ由^{ゆう}意^い志^し設^し定^{てい}のキヤラね。環^{かん}境^{きよう}的^{てき}人^{じん}物^{ぶつ}よ」

「あ、あの一^{いち}、日^に本^{ほん}語^ごで、プリーズ」

「つまりね、彼^{かれ}は、アバターじゃないわ。

だれかが操^{そう}作^{さく}しているキヤラじゃなくて、川^{かわ}や、海^{うみ}の波^{なみ}や、風^{かぜ}と

おな
同じ。

ほら、この吹雪ふぶきと同じで、I Eのなかを自動的じどうてきにうごいているの
よ。

プログラムで、うごくキャラだけど、まるで、じぶんの意志があ
るみたいに見えるみでしょ？

だから、アバターとの区別くべつはつきにくいわ」

……んー。わかったことにしておこう。

「で、これ、なにしてるの？」

あたし、ANKAにきいた。

「ふんいきづくり……かな？」

「……………じ、じゃ、いこうか？」

でも、状況じょうきょうは容赦ようしやなく、さらに、悪化あくかしていった。

あたしたちが登りのぼはじめた斜面しゃめんは、もう、斜面しゃめんなんかじゃない。

アルプス山脈さんみやくの絶壁ぜつぺきを登るのぼみたいだった。

風があたしたちをもぎとって、下へ突きおとそうとする。まち怖
い。

あたしたち、なんども、休んだ。3分くらい登って、10分くらい
休んだ。

登れば登るほど、雪がすごくなっていて、なんにも見えない。息
もできない。

酷すぎるよ。殺す気かつつの？

ぶちギレソーになる。

これで、まち、ほんとに、帰れんのかよ？

でも、ANKAは、ふしぎと元気が復活してて、気力に満ちてい

る。あ、あんた、超人だ。あたし、もう、ダメっぽい……。

手がここえる。

ぶあつい手袋をしていても、凍えて、かじかんでる。

力が入らない。

疲労困憊、って、やつだった。

「ANKA、もおー、だめー、死んじやうよ。」

おっこちやうよーっ！」

「がんばれっ、集中してっ、あんたの命を燃やすのよ」

なに、それ？ どーゆーこと？ マンガじゃないのよ。

でも、ぜんぶ、これ、バーチャルなのよね。現実じゃない。

理不尽で、弱い者いじめする、糞つたれの現実じゃねーのよね。

よおーし。

えいち、あたしに教えて、どーしたら、命は燃えるの？ エイチ、

あたしをおもいどおり、生きさせて！ ここは、正義でしょ？ あ

たし、なんにも、わるいことしてないわ！ どうか、友だちを、た

すけて！ 彼女の装備、あたしのより、うすいのよっ！ このお願い

が正しくないってんなら、てめえら、ぜんぶ、おかしい。死んじま

ええええー！

ここで、そうさけびながら、あたしは、固く眼をつぶった。

まっ暗だった。

その闇の底に、とおいところに、かすかに光る星のような、小さな粒を感じた。

小さいけれど、はげしさのある、強い光だった。

だんだん、ちかづいて、大きくなるように見えた。

臍下丹田。

おへその下の、おなかのところのこと。

そこに、青白い炎を感じた。

奥深く、純白にかがやく、まばゆい金剛のよう。

じぶんのからだがなくなったように感じた。えんりよしなくてい

い。

ANKAの手をひっぱって、がむしやらに登るじぶんを、あたしは、映画でも観るように、じぶんのなかから、見ていた。

皮膚^{ひふ}を突き破^{やぶ}り、筋肉^{きんにく}をひき裂^さき、骨^{ほね}を砕^{くだ}きそうなぐらい、ふんばって、登^{のぼ}る。

じぶんを超^こえて、じぶんのあたまのてっぺんから、じぶんじしんが飛^とび出^でそうなぐらい。歯^はをくいしばる。じぶんのあたまを、ふんづけて、上^{うえ}へ登^{のぼ}ろうとするかのように。

氣^きがついたら、あたしたち、山頂^{さんちょう}にいた。

Anka QDQ : 5 Eureka QDQ : 5

クドクが上^あがっていた。少^{すこ}し、うれしーけど、どーでもいい。もー、疲^{つか}れまくり。ぜんぜん、力^{ちから}入^{はい}らないし、いくら息^{いき}しても、苦し^{くる}しい。

見^み上^あげると、空^{そら}はうつすら、あかるくなっていて、すぐ上^{うえ}に、雪^{ゆき}雲^{ぐも}が見^みえる。あたしたちを威嚇^{いかく}するように、おおいかぶさっていた。

すごいスピードで、あたしたちの上^{うえ}を、すぎ去^さっていく、とてつもなく大^{おお}きな生^いき物^{もの}に見^みえる。怖^{こわ}ーい。

風は風というより、空が滝になって、たたきつけているようだった。

小さなあたしたちを、怒涛で、こなごなにしそうだった。氷の雪は服をつらぬきとおし、あたしたちをひき裂き、ちりぢりにしてしまいそうだった。

はるかな下のほうに、小さな村と駅とが見えている。あそこまで、三百メートルくらいかなあ……。

まだ若かった小学生のころ、遠足で登った又鋸山から見下ろしたときの、距離感と似ていたから、そうおもった。

「ハア、ハア、あ、あれかあ」

あたし、あえぎながら、つぶやく。

ANKAがするどくも、力なく、

「そうだよ、あれだよ。さあ、いこう、ユリイカ。いま、なん時かな？」

「午前3時ごぜんじちよつとまえかな。冬ふゆのくせに、あかるくなるのはやいね。ほんと、3時じかなあ」

「わたしのケータイも、3時じ2分ふんまえ。

あつてゐるね。

日本人にほんじんだけのサイトじゃないから、12月がつの日の出ひがおそいとは、かぎらないよ。南半球は12月が夏よ」

「わあーつた。けど、あと2時間じかんで、あそこまで、いけるの？。

まにあうかなー」

「まにあわせるんだよ。

すべては意志いしと正しい動機ただ どうきによって決きまる。それが真しんの自由じゆうだ」

うーん、いうこと、りっぱなんだけど、ANKA……

「ねえ、ANKAは、キャラクターで、なにをえらんだわけ？」

「軍武力ぐんぶりよくよ。

あんたと同じおなじじゃ、意味いみないでしょ？」

「てか、あたしがなにえらぶか、読^よんでたってわけえ？」

「ダルいこと考^{かん}えてないで、ユリイカ。

行^{こう}動^{どう}あるのみよ、さあ」

いきなり、ANKAがジャンプする。

うつそおー、まぢかよ。

こんどは、山^{やま}の急斜^{きゅうしゃめん}面^{めん}を、滑^{かっこう}降^{こう}するっていうのっ！

ANKAは、上^{うわぎ}着^ぎの背^せのすそを股^{また}のあいだからつかんで、ソリみ

たいに、うまく滑^{すべ}ってる。

信^{しん}じらない。映^{えい}画^がじゃん。ぜったい、クソッたれの現^{げん}実^{じつ}じゃ、

ありえないとおもう。

「えーい、どうせ、バーチャルだぜーい」

あたしも、マネする。お尻^{しり}をソリにして、雪^{ゆき}蹴^け散^ちらし、滑^{すべ}り降^おり

る。

すごい、景^け色^{しき}がびゅんびゅん飛^とんでいく。すごいスピードだよ、

これ。まち止まれんの？

斜面の凹凸のせいで、ところどころ、派手にジャンプする。キャーキャーキャアアッ！

こわい、こわい、こわい、こおえええーよっ！

「もうすぐ、平地に、村に着くわっ、ユリイカがんばって！」

「つて、てゅーかつ、そのまえに森があるんですけどーっ」
村のまえに、黒々した針葉樹の林があった。

「ぶつかるよーっ」

A N K A がふりむかず、大声でいう、

「わたしをよく見て！ 重心移動で、左右にかわすのよっ。イメー
ジして。強く求めれば、なせるわ！」

A N K A が林に突っこむ。ああ、ぶつかる！

彼女は、1本の大杉を、左にかわした。

すそを右がわに、ひっぱり上げて、左に重心をかたむけ、左に

まがった。

こんどは、すその左^{ひだり}がわを、ひっぱる。右^{みぎ}にまがった。

す、すごい。あたしも、イメージ、ああ、イメージつ、わいてき

てよ！ あ、来^きたあー。

あたしも、林^{はやし}に突^{とつ}入^{にゅう}。

「うわあああああああああああああああああつ！」

1本^{いっぽん}1本^{いっぽん}の木^きが眼^めにとまらない。すうんごおいスピード！ なん

で、よけられるか、よくわかんない。

けど、奇跡^{きせき}のように、木々^{きぎ}をぬける。スリル、ちよーすげエー。

あつ！ あつ！ あああつ！ おおつと……

やったー、林^{はやし}を、ぬけたあー。

でも、あ、こんどは、あ、あつ、む、村^{むら}だー！ 家^{いえ}にぶつかるよ！

「どいてーっ！」

ANKAがさけぶ。

サイロの扉とびらをあけて、藁草わらくさをとり出だそうとしていたおじいさんの背せなかにぶつかりそうだった！

「どいて！ どいて！ どけーっ」

あたしも、絶叫ぜっきようする。

ころがるように、身みをかわすおじいさん（意外いがいに身みがるジャン？）、あたしたちは、ひらいたままの扉とびらから、藁草わらくさの山やまに突つっこむ。ずばおっこああん、ずん！

「ぶわー」

藁わらの山やまから、もがいて、顔かおを出す。

ANKAも、出でてきた。

「ユリイカ、だいじょうぶ？」

「あたし、無事ぶじよ。ANKAは？」

「どうやら、クリアしたみたいね、わたしたち。

さ、キップ買かうわよ」

キ、キミって……、タフでなくちゃ、生きていけナイ。

4 エリコとミーシャ!! & イース ☆彡

いきなし、猛スピードで藁に突っこんで、大きな音を立てた、あたしたちを、しんばいそーに見てるおじいさんに、「ごめんなさい」とだけ、いいのこし、走る、走る。

気がつけば、風はすでに弱くなつて、雪が降りしきつてるだけだった。

茅ぶきの屋根と石づみの壁の村は小さくて、うす闇のなかでも、すぐに駅舎が見つけられた。

午前3時36分。楽勝だ!

駅は古くて田舎の無人駅みたいだったけど、キップ売り場も改札もあって、駅員さんもいた。

そのまえで、必死^{ひっし}になって、荷物^{にもつ}をひつくりかえし、なにかをさがしまくってる女^{おんな}の子^こがいた。

「どーしたの？」

あたし、おもわず、きいちゃった。

その子^こは、キツと、にらむように、あたしを見上^{みあ}げた。

「ないのよ！」

「なにが？」

「お金^{かね}に決ま^きってんでしょ！」

「決ま^きっては、いないとおもうけど」

「どーでも、いいわよ。あんた、ちよつと、ウザくない？」

そこにANKA^きが来た。

「ユリイカ、なにしてんの。キップ買^かわなきや、乗^のれないでしょ。

いいから、財布^{さいふ}よこしなさい。

買^かってきてあげるわ」

その子の眼^{こめ}がかがやいた。

「ねえ、エリコのも、買^かってきて！」

A N K Aが怪訝^{けげん}な顔^{かお}でにらむ。

「いいけど。でも、お金^{かね}くれる？」

エリコがこまった顔^{かお}をつくる。

「ねー、少し貸^かしてくんない？」

「少し^{すこ}って、いくら？」

「キップ代^{だい}全額^{ぜんがく}」

A N K Aがおもしろがってるような表情^{ひょうじょう}で、いった。

「もちろん、貸^かしても、いいわ。

返^{かえ}したくないなら、返^{かえ}さなくてもね。

あんたも、ここのルールは、とーぜん、知^しってるわよね？」

エリコがふくれっツラする。

「ばかにしないで。知^しってるわよ。

クドクが減^へるわ。でもさ、しかたないじゃん。またとり返^{かえ}せばいいのよ」

「OK！」

じゃあ、いっしょにいこうか。

ユリイカ、あんたの財布^{さいふ}からも、この子^このぶん、出^だしとくからね」

「ええ！　なんでー、ANKA」

「ばか、あんたも、わかってないの？

クドクよ、クドクのほうがお金^{かね}より価値^{かち}があるの。

わかった？」

あたしとANKAは、防寒具^{ぼうかんぐ}やらをぬぎ、折^おりたたんであったバッグをひろげて、それらをしまい、エリコといっしょに、その荷物^{にもつ}をひきずりながら、キップ売^うり場の窓^{まど}口^{ぐち}へいく。

デニムを着^きた、太^{ふと}ったおじさんが背^せをむけて、だるまストーブにあたっていた。

「キップください」

大きな声こえでよびかけるエリコ。あんた、じぶんの金かねじゃないでし
よー。

「シーレオーノ行いき、3枚まいね。

特等とくとうにしてよ、空あいてるわよね？」

ふりむいたおじさんは、赤鼻あかはなに小ちいさなメガネをのせている。顔かおを
しかめて、小ちいさな紙かみきれをにらむ。白しろい鬚ひげをなでる。

「空あいてるよーじゃな。アカデミアにいくのかい、お嬢じょうさんがた」

「とーぜんよ」

「そうかい、がんばってな。ほら、3枚まい」

エリコが得意とくいげに、キップをあたしたちにくばった。

そして、あたしとANKAは、顔かおを見あわせる。プつ。ふき出だし
て笑わらう。

「なによ」

エリコが不満^{ふまん}げ。あたしも、いつてやったよ、

「なんでもないわ、あきれただけよ、あんた、ある意味^{いみ}すごい」

AnkaQDQ : 6 EurekaQDQ : 6 EricoQDQ : 3

そんなあたしたちのやりとりなんか無視^{むし}して、ANKAがホーム
のようすを改札口^{かいさつぐち}からうかがう。閑散^{かんさん}、風^{かぜ}ふくだけで、さびしげだ。
いう、

「さ、いくよ。ここじゃ、寒^{さむ}すぎるわ。ホームにいつても、しょー
がないしね。」

バルで、コーヒーでも、飲^のみましょう。ひらいてれば、だけど」
「バル？」

あたし、きいちやった。

エリコがエラそーに、うんちく、

「あー、そんなことも、知^しらないの？ 勉強^{べんきょう}不足^{ふそく}ね。」

バル、っていうのはね、どこの村^{むら}や町^{まち}にも、かならず1軒^{けん}はある

立ち飲み食い、安い店で、都会なら、街区ごとにあるわ。

国や地方によっては、ボールっていたり、パブっていたりするのよ」

「へー。

エリコ、バカそうに見えるけど、勉強したんだ」

「ユリイカ、っていったつけ？ あんたに、いわれたくないわ」

ANKAが口をはさみ、

「あそこに、あるわ、やってるみたい。こんなに、はやい時間から、ありがたいわ」

あたしたちは、雪降りしきるなか、震えながら、店に飛びこんだ。
いかにも田舎っぽい、つか、農家の納屋に、カウンターがあるみたいな。

朝、仕事のまえに1杯やってる農夫のおじさんたちがなんかい
る。

あたし、入^{はい}ってびっくり。だって、床^{ゆか}はまるめたナプキンやタバコの吸^すい殻^{がら}だらけ。サイアクじゃーん。

「あーら、いいお店ね」

エリコが得意^{とくい}げにいう。

「どーゆーことよ」

あたし、ついムツとなる。

ANKAがため息^{いき}しながら、説明^{せつめい}、

「あんたら、猿^{さる}と犬^{いぬ}みたいね。レベル同^{おな}じで、ちようどいいってことかしら？」

ねえ、ユリイカ、バルでは、ゴミは床^{ゆか}に捨^すてていいことになってるのよ。

繁盛^{はんじょう}してる店^{みせ}ほど、ゴミだらけなわけ」

「へー」

うす暗^{ぐら}くて、黒^{くろ}っぽい、丸太^{まるた}小屋^{ごや}みたいな店内^{てんない}で、あたしら女^{おんな}の

子3人は、奇異の眼で見られた。とくに、雪まみれのあたしとAN
KAとは、けげんな面持ちで、じつと見られた。

カウンターのむこうに、背が高くて、やせた、気の弱そうな男と、
小柄で小太り、頬がつやつやして血色がいい男とがいて、上機嫌に
お客としやべってる。

「いらつしやい、お嬢さんがた。なんにしましょうか」

やせた人がやさしげに注文をきいた。つやつやした頬の人は、ニ
コニコしていう、

「うちのチーズは最高だよ。ワインは、ちよつとムリかな、お嬢ち
やんがた。」

おれたち、いつも週末は、あっちこっちの農家をまわって、それ
こそ、山も越えてね、秘蔵のワインや、チーズを見つけ出して買
つける、それがしゅみななのさ」

しあわせそうに笑った。少し離れた席の農夫がふいと、よこを

むく。小^こ声^{こえ}で、ぶつぶつぶやくのが、あたしの耳^{みみ}にもきこえた。

「けっ、このご時勢^{じせい}に、のんきな暮^くらしぶりじゃねえーか。さぞかし儲^{もう}けてんだろおーなあ、へっ」

A N K Aが顔^{かお}を声^{こえ}のほうへむけ、

「変^{へん}ね」

ポツリといってから、顔^{かお}をもどし、注^{ちゅう}文^{もん}をはじめた。ホット・ミルクをたのんだ。あたしも、同^{おな}じにする。エリコが気^きどった口調^{くちよう}で、

ブラックを注^{ちゅう}文^{もん}した。

「あんたら、ガキねえ」

なまいきなこといったエリコに、A N K Aが忠告^{ちゅうこく}している、

「からだをあつためるものを飲^のんだほうがいいわよ。そんなんじや、おなかも、すくよ」

「ふーん」

「ねえ、あんたさー、なんで、そーゆー態度^{たいど}なわけ？」

あたし、いわずにいられない。

「そーゆー態度^{たいど}って、どーゆー態度^{たいど}よ」

「てゆーか、お金^{かね}なくて、こまってたくせに、えらそーってことよ」

「あーら、あんたたちに、クドクをつませてあげたんじやない。じぶんのポイント^{ポイント}を犠牲^{ぎせい}にしてさ」

A N K A がからかうように、

「まあ、そうとも、いえるわね。ところで、あんた、1人^{ひとり}で、ここまで来た^きの？　たいしたもんね、女^{おんな}の子^こ、独り^{ひとり}で」

エリコが鼻^{はな}の穴^{あな}をふくらませる。

「まあね、あたしって、けっこう、かしこいから、しょーがないじやん。

あんたらも、ケータイあるでしょう？　雪上^{せっじょう}タクシーよべばよかったのよ。

運転手^{うんでんしゅ}は、雪豹^{ゆきひょう}くん。攻略本^{こうりやくほん}にも、書いてあつたわ^か」

あたし、すなおに感心かんしんしたけど、ANKAは、けらけら笑わらって、

「それじゃあ、お金かねもないわね。しかも、マイナス・ポイントよ。

あんたの攻略本こうりやくぼん、よっぽど、安やすかったみたいね」

「知らないわ。彼氏かれしが見せてくれたんだもん」

こいつ、彼氏かれしいるんだー。あたし、まちムツとした。少し哀かなしかった。ANKAが素知そしらぬ顔かおしている、

「そんな男おとことは、わかるべきね。バカとつきあっても、いいことないわ」

意外いがいにも、エリコが真顔まがおでうなずき、

「そうね、ほんとだわ。もう、アイツとは、終おわりね。ふん。

もっと、いい男おとこにするわ。かしこいやつにね」

あたし、よけいムカつくんだケド。そんなに、えらべるワケ？

「あ、そー、そー、じつは、わたし、独ひとりじゃないんだよ、厳密げんみつに
いえばねー」

まちで、いちいちムカつくんだケド？　だから、いつてやったよ、

「なに、そのゲンミツにいうと、って。

ひとり
1人なの、そうじゃないの、どっちよ」

さげすむような眼で、エリコがあたしを見た。

「ニュアンスつてもンを理解できないのね？　まあ、事実上、わたし1人みたいなもんだった、ってことよ。

ぜんぜん、たよりない子でさー、ロリ系の夏服で来ちゃったのよね。っていうか、装備に金かけなさすぎ、ってやつよ。

タクシー代、わり勘にしたんだけどさ、彼女、わたしとちがつて、装備品買っていないぶん、列車代があつてさ。

ミーシャだけ列車にらせて、わたしは、奇跡を信じ、お金をさがしてたってわけよ」

「あんだ、それで、タクシーに……」

あたし、少しこいつを見直した。だから、あたしたちに、救われ

たのかも。そっかー。これがIEのからくりなんだ。

「まあ、列車代れっしゃだいくらい、ギリギリのこせると、おもったんだけどね。

まー、わたしでも、ちよつとぐらい、計算ミスけいさんはするわよ」

かくにん確認するような上眼うわめづかいで、得意とくいげにこちらをみ見るエリコ。

「どお、謙虚けんきょでしょ？」

やっぱ、見直みなおさなくて、いいか……。ともかく、動機どうきはどうでも、

いいんだ。よいことをすれば、ここでは。あたしらが返事へんじしないの

もき気にせず、さらに、エリコ・ペースでしゃべる、

「ねえ、それよりさ、とりあえずメアド交換こうかんしない？ 腕うで、見みせてよ。

エインディオイ・コンペティション・バージョン・フオー
A'nDoi - CVersion04に、くー、スーパー・ハイブ・イージー・ニイナナ
Super;Hyp - izz27じゃん。

ちよつと、リスpektかなー。

スマートフォンスマートフォンのF1マシンだもんね。へー。

あ、でも、メアド、ダサイ。だって、そうじゃん。ほら、わたし

の、見て、見て」

「さあ、もういいかしら。いくわよ、時間だし」

ANKAがいった。

時間になつて、プラットホームにいくと、蒸気を上げる機関車が待っていた。寝台車や、食堂車がある。豪華にデザインされたロゴが車体に飾られている。

こんな、田舎の駅に、こんなに、りっぱな列車って、すごく変だよ。

あたしたちは、ポーターに荷物をはこんでもらい、客車のまえのステップに立つ。あたし、きれいに黒く塗られた鉄のステップのまえで、うきうき。

「なんか、出発のときの、みじめな状態がウソみたいだね」
意気こんで上がろうとするあたしは、出て来た女の子と、ぶつかった。

「キャッ！」

「ごめんなさい、急いだのー」

それがミーシャだった。

あたしたちは、特等とくとうの客室きやくしつ（コンパートメント）に4人よにんで入った。

特等とくとうはみんな、定員ていいん2名のコンパートメントだ。ミーシャは、エリコきがいつ来てもいいように、ここをえらんでいたらしい。

あたしたちは、車掌しやしょうにたのんで、窓口まどぐちで買かってあつた指定券ししていけんを、その客室きやくしつに替かえてもらい、はんぶん、お金かねをはらいもどしてもらつて、4人よにん仲よく旅たびすることにした。小さな女おんなの子こばっかしだから、これでじゅうぶんだ。

コンパートメントはトイレや化粧室けしょうしつをかねた洗面室せんめんしつや、シャワー室しつもついていた。マホガニーの小テーブルもきれいだ。

むかいあつたベンチシートを伸のばして、2人ふたりぶんのベッドにするしくみだけど、サイズによゆうがあるから、2人ふたりで1つひとつのベッドに

寝るくらいが、あたしたちには、ちょうど、よかった。

ミーシャは、金髪をたてロールにした、かわいい、おとなしそうな子で、大きな碧い眼に涙を、いっぱい、ためている。

「よかったー。エリコったら、ぜんぜん、わたしのいうこと、きいてくれないの。お金のことは、これから、がんばるから、2人でいこう、っていったのに」

「ふん。あんた、わたしはね、お金なんかなくても、どおーにでもなるわ。じっさい、こうして、どうにかなったじゃん。

あんたとは、ちがうの！ あんたこそ、せめて、お金でもなきや、とうてい、生きてはいけないでしょう。このIEですら、あんたには、ムリよ」

むかいあわせのベンチシート、2人で1つに坐ってる。

部屋はあたたかく、椅子の生地は上質でやわらかく、ここちよい。

壁はマホガニーで、木目が美しい。室内のあかりは金でメッキされ

たランプだ。

あたしは、インテリアを、うつとりながめながら、さつきまでの
つらい環境かんきようとの、あまりのちがいに、夢ゆめきぶん。まかふしぎな感かん覚かく
だった。

なんとなく、よゆうのせい、気きになつてケータイ出だす。なんで
人間にんげんつてしあわせのさいちゆうに、わざわざ不幸ふこうをよびましたが
るんだろー。やっちゃいけないとおもうと、やっちゃうみたい
な……。わたし、学校がっこうの裏うらサイトを見みる。

あいかわらず、たたかれてんなー。

だれだか、わかるよ。ま、いいーし。死しねつていわれたからって、
死しぬ義務ぎむはない。てか、死しんでも、生いき返かえってやるわ。

人ひとは、みんな、じぶんのつごうで、かつてなことをほざいてるダ
ケだ。

あーあ、現実げんじつって、なんで、まちウゼーの？ 人にんげん間の設せ定ていにあわ

ないンならなくなれよ。つーか、なんで人間の設定は現実にあわせ
てナイの？

現実げんじつって、けつきよく、ANKAが教おしえてくれたように、脳内のうないの
信号なんでしょ？ だったら、じぶんのつごういいようになってい
なきや、おかしいんじゃないの？

で、ふと、ANKAをみ見る。

ANKAは、窓まどわくに肘ひじを突ついて、ホームのようすをながめてい
た。

ともかく、この人ひとについていけば、だいじょうぶな気きがする。会あ
えてよかったよ……

ミーシャも窓まどがわ。ANKAとむかいあわせ。あたしとエリコが
出口でぐちがわで、むかいあつてゐる。

ANKAがふと、いう、

「ねえ、あなたたちのキャラは、なに？」

「きやら、ですか？」

ミーシャがおずおず、問い返す。

「あら、あんた、基本設定のキャラクターのことよ、わたしはねー、

聖性！」

エリコがいう。

「まぢイかよ！」

あたし、いっちゃった。

「なに、それえ！ どーゆー意味？」

ANKAは、相手にせず、冷静に、

「で、ミーシャ、あなたは？」

「運命、です」

うーん、わかる気もする……。しかし、ヒトのことはいえないか、

あたし。

「ちよつと待って、ねえ、じゃあ、あんたは、なんなのよ、ユリイ

カ」

「う、うーん……」

「ちよつとーつ、いいなさいよおー」

「うん。……叡智、かな？」

エリコの大爆笑。
だいはくしょう

「キャハハハハハハ、ちよ、ちよつと、あんだ、わたし、殺す気？
ころすき

アアハハハハハ！」

ANKAは、そんなの無視で、
むし

「ねえ。これって、ぐうぜんじゃないわ」

あたし、意味わかんなくて、
いみ

「え、なんで？ 4つのキャラがそろったから？」
よっ

エリコが腕を組み、
うで

「うーん、そうかも。たしかに各キャラがそろえば、漏れなし、か
かく
んぺきって、いえるわよねー」

キョトンとしてたミーシャが、

「わたしたち、すごくいい組^くみあわせてこと？ 4人^{よにん}でチームになれば」

「そうかも」

ANKAは、うなずいたが、まだなにか考^{かん}えていた。

エリコがいう、

「あと、1人^{ひとり}よね。きっと、どこかでめぐり会^あうんだわ。ね、ね、

どこだともう」

「あたしに、わかるわけないでしょ！ ANKAにきいてよ。だいたい、あんたとしゃべるのって、ほんと、めんどくさいのよね」

「あーら、ぐうぜんね、同感^{どうかん}だわ。わたしも、そーおもってたトコよっ！」

ANKAがうんざりした顔^{かお}で、

「いいかげんにしてくれない？ まじ、疲^{つか}れるわ」

列車は蒸気を噴いてさけびを上げ、走り出した。

雪の山岳を除雪された線路がつづく。

雪をかぶった岩ばかりの風景だ。列車は崖の壁を削ってつくられた路にしかれたレールをくだっていた。

だから右がわはせまるような大岩だらけだけど、左がわはとおくまで風景が見わたせる。

あたしたち、みごとに景觀に、しばらく見とれてた。

「おなか、すいたわよね」

しばらくの沈黙のあと、エリコがととつに、いった。

すかないわ、といたかったけれど、ムリ。あたしも、ハラペコだった。それに、乗るまえに見たあの豪華な食堂車で、なにが出来るのか、きようみしんしんだった。エリコがまた、ムカつくことをいう、

「ねえ、あんたたちって、どーして、そんなふうに行動力がなくて、

かしら。

わたし、いくわよ。さあ、ミーシャ、ぼさつとしてんじやないわよ。あんたはね、そーだから、みんな、ムカつくのよ」

それ、おまえだ、つーの。

窓^{まど}の外^{そと}を見ていたANKAが、

「そうね、そろそろ食事^{しょくじ}の時刻^{じこく}だね。いこうか」

「とーぜんね」

エリコが勝ちほこったように胸^{むね}をはって、コンパートメントを出^でる。はあ……。ミーシャがあわてて、立ち上^たがり、

「あ、待^まってよ、おいてかないで」

ったく……

ANKAも、席^{せき}を立^たつ。

「さ、いこうよ、ユリイカ」

「しかたないわね」

といった瞬間^{しゆんかん}、おなががグーと鳴^なった。ANKA、大笑^{おおわら}い。あたし、じぶんの腹^{はら}に、ちよームカつく。鳴^なるのは、アンタのかつてだけど、なにも、このタイミングじゃなくなつて、いいじゃない。なんで、あたしに、恥^{はじ}かせるのよーっ！。

「なによ、ちがうわよ、これは、オナラよ」

「あんた、それ、ぜんぜん、フォローになつてないよ」

「だよね」

あたしたち、笑^{わら}いながらコンパートメントを出^でた。そのとたん、あたしを見ていたANKAの笑顔^{えかお}がきびしい表情^{ひようじよう}に変わ^かる。

「な、なによ、ANKA」

あたし、そういいながら、ANKAの視線^{しせん}があたしをとおり越^こしていることに気^きがついた。うしろをふり返^{かえ}る。

「え？」

だれかが車両^{しやりよう}の、いちばん、はしつこのコンパートメントから、

こっちを見ていた。部屋から顔だけ出しているのだが、みように陰になつて、どんな顔か、どんな表情なのか、よく見えない。

しかも、あたしがふりむいたとたん、さつと身をひいて、部屋のなかにかくれたのだ。

「な、なによ？ キモいわねー、どーゆーこと？」

あたし、なんか、ムカついてツカツカと、じぶんでも意識せずに、その方向へと歩いていった。なんで、こんなにムカつくんだろ？ つて、こころのどこかでおもいながら……

「待ちなさい、ユリイカ！」

けど、あたし、止まることができなかった。

ANKAがあたしの肩をつかんだときには、もう、あたし、車両のはしっこまで来ていて、そのコンパートメントのドアのノブをにぎっていた。

「ユリイカ、ちよつと、待って！」

あたし、ひきあげた。見た瞬間、背筋に寒気が走る。

からっぽ。だれもいない。そんな……。まぢこわい。

ANKAも、同じきぶんだったみたいだ。息を吸いこむ音がきこえたあとは、しばらく声がしない。

けど、ようやく、

「だれも、いない。でも、たしかに見えた。ユリイカ、あんたも、見たでしょう？」

「見たわよ、見たから、ここに来たんじゃない！」

これ、どういうこと？ ANKA！」

「わたしにだってわからないわ！ ヒステリックにならないでよ！」
「ヒステリーなんか、なってないよ、おちついてるわ。変なことい
わないで。」

かなり、じゅうぶん、すんごく、おちつきはらってるわ！ ふ
ざけないでよ！」

「どこがおちついてんのよ。めーいっぱい、動揺^{どうよう}してんじゃん。

それよか、よく見て^み。だれか、かくれてるか、とか」

あたし、ゾツとして、もういちど、部屋^{へや}のなかをふり返^{かえ}り、1つ

1つ、よく見た^み。ANKAがいう、

「荷物^{にもつ}らしきものもないし、空き部屋^{あべや}だよね、ここつて。気配^{けはい}もしないしね。

あ、待ち^まなさい、ユリイカ。ロッカーや、クローゼットとかに、かくれてるかもよ。もう、やめなさい。

ともかく、ひきあげよー。

べつに、なんでもないことかもしれないし。

もし、なにかがあるなら、だまっても、つぎのアクションがあるわ」

あたし、それでも、見^みまわさずに、いられなかった。天井^{てんじょう}にぶらさがってないかとか……。でも、だれも、いないし、窓^{まど}から出^でて

いったとは（内からカギがかかっているから）、考えられないし。

「さあ、いこう」

そういったANKAの声と同時に、あたしのケータイが鳴った。
ホルダーから外し、耳にあてる。ミーシャの声が、

「どーしたんですかあー？」

「なんでもないよ、いま、いくからさ」

そうこたえてから、歩き出したものの、あたしは、そのコンパートメントをふり返る。

なにもない。なんでもない。だれもない。

食堂車に入るには車両のつなぎめをわたるが、つなぎめにありがちな振動や、ゆれなんか、まったくくない。

まず、エントランスがあつた。

シルク織の絨毯をしきつめ、舞台の緞帳みたいなカーテンをつるし、タペストリー、高価な木製家具、漆喰のレリーフ、フレスコ画、

すうひやつぽん
数百本のロウソクをともした金製のシャンデリア、「豪華」って言
葉そのもの。

金の紐飾りに青い制服のドアボーイが会釈しながら、櫛のドアを
あけてくれる。

食堂の内装も、すごく豪華だった。

「はやく、はやくー」

エリコが手をふる。2人は、もう、坐っていた。

金いろの真鍮の傘のついたランプ、窓にはベルベットのカーテン、
シルクのような光沢のテーブルクロスに、燭台。

キラキラしたグラス、繊細な図柄の陶器のお皿。

ここに来るまでの過酷な環境との、あまりのちがいに、またもや、
ふしぎな感覚にとらわれた。

あたし、ちよっと、うっとり。窓がわに坐って、外をなにげなく
ながめる。

雪が降ってけど、くもり空がさほど暗くない。

樹木のまったくない、白っぽい灰いろの岩があちこちで、むき出した丘。雪は少ししか、つもっていない。その岩がなんか、すごくつきり、なまなましいくらい、あざやかに見えてた。

あたしのむかいに坐るミーシャは、ワクワクしたようすで、さつきから、あちこちを見まわし、あきないようだ。

「あったかいシヨコラ、よく冷えたシードル、サラダ、スープ、フオアグラ、牛肉の骨つきステーキ、トリュフを添えて、うーん、キヤビア、チーズ盛りあわせ、それからティラミス、えーと」

通路がわに坐ったエリコがメニュー片手に、しきりに給仕に注文してる。

ANKAは……

やっぱ、ボーつと、メニュー見ながら、エリコのむかいに坐って、考えこんでる。

ほかに、お客きやくが3組くみあった。

2つのテーブルにわかれて坐すわってる5人1組にんひとくみのグループ。男女2人ふたのグループ、そして、独りひとりの男おとこ。怪あやしいかなあ。

ANKAがようやく、口くちをひらき、

「エリコ、ちよつと、ぜいたくすぎない？」

わたしたちのお金かねって、たくさんじゃないわ。

「つか、だいたい、あんた、お金かねないんでしょう」

「へー、ANKAらしくないこというじゃん。小せえなー。そんなこと、どーにでもなるわ。」

すべてはキモチ、意志いしの力ちからよ」

……らしくないって、今朝けさ、会あったばつかじゃん。

まぢ、ちよーしいい、こいつ！

ANKAは、そんなの無視むしで、給仕ギャルソンにむかって、

「シヨコラと、ヤギのチーズでいいわ。ああ、ポークのソーセージ

なら、安^{やす}くいから、OKよ」

「かつてにしてよ」

エリコが唇^{くちびる}をとがらせる。

あたしは、そのとき、ミーシャがじつと窓^{まど}の外^{そと}見てることに気^きがついた。あたしも、彼女^{かのじよ}の視線^{しせん}の方向^{ほうこう}を見る。

「あつ」

すぎ去^さる風景^{ふうけい}のなか、雪^{ゆき}の上^{うえ}に男^{おとこ}が立^たつてた。車両^{しやりよう}のはしで、あたしたちを見ていたあの男^{おとこ}に、ふんいきが似^にている気^きがした。

「ANKA、ANKA、あれ、あれを見て」

「なによ」

けど、もう、通^{とお}りすぎて、見^みえなくなっていた。

でも、なんで？　かくれるように見^みていたかとおもえば、こんどは、すがたを見^みせるように、立^たっているなんて。

怖^{こわ}がらせようとしてる？……、それとも、警告^{けいこく}？

でも、ありえない、さつきまで、走^{はし}つて^{れつ}る列車^{しや}のなかにいたのに、いま、外^{そと}なんて！ あたしのいつて^{そと}ること、おかしくないよね？

なんか……じぶんの感^{かん}覚^{かく}が信^{しん}じ^んられなくな^{かん}つてくる。でも、見^みたものは、まさしく見^みたのよ。

「あ^{おとこ}の男^こが、ほら、コンパートメントのところで、あたしたちを見^みてた、あ^{おとこ}の男^こが外^{そと}に、いま、立^たつてたのよ！」

ANKAは、身^みを乗^のり出^だして見^みようとしたけど、もうおそい。とおすぎて、だめ。

「え、わかんない、見^みえないよ。

でも、ユリイカ、あ^{おとこ}れが男^こだつて、いつ、わかつたの？

あ^{おとこ}のときは、シルエツトだけで、はつきりしなかつたわ。

なんとなく、ふんいきが男^{おとこ}つぽかつたのは、たしかだけど……」

「さつきのコンパートメントにいたシルエツトと同^{おな}じだつたし、い

ま、見^みたアバターは、ま^{おとこ}ちがいなく男^こだつたわ」

エリコとミーシャとは、なんのことかわからず、ぽかぁーんとしてる。

「あんたたち、いったい、なんの話してんの？」

あたし、事情を説明した。

だまつてきいてたエリコが、意外に、しんけんな表情で、

「ふーん。来ンのおせーとおもったら、そーゆーことだったんだ。

でも、現象としては、そんなに、おどろくようなことじゃないよ。

だつてさ、そもそも、バーチャルな世界なんだから、わたしたちが
ほんとーに生きてる現実世界みたいにさー、物理的な制限、つーか、
限界なんか、ないんだから。

じつさい、なんでも、ありなんだよ。

ただ、じゃーおめーできるのかよ、つていわれちゃうと、ううん、
できないよ、つー、こたえしかないんだけどねー」

ANKAも、うなずきながら、

「そう。たいして、ふしぎじゃないわ。

問題は、もんだいなんですか、つてことよ。だって、わたしたちに、そんなこととして、いみなんの意味があるの？

ぜんぜん、わかんない。しかも、エリコのいうとおり、あるていど設定をいじることができる者もののしわざだわ。

そんなやつがなんで、わたしたちにかまうの？ わかんない。だから、ゆだん油断ができない」

あたしも、やっぱ、きも気持ちわるい。

「だよね。

なんの目的で、もくてきあたしたちのまわりに、まとわりつくのよ？」

「ねー、もー、そんな話はなしやめよーよ。ごはんおいしくないよー」

つてミーシャ。

たしかに、そうだよ……けど。

あたしたちは、ちよっぴり暗くらくなって食しょくじ事を終おえた。

少し沈黙。
すこ ちんもく

部屋に帰る空気になったんだけど、なんか、コンパートメントにもどるのが怖くて、あたし、だれがさきに立つか、ようすをうかがった。

だって、もし、やつがまたいたら、あたし、怖えーよ。

空気をさっして、ANKAが立つ。すると、エリコがいかにも、ぐうぜんのように、わずかにおくれで立ち上がった、

「さあ、いくわよ。あれ、もしかして、なんか、ビビってる？」

あたし、まぢムツとすんだけどー。

エリコが立ち上がると、ミーシャも、自動的に立つ。あたしが、いちばん、最後になった。

最後って、ちよつと怖い。うしろから襲われたら、無防備じゃん。お辞儀する給仕をあとにして、あたしたちは食堂車を出た。

客車に入る。

せまい廊下、列車のなかだからしかたない。窓の外は、くもり空で、暗くなってきた。

まだ、午前10時くらいのはず。さつきまでは、さほど、暗くなかったのに……せまい廊下を、すごく暗く感じる。

列車の走るガタガタした音以外、しずか。あたし、なんども、うしろをふり返った。

ミーシャが、いちばん、安心な位置かも知んない。でも、彼女は、意識してないとおもう。

やっぱ、ムカつくのはエリコだね。んー、なんか、ドキドキしてきたよお。

あたし、廊下にならぶコンパートメントの扉から、眼が離せない。だって、そのどれかから、やつが出てきそうな気がするから……

「なんか、気持ちわるい空ね」

ミーシャがポツリという。

「あんた、なにいつてんの、雪、降ってんだもん。くもり空に決ま
ってんでしょ」

エリコがあざけるけど、ANKAは、

「でも、今朝より、ずいぶん、暗くなってる。たしかに、ぶきみね」
けつきよく、なにごともなく、あたしたちは、コンパートメント
に着いた。

ふー。あたし、安堵のため息つく。

となりで、エリコも、同じ吐息をしてた：

「ちよつと、昼寝しよう。わたしとユリイカは、とくに、疲れてい
るし」

だよな……。眠った。いろんな夢見た。吹雪のなか、もうろう
と、歩きつづける夢。いっても、いっても、たどり着けない。泣い
てる夢……。それでも、すごい疲れていて、爆睡だった。

とちゆう、1回起きた。夜になっていた。時計、見たら午後7時。

エリコがミーシャとディナー食たべにいくとか、なんとか、いった。

けど、ANKAも、あたしも、眠ねむってるほうがよかった。あたし、水飲みずのんでから、また寝ねて、午前2時ごぜんじ、眼めがさめた。

わきで、ANKAが眠ねむってる。あたし、ぞつ、とした。

ゆれる列車れっしやのガタガタした音おとにまざり、廊下ろうかを歩く足音あしおとがしている。それがあたしたちのコンパートメントのまえで、止とまった！

エリコも、ミーシャも、となりのベッドで、熟睡じゆくすいしてる。部屋へやがまっ暗くらで、音おとだけが空間くうかんを支配しはいしている。

「ANKA！」

あたしは、彼女の耳かのじよ みみもとで、ささやいた。けど、起おきない。

足音あしおとの主ぬしは、ふたたび歩き出あるした。足音あしおとはきこえなくなつた。

あたし、怖こわくて、じっとしていたけど、いつのまにか、眠ねむりにおちていた……らしい。

夢ゆめを見た。

夢のなかで、12本の大きくて反り上がった牙を持つ白い巨象が、
がやく4人の戦士にかこまれて、ちかづいてくる。紫摩黄金の雲が
彼らのまわりをただよう。すごおい……きれい……

あたしは、ガサガサする音で、眼がさめた。

ANKAがしたくをしている。よかった、朝になったんだ。

起き上がると、エリコも、化粧室をかねる洗面室に坐って、みじ
たくをしている。そのとなりで、ミーシャが歯みがき。

でも、これ、ほんとかしら。だって、なんでもありのバーチャル
世界だもの。あたしをだましてないかとか、すぐに変わっちゃうん
じゃないか、って、疑っていると、きりが無い。

無情で、鉄みたいな現実のほうगतよりになる気がしている、い
まは。

「おはよ、ANKA」

あたし、言葉を発した。

「あ、起きたね、ユリイカ。だいじょうぶ？」

その一言ひとことがうれしい。安心あんしんした。急にきゅうに、周囲しゅういのすべてが色彩しきさいを帯おびて、リアルになる。

「ありがと。だいじょうぶだよ。ANKAは？」

「わたし？ なにいつてんの、もちろんよ。わたしは、だいじょうぶ。決きまってんじゃん」

ちよつと、ムカつかせる、その言葉ことば。信じしんあつている証あかしみたいで、すべてのしんぱいを、ふき飛ばとしてくれる。

そして、エリコのちよムカつくセリフが、

「ユリイカ、なにしてんのよ、すぐ、シーレオーノなんだから。

わたし、トロいやつなんか、待まちってないよ。もう、ミーシャだけで、じゅーぶん」

「あーつ、どーしてえ？」

わたし、したくしてんじやーん！」

あたし、ホツとした。

さくばん あしおと
昨晚の足音のこと、わすれちゃっていたよ。そーよ、わすれちゃ

だめ。ANKAに話した。

わら はなし
「笑えない話だね。でも、それだけなら、なんでもない話だよ。

はなし
まあ、エリコたちには、話さないでおこうか。べつに嘘つくわけ
じやないし。それでいい？」

もちろん、OKだし。

れっしや ごぜん じ ふん えき
列車は午前7時48分、駅に着く。大急ぎで荷物をまとめ、あたふ
たと、ホームに降りた。

ちい にもつ ころ
あたしたち、小さいから、荷物をはこぶってゆーか、転がつて
って感じ。

えき やね てっこつ
駅の屋根は鉄骨にガラスがはられている。

てんねん ひかり
天然の光がいっぱいだ。ヨーロッパみたい。

ホームがいくつも、つてゆーか、20か、30くらいあって、列車が

続々と到着し、人がゾロゾロと降りて来る。すごく、そうぞうしい。

みんな、アカデミアへむかう、新規登録者ばつかしだった。

こんなに、たくさんいるの？って感じ。

「人気サイトだからね。世界レベルだし。

あんたも、いまぐらいから、世界レベルに接したほうがいいのよ。

ドーせなら、最高がいいっしょ。

1番じゃなきゃ、ダメな理由がなんでひつよーなの？ 1番をめ

ざさなきゃ、ビリになるのが現実よ。

ワールドカップで、2番めざして戦うとか、そんなビミューな聞いかた、ム

リっしょ lol (大笑 : laughing out loud)。

すべて世界レベルをめざすのよ」

ANKAって、まちすぎいいね。あたし、そんなこと1兆分の1

ミクロンさえも、考えたことがなかった。

ドーして、眼ざめてる人と、そうでない人間とがいるの？ んご

おい不公平ふこうへいだけど、けつきよく、しかたないのよね。ANKAと出で会あえて、あたし、幸運こううんなんだ、っておもうほうが精神衛生上せいしんえいせいじょう、いい。

っていつても、こころの底そこでは、不公平とおもう気持ちき……消えきないよ。

受け容うれなきや、ラチがあかないことなんだけど……。

んー、あたし、どーしたらいいの？

なんて、なやんでるヒマもなく、現実げんじつに押し流おされて、あたしは、ステツお降りてホームに立たっていた。

現実げんじつは、いつも容赦ようしやがない。待つまててくれない。即答そくとうを求めもとてくる。ここ、IEですら同じなんだ。

ハデな身みなりの男おとこたちが立たっていた。

金きんいろの飾かざり紐ひもがたくさんついた水みずいろのサテン地ちの丈たけの長ながいコートきぬを着きて、ブロンズの巻まき髪がみのかつら、刺繡ししゅうのある縹しゅうす子の靴くつに絹きぬの靴下くつした、大きなカフス、そんな身みなりで、紋章もんしょうのついた杖つえをふり、

大きな声を出している。

その紋章がアカデミアの聖の聖なる紋章だということは、あとで知った。

クローンみたいに、十数人も立っていて、同じセリフをバラバラに、わめいている。

「こつちだ。

アカデミアにいく新参者！

知の殿堂、叡智の学舎、真実の伝授所なら、こつちだ。

真理を求むる者、ここへ集まれ」

駅舎から、外に出ると、雪がはげしくなっていた。でも、風はな
くて、ひたすら深々と降ってる。

大きな噴水のあるロータリーに、数えきれないくらい、たくさんの馬車がならんでいた。あたしたちみたいな、新規登録者を、つぎと乗せて、ロータリーから出ていく。

アカデミアにむかう馬車ばしや くらが連なり、列れつをなして、とおくまで、えんえんと、つづいていた。いくさきには、古いふる、陰鬱いんうつな、石畳いしだたみの路がある。シーレオーノは歴史れきしある街だ。まち

皇帝こうていシーレイオン13世せいの、かつての栄耀栄華えいようえいががしのばれる城壁じょうへき、鐘楼しょうろう、天てんを刺さすように、いくつも塔とうを屹立きつりつさせている聖堂せいどうの屋根やね、背せの高い石造りいしづくの建物たてものたち……石葺屋根スレートやねがならぶ。

しかし、皇帝こうていの鎮座ちんざする街まちであつたのは、数百年すうひやくねんもむかしのことらしい。

いまは、ただ歴史れきしを誇ほこりするだけの、淋しいさび、暗鬱あんうつな街まちだった。雪ゆきぐもりがなおさら、そんなふうに見みせる。

「寒いね」さむい

ミーシャがいった。

「そうね。いままで列車れっしやのなかがあつたかかつたからね」

ANKAがきようみなさげに、そうこたえた。

そうだよ、寒いとか、いってるばあいじゃない。あたしも、微妙びみょうに緊張きんちやうしてきた。

馬車ばしやに乗る順番じゆんばんを待まつために、あたしたち、ならんだ。

列れつはいくつかあったけど、どれも長い行列ながぎやうれつになっていた。

「どーにか、なんないのかしら、まちめんどいわ。ちよー寒さむいんだけど。」

いつ、乗のれんのよ」

エリコがまたムカつくことをいった。あたしたちのまえに、ならんでいた背せの高い女たかおんなの子このグループひとりの1人かえがふり返って、

「ふ。テメー、ガキかよ」

ぴしやりといった。あたし、びっくりした。その子こは、色白いろしろで、青あおく深ふかいまなざしに、血ちいろの唇くちびるをしていた。

「な、なによ、あんたに、関係かんけいないでしょ！」

エリコは、せいっぱい抵抗ていこうしたけど、相手あいての迫力はくりよくに気けおされて、

いつもの強氣つよきがない。

そのほかの4人よにんの女おんなの子たちこも、ふりむいた。

「どーした、メアリー、こんなやつ、相手あいてにして」

「いわせとけよ、メアリー」

「くだらないことにかかわるな。メアリー」

メアリーとよばれた子こも、鼻はなでせせら笑わらいながら、

「ふっ。そーだね。あたしも、どうかしていたよ、ジン。こんなチビにムカつくなんてね」

「いーえ、どうかしてないわ、メアリーさん。エリコは、人ひとをムカつかせる天才てんさいなのよね。」

「背せは関係かんけいないわ。あんた、なによ、エラソーに、デカけりやいいつてもんじやないわよ」

「プっ」

そう鼻はなを鳴ならして笑わらうだけで、女おんなの子たちこは、もう、むき直なおって

無視^{むし}してる。

「ちよっと、ちよっと、なによ、その態度^{たいど}わあ、ちゃんと話^{はなし}しなさい。

ビビってるの？」

こんどは、ジンとよばれた、鬣^{たてがみ}のような金髪^{きんぱつ}の女^{おんな}の子^こが首^{くび}だけひねり、こちらを見て、カラカラ笑^{わら}った。

「ムキになるなよ、おチビちゃん。弱い犬^{いぬ}ほど、よく吠^ほえるっていうぜ」

「キーツ」

犬^{いぬ}つつか、猿^{さる}？

エリコは、味方^{みかた}を求めて、ANKAのほうをむくけど、彼女^{かのじょ}だつて、あきれて肩^{かた}をすくめるだけ。そりやそーよね。

ただ、いちどだけ、ジンとANKAの眼^めと眼^めがあつた。凍^こりつくような、しずかな火花^{ひばな}みたいなものを感じ^{かん}ただけど、なんなの、

これって……

つくったような冷笑をジンが泛かべ、さげすむように眼をそらす。ジンの仲間たちも、それにあわせて、よゆうを見せつけようとするかのように、不自然に、くすくす笑ってみせる。

しかし、すぐに沈黙。

やっと、馬車が来て、ジンたちが乗りこむと、あたし、すぐ、ANKAにきく、

「ねえ、知りあい、もしかして」

ANKAが眼でジンの乗った馬車を追いながら、

「ジン・メタルハート。MUD（マルチ・ユーザー・ダンジョン）の世界じゃあ、けっこう、有名なやつ。

あとの4人は四天王、つてとこね。

なんだか、よそのゲームですれちがったわ。それだけよ」

ミーシャがたまらずいう、

「ねえ、馬車、来ちゃってるけどおー」

エリコが声を上げ、

「えー、あいつが、そーなの？」

なによー、たいしたことないじゃん！」

おめーもな。

でも、ジンのこと、知ってたんだあ。あたしだけかよ？ ぜんぜ

ん、知んナイ。

「ミーシャ、知ってた？」

「んうーん」

首をよこにふる。あー、よかった。これで、よし。

あたしたち、協力しあつて、荷物を後部の台にのせた。んしよ、

んしよ。ランプがゆれる。

獣脂を燃やす吊るしランプ。独特のにおい。

かばそいステップを上がり、豪華な飾りつきの扉から入ると、ギ

ヤザーの入った革張りのシート。ふれてみた。きめこまかくて、しなやか。

じよ、上質だー。

すげー、いーじゃん。

馭者が鞭をふると、4頭の馬が蹄を鳴らして、ゆつくりと、すすみはじめた。

ほかの列からも、馬車がつぎつぎ出発しているので、ジンたちの乗った馬車は、すでに、見えなくなっていた。

あたしたちがいくのは、古い街の、さびしげな石畳のメイン・ストリート。

過去の栄光をしのばせる石造りの建物は、たくさん彫刻で飾られ、円柱にささえられたアーチ形のステンドグラスの窓を、いくつも身にまとい、破風に浮彫りや、モザイクを奢っている。

ひろい歩道には、街灯がならび、歩く人たちは、優雅なコートを

はおつていた。

けど、あたしには、ほそい路地ろじにいる物乞ものごいの人たちや、酒さけを呑のんで酔よっぱらい、道みちばたで眠ねむってる人たちのほうが眼めについた。

ANKAも、つぶやく。

「おかしいね。IEには、物乞ものごいなんかいないはずよ。

コスプレかしら。慈善じぜんや奉仕ボランティアは、なによりも、クドク・アップに、

ひつようだから、いるはずがないわ。それに」

「なに？」

「見て、あれ。証券会社しょうけんがいしゃよ。人ひとが集あつまって、さかんにしゃべってるでしょ。

あの銀行ぎんこうも見て。為替かわせレートが表ひょう示じされてるわ。

公会堂こうかいどうの看板かんばんには、競売けいばいの予定日よていびが掲出けいしゅつされてる。

金銭きんせんや財産ざいさんへの執着しゅうちやくはマイナス・ポイントなのに、こんなはず

がない。

なにか、おかしいよ」

「でも、あたしらの現実世界げんじつ せかいでは、たぶん、ふつうだよね？」

「現実の世界げんじつ せかいは、くさってるからね。

力ちからの争あらそいだけがあつて、なんの倫理りんりもない世界せかい。

モラルになんの関係かんけいもなく、ただ、ただ、原因げんいんが結果けっかを生うむだけ。

なんの規制きせいもなくて、金銭きんせんとか、即物的な原理そくぶつてき げんりがはばきかせてい

て、強い者つよものが勝ち、したたかな人ひとたちがトクをする、ただ、それだ

けのくだらない世界せかい。

それなのに、わたしたちに、いい子こになれよ、とかいうんだから、

大人おとなって、みんな、あたまおかしいでしょ。イミわかんないよね(笑)。

いい子こになつてほしきや、金権政治家きんけんせいじかや指定暴力団していばうりよくだんや天下り役人あまくだ やくにん

を全員処分ぜんいんしよぶんして、オレオレ詐欺さぎとか、みんな死刑しけいにしなきゃ、ナツ

トクできないでしょ。

大人おとなが拝金主義者はいきんしゆぎしやだから、こどもが「年寄りとしよから、ハンドバッグ

ひったくったって、いいじゃん。金儲かねもうかるんだからさー」てき的な感覚かんかくになっちゃうんだわ。

わたしたち、大人おとなと、いっしょに、やってたんじゃ、正ただしくも、しあわせにも、ぜったい、なれないのよ」

「けど、どーしたんだろ。作者さくしやの気きが変わった、ってこと？」

「そんなの信しんじらない」

「でも」

エリコがわって入はいってくる。

「あーら、知しんなかったの？　ここじゃ、これがさいきんのモードらしいわよ。どっかのスレッドにも、あったわ」

ミーシャが変へんな顔かおをする。

「えー、それじゃあ、こまるうー。わたしでも、たのしく生いきていけるとこだと、おもってたのにー」

ANKAが手てをふった。

「いいわ、ともかく、ようすを見ましよう。

でも、ほんとに、変わかったんだとすれば、モードなんてレベルの問題もんだいじゃないわ。

ミーシャのいうとおりよね。来た意味き いみがなくなる。根本的な問題こんぽんてき もんだいだわ」

メイン・ストリートをぬけて、街まちはずれに來ると、城壁じょうへきと、門もんが見えはじめる。燦然さんぜんたる紋章もんしょうが城塞都市じようさいとしの門もんの、アーチの頂点ちやうてんに、はめこまれていた。

蛇体じやたいの龍りゆうを2匹ひきま巻まきつかせた鷲わしがシーレオーノの街まちを象徴しょうちやうする紋もんらしい。見上みあげれば、舞まいおちる雪ゆきが幻想げんそう的なきぶんにさせる。

無口むくちになった。

ANKAも、なにか考かんえこんでいるけど、なに考かんえてるかは、わからない。いわないし。

「やっぱさあ、なんか、旅愁りよしゆう感じるよねー」

エリコが氣どつて、そういった。

「ロマンチックみたい」

ミーシャは、うっとりしてる。

門衛の兵の立つ、門を出た。

石畳の街道になっている。

さびしい風景だった。ただ、灰いろの空と、降る雪。

白い丘陵地帯へつづく、古い石の道。とおくに見えていた山々が
少しずつだけど、ちかづく。

しばらく、ゆられてすすむと、あたし、眠くなってきた。ウトウ

トしてると、だんだん、樫や杉、ブナや楠がふえ、大木がたくさん

そびえて、陰をなす森に入る。

木の幹の苔が老人の鬚のようだった。

積雪の氣候なのに、深い苔があるなんて、ぜんぜん、あつてない。

ふしぎな森だ…

とうとつに、数十メートルあとから、悲鳴や、怒号がきこえた。
馬車を牽く馬の、おびえた鳴き声をする。護衛のアカデミア騎士
が剣をふるう音。

なに者かが馬車の列を襲ってる？

あたし、あらわれたやつらのすがたを見て、鳥肌が立った。

裸にちかいからだで、体毛の長い、ゴリラみたいな怪物の集団が
コン棒や、斧や、大剣を持って、あばれている。

寒くないのか？って、んなこと、ゆーてるばやいじゃない！

エリコがさげぶ、

「オークだわ！」

「おーく？」

あたし、きいちゃった。ミーシヤも、

「えー、えー、こわいよおー。」

で、オークって、なに？」

ANKAがこたえる、

「怪物^{かいぶつ}よ、鬼^{おに}みたいなものね」

そうなんだ、あ、あー、あゝつ、来る^くよ。

「あ、来る^く、ありえねー」

エリコがふたたびさけぶ。

あたしたちのちかくでも、護衛^{ごえい}の騎士^{きし}が剣^{けん}をぬき、騎馬^{きば}のたてが
みをなびかせ、いなかせる。

すると、両^{りょう}わきからも、とつじよ、わいたようにオークの一団^{いちだん}が
あらわれた。不意^{ふい}を突^つかれた騎士^{きし}たち、つぎつぎと馬^{うま}から、ひきず
りおろされる。

「どーしよー、まちやばいー」

あたしも、あせつてさけぶ。

その瞬間^{しゆんかん}、1人^{ひとり}の少女^{しょうじょ}があたしたちのまえの馬車^{ばしや}から、飛^とび出^だし
て来て、あつ、というまに、5匹^{ひき}のオークを斬^きりたおした。そのは

やさ、運動能力、超絶すごい。

稲妻いなづまみたいだった。

剣けんが氷河ひようがの奥おくの碧あおい燐火おきびのように滾たぎり、蒼あおい軌跡きせきを遺のこす。

少女しょうじょは、怪物かいぶつが水平しんたいにふった剣けんを、身体くうちゆうを空中ねで寝かせてかわし、

その状態でバットをスイングするように、剣けんをふりおろして、オー
クをあたまから、両断りようだんする。

身みをひるがえして、大きな剣けんをたくみにふり上げ、こんどは、股また
から、あたままでを裂さく。血ちの噴水ふんすいが雪ゆきをそめる。

バトル系けいゲームの天才てんさいじゃないかしら！

少女しょうじょは、長身ちようしんで、ストレートの黒髪くろかみ。両頬りようほほに唐獅子からじしの刺青いれずみがある。

でも、やっぱり、眼めにつくのは、剣けんの大きさだ。

はばがひろくて、文様もんようが彫ほられ、長さながが彼女の背丈かのじよ せたけを超こえている。

これって、現実げんじつじゃ、ありえない。現実げんじつなら、ふりまわせるはず

がない。

彼女^{かのじょ}は、ひるんだオークを冷徹^{れいてつ}な、へいぜんとしたまなざしで、睥睨^{へいげい}している。

形勢^{けいせい}は逆転^{ぎやくてん}し、騎士^{きし}がつぎつぎ立ち上^あがって、ひるんだオークたちを、片^{かた}っぱしから斬殺^{ざんさつ}する。

卑怯^{ひきょう}で、名誉心^{めいよしん}のカケラもない怪物^{かいぶつ}たちは、劣勢^{れっせい}になると、たおれた仲間^{なかま}を見捨^{みす}てて、逃げ出^{にだ}した。

ようやく、平和^{へいわ}がもどり、馬車^{ばしや}からひきずりおろされた数人^{すうにん}の少女^{しょうじょ}たちが蒼白^{そうはく}な顔^{かお}で、よろよろと、立ち上^{たあ}がりはじめる。

ひとり 1人の少年^{しょうねん}がたおれたままだった。

ANKAが駆^かけつけたけど、

「だめ、死^しんでるわ」

亡骸^{なきがら}が……消^きえた。

ゲーム・オーバー。よかった、ユーザーがあきらめて消^けしたんだ。

つまり、無事^{ぶじ}ってこと。

だって、バーチャル体験たいけんって、ショックが強つよすぎると死ぬしことも、あるんでしょ？

じぶんで消けしたんだから、ユーザーは、無事ぶじなのよね？

エリコが息いきを呑のみ、

「うっそー、信しんじらんない。どーして、殺ころせるのよ！」

黒髪くろかみの少女しょうじょがクールに、

「IEは変かわりはじめている。それが作者さくしやの意図いとなのか、どうなのか、わからないけど」

エリコが反論はんろんして、

「たとえば、大きな事故じこだって、よっぽど、大きな罪科つみとががなくなっちゃ、死しんだりなんか、しないはずよ。

わたしたち、来きたばかりの新規しんきユーザーに、そんな大きな罪科つみとががあるわけない。

ましてや、醜みにくいオークに殺ころされるような罪つみなんて、ぜったいに、

ないわ」

おまえなら、どーだか。

ANKAがきく、

「あんた、なまえは」

「イス (Iearth QDQ : 7) 」

「わたしは、ANKA。また、ぜひ会いたいわ」

なんで、ANKA？ ひつようなキャラは、『平和』よ。

イスが少し恥ずかしそうにあたまをかいて、

「それなんだけど、じつは、ぼくの乗ってる馬車は6人乗っていて、

ていいん
定員オーバーなんだ。

み
見たところ、きみらは、4人のようだが」

「よろこんで、迎え入れるわよ、イス。乗って」

ふたたび馬車がうごき出し、あたしは、イスにきく、

「ねー、あんたのキャラは、なに？」

イースが無表情^{むひようじょう}にこたえる、

「『平和』^{へいわ}」

あの一、どーして……………

エリコが声^{こえ}を上げる。

「やったー、これで、カンペキだわ」

「すごーい」

ミーシャも、いう。

ANKAが微笑^{ほほえ}んだ。

「おもったとおりだわ」

へー、さすがあ。ANKA、わかってたんだあ。

エリコがおもしろがっているような眼^めつきで、あたしの顔^{かお}をじつと見ていう、

「あんたさー、まさか、わかってなかったんじゃないでしょうね？

なんか、そんな感じ^{かん}ねー」

けら笑いしやがる。

ちよームカつくんですけどー。まぢ、こいつ、わかってたのかよ。そんなの、あとからいくらでも、いえるじゃん。なんか、くやしー。

イスがいぶかしげにたずねた。

「すると、きみたちは」

あたしが説明した。

森をぬけて山岳地帯を登る。猛吹雪だった。

時間をもどったみたいな感じ。

てか、山のほうは、ずうっと、荒れつづけてたんだあ。

あたしらがそこにもどって来ちやっただってコト？ あちやー。帰

って来ちやっただんだあー。

まえも、よく見えない。窓ガラスが急にくもって、ビュービューあたってくる風のせいで、ガタガタ震えてる。

あたし、1列めの窓がわ。寒いわ、まぢ。だって、正面も右もガ

ラス窓^{まど}だし。ううつ。

でも、となりのANKAは、平気^{へいき}みたい。なんで？ それはともかく、後部^{こうぶ}シートは、いいよねー。

とくに、まんなかにちゃっかり坐^{すわ}ってる、エリコ。

うーん。クドク、クドク。

あたしは、人^{ひと}をいい席^{せき}に坐^{すわ}らせて、クドクをつむのよ。あたし、こつそりケータイでポイント見^みた……

ODD… あれ、変^かわってないや……意外^{いがい}ときびしいかも……

と、独^{ひと}りところでさわぎつつも、あたし、なんども、くもるガラスをふいて、ふしぎな外^{そと}の景色^{けしき}を見^みた。

寒^{さむ}さも、瞬^{しゆん}間的^{かんてき}にわすれさせてくれる、IEの世界^{せかい}のふしぎな光^{こう}景^{けい}だった。ヨーロッパの山岳^{さんかく}地帯^{ちたい}みたいなんだけど、どこかなつかしい感^{かん}じがある。こころの原風景^{げんふうけい}……ってやつ？

すすむうちに、偉容^{いよう}をほこらしげに、天^{てん}にそびやかす、大山脈^{だいさんみやく}が

見えてきた。

その山脈の、山の1つに、異様に、とがってそびえる岩山があった。その頂上には、とがった建物の群れがあった。山の尖端の一部みたいだ。

それらは聖堂や、教会や、修道院なんかだった。

中央にある大聖堂が最も高く、そこから離れるにつれて、低い建物になっていた。

全体で、1つの剣のさきっぽみたいに見える。

アカデミアだった。

Eureka, 青龍 έκστασις; 2

Act 2.

Study of *ékstasis*

Act 2. Study of *ékotaoris*

5 アカデミア

Isèa (Idea : イデア) 山の断崖絶壁に、^{だんがいぜつぺき} zigzag にアカデミアへの道が掘^ほられている。

「正確にいえば、山ではない。

垂直にそびえ立つ、^{すいちよく} 1個の巨石^{きよせき}だ」

イースがそう教えてくれた。

摩天楼^{まてんろう}のように、大地から、とうとつに突き出し、とんがっている。ふつう、山は傾斜^{けいしゃ}を持つけど、イデアは壁^{かべ}だ。

ふもとに着き、見上げると、のしかかってくるように見える。

「アカデミアで、聖なる象徴をあらわす『I Y E』という文字があるの。

その頭文字 I と、同じかたちだといわれているわ」

こんどは、ANKA がそういう。へー。

道に入った。なかば洞窟みたيدだった。

掘削の跡が生々しい。手掘り。ノミや、鍬で、少しずつけずった

んだろーな。

登るにつれて、景色が見わたせるようになる。

北の山岳地帯のほうは、広大な、白一色の空間だった。

さいしょ、この路なら、吹雪もいくらか弱いかとおもったけど、

じっさい、入ると逆で、せまい筒状のなかを凄まじい速度で荒れ

ている。

一瞬だけ、とうとつに、風がやむと、雪が宙にとりのこされ、霞

のように、ゆらゆらただよってから、おちた。幻想的……さらさら

した、かるい雪質ゆきしつのせいか……でも、すぐに凄くすこふき荒れる。

憂鬱アンニユイなきぶんになった。時間を長く感じた。

ようやく洞窟どうくつみたいな道をぬけ、頂上ちやうじやうにたっし、ひらけた場所ばしよに出る。

壁かべが見えた。城壁じやうへきだ。石をつみ上げた壁は灰はいいろで、霧雨きりさめみたいに哀しい。

自然あらけずのままの荒削りな壁かべのまえ、神々こうこうしく金属メタリック的に光輝ひかりかがやく鎧兜よろいかぶとで武装ぶそうした人たちがならんでいた。

「叡智えいちを護まもる衛兵えいへいだよ。

真理しんりは命いのちをおしまない高潔こうけつな戦士せんしたちの勇氣ゆうきによって、護まもられる」

イスがそういった。

なんの表情ひやうじやうもない、感情かんじやうも入はいっていない。

壁かべには、門もんが切られていた。

門もんは巨大なアーチだ。壁かべがすごくぶあついから、アーチというか、

トンネルみたい。

尖塔せんとうが門もんの両わきりように、そびえてる。戦たたかいを、ずっと、見まもつ

てきた、誇ほこり高く、きびしく、情なさけ容赦ようしやのない塔とうだ。

門もんの上には、楼閣ろうかくがあつた。

楼閣ろうかくっていつでも、豪華ごうかさはかけらもない。城砦じょうさい、つてゆーのが

ふさわしいような、とんがった建物だ。

新規ユーザしんきーは、みんな、ここで馬車ばしやから降おりる。大渋滞だいじゅうたいしてい

た。

たくさんごえいへいの護衛兵れつが列れつしている。

威猛いたけだけ々しくならぶ彼らせいえいが精銳ぶたいシールド部隊ぶたいウォールだよ。そー

そー、あたしも、わかつてきたでしょ？ 眠ねむいのがまんして、イー

スから借かりた説明書せつめいしょ、ちよつと、読んだんだよ。ちよつとね。

そのなかに、くるぶし丈だけのロング・コート、黒くろい影かげのように黒くろづ

くめの男たちもまじってる。あたし、びっくり。

「あ、あれ、あたしたちを見ていた男」

「なによ、あれが例^{れい}のやつなの？　たくさんいるじゃない」

エリコがとがめるようにいう。

ANKAも、一瞬^{いつしゆん}、あぜんとしてたが、

「あ、そっか、ウイルス対策^{たいさく}なんだ」

「へ」

「ウイルスをはこんで来るユーザーがいないか、チェックしてるのよ」

「あたしたちを!？」

「たぶん、みんなよ」

「うーん、そっかなー。なんか、ちがう気がする。

だってー、あたしたち以外^{いがい}のユーザーも、ぜんぶ視^みてるんだったら、もっと、あっちこっちで眼についていたはずじゃない？」

そこへエリコが口をはさんで、

「うざいわねー、きいてみりゃー、いーじゃん」

そのとき、ちようど、あたしたちの馬車ばしゃが停車ていしやする順番じゅんばんがきていた。エリコは、飛び降りと おり、走ってコートとの男たちのうちの1人のまえに立ちどまった。

「ねえ、あなたは、ウィルスウイルスをスキャンしてる人でしょ？」

男は、あごをつき出して、まっすぐまえをにらんだまま、無言むごんで、エリコに眼をむけさえもしなかった。

「ちよつとー、なによー、あんたー、こたえなさいよー」

そこに僧衣そういすがたで、丸い鼻メガネはなの男が来て、あいだに入る。

「ちよつと、きみは、新規ユーザーしんきだね」

「あたりまえじゃない、この状況じょうきようで、新規以外しんきいって、いるの？」

「バリユースに話しかけてもムダだよ。彼らは、いかなる情報じょうほうも漏洩もちさない」

「どうわ!?　じゃあ、あんた、知ってる?　彼らは、だれにでも、

つきまとって、チェックするの？　もちろん、新規しんきユーザーだった
ら、ってことなただけどー」

「さあ、そんなことは……。きいたことがないが。

しかし、はっきりとは……。断言だんげんできない。いつでも、シークレツ
トだからね、彼らの行動こうどうは」

あたしたちは、そんなやりとりをききながらも、エリコのぶんま
で、荷物にもつを降おろしていた。彼女は、もどつて来るなり、手つだいも
しないで、ぶつぶつ愚痴ぐちる。

作業を終えて、ANKAが城壁じょうへきを見上げながら、嘆息たんそくし、

「いま、考えても、なにも、わからないわ」

あたしたちは、ぐしゃぐしゃになっている雪の上を、荷物をひき
ずりながら、門もんの下に入った。雪がなく、ぬれた黒い敷石しきいし。

入ってみると、まさしく天井てんじょうの高い、巨大なトンネルだ。

威圧感いあつかんが無言むごんで、とどろきわたっていて、まるで、大穹おおぞらにとどろ

く霹靂へきれきみたいだった。

眼がなれてくると、なんと、階段や、窓や、門扉もんびがあるのが見えてくる。人が住すんでる!?

バルコニーに人が立っているし。日あたりわるそお、つか、あたらねーだろ、日射ひざし。

あちこち小さな聖火せい火がともされている……

聖歌せい歌がかすかに、香かうのようにながれていた……

門もんをぬけ出ると、眼のまえに、建築群けんちくぐん。

古い建物が雪をかぶって、せまるように、そびえるすがたは、いかめしくて、ちかづきにくい。

外から見上げたときは、建物が寄り集まって、剣つるぎの切ツ尖さきみたいに見えていたけど、眼のまえにすると、ヨーロッパによくある、ふつうの古い街まちなみにも見えた。

あたしたちは、列れつになって、みんなと同じように、すすむ。

すすむにつれて、山のような、大きな大聖堂^{カテドラル}へと、ちかづいていく。

あたし、まちびびった。デカすぎない？ 空がはんぶん以上、かくれる。すげー。写メ撮^とろ。あ、画面におさまんねー。

大聖堂^{だいせいどう}のまえは、円形^{えんけい}の広場^{ひろば}になっていた。

広場^{ひろば}を抱^{いだ}くように、屋根^{やね}のついた大理石^{だいりせき}の円柱^{えんちゆう}がならぶ。

「列柱廊^{れっちゆうろう}、っていうんだ。屋根^{やね}の下が通路^{つうろ}になっている」

イスがまた教えてくれた。

やぶれた僧衣^{そうい}の老人^{ろうじん}が長い杖^{つえ}を持って広場^{ひろば}に立ち、つぶやいていた。

「さいわいあれ、大真理^{だいしんり}が鎮座^{ちんざ}しておられる大聖堂^{カテドラル}に。さいわいあれ」

あたしは、ANKAの顔を見て、

「なんのことってんの、この人？」

おし
教えていう、

「聖典『k O O』が保存されているのよ。’11年5月に、マコトヤ・

アマヤスによって著わされた、聖典中の聖典よ」

マコトヤ・アマヤス？　なんかりアルっぽい、なまえ。アバター
名や、ハンネじゃないみたい。

しかも、’11年って、そんなに古いことじゃないじゃん。

聖典っていうと、埃かぶってそうな、古代っぽいイメージあるん

だけど……

ひろば
広場をよこ切り、列柱廊をスルーする。列柱廊の屋根の上に、い
ひやく
く百も、聖人の彫像群が、ずらっと、ならんでいた。

あたし、見上げながら、ため息した。凄すぎ。

せいどう
聖堂を迂回して路地に入る。

ろじ
路地は高い石造建築群の谷間にあり、せまくて、湿っていて、暗
かった。

荷物がぐつしよりぬれて、重くなってきた。腕^{うで}がだるくなる。

「もー、どこまでいきやあ、いいのよ！ポーターとか、いないの？」

エリコが怒^{おこ}り出す。

あたしも、いーかげんキレそうだった。

いつ、いかん、いかん。クドク、クドク。なんか、はやくも、わすれてんなー。

左にまがると、小さな広場^{ひろば}に出た。古い噴水^{ふんすい}がまんなかにある。

広場^{ひろば}をかこむように、いくつか建物があつた。あたしたちは、大きい建物にむかう。3階^{かいだ}建てに見えた。1階^{かい}の四面^{しめん}すべてが列柱^{れいちゅう}で、いくつものアーチをつくっていた。

ピエロのような聖職者^{せいしよくしゃ}たちが太鼓^{たいこ}をたたき、チャルメラを鳴^ならし、建物のまえに立って、大笑いしながら、

「あはは。

さあ、さあ、そおれ、そおれ。

笑う門には、福が来る！ さあ、さあ！

オリエンテーションがはじまるから。集会堂に入ってくださいあい。

こつちに、集まってくださいあい」

陰気臭い祈祷僧が香の壺を金のクサリで吊るし、ゆらしながら、

低い声で、讃歌をくり返し、入ろうとする者たちを清めている。

「神は偉大、神が正義、神は永遠の真理、神こそが生命！

永遠の真理を讃美せよ。

ロゴスに、栄光あれ。

真実こそが生命、生命であるから、それを真実とよぶのである」

あたしたちは、てきとうなアーチから、なかに入っていった。ア

ーチの上部に、石の透かし彫りがある。

「さあ、さあ、奥からつめて。席に着いてくださいあい」

粗い織りの僧服の男がそういう。世俗の慾とは関係のない、森に

住む世捨て人のような、質素さ。片手にパンを持って、モソモソと

食べている。

A N K Aを先頭^{せんとう}にし、なかに入った。

外から見たときは、3階^{かいだ}建てに見えたけど、なかに入ると、天井^{てんじょう}の高い、1つの大きな空間だった。

暗^{くら}くて、ともかく、ひろい。窓は高いところにあるので、光^{ひかり}があたりしたちの場所^{ばしょ}までとどかない。

粗末^{そまつ}な、長いベンチがたくさん、ならんできた。新規登録者^{しんきとうろくしゃ}たちが音を立て、つぎつぎ席^つに着く。

聖歌隊^{せいかたい}が集会堂^{パジリカ}のなかにならんでいる。昏^{くら}いなか、ロウソクの火に照^てらされたすがたは、まるで彫像^{ちやうぞう}のようだ。

白と赤の礼装^{れいそう}で、聖堂^{せいどう}附の専属衛兵^{せんぞくえいへい}が大きな聖旗^{せいき}をかかっていた。聖楽隊^{せいがくたい}の金管吹奏楽部^{きんかんすいそうがくぶ}隊がラッパ^なを鳴らす。

旗^{はた}から、バラの花びら^{はな}があふれあらわれ、ひらひら宙^{ちゆう}を舞った。

花びらがおちた場所^{ばしょ}には、黄金^{おうごん}の梵字^{サンسكريット}があらわれ、一瞬で消え

る。聖歌隊の讃美歌がおごそかに、はじまった。

空気がふるえ、音のひびきが霧のように残存する。

空間が祓いきよめられ、清爽の気がひろがった。

どこから、鐘の音がきこえてくる。ふしぎな残響音が、いつまでも、つづく。

ANKA、イス、ミーシャ、エリコ、あたし、の順で人をかきわけて、すすむ。人と人のあいだで、もみくちにされて、はぐれそうになるから、イスがミーシャの手をにぎっている。

あたしも、はぐれそうだおー。いっしょうけんめい、エリコを見失わないように、がんばる。

ようやく席に着いた。はあ。

坐ると、すぐに、エリコが荷物をゴソゴソやり出した。ビニール

袋を出して、もしやもしや食べ出す。おお、バナラ・クリーム・サ

ンド・クッキーか？ 匂いでわかつちやう、あたしって……
(-_-;)

ANKAがキツとにらむ。エリコは、素知らぬ顔で、

「知らないの？ 紋章入りクツキーよ。聖人を象徴する紋章がかた

どつてあつて、噛むと、御神籤が出てくるのよ。……ああつ」

「どうしたの！」

ミーシャがしんぱいそうに、きく。けど、あたしは、

「やっぱ、凶でしょ？」

「ちがうってば。末吉だわ。びみよおー。意味、わかんねー」

そういつて、エリコは、クツキーからひっぱり出した御神籤をま
るめる。

「なんだ、つまんない。いーじゃんか、ようは吉だし」

って、あたし。

「わたしはねー、大吉しか受けつけない体質なんだよねー」
きいたことねーって。

「ねー、なんか、はじまりそおだよ」

ミーシャがエリコの袖そでひっぱって、そういうと、ANKAが、

「てか、もう、はじまっているよ。しずかにしてくれない？ きこえなくなるわ」

暗くて、よく見えないけど、正面奥に、低い壇だんがあつた。壇上だんじょうに演台えんだいがある。

見ると、壇上だんじょうに、だれか立っていた。

ケータイのカメラで、動画撮とって拡大かくだいしながら、見る。シルクのようなつやの黒い服、やせて長身ちようしんの人。髪はボサボサで、ワシ鼻ばな。

エコーのかかった声が反響はんきやうする、

「アカデミア事務局じむきょくの局長きやくちよう、ハーロック・シヨルムスである。

今後のスケジュールであるが、いまからいうことを、きちんとメモするように」

エリコが微笑ほほえんで、わたしのほうを見る。

「ねー、鉛筆貸えんぴつかしてくんない？ どこかに、おとしちゃったみたい」

さいしょってから、持って来てないんだろ？

「ふーん、いいよ」

ハーロック局長きよくちようが語り出す、

「まずは、明日、ここにいる全員が基本講座きほんこうざを受講じゅこうしてもらおう。

場所はカテドラル大聖堂。ここまで来るとちゅう、見たであろう。

聖の聖なるアカデミアの中樞ちゅうず、アカデミアの精神、最も神聖な場ば

所しよだ。

講義こうぎはアカデミアの学長がくちようイクシヴァーンがおこなう。

朝7時までに、集合しゅうごうすること。

遅刻者ちこくしゃは、I Eのエントランスから、やり直しとする。かならず

出席するよう」

ふんふん。メモメモ：…つと。

「そして、基本講座きほんこうざの終了後しゅうりようご、3日以内に、2つの専門講座せんもんこうざを選択せんたくすること。

むろん、3日をすぎてもよい。べつに、3日以内という決まりがあるわけではない。

しかし、アカデミアで勉強べんきょうできる期間きかんは、今日をふくめて27日間しかない。

基本講座終了後3日以内（つまり、ここに来てから、5日以内）に決まらないようでは、卒業そつぎょうできなくなるのは、あきらかだ」

そ、そおだったのかー………焦アセつ！

「主しゅとなるメイン専門講座せんもんこうざと、副ふくとなるサブ専門講座せんもんこうざとをえらべ。

2つの専門講座せんもんこうざをえらべといったのは、そういう意味である。

パンフレットに書いてある説明をよく読んで、内容を確認した上で、えらぶがよい。

講座こうざには定員があるから、希望きぼうの講座を受講じゅこうできないばあいもある。

よって、第3希望きぼうまで決めておくがよい」

ふむふむ。なるほど……………？

「わかったか。」

しよくんは、卒業後、就職を決めることとなるだろうから、専門講座の選択にあたっては、よく考えて決めよ。

しかし、専門講座に関係した職業をえらばなければならないという事ではない。

就職は勉強したことは、無関係に、自由に、えらんでよい」

ふーん。あまし意味ないつーことか。

「参考までに、教えておくが、師範らは、もともとは、しよくんと同じくアカデミアの生徒だった者だ。」

卒業後も、たのしい冒険を求めずに、アカデミアで学究をつづけ、しよくんのような後輩たちに、正しい智慧を伝授するため、難度の高い師範試験に合格した、成績優秀で、気高く、崇高なる者たちだ。

しよくんを、よく理解し、正しく導いてくれるだろう」

なんだか、めんどくさい輩やからのような気もするけど……

「さて、つづいて、生活面せいかつめんだが」

事務局長じむきょくちやうは、いったん、言葉を切ってから、つづけた、

「しよくんは、全員寄宿舎きしゆくしやに入りって、寮生活りやうせいかつをしてもらう。

ぜんぶで、2千棟とうあるが、そのうちの、5つの棟とうが今回の新規登しんきとう録者ろくしやの入る寄宿舎きしゆくしやだ。

よって、1棟とうあたり1千人のわりあてになる。

部屋へやわりはこれから案内あんないするが、ここにいるあいだは、5人で1つの班はんをつくり、班ごとはんごとに1つの部屋へやをつかうようにすること」

おお、あたしたちって、ちょーどいいーじゃん！

「班はんをつくるときの、キャラの組みあわせは自由だ。5つそろうのが理想りそうだが、かまわない。問題もんだいはまったくない」

ふふ……

あたしたち、かんぺきよ。5つのキャラがそろってる。

「さあ、班はんが決まったら、入寮受付にゅうりょううけつけをせよ。では、解散かいさんだ」

バジリカを出たところに、いつのまにか、77張はりの極彩色ごくさいしよくのテントがならんでいて、そこに受付うけつけがあった。ANKAが受付をしてくれた。じぶんたちのいくべき棟とうも、その受付で教えてくれるらしい。

あたしたちは、バジリカの外壁がいへきにへばりついて、ANKAの帰りを待った。荷物にもつはグシャグシャ。

「寒いねえー」

ミーシャがあたしのほうをむいて、そういった。いわれなくとも、わかってる。雪ふ、降ってんだもん。ブルるッ。

ANKAがもどって来た。

「パルメニデスだって。部屋番号へやばんごうは512号室ごうしつ」

「イオニア派はの大哲学者だいてつがくしやの名を冠かんしているのか」

イスがそういったけど、あたしもミーシャも、意味イミ不フで、

「？」

ANKAが無視^{むし}している、

「ともかく、そういうなまへの寮^{りよう}なのよ。いいから、あたまの上の
はてな
？マークしまいなさい。いい？　ちよつと、きいてくれる？

まず、部屋^{へや}に入ったら、すぐに、荷物整理^{にもつせいり}をすること。

そのあとは、午後5時に、食堂^{しよくどう}に集合^{しゆうごう}。寮生活^{りようせいかつ}のレクチャーがある
そうよ。

それから夕食^{ゆうしょく}、そして就寝^{しゅうしん}。翌日^{よくじつ}、朝5時に、起床^{きしよう}して朝ごはん
をすませ、7時からの基本講座^{きほんこうざ}には、おくれにないようにすること。

以上よ。いい？　わかった？」

雪のつもった、ほそい路地^{ろじ}を、パルメニデス寮^{りよう}へ、むかつていく。
暗^{くら}くて、せまくて、風になぶられ、よごれた雪がつもってる。

あたしたちは、人のながれにしたがつて、路地^{ろじ}をぬうように寄宿^{きしゆく}
舎^{しゃ}へむかう。

路と路^{みち}とが交差^{こうさ}するところでは、質素^{しつそ}な僧衣^{そうい}の人が立ち、寒さに

ふるえながら、

「ブラジュニーヤ・パーラミイタ寮はこちらあつ」「パトモス寮はこちらあつ」「ミトラ寮はこちらあつ」「ジェイル・ハウス・ロックス寮はこちらあつ」

と無表情に、抑揚のない鬱な声で、案内している。

「パルメニデス寮はこちらあつ」

あつちらしい。かどをまがった。ますます、大通りからは離れる。

「あ、あれだよ、きつと」

エリコが声を上げて、指さすほうを、あたしも見る。

「ええー？」

ミーシャがこまった顔をする。

あたしも、見た。

濃い灰いろをして、粗い質感の石をつみ上げ、つくられた建物。とりわけえらそうに、はばひろに建てられてる。

威丈高な、大玄関。よこにひろい階段の上にあった。

陰鬱。

まさに、その一言でしかない。たくさんの彫刻が繁茂したような

建築物……

「なんかあー、怖いよー」

「なにバカなこといつてんの、ミーシャ。素敵じゃない、ゴシック建築」

「まち？ ステキかよ」

て、あたし。ま、きらいじゃないんだけど、ほんとわ。

「べつに、関係ないとおもうが」

イスが剣の位置を直しながら、そういった。ANKAも、

「さあ、つべこべいわないで。いくよ」

「ちかくに、コンビニとかないね」

ミーシャが残念そうに、そういう。

エリコがすぐに、

「なにいつてんの？ あるわけないじゃん。なんで、欲しいわけ？」

「だあって、夜おなかとかすいたらどーすんの？」

あたしも、

「そうだよー、日用品にちようひんとか、買わなきゃいけないときだって、あるじゃん」

「あんたらねー、そんなのどうにかなるように、できているに決まってるじゃん。」

もう、なん百万人も、ユーザーいるんだからさー。あたまワル〜」

うつせーよ、エリコ。

「なんの情報じようほうもないのに、いくら考えても、想像そうぞうでしかないよ。レ

クチャーのときに、わかるんだから、グダグダいわない！」

ANKA、あんたのいうとおりだ…。

あたしたちも、ほかの人たちにつづいて、階段を上がって、彫刻ちやうこく

のある正面しょうめん玄関から入る。紋章もんしょうがあり、龍りゅうと鷹たかがテーマだった。

ゾウが通れそうなくらいひろい玄関げんかんだお。やっぱ、なんか怖えよ

！。

はい入ると、エントランスだ。くら暗あい。

なん千年も、人にふまれていたみたいに、絨毯じゅうたんがくたびれていて、

いろもあせていた。絵柄えがらは卵たまごみたいな黄きいろが基調きちようで、あかるい緑みどり

の蔦つたに、真まっ赤な花が咲いているのが……かすかに、わかる……

新入生しんにゅうせいは、みんな、掲示板けいじばんのまえに集まっていた。

チョークの文字が古いネオンのように、光ひかっている。

ANKAがさつと見て、

「512号室みなみとうは南棟みなみとうだわ。あっちの階段を上るみたい」

あたしたちは、彼女についていく。それしかない。

いくつかある廊下ろうかの1つに入っていく。

小さな広間ひろまに出た。そこから、また、いくつかの廊下ろうかがある。

うわ、迷路めいろだわ……。おぼえられるかなー。

けど、あたしたちは、そちらへはいかず、木製もくせいの手すりが見ごとな彫刻ちようこくで装飾そうしやくされた階段を上がっていく。

上のぼった。ふーっ。壁かべには、肖像画しょうぞうががかけられている、いっぱい。

きみがわるい。

とちゆうで、1枚のタペストリーに眼がとまった。

「これって、なに？」

あたし、おもわずきいちやった。だって、織おりこまれた絵柄えがらが、なんとも、ふしぎな光景こうけいだったからだ。

冷たい感じの、月夜つきよの風景ふうけい。大きな湖みずうみが照てらされている。

まわりは、すごく高い絶壁ぜつぺきの岩山？ それが円戯場えんぎじようのように、湖みずうみをかこんでいた。

水面が鏡かがみのようにしずか。

でも、よく見ると、小さなさざ波なみが立っている。1ミリもないん

じゃないかとおもえる、小さな波なみの図柄ずがら。それが織りこまれている。
しかも、そのこまかい波なみの1つ1つに、月光げっこうがあたって、銀いろぎんにきらめいていた。精緻せいちな技巧ぎこうで、くつきりと。

見つづけることがたえられないような、細密さいみつさ……。そして、死
のようにしずまり返かえっている……

湖みずうみのまんなかに、大きな黒岩くろいわが突き出ていた。岩の上には、純白じゆんぱく
の尖塔せんとうを、たくさん屹立きつりつさせる城しろがある。

「湖上城こじょうじょうよ」

ANKAがいった。

「こじょーじょー？」

「そー。そのまんまつしよ。」

湖の上にあるから、湖上こじょうの城しろ、湖上城こじょうじょうよ」

「なんか、すごい、冷たい感じ。しずかすぎて怖いよ。無音むおんってか、
吸すいこまれそう。月が凍いてついてるみたいだし……」

ミーシャも、

「ほんとー、こんなとこに住^すんでるのは、ゾンビみたいな人ね」
イースが笑った。

「あたらずといえども、とおからず、だな」

エリコが顔をしかめ、うなつて、

「うーん。ラグナレク^{はくしやく}伯爵^{きよじよう}の居城よね」

あたし、声を上げ、

「神^{ラグナレク}々の黄昏？」

A N K Aが鼻さきで笑い、

「ふ。わたしたちに関係ないわ。さ、いこうよ」

エリコは、まだ、むずかしい顔をし、

「なんか、いいいわさ、きかないわよね。

悪魔^{あくま}に魂^{たましい}を売ったとか、こどものころ、じつの親を殺したとか」

「えー」

って、あたしとミーシャ。

「さ、いくよ」

そういいながら、ANKAは、ふたたび、階段を上りはじめる。

上ると、長い廊下^{ろうか}があらわれた。

地上5階なのに、古い城^{しろ}の地下室^{ちかしつ}みたい（見たことはないけど）。

壁^{かべ}も、床^{ゆか}も、ゴツゴツした、むき出しの石組みだ。んー、CGだから、なんでもありだなー。とりあえず写メ。

煙^{けむり}の出ない、小さな篝火^{かがりび}が点々^{てんてん}とならんで、あかりになっっているだけだから、奥^{おく}は暗^{くら}くて、よく見えない。

廊下^{ろうか}の左右^{さゆう}には、部屋^{へや}のドアがだまったまま、ならんだ。

「512号室^{ごうしつ}って、どこよおー」

エリコ、もう、限界^{げんかい}か？ たしかに、荷物^{にもつ}重^{おも}すぎ。

あたしも、もうダメだわ。ひきずりまくりだし。けど、がんばろ。

ようやく、たどり着^ついて、ANKAが、

「さあ、ここよ」

っていつて、怪物かいぶつの彫り物ほがある重おもそうな、黒っぽい櫥かしの扉とびらをあけた。

あたし、なかに入るのが怖くて、ひるんだ。よこを見ると、エリコも、唇くちびるをへの字にして、足がまえに出ない。

ミーシャが、

「え、どんなふうなのかしら」

っていつて、ANKAのあとにつづく。

そのとたんに、エリコが、

「さあー、さあ、グズグズしてないで、とつとと入るのよ」

って、なんでもなかったかのようにふみこむ。うぜー。

あたしは、エリコみたいに調子ちょうしいやつじやない。すぐに部屋へやが見たかったけど、あえて、うしろのイスのようすを見た。

頬ほほに唐獅子からじしの刺青いれずみがある黒髪の少女は、みんなの背後はいごをまもるた

め、いちばんあとから、入ることを決めこんでいるらしい。

エリコにつづいて、あたしも、入った。

おもっていたよりも、まとも。つーか、家庭的だ。

カーテンのしまった暗い部屋。ソファがあつて、そこがリヴィン
グルームらしい。

ANKAがカーテンをひいた。窓だ。

ミーシャの声聞きこえる。

「えー、こんな感じなんだ。窓、少ない」

エリコは、部屋の中央の壁にむかう。

「見て、暖炉よ。薪を燃やす、ホンモノの暖炉だわ。大きいわね、

わたしたち、入れそうなぐらいよ」

部屋は5人が住んでも、じゅうぶんくらい、ひろい。

窓のかたわらに、1メートルくらいのくぼみがあつて、小さな祭壇
が祭られていて、女神像がある。祭壇のまえには、紺碧と深紅とが

基調きちょうの、小さな絨毯じゅうたんが敷しいてあつた。黄きいろや緑みどりの、蔦草つたくさ模も樣ようが入いっている。

あたしがじつと見てると、

「壁龕へきがんっていうのよ」

「へきがん？ ANKA、なんなの、それ？」

エリコがニコニコしながら、飛んで来た。

「あーら、知らないのお？」

西洋建築せいようけんちくなんかで、壁かべとか、柱はしらとかにつくる、くぼみのことをい

うんだよねー。

彫刻ちようこくとか、飾かざるためのね」

イースが、

「ニッチとも、いう。

建築けんちくや、美術史びじゆつしでいえば『なにかを設置せっちするために、壁かべや柱はしらの垂すい

直面ちよくめんの一部につくられた、くぼみ』のことだ。

なにかを設置する目的で、垂直面に設けられたくぼみのことは、
ぜんぶ、「壁龕（ニツチ）」だともって、いい。

崖や、洞窟の面を彫ってつくった岩窟像なども、壁龕とよばれる
ことがあるけど」

ミーシャが、

「この女神さまは？」

「智慧と戦闘の女神イシャンナ・ジーナね。智慧の神イシャンと戦
闘の神ジンとが龍と鷹のすがたで戦ったとき、その衝突から生まれ
た女神よ」

ANKAがそうこたえてくれた。

「ふうーん」

「あっちこっちで蛇のからみついた、鷹や鷲や獅子の紋章や彫像を
見ることになるとおもうけど、蛇は智慧の象徴で、鷹が戦士、獅子
や鷲は、王族の象徴なのよ」

「龍^{りゅう}は？」って、あたし。

なぜか、龍^{りゅう}が気になって、きいた。

「神性^{しんせい}、または、神的^{しんてき}な叡智^{えいち}ね」

「へー」

「あのジン・メタルハートの、ジンというなまえは、戦闘神^{せんとうしん}ジンにあやかるうとしてつけたハンドル・ネームよ」

「え、あのジンが？」

あたしがそういうと、イースが、

「ジンに会ったのか」

「会ったのよ。ANKA、知りあいみたいなんだけど、ふゆかいなやつだよ。知りあい？」

「まあね」

すると、エリコが、

「ちよつとお、なんか、ANKAも、イースも、すごくいわくあり

げなんだけど、ジンと、なにがあつたのよ。このさい、はつきりしてちょうだい」

「ぼくは、以前、彼女に殺された。死んで、エントランスから、やり直した。

それだけさ」

「ジンは、人を殺したの？」

「だから、彼女も、やり直しをしてるのさ。人の生命を奪うことは、戦争か、裁判で決めた刑罰でなければ、だめなんだ。
せんそう さいばん けいばつ

なぜ、その2つがゆるされるのかは、だれにも、わからないがね。

いや、むろん、おもてむきの理由は、だれでも、知っているさ。

ともかく、その2つ以外の殺人は、つみとが 罪科だ。

ほんらいはね」

「でも、いま、変わっちゃったみたい」

「そうだね」

「リベンジするの？」

イスが笑った。

「いや。また、エントランスから、やり直したくないし」

あたし、ANKAをふりむく。

「ANKAは？」

「わたし？ わたしは、ここでは、はじめて会うわね。」

彼女は、超有名なゲーマーなのよ。

強すぎて、あいて相手がいなくてね。

本人は、じぶんのことを、せんとうしん戦闘神ジンが人のすがたをしてあらわれたと称して、しょううぬぼれているわ。

なんども、なまえを変えてた時期もあつたけど、さいきんは、バトル系じゃない、こういう、ふつうのサイトに来るのよ。顔や、なまえが知られていないし、しあいほうき試合放棄とか、きけん棄権とかないし（バトル系のゲームじゃないからね）。

つまり、相手は逃のがれられない」

「きもーい。じゃ、べつのRWサイトで、会ったの？」

「ま、そんなとこね。」

さあ、こつちも見よう

右のドアをあけると、寢室しんしつで、どんなサイズのアバターが入寮にゅうりょうしても、からだを伸ばのばして、よこたわれるようにと、特大サイズとくだいのベッドが5台ならんでる。

「さ、荷物整理にもつせいりして、食堂しょくどうに集合しよう」

「寒いから、火い熾おこさなあい？」

「エリコ、時間がないのは、わかってるでしょ？」

クロゼットがあそこにあるわ。着替きがえをしまつて。

お菓子かしのたぐいは、くさらないように、棚たなにしまつてね。

あ、あれつて、収納庫しゅうのうこじゃないかしら。

旅関係たびの道具どうぐは、しばらくつかわないから、そこへしまおうよ。

さあ、スタート！　もう、4時20分だぞお」

ANKAの声で、いつせいに、作業開始。さぎようかいし

整理を終えると、あたしたちは、あたふたしながら、食堂へと降りていった。せいり
しょくどう

食堂も、まるで古い教会のなかのようだった。天井が高いし、暗くれ

えーし。

窓から、外の光がさす。そと　ひかり　けど、もう、日が沈みかけているし、ま

わりには、高い建物が多いし、だいたい、窓のある位置が高すぎて、

光がとどかない。ひかり　夜かよ？　って感じた。

つぎつぎと、ロウソクに、火がともされる。

火をともしのは、白いシャツに黒いチヨキを着た、無表情な、影かげ
のような人たち。

すでに、たくさんの薪まきが燃えている。暖炉だんろの数も、1つ2つじゃない。いっぱいある。もし、これが現実だったら、一酸化炭素中毒いっさんかたんそちゅうどくに

なりそうなくらい。

鐘楼しょうろうの鐘かねの音がロウソクの炎ほのおをゆるがす。どこの鐘楼しょうろうだろう？

低い、しずかな聖歌せいかがわき上がるように、はじまった。

「さあ、しよくん、静肅せいしゆくに」

だれも、さわいでねーよ、つか、なんなの。なんか、しゃべるまえから、もお、エラソーで、超キモおい。

「私が舍監しゃかんのラクシャである」

白髪オールバック。顔が土つちいろの男がそう名乗なった。

丈たけの長い貫頭衣かんとういの、白地しろじのふちが黒く染められたのを着た、太っ

たからだ、尊大そんだいな態度たいど。ぶさいく。

「これから寄宿舎きしゆくしやでの寮生活りようせいかつを説明せつめいする。

起床時間きしょうじかん、ゴミを出す場所ばしょ、暖炉だんろのつかいかた、薪まきの配布場所はいふばしょ、

食事時間しょくじかん、洗濯せんたくの場所ばしょ、図書室としょしつの利用方法りようほうほう、生活用品せいかつようひんの購入こうにん、講義こうぎ

を休むときの手つづき、門限もんげん、各部屋かくへやのシャワーをつかうときの注ちゅう

いじこう　しゅうしんじかん
「意事項、就寝時間………」

説明がつづいた。

つーか、エリコがポケットからビスケット出して、食べてるんですけど？

「専門講座は、それぞれ講座ごとに、場所がちがうから、オリエンテーションで、くばられたパンフレットを熟読すること。
じゅくどく

なお」

えらい、イース。じっと、正面を見つめ、ときどき羽根ペンで、メモってる。イーグルの紋章が入った携帯用インク壺、ぶら下げて。
もんしやう　けいたいよう　つぼ
「基本講座は、本日、しよくんらが通過した、大聖堂ウパニシャツ
きほんこうざ　ちゆうおうれいはいじよ　だいせいどう
ドの中央礼拝所で、おこなわれる」

ANKA、さすがだわ、ケータイに録音。
ろくおん

「時間に、おくれることのないように。」

遅刻者は、IEのエントランスから、やり直しとなる」
ちこくしゃ

ミーシャ、なんで、そんなに眼をかがやかせているのよ、なんだか、その表情、内容をきいてるとは、おもえないんだけど。ワクワクって、なによ？

「以上だ、しょくん。」

待たせたな。では、食事の時間だ」

やったー。

「むこうのテーブルにならべられたものを皿に盛って、食せよ」

いつのまにか、食器や、食べ物の満載された長いテーブルが壁ぎわにそって、用意されてる。

「さあ、さあ、しかたないわね、いくわよ」

エリコが急に眼ざめたように顔を上げ、立ち上がる。とても、さつきまで、なんか食べていた人とはおもえない。あたしとANKAは、笑った。

それでも、5人なかよくまとまって順番にならび、あたしたちは、

トレーに食べ物を盛^もった。

香草^{こうそう}チキンにブルーチーズ、スパイスのきいたトマト・ソースのかかったツナ、ムール貝^{がい}、ハーブにオリーブ・オイルたっぷりのサラダ、バジル・ソースのパスタ、骨^{ほね}つきのマトン、パン、塩漬^{しおづ}け牛肉のステーキ、カモのソテー、ヤギのあたまの入った野菜^{やさい}スープ、トカゲの串焼^{くしや}き、コウモリの蒸焼^{むしや}き、イナゴ、桃^{もも}のシャーベット、コーカサス地方^{ちほう}のヨーグルト：：：：：：

最高？だわ。ふんいきあるし、いい感じで、おいしそー。あたし、変かな。

「ねー、このアイスクリーム、超おいしいーよお！」

席に着^つくまで待てないミーシャが歩きながら、スプーンで一口にすくって、そういった。

ザワザワする声が食堂^{しょくどう}にひびく。

けど、気にしない、あたしたちは、おいしい、おいしいの大連^{だいにん}発、

会話がそれ以上になりようがなかった。

部屋にもどりながらも、しゃべりっぱなし。

イスが暖炉に火を入れる。

あたしたちは、刺繍入りの生地をはったアームズ・チェアを部屋
のすみっこから持ちよって、暖炉のまえをかこむように、半円をつ
くり、たわいもないことをしゃべりつづけた。

午後10時になって寝なくちゃいけない時間を知らせる梵鐘が、ご
ーん、ごーん。なあーんか、怖えーよな、いちいち。

「ふあーあ。眠くなっちゃったねー」

って、ミーシャがからだをのばす。

「なにいつてんのよ、ガキじやあるまいし、まだまだ、眠くなんか
ないわ」

ガキだろ、エリコ、おめーは。

「まだ、初日だし、規則どおりに就寝しよう」

そういつて、イースは、チェアから立った。

「ユリイカ、ベッド大きすぎるし、いっしょに寝^ねようか」

「うん、あたしも、そうしたかったんだ、ANKA」

「てか、ベッドくつつけて、みんなで寝^ねない？」

「あんた、ミーシャ、なにいつてんのよ、わたしは、いやだよ」

「あ、おもしろい、ベッド大陸^{たいりく}つくろーよ」

「ね？ でしょ？ ユリイカ、おもしろいよね」

「こんな時間から、ガタガタさせて、だいじょうぶか。明日^{あす}でもいいのでは」

「そうね、おもしろそうだけど明日にしたほうがいいね、ユリイカ」

「えー」

「えー」

急にエリコが立ち上がって、つかつか歩き、ベッドの脚^{あし}をつかんだ。

「あー、めんどくせー。なら、とつとと、やっちゃえば、いいじゃん。とりあえず、2つくつつければ、わたしたち女の子5人くらい、
楽勝で寝られるよ」

じつは、やりたかったんじゃないん、エリコ？ 素直じゃねー。

あたしたちは、力をあわせて、1つのベッドをうごかし、くつつける。ひきずったけど、たいした音は出なかった。ギガガ……ギギ……ガガ……ギ……ガ。音はだんだん小さくなりながら、いつまでも、ひびきつづけるような感じがした……

アカデミアの夜はしずかだ。

あたしは、扉にちかいほうの、はじっこに寝た。ちと寒い。

見捨てられたような、場末っぽい位置が好きなたたし。感傷的なきぶんにはたれるし、中枢でない気楽さがある。

あたしのとなりはANKA。もう、寝息になっている。スヤスヤ。

彼女のむこうはエリコ。ときどき、エラそうな寝言をいうけど、

そのなかにママに甘えるような言葉もまざる。

そのとなりがミーシャ。なんでだか、ときどき笑ってる。ANKも、強い人だけど、じつは、ミーシャみたいな人が、ほんとは、いちばんポジティブな人なのかも知んない。運命愛^{うんめいあい}って、そういうことなのかなあ……

窓がわのはじはイースだ。

彼女の寢息^{ねいき}は眠っているのか、起きているのか、わからない。

外は吹雪^{ふぶき}が強くなったようで、ときおり、風が窓をゆらし鳴^ならしで、あたしを眠らせてくれない。すごく疲^{つか}れてるのに……

6 基本講座序奏^{きほんこうざじょそう}…だれかいるようっ!?

リヴィングにつながる扉はあけたままにしてある。

いま……なん時なんだろう……。あれ？

あしおと
足音だ。

ろうか
廊下を歩く音がする。なんで？

きみわるいぐらい、ゆつくりで、1歩から、つぎの1歩までの間かん
隔かくが大きく、ひびきがしみこむような余韻をのこす。よいん

なんて、ふしぎな音だろう。見まわりかしら……

あたしは、不安を感じた。いや、まち怖かった。

あしおと
足音はちかづき、あたしたちの部屋のまえで……止まった！と

また、このパターン？ でも、今回は、まえよりも、はつきりと、
とびら
威圧を感じる。扉のむこうで、だれかがこちらをじつとにらんでいる。
そのまなざしを、はつきりと感じる。

ゾツとした。からだがすくみ、かたまった。

怖くて、うごけない。

ANKAを起こしたいけど、声が出ない。

どのくらいの時間だったのか。すごく長く感じたけれど、1分く

らいだったのかもしれない。

足音あしおとの主ぬしは、ふたたび歩きはじめた。音はだんだんと、とおくなつていった。

あたし、金縛りかなしばりがいきなりとけた人みたいに飛び起きたと お。

「ANKA、起きてよ」

「ううん？ なによ、ユリイカ？」

ANKAが眼をこすりながら、からだを起こすお。すでに、イースは、上半身じょうはんしんを持ち上げていた。

あたしは、説明せつめいした。

「また？ほんとに、見まわりじゃないの？」

「だって、ANKA、この部屋へやのまえでしか止まとらなかったよ。

そんな見まわりってあり？ あたしたち、しずかに寝てたじゃん。それに、……こつちをにらむ悪意のまなざしを、すぐくはつきり

感じたの！」

「ANKA、ユリイカのいうとおりだとおもう。

見まわりでは、ありえないな」

「わかったわよ。でも、なにかなあ」

ANKAが首をかしげる。イースは、ベッドから出て、もう剣を
佩^はいていた。

「追^おってみるよ」

ANKAの顔が眼のさめた、けわしい顔になる。

「危険^{きけん}だよ」

イースは、冷静^{れいせい}な表情^{ひようじょう}で、

「なにも知らないことも、危険^{きけん}だ。

ぼくが独^{ひと}りでいって来よう」

「だめだよ、やばいし」

って、あたし。

「だね。ユリイカのいうとおり。

いくなら、わたしも、いくよ。

ユリイカ、あんた、ここで待^まってなさい。

なにかあったら、あんたが舍監^{しゃかん}に知らせるのよ」

「なにかあったらって、なにがあるの？」

「そんなの、わからない」

「なにかが起こったとしたても、ここにいて、どーやって、それがわかるのよ」

「ふんいきで判断^{はんだん}して。」

帰^{かえ}って来るのがおそすぎるとか」

「やだ、ANKAがいなきや怖いし、舍監^{しゃかん}のケータイ番号^{ばんごう}知らないから、1人で、暗い廊下^{くら}わたって、階段降りて、やつのトコまでいくなんてできない。

そんなのムリ！ ぜったいつ」

「ぼくが独^{ひと}りでいく。ユリイカのいうことは、もつともだ。ANK

Aは、のこつてたほうがいい」

「あたしも、いっしょにいけば、いいんじゃない？」

あたしがそういったとたん、寝ていたはずのエリコが跳ね起きた。

「ちよつと待つてよ、ムリでしょ、わたしもいくわよ。あんたら、

ひどいじゃない。こんなたよりない、ミーシャと2人だけにしてい
つてしまう気？ 信じらんないつ、まじ？ じょーだんじゃない

わ！」

イースが冷たく微笑んだ。

「じゃ、ミーシャも、つれていくんだな。

まさか、きみは、ミーシャ独りをここにのこしていくのがひどい
ことじゃない、なんていうんじゃないだろう？」

エリコは、反論できず、ふくれっ面で、そっぽをむいてしまった。

ザマーミロ。あつ、いけない。クドクがまちとおくなっている気が
するう、さいきん……

エリコは、嘆息たんそくしてから、

「とっと起きおなさいよ、ミーシャ、まじ、あんた、ウザいわ」

やつあたり発見はっけん（笑）。

で、あたしらは、みんなで暗い廊下くらろうかに出ることになった。

ミーシャは、ぜんぜん、眼がさめていなくて、これ、尾行びこうがで
きる状態じょうたいか？って感じで、すっごい不安。とちゅうでつまずいたり、

あくびされたりしたら、気づかれちゃうんですけどおー。

「ぼくがいちばんさを歩くよ」

「待つて、わたしがいくよ。イース、あんたは、わたしたちの背後はいごを
まもつて。

恐いのは、うしろから、不意ふいを突つかれること。もうしわけないけ
ど、イース、そうしてよ」

「わかった。まかせてくれ。ミーシャは、ぼくのまえをいくのがい
いだろう。彼女へのフォローが最ももつとひつようだ」

「じゃあ、ミーシャのまえは、わたしが歩くしかないわねー。彼女
のめんどーを見るのは、わたししかないんだからー」

エリコが急いでそういった。ずるいー。つてことは、あたしがA
NKAのつぎをいくことになるから、前後に2人ずつ人がいるエリ
コは、いちばん安全で責任のないポジションじゃん！ 汚えー。
ゆうことで、あたしたち、いくことになった。

「で、ユリイカ、足音はどっちの方向へ消えたの？」

あたし……自信ねーな。

「たぶん、こつちだとおもう」

あたしは、左を指差した。そのさきには階段がある。反対の右は
いき止まりで壁があるのみ。

「わかった。みんな、慎重にね。」

いくよ」

ANKAって、すごいとおもう。なんで、こんな暗い、怖い廊下を、

ずいずいと冷静れいせいにすすめるわけ？　篝火かがりびが照てらすだけで、足下あしもとゴツ

ゴツ、洞穴ほらあなみたい……

比べて、あたしって、どーよ。

同じ人間で、この差さって、なーに。

こーゆー不公平ふこうへいって、どーしたら解消かいしょうできるわけ？

ま、無意味むいみな問といかだよ。

わかってる。もおー問とうこと自体じたいがダルいわ。

現実げんじつは現実。逃げようがない。

あたしが無能むのうに生うまれたのは、あたしのせいじゃないけど、あたしが背負せおう以外の選択せんたくし肢しは、まったく、ない。かつてにこんなこと決められて、ムカつくけど。しかたない。

まーいーや。いま、ンなことゆーてるばあいじゃないし。

そう、現実げんじつって、けつきよく、この一言、『ンなことゆーてるばあいじゃない』だ。アー、腹立はらだつわ！

さあ、さあ、現実^{じやうじつ}に集中^{しゆしゆ}しなくっちゃ!!

影^{かげ}が炎^{ほのお}のせい^{せい}でゆれてる。氣^きをつけないと足音^{あしおと}ひびくし。ミ―シ

ヤわかつてるかな? あたし、おもわず、ふり返^{かえ}っちゃう。エリコ

が、

「なによ、しっかりまえ見てなさいよ。あんた、まじめにやつてよね。

状^{じやう}況^{きやう}わかつてる?」

オメーがいうか?

「つせーな。わかつてるよ」

幽霊屋敷^{ゆうれいやしき}より怖^{こわ}くて、ひざの力^{ちから}ぬけてる。

でも、現実世界^{じやうじつせかい}じゃない。とり返^{かえ}しのつかない死^しにはならない。

現実^{じやうじつ}の最悪^{さいあく}なところは、とり返^{かえ}しがつかないことだ。かつてにそう決^きめられている。それがリアル^{リアル}のリアルさ。

ふつ、ブサイクな規則^{きそく}!!

A N K Aの肩越^{かたご}しに、暗^{くら}い廊下^{ろうか}を見る。なんかめまいがしそう。

あたし、だいじようぶかな。ミーシャのこと、いつてらんない……

階段まで来た。

のぞくと階下^{かいか}は深淵^{しんえん}のよう。

しずかすぎ。吸^すいこまれそう………

「足音は」

A N K Aがささやいた。

「もうしてないね」

ギー………

「え？」

あたし、おもわず声立^{こえた}てそうになった。

同じく声を上げ^あげそうなミーシャの口をおさえながら、エリコがあたしをにらんで、なによ、あんたまで、って顔する。

「あれは、どこかで部屋^{へや}で扉^{とび}のあく音だ。どこの階^{かい}だろう」

うしろからイースの冷静な声^{れいせい}がする。

A N K A も、

「場所^{ばしょ}までは、わからないね。しずかすぎるから。

とおくても、ちかくても、同じくらいにきこえる可能性^{かのうせい}があるよ」

イースが1歩ふみ出しながらいった。

「ぼくが降り^おてみよう。

きみらは、ようすを見ていてくれ」

A N K A がイースの肩^{かた}をつかむ。

「だめ。

ひき返^{かえ}そう。深追^{ふかお}いはN G」

「あら、A N K A も、ビビることがあるのね」

エリコ、殴^{なぐ}りたいんですけど？

けど、A N K A のほう^{うわて}が上手。

「そう？　じゃ、あんたにゆずるよ。」

どうぞ、いってちょうだい」

エリコが必死ひっしになって、

「なにいつてんの、わたしは、ミーシャのめんどろを見なくちやいないし」

うざ。あたし、がまんできなくって、

「エリコ、声荒こえあらげてんじやないよ、状況じようきようわかつてる？」

エリコがにらみ返す。闇やみでもキラキラする眸ひとみ。そのとき……

ギ、ギ、ギー、ボタン！

あたし、まち心臓止しんぞうとまりそうだった。ドアのしまる音じやない？

ANNAが小さなため息いきをつく。

「ひき返かえそう。」

どこかの部屋へやに入った。これで、もう、わからないよ。だって、ぜんぶの部屋へやをあけてしらべるわけにはいかないし。

さあ、もどろう」

あたしたちは、部屋へやにもどろうとした……あたしは、そのつもりだった。

いちばんうしろにいたイースが、こんどは、いちばん先頭せんとうになる。
あたしとイースとのあいだには、エリコとミーシャとがいるけど、
そのエリコが、

「イース、なにしてんのよ。突つっ立たってないで、はやくいこーよ」
こたえない、彼女かのじょ。

なんで？

あたしも、なにかいおうとしたけど、うしろのANKAがあたしの肩かたをつかむ。あたし、おもわず、

「え？」

「ユリイカ、まえを、よく見て」

あたしは、闇やみにかすかに見えるイースのあたまのむこうを凝視ぎやうしした。

「なにしてるんだ？ おまえたち」

ふと
太った大きな男。あたし、びっくりして飛び上がりそーだった。

しょうじょうじかん
「消灯時間は、とつくにすぎてるぞ」

しゃかん
舎監ラクシャ、もし、あかるければ、その白髪のはくはつ
のオールバックも

わかっただろう。しわのきざまれた尊大な顔も。さいあく
最悪だわ。

「いったい、なにをしていたんだ」

しょうじき
あたしは、正直にいうべきか、まよった。ANKAの顔をのぞく。

こういうとき、エリコは、おとなしいよね。

びよう
ANKAが1秒で考えをまとめようとしていたけど、それよりさ

きに、イースが口をひらき、

「部屋で寝ていました。

ぜんいん
ぼくたち全員が、です。

へや
足音がして、ぼくらの部屋のまえで止まりました。

ふしん
不審におもったので、ついせき
追跡したのです」

ラクシヤが眉まゆを上げるのが見える気がした。

「全員で追跡ついせきかね？」

こんどは、ANKAがしゃべりだす、

「だれかをのこすのは、危険きけんだと考えたんです。

5人そろって、うごいたほうが安全あんぜんだと考えたんです。

セキュリティについては、あなたがたに責任せきにんがあるのではないの

ですか。わたしたちの部屋のまえで立ち止まって、ようすをうかが

っていた不審人物ふしんじんぶつについて、なにも把握はあくしていないことのほうが問

題だとおもいます。

規則きそくをやぶったかもしれないけど、セキュリティの不備ふびのせいで、

自衛じえいせざるをえなかったからです」

そーそー、そーだよおー。ANKA、あたまいー。

「足音は定例ていれいの見まわりだ。問題などない。ありようがない」

「なんで、わたしたちの部屋へやにだけ立ち止まったんでしょう？」

「起きている気配けはいを感じたのだろう」

動揺どうようから復活ふっかつしたエリコがしやしやり出て、

「寝てたわよ。」

そりやー、ユリイカとかがふとんのなかで起きてたかもしれないけど、sonでだけで足止とめるって、変へんじやない？ なら、どつかほかの部屋のまえにも、止とまってなくちや、おかしーじゃん。

ふとんのなかで起きてる人なんて、ぜったい、ほかの部屋へやにもいるよ、そこでも止とまらんなくちやおかしーじゃん、わかんねーの、そんぐらい！

なんで、わたしたちのとこだけなのよ？ こたえられるもんなら、こたえてごらん」

「起おきていても、足を止とめるか、どうかは、ケース・バイ・ケースだ。

おまえたちのばあいは、たまたま、結果けつ的にそうなたただけだ。

それから、セキュリティについていえば、寮生活管理のばあいと、サイト自体のセキュリティのばあいとがある。

とくに、新規ユーザーに関しては、サイトのセキュリティが働く。とうぜんだ。ウイルスをはこばれては、たまらんからな。

サイトからのセキュリティにひっかかって、チェックを受けているのであれば、わしの関知するところではない。異議があるなら、管理者に確認しろ。わかったか？

まあ、どっちにしろ、今日は初日だから、赦してやる。さあ、寝るんだ。

明日は、よび出すかもしれないけどな」

はあ？　なんでよ。

部屋にもどった。

あたし、ベッドにドスンと、あおむけにたおれる。

「明日、ほんとに、説教する気かなあ」

ANKAは、気にせず、

「基本講座きほんこうざは受けさせるだろうから、もしあるとすれば、夕食時ゆうしよくじかな。どっちにしろ、本質ほんしつ的な問題はない」

部屋へやにもどってから、あたしたちは、そんなふうに、ちよつと話しあつた。疑問ぎもんがわく、

「なんでラクシャの気配けはいに気がつかなかったのかなあ。あたしや、エリコなんかは、ともかく、イースまで」

「なによ、あんた、かつてに、わたしまで同類どうるいにしないで」

だまつて窓の外まどを見ているだけのイースに代わかつて、ANKAが、
「ラクシャは、環境かんきやうてき的な人物じんぶつだもん。」

わたしたちは、じぶんの眼めや、耳みみで、見たり、きいたりしているつもりだけど、じつさいは、システムによつて、提供ていきやうされた情報じやうほうを
感覚かんかくしているだけなのよ。

そのシステムは、いつだつて公平こうへいに、情報じやうほうのすべてを、わたし

ちに提供^{ていきよう}してくれるべきなんだけど、管理者^{かんりしや}が、意図^{いとてき}的に、そのシステムをコントロールするばあいもあるのよ。今回^{こんかい}みたい、気がつかなかった、なんてことがあっても、ぜんぜん、ふしぎじゃないわ。

管理者^{かんりしや}が舍監^{しゃかん}をそういうことのできる存在^{そんざい}として設定^{せってい}しておくか、その瞬間^{しゆんかん}だけ、それができるようにしておいてやるかすれば、いいのよ。それだけで、舍監^{しゃかん}は、わたしたちに気がつかれずに、背後^{はいご}にまわることができる。

あたえたくない情報^{じようほう}をあてえないことも、ありもしない情報^{じようほう}をあてえることもできる。ほかのユーザーが見ることもない、標準^{ひようじゆん}の設定^{せってい}にはない現実^{じやうじ}を、わたしたちだけに見せるってことだってできるのよ。直接^{ちよくせつ}入力^{にゆうりよく}で、感覚^{かんかく}をコントロールできるから、なんでもできる。

管理者^{かんりしや}サイドからなら、なんでもありなんだよ」

「神出鬼没しんしゅつきぼつな、あのバリユースのうごきと、同じってわけね」

ミーシャが不満ふまんげに、

「なんで、わたしたちなのお、つけまわしてー？」

「知らないわよ」

っていつてから、エリコがこんどはあたしにむかつて、いう、

「ユリイカ、あんたってば、なんか、最悪さいあくなウイルスでもくつつけて来ちゃったんじゃないの？」

「ちよつとー、なんで、あたしって、決めつけるわけ？」

イスがさえぎるように、

「さあ、眠ろう。」

今晚こんばん、ぼくたちにできることがあるとすれば、それしかない」

あたし、眠れないとおもった。いろいろ、しんぱいで、とうてい、眠れない、とおもった。でも、気がついたら爆睡ばくすい（笑）

あれ、眠ってたんだ、あたし、ってゆー朝あさだった。

あー、よく寝たわ。

雪、やんでる。

太陽が東の空から顔を出す、朝5時。日本の冬じゃありえない。こういう設定だから、しょうがない。屋根の白雪が黄金にかがやいている。

きれいすぎるわ。女優ライトをあてた金泥みたい。

あたしは、飛び起きて顔を洗った。こんな積極的な行動、現実の世界にいたときは、ありえなかった。ミーシャが寝ぼけ眼でベッドから身を起こす。エリコ、まだ寝てるし。性格もわるいが寝起きもわるいのかよ？

ANKAは、鏡のまえで髪をとかしながら、あたしにきく。

「5時半くらいに、食堂へ、いけるかな？」

7時に始業だから。

たぶん、6時半くらいに席に着かないと、5人いっしょには、い

い席に坐れないよ」

「あたしは、だいじょーぶだけどさー」

そのときイスが扉をあけて、部屋に入ってきた。

「いい天気だ。」

食堂は、もう、なん人が来ていたよ。階段でも、なん組かすれち

がったし」

そのとき、ふとんを持ち上げるガサガサした音がする。

「ふあーあー。なによお、あんたたち、ずいぶん、はやいじゃん。

ふあー。

ふんと、早すぎるよ。なにしてんのさあー。ふあーああ」

「エリコ、あんた、いーかげんにしなよ」

「ふあ、朝から、うっさいよ、ユリイカ」

まちギレ寸前なんですけど？

どうにか、大食堂へ、降りていったのは、5時50分くらい。もう、

人がいっぱいだった。

A N K A が、きっぱりいう、

「いい？ みんな、まよってないで、さつさと、皿さらに盛もって、テールブルに着っくのよ！」

あたしたち、速攻そっこうで食べてから、部屋へやに駈かけもどり、身みじたくして、6時半には階段をころがりおちるように降りて、外そとへ飛び出す。

雪凍こおってて、足すべらす。

「走らなきゃだめなのー？」

「いやなら来るな、エリコ」

「あいかわらずウザいねー、ユリイカ」

歩いてるアバターもいれば、あたしたちみたいに走ってる組もある。せまい雪の路地ろじを、ともかく、ころばぬよう気をつけながら、あたしたち、走る走る走る。

垂直すいちよくな石造建築せきぞうけんちくのはざま、たてにほそい谷間たにま。その終わりに、柱ちゅう

廊ろうの一部いちぶが見えてきた。この谷間たにまにいてさえも、そびえる大聖堂だいせいどうの偉容いようは、白嶺はくれいのチヨモランマみたいだ。ちかくても、離はなれていても、変わらない。

晴天せいてんに見る大聖堂だいせいどうもまた、圧巻あつかんだ。曇天どんてんの下で見ると、せまるような威圧感いあつかんとはべつの、神々こうこうしい威圧感いあつかんがある。

すげえーすごすぎるよ。昨日きのうより、高く見える。蒼穹そうきゅうに伸び上のがるように見える。

柱廊ちゅうろうの円柱えんちゅうの列れつをぬけ、広場ひろばに出て、大聖堂だいせいどうを目標めざす。

あたし、腕うでのケータイ見た。6時40分。きやー。

聖堂せいどうの正面フアサードでは、12段のひろい階段が肅然しゆくぜんとして、来る者ものをむかえている。

入り口は7か所あった。まんなかには3つ、身廊しんろうに入る大アーチと2つの中アーチだ。身廊そくろうの左右に側廊が建築されていて、それぞれが小アーチを2つずつ持っていた。

どこも混みあっていた。いやーだ。

「どこから入っても同じだな」

というイースの声に、ANKAがこたえて、

「では、同じというなら、いちばん大きな中央口から入ろうよ。

大真理だいしんりに見えるんだから、直球まみでいこうじゃない」

外界がいがいは太陽光たいようこうが雪に乱反射らんはんしやして、光にあふれているのに、大聖堂

は静肅せいしゆく、うす暗ぐらかった。

壁の高いところにあるステンドグラスの窓に、黒くて太い輪郭りんかくで、

青いマントや赤い帽子ぼうしの人物じんぶつや、神聖しんせいな大樹たいじゆや、動物や、鳥たちの

登場とうじようする聖なる物語ものがたりが画かかれている。

そこから、崇高すうこうな光が深厳しんげんにさし、永遠えいえんの問いかけがくり返され

ている。「宇宙むげんは無限むげんなのか」「愛は最も尊もつといのか」「なぜ非存在ひそんざい

があるのではなく、存在そんざいがあるのか」

見上げる天井てんじようの穹窿きゆうりゆうがはるかとおい。

聖人の彫像や物語を彫った彫像群、聖句をかたどる巨大な嵌め細工や、側廊に沿って列しているいくつもの礼拝堂、大きな円柱、飾られた壁龕。

屋内に天蓋がつけられ、その下に設置された、建物のなかの建物ともいうべき、壮麗な伽藍があり、そのなかにも、荘嚴な祭壇がそなえられ、聖歌隊の席がならび、地下へ降りる階段がある。ちなみに、これが大聖堂の中央部にあたるとらしい。

そのさきに、受講者たちの席のならば空間があつた。

あたしたちは、人を（アバターを）かきわけ、あたしたち5人がまとまって坐れそうな場所を、さがした。

「あー、あつた。うそみたい」

意外なことに、見つけたのは、ミーシャだった。

大急ぎで坐る。イスは、超然としていたけど……

あたしたちが坐つたのと同時に、聖歌が地からわき上がるように、

しずかにおごそかにひびきはじめた。あたし、なんだか感動した。

ミーシャも、

「あー、すごーい」

天井てんじょうからつるされた、大きな香炉こうろから、香気こうきがあふれ出す。

エリコも神妙しんみょうな顔だ。

金箔きんぱくの貼はられたイコンがロウソクの光にゆらぐ幽玄ゆうげん。

イスが頭こうべをしずかに少し下げる。

気持ちかが、空気が切り替わる。

鐘楼しょうろうの鐘かねが街まちを祓はらい浄めるよう、鳴りひびいた。

ANKAの頬ほほが紅潮べにうしろしてる。

聖せいなる管奏楽隊かんそうがくたいのラッパが吹奏すいそうされた。

いつのまにか周囲しゅういは祈祷師きとうしであふれていて、いつせいに聖句せいくが唱とな

えられ、浄化じょうかされる。

壇上だんじょうに、まずあらわれたのは、ハーロック局長だった。

「基本講座にさき立だつて、これから賞讃しょうさんの義ぎを叙のべる。なぜなら、
眞実しんじつ、善ぜん、正義せいぎは、美だからである。有益ゆうえきで、実用じつよう的てき、実践じっせん的てきで最も
現実的である。たたえて、いわく、

『正義が眞実である。

眞実が現実である。

正義でなくば現実的ではない。

神が我々にそのように生きるよう命めいじ、魂たましいをあたえた。

それゆえに、我々は、そのように感じる。

ならば、我々は、

神にあたえられたままに、

そのように信じ、そのように生きなければならぬ』

すばらしき聖句せいくである。ウオツホン！

さあ、では、本日はしょくんに、真実とは、なんであるかを紹介しよう。

しょくんが、いま、眼のまえに見ているこの祭壇こそが真実の中
枢、聖域のなかの聖域、聖域の中枢である。

よって、まずは、この聖堂を司教座とする大司教イタルから開講
の祝辞をいただく」

帽子も長衣もすべて白い、血の気のない蒼い顔の少年があらわれ
た。髪の毛のいろがクリムゾン・レッドで、大動脈から噴いたばかりの
生々しい血のような、ぬれた緋いろ。

痩せていて、眼には表情のない焦燥、狂犬のような、滾った虚ろ
さがある。顔の左のはんぶん、青い文様のようなものが入っている
ように見えた。けど、とおいし、暗いし、よくわからない。

エリコがとくいげに、あたしの耳にささやく、

「彼はね、自由意志設定のAvatarなんだけれど、もともとは、ユ

ーザーが操作していたんだけど、そのユーザーが操作をやめて、自由意志設定にしたまま、死んじゃったの。

有名な話よ」

「え、死んじゃったの!？」

「そうよ。」

そして、自由意志設定のアバターだけが永遠に活動しつづけている」

「そんなあ……。なん歳くらいだったの、アバターは、あたしたちぐらいに見えるけど……」

その問いに、ANKAがこたえてくれた、

「17よ。」

『v v w』ってバンドのヴォーカルだった。

(v v wとは、Very Very Well-doneの略。これをクワドルプル・ヴィ Quadruple

v「4倍のv」とよぶのは、wはvが2つであり、ぜんぶでvが4つあると考えるか

ら。ちなみに、Well-done は肉の焼き加減かげんをいうときなどにつかうウェルダンと同じで、よく焼けた、転じて、容赦ようしやないハードなサウンド、であることを意味していたが、のちに予言的な意味にも解釈かいしやくされるようになった

ガソリンかぶって焼身自殺しょうしんじさつしたの」

「……っ、信じらんない。なんで？」

あたし、壇上だんじょうとエリコとを、交互こうごに見る。

イスがいった、

「死んだ場所っていうのが、その地方で聖域せいいきとして崇拜すうはいされていた
眞神山まがみやまという、山の頂上ちようじょうだったらしい。

いくつかのブログや、スレッドでいわれていることだから、事実
だとおもう。

そこには、御神体ごしんたいといわれる大磐おおいわがあつて、縄文時代じようもんじだいの祭祀跡さいしあとが
のこっていることでも、知られていた」

焼身、神の磐、まだ17で……なぜ？

衝撃……。胸さわぎみたいな動揺。あたまから、離れなかった。

イタルをリアルに感じた。そのまなざしを。どこから、見られているかのように……

A N K A がさびしく微笑^{びしょう}し、

「けど、彼は、いない。設定^{せってい}でうごくアバターだけが虚^{むな}しくうごいているだけよ」

すると、エリコがとくいげに、

「あーら、そうかしらー。わたしたちも同じようなもんじゃねー。ムカつくこといわれると、自動^{じどう}的に怒^{いか}りがこみ上げて。

これ、自由^{じゆう}意志^{いし}設定^{せってい}と同じだよ……ねっ、ユリイカ」

ミーシャが壇上^{だんじょう}を指^{ゆび}さし、エリコの袖^{そで}をひっぱる。

「ねー、きこうよ、わたし、ききたーい、イタルう」

永遠^{えいえん}に17歳^{だいし}の大司教^{ききょう}イタルは、語^{かた}りはじめた。

意味^{せみ}など知らず、設定^{せってい}された言葉^{ことば}を、設定^{せってい}された感情^{かんじょう}でいって

るんだ……。なんかふしぎな、神妙しんみょうな気持ちだった。

あたしたちも同じ、かあ。　さいしょ、ちよつとムカついたけど、
そうかもしれないね……

「すべての生命せいめいは、超越ちょうえつを志向しこうする」

意味、わかんない。

あたしだけじゃない、ミーシャもわかんなくて、ANKAにきいてる、

「ねー、シコウって、なに」

「なにかを目標めざすることよ」

あたしも、きいた、

「生命せいめいが超越ちょうえつを目標めざすって、どういうことなの？　てか、超越ちょうえつって、わかってるよーで、わかんないし」

ANKAはささやく、

「だまって、きこうよ」

イタルは、表情ひようじょうのない、まっ蒼さおな顔で語りつづけている。

「海うで生まれた生命せいめいは、より強く美しく生きるために魚しんかへ進化しんかした。

また陸上りくじょうへ上がり、乾燥かんそうに耐たえる皮膚ひふをつくり、大地だいちを自由じゆうに駆かけた。

またべつの生命せいめいは、皮膚ひふを羽はねに変えて、蒼穹そうきゆうを自由じゆうに舞まった。

過去かこのじぶんを捨てて、より高度こうどな未来みらいのじぶんへと進化しんかした。

過去かこのじぶんを超越ちようえつして脱却だつきやくし、より高度こうどに進化しんかした。新しいじぶんになった。

より強く、より高く、より高度こうどに、より大きく、より複雑ふくざつに、よ

り精緻せいちに、より美しく、脱自だつじ（エクスタシス *ékstasis* *ek-*外そとに+

stásis 立つこと）し、延長えんちよう（エクステンション *extension*）・拡大かくだい（エ

クスペンション *expansion*）しようとする。

これがすべての生命せいめいの基本原理きほんげんりである。すべての欲よく、すべての意思いしの源泉げんせんである。この志向しこうが生命せいめいの、いや、存在そんざいの意志いしである。

以上。

つぎは、学長がくちょうイクシユヴァーンからの基礎きそ哲学てつがく講義こうぎだ」

あたしたち、魂たましいがぬけたようになっていた。いや、ANKAやイ

ースは、そうでもなかった。でも、少なくともあたしやミーシャは、

彼の言葉の意味にカンケイなく、存在そんざい感かんっていうか、オーラってい

うか、ふんいきに圧倒あつとうされていた。夢に見そうだ……

鐘楼しょうろうの鐘かねが鳴りひびく。

聖歌隊せいかたいの讃美歌テ・デウムが霧きりのようにわき上がる。

大理石だいりせきの円柱えんちゆうは巨大な木のようにわき上がる。苔生こけむす老樹ろうじゆの森厳しんげんな空気がただ

よう。

講座こうざの開始かいしを告げる梵鐘ぼんしょうが鳴ならされ、香炉こうろが大きくふられ、天井てんじよう

から蓮はすの花びらが雪のように舞まいおちてきた。

颯爽さつそう？と、学長が壇上だんじように立つ。

7 イクシユヴァーン学長、哲学真髓をかく語りき。

イクシユヴァーンは、まだ若い（つても30歳くらいか）、まなざしの深い人だった。

クリームゾン てん けがわ
深紅の貂の毛皮のローブをまとい、ひきずり、シルクの貫頭衣の襟や袖のふちには金燦糸の刺繍がなされ、長い髪 of いろいろ絹糸のよ
えり そで きんさんし ししゅう うに真つ白だった。

「ここでは、しよくんに、現実世界では、永遠に失われたものを学んでもらおう。

それは、たとえば、『真実』です。

さあ、ところで、どうでしょうか。あなたがもしもスレッドに、
ひしこい
真実なんて言葉を一言でも書きこんでみなさい。たちまち、うざい、
ちようしやう げさう
キモイとさげすまれ、嘲笑愚弄、たたきの嵐になるでしょう」
アラシ

そーかなー。

ぜんぶじゃないけど？

「ネットの世界は、匿名性とくめいせいのシールドにまもられ、透明人間とうめいにんげんのよう、だれにも知られず、見られず、たしなめられもしない。そのとき、人は、悪意あくいのかたまりです。なにもかもを怨みうら、憎にくんでいます。

本性ほんしょうをあらわにし、本音ほんねを吐露とろしているのです。

しかし、そのことはよいことではないとはいえ、真実という言葉が批判ひはんされるのは、やむをえないことでもあるのです。

真実しんじつには、なんの効ききめ也没有ありませんから。

科学的な、物質的な真実以外は見むきもされません。実用じつよう的ではないからです。実用むきなものは、真実というよりは、事実とよぶべきでしょう。私がいおうとする真実とは異ことなります。

私のいう真実とは、じぶんが真実を生きているという、自信じしんと氣力りよくとに満みちた感覚かんかくのなかにあることです。

それは、じつに幸福こうふくな感覚ともいえましよう。

しかし、眞実を生きようとすれば、現実生活においては、損そんをす
るばかりです。虚むなしく身みを滅ほろぼしてしまおうでしょう。

眞実には、なんの実用性じつようせいも、効能こうのうもないからです」

イクシュヴァーン学長は、言葉を止めて、しずかに、あたしたち
をながめた。しずかな湖みずうみの深さの、まなざし。

「しかし、人は、幸福しあわせを求める存在そんざいです。欲よつこびを求める存在そんざいです。

これは、第1の公理こうりです。

もし不幸ふこうを求めると称しょうする人ひとがいたとしても、その人は、それに
よつて、こころの納得なつとくを見出みいし、欲求よつこを満みたし欲よつこび、幸福こうふくをえてい
るのです。

幸福しあわせとは、むしろ、存在そんざいそれ自体じたいといつてもよいものです。すべ
ては、幸福こうふくへの追求ついきゅうから生しょうじたものだからです。だれも例外れいがいではい
られない。

ならば、眞実しんじつという感覚かんかくのなかにいられる方法ほうほうを1つの趣味教養しゆみきょうよう

として、知っておくことも、無益むえきとはいえないでしょう。

では、そのためにひつようなものとは、なんでしょう。それは、正義せいぎです。

自らが正義せいぎであれば、こころは充たみされているでしょう。

愧はずべきことがなければ、こころかるく、懼おそれなく、氣力きりよくはみちあふれ、たのしいでしょう。

しかし、現実げんじつというものは、正義をつらぬく者ものにつらくあたります。

だから、こころの弱よわい者は、現実げんじつにこびへつらい、迎合げいごうし、正義せいぎを嘲嗤あざわらい、悪あくに走る。

そのほうが伶俐りこうだと自慢じまんするのです。金かねがすべてだと、うたうのです。

そして、真しんの幸福こうふくからますます離はなれていく。離はなれていくから、まえよりも、さらに幸福こうふくに飢うえ、渴かわく。さらに強く執著しゅうじやくし、金かねや、物もの

や、権力や、色情を追求する。求めて終わることがなく、永遠に渴
き餓えつづける。

真の幸福とは、なんであるかを知る叡智がないから、このような
ことが起こるのです。

叡智がないとは、なんと悲しいことでしょう。

では、こんどは逆に、しょくんが叡智にもとづいて、現実のなか
で身を犠牲にし、損得をかえりみず、正義をつらぬいたとしたなら
ば、どうなるでしょうか。

ただ、損をし、つらいめに遭います。

それだけです。

それしかありません。

しかし、こころは満たされ、清爽で、さわやか、からかな気持
ちで、しあわせを感じるでしょう」

イクシュヴァーンは、ふたたび言葉を止めて、しずかに、あたし

たちをながめた。

またも蒼い湖の深さの、まなざし。

「さて、もう1つ、真実を生きているという感覚のなかにいられるためにひつようなもの、それは愛です。

しかし、愛は、かなうことはありません。ただ、失うのみです。すべてがムダに終わります。

どのように誠実な愛であっても、相手の求めるなにかがなければ、かえりみられることもありません。それは好みとか、タイプとかいう言葉で表現されますが、とてもあいまいで、いいかげんで、理不尽です。

そのような理不尽な理由で、人を選別することは、残酷ですらあります。

ちがうでしょうか？

むろん、ちがいません。

かんが
考えてみてください。

どんなに誠実で、こころのこもった、自己犠牲的な愛であっても、
好みでなければ、迷惑がられ、あぐくの果てには、キモいといわれ、
ウザいといわれ、疎ましがられ、避けられてしまうのです。

ひじょう こうい
非情な行為といわざるをえないでしょう。

けつきよく、恋愛の成就是運命でしかない。善良さも高潔さも、

なんの関係もない。

れんあい
恋愛とは、運命という名の弱肉強食、獣の世界です」

がくちよう あさけ
学長は、嘲りの笑みを泛かべている。

なみだ
あたし、涙がながれた。

そつかあ、愛はかなわないもの。愛はむくわれないもの。まちで、
そおだおー。グスン、グスン……理屈は、ちよつと、きよくたん
かなとは、おもったけど……

イクシュヴァーンは、言葉をつづけた。

「それが現実げんじつです。

現実世界げんじつせかいがどんなに理不りふじん尽ひじょうで非情ひじょうであるか、どんなに不実ふじつで道みちに外はずれているか。

しかし、I Eイデールアースでは、そうではない。

正義せいぎをおこなう者ものには、繁榮はんえいと榮譽えいよがもたらされ、榮耀えいよう榮華えいががあたえられ、富とみ榮えることができます。

愛あいにはむくいがあります。

哲学てつがくが崇敬すうけいされ、侮あなどられることがない。

おろかな価値観かちかんが専横せんおうする現実世界げんじつせかいとは、異ことなります。

力ちからだけが支配しはいする現実の世界は、不幸ふこうです。軍事力ぐんじりよくや、經濟力けいざいりよく、狡猾こうかつさや、強したたかさが支配しはいする現実世界は、不幸ふこうです。

なぜならば真しんの魂たましいを、真しんの生命せいめいを喪うしなっているからです。

生存せいぞんすることが生命せいめいなのではない。

富とみや権力けんりよくのために、罪つみのない弱よわい者ものたちをあざむき、くるしめ、

ちから
力をふるうおろかな者たちはじぶんたちがすでに生命を喪つてい
ることに気がつかない。

しかし、彼らに即刻、罰をあたえないことにも問題がある。罰が
なければ罪がないと誤解する者がいても、ふしぎではない」

んー……めんどくさいなー。

現実わ、きらいだけど、かたつくるしい話もきらいだお……

イクシュヴァーンは、おおげさに髪をふる。

「しかし、ここでは、そうはいかない。

世俗的な価値に左右され、欲望を貪り、生まれて来ないほうが良
かったような、獣同然の人間ども、彼らは、このIEでは、永劫の
罪を背負って、止むことのない罰を受けます。

真実と、正義と、愛とをつらぬく者は、永遠のむくいを受けます。

栄光の頂点に立ちます」

1人の少年が立ち上がった。

外人だ。ヨーロッパっぽい？

まっすぐで、あかるい髪かみのいろ、太陽のような高貴こうきな顔立ちかおだで、あたしたちと同じくらいの歳としだろうとおもうけど、知的ちてきで、凛々りりしい。

「では、イクシユヴァーン学長がくちょう、いったい、どうすることが正義せいぎで
しょうか。

どうすることが愛あいなのでしょうか」

学長は、よどみなくこたえ、

「それは、じぶんを超越ちようえつした行為こういです。

たとえば、自らの死を怖れず、自らの損得そんとくをかえりみず、権力けんりょくや、
金持ちかねもちや、暴力組織ぼうりょくそしきに立ちむかうことです。

たとえば、他人たにんを愛あいし、自らを犠牲ぎせいにする超越ちようえつてき的な行為こういのことで
す。けがれなく、他者たしやを愛あいすることは、自己じこの超越ちようえつなのです。

正義せいぎのために死すことは、幸福こうふくです。こころに一点のくもりもな

い。蒼穹そうきゆうのように自由です。

こころは、つねにさわやかでかくく、澄すみ切きっているでしょう。

わかりますか。

私は、実用じつよう的で実践じっせん的な話をしています、これが真のリアルであ
って、人々が追おい駈かけているものは、実体じつたいのない幻まぼろしです。

しょくんは、私を夢ゆめ見る者ものというかもしれない。しかし、だれも
がほんとうは、それを求もとめている。

いや、もし夢ゆめであっても、夢ゆめとは、現実じやうえつを超越ちやうえつするための、人間にんげん
精神せいしんの翼つばさ。

その自由を、だれも奪うばえません」

学長がくちやうは、沈黙ちんもくした。聖せいなる沈黙しじまだ。

イクシュヴァーンは、背せをむけ、うしろの大祭壇だいさいだんを見上げ、胸むねに
手をおく。

そびえる祭壇さいだんは段だんをなし、山のような、大神偉だいしんいをあらわにする。

その祭壇さいだんの背後はいごには、繁褥はんじよくな彫刻ちようこくに莊嚴そうごんされた衝立ついたてがそびえていた。

その頂上ちようじようには、金きんでつくられたIとYとEの3つの文字が1つの文字のようにかさねられ、円形えんけいの炎ほのおのなかで、かがやく。

ANKAがあたしの耳にささやいた、

「あれが聖なる象徴しやうちようよ。

神聖しんせいな原理アルケー、世界宇宙せかいうちゆうの原理アルケー、この世をささえる究極きゆうきよくの真理しんりの象徴しやうちようなのよ。

イデア山イーが同じかたちをしているっていったでしょ。それがあのIYEの頭文字かしらもじのIよ」

ふたたび、彼は、こちらへむき直りなお、演壇えんだんから1冊の本をとり上げた。

「この本は聖典せいてん『k O O (空)』のコピーです。

オリジナルは世界に37冊しかなく、そのうちの1冊さつがここ、ウパ

ニシャッド大聖堂で聖櫃アークにおさめられ、保管ほかんされています。

世界の25の大都市、7か所の聖地さつに1冊さつずつ、そして、ここアカデミアに5冊さつあります。

あとで、大聖堂で保管ほかんしている現物げんぶつも見てもらいますが、いつも見ることができるよう、わたしがいま、手にしているものと同じコピーしゃほん（写本）を、1冊さつずつ、しよくんにあたえます。

聖堂の出入口でいりぐちにつんでおくので、わすれずに持って帰りなさい。

これで講義こうぎは終了しゅうりようです」

その声と同時に、鐘楼しょうろうの鐘かねが高らかに鳴なった。

蓮はすの花が雨のごとく降り、香かうの匂においとともに、聖歌隊せいかたいの神聖しんせいな調しらべがひびきはじめる。

またハーロック事務局じむきょくちよう長があらわれた。

「さあ、さあ、これから『kOO』の原書げんしよを見てもらう。

前列ぜんれつの者たちから順じゆんにこちらへ。

聖の聖なる原書げんしょは祭壇さいだんの下したの地下室ちかしつ、聖堂フリダヤの心臓部しんざうぶにおかれている。

さあ、来るがよい」

みちびかれるままに、祭壇さいだんのほうにいく。いつてみると、なるほど、大祭壇だいさいだんの裏うらに、半円はんえんをえがくような感じかんじの通廊つうろうがあつた。

祭壇さいだんをかこむようになってゐる。

「そこだ。その通廊つうろうをいくがよい。いけば、祭壇さいだんの地下ちかに入る扉とびらが見つかる。扉とびらはあけたままにしてある。

階段かいだんがあるから、それを降りよ」

長い列れつができた。なかなかすすまないからだ。あたしたちは、足ぶみするみたいに歩いた。

あたしたちは、ANKA、エリコ、ミーシャ、あたし、イースの順じゆん。

「あ」

って、小さくさけぶミーシャ、ふりむいたエリコが、

「なによ」

「ね、あれって、ジンよ、ジン・メタルハート」

たしかにいた。あたしたちが祭壇さいだんのまえに、さしかかろうとするとき、祭壇さいだんのうしろの通廊つうろうに入いって、見えなくなろうとしている彼女のシルエットが。

尊大そんたいで鉄アイアンのような女。

あたしたちは、ようやく祭壇さいだんのうしろの通廊つうろうをまわって、扉とびらの見えるところまで来た。

ひらいたままの扉とびらのさきには、奈落ならくへおちるような階段がつづいている。まっ暗くらだ。

「怖いんですけどー」

ミーシャがさけんだ。

「はやく来なさいよ、あんた」

エリコは、そういうが、たしかに、ちょっと怖い。いざ降りてみて、はじめてそうおもった。手すりにすがるけど、冷たいし、さびてる。わっ、さびが手にー。さいあくー。

足下暗くて、段がよく見えない。

ほんとに長く感じたけど、たぶん、20段と少しくらいだとももう。階段の終わりがよくわからない。エリコがつまずく。あたしは、それ見て（感じて？）、気をつけたので、すんなり着地。ラッキー、かな？

あー、そんなことおもっちゃ、だめえ。

クドク、クドク。自己超越しなくっちゃ、いくらエリコがきらいでもねー。

ここは、少し明るい。

獣脂の燃える独特の匂いがしてた。ランプの傘に、聖人の彫像があった。クモの巣と、ホコリだらけだ。光が少ないわけだ。

着いた場所は、地下のフロア、っていうより、ただの小さなスペース。

つぎに、右に曲がって、まっ暗な廊下へと、つづいていた。

ANKAがその暗闇に消えていく。

石の冷たさが空気を通じてわかる……

なんか、厳粛なふんいき。大きな声なんか出せない感じ。あたし、

小さな声で、ケータイつかって、ANKAにきく、

「どうなの、ANKA」

彼女がいう、

「すごく暗いから。気をつけて。石の組みかたがあらくて、床がデコボコしてるよ。」

手すりにつかまるのわすれないで」

「手すりあるんだ？ それ、さいしょにさがすよ。で、どんな感じなの？」

「まっ暗^{くら}だけど、あつ、あかりが見えるかも。

ちよつとおー！

エリコ、めんどくさいから、わたしの裾^{すそ}つかむのやめてくんない？」

「なによ、ちよつと、さわっただけじゃん、ANKAのケチ」

エリコの声だ。

「怖いよ、エリコ、あなたのからだにつかまっていいい？」

ミーシャか？

「うざいわねー、さわんないでくれる？」　……エリコ。オメーつ

て、やつわー。

そうおもいながらも、すすめば、あたしも闇^{やみ}に浸^{ひた}る。

手すりはすぐにわかった。でも、まっ暗^{くら}だから、少しずつしか歩けない。

廊下^{ろうか}は曲がついているみたいだった。

あかりが見える場所まで、とおくはないはずなのに、なかなか着か

ない。

けど、それは数十秒のことではなかった。

あかりは小さな部屋へやからもれていた。ああ、よかった。

聖なる部屋せい。

廊下ろうかの左がわにつくられた小さな部屋へやで、入り口の上に、文字が

書かれていた。

あたし、ケータイの翻訳機能ほんやくきのうで読んでみる。

『真実奥義の精髓しんじつおうぎのその心臓せいずい』と書かれていた。

さらに入り口の左右さゆうには、むきあうように、2人の僧侶そうりよのレリー

フがある。

中国の僧侶そうりよつぽいけど、レリーのふんいき、つか感じは古代

エジプトつぽい。

入口しゅこを守護しゅごする知恵ちえの守護者しゅごしやがレリーの意味かいせつを解説した。

「彼らは、龍峯寺りゅうぶじの僧そう、眞巖しんがんと、弟子でしの龍鳳りゅうおうです。

この2人はつぎのように語りあっています。

眞曰、文趣眞奚焉にしあるとも、究竟也

龍曰、卷子皆同じう究竟を云か

眞曰、佳文究竟の所以

すばらしい会話です」

「わかんないよー」

「つまり、こういうことです。

眞巖がいった。

『この本の内容がどんな内容であろうとも、その内容は、究極の真理をかんぺきにいいあらわしている』

すると、龍鳳は、たずねた。

『なにが書いてあっても、究極真理ですか。師よ、それなら、どん

な本であっても、究極きゆうきよくの真理しんりが書いてあることになってはしまいませんか』

眞巖しんがんは、満足まんぞくげに、大きくうなずいて、こたえた。

『そのとおり。』

それこそこの本がほかの本に勝まさってすぐれている特徴とくちようなのだ』

どうですか、すてきじゃありませんか！ すばらしい。

その本こそが、これからごらんになる『kOO』です」

「少しも、わかんない！」

ま、いや。

あたしも、はやく入ろー。みんな、どんどん入って、どんどん出てくる。ゆっくりは見てられないようだ。

入った。

4人の衛兵えいへいが部屋へやの四方よもを護まもっている。

選よりすぐられた、精鋭せいえい中の精鋭せいえいにちがいない。

精巧な細工が施され、まぶしさのはんばじやない黄金の甲冑、装飾的な流線をえがくデザインは実戦むきじやない。細部まで緻密な造形が奢られ、聖なる神句が神聖な文字で浮き彫りにされていた。

解説を仕事とする僧侶、解説僧が1人立っている。

けど、あたしは、すぐに、ちがうことに氣をとられた。

ふしぎだあ。地下なのに。だって……

エリコがいう、

「なんかさー、空気がさわやかじゃない？」

そう、あたしも、そうおもった。それなのに、なにこれ……

「ほんと、なんか、気持ちいいーおね」

ミーシャのいうとおり。きよらかな小川がながれる、夜明けまえの森みたい……、でも。

「これだよ、見て」

ANNAがいう。

あたしも、ミーシャのあとから歩みすすんだ。

部屋の奥にある、大きな聖櫃。

とおもったら……なんてことなのよ!?

まっ黒な、ごつごつした巨大な磐じゃん！ なんじゃ、こりやあ！

こ、こわいよ。

その黒さ、黒曜石つつか、なんか、ぬれてるみたい、つかさー、

黒漆塗りみたい？

しかもあざやかな、濃い緑の苔まで生えてるわ。

ニコニコした解説僧がそばに立っていて、だれが来ても同じ言葉をくり返す。

「さあ、さあ、ごらんなさい。

聖櫃は1個の大きな磐を、けずり削りぬいてつくりました。

その磐は聖なる神の山の1つ、イーユイの山頂にあったものです。

それを、聖なる神の森ノールゴイに1年おいてから、ここへはこび

ました。

深みふかのある緑の髭ひげのような苔こけは、霧濃きりこく岩いわ迸ばしるながれや、瀧たきの多い森はにおいて生えたものです。

そのせいで見えにくいですが、よくごらんなさい。

聖櫃アークのぜんたいに、文字があります」

そっか。

てらてらと光って、ぬれているのかとおもったけど、なんだ、文字だあ！ でも、この文字って、なんかヘン。どうやって書いてあるの？

「これは、大磐おおいわの表面を、小さくこまかいたくさんの文字のかたちに彫ほって、そのかたちにあうように、1文字ごとに、24金のゴールドと、ダイヤモンドとを、コンビネーションで嵌はめたものです。

こういうふうに嵌はめこんで装飾そうしよくする技法ぎほうを、象嵌ぞうがんといいます」

あらあらしい石の素材感そざいかんに、ゴールドとダイヤの人工的な文字の、

コントラストが眼にあざやか。

聖櫃せいひつを上から見るために、櫃はこをかこむように小さな橋はしみたいなものがつくられていて、ハシゴでそこに上がる。39段くらい。

上がり切って、橋はしの手すりに寄りかかって、のぞきこむ。

聖櫃アークの蓋ふたは、ぶあつくて、大きなガラスだった。

「さ、さ。どうぞ、見てください」

解説僧かいせつそうがいった。

ガラスの下に、また、聖櫃アークが見える。白い石の櫃はこだ。聖なる物語の人物のレリーフが、いっぱい、彫ほられている。

そのレリーフの人物にも、建物にも、背景はいけいにも、ぜんぶに文字が象嵌ぞうがんされている。

「ピュシス山麓さんろくで採れる、最高級の大埋石だいりせきです。

これにも文字が象嵌ぞうがんされています。素材は螺鈿らでん、つまり貝殻かいがらです。

貝殻かいがらをけずってみがくと、このような靨にじのような、とてもうつく

しいかがやきが生まれるのです」

その櫃はこにも窓があつて、なかには濃こくぬれたような深ふかみのある、
クリムゾン・レッドの櫃はこがある。

やっぱ文字が象嵌ぞうがんされてる……（ちよつと、あきれた）

「聖櫃アークは濃紅のうくの金剛石こんこうせき（ダイヤモンド）でつくられました。

象嵌ぞうがんされているのは、ラピスラズリ、クジャク石、トルコ石、少
しですが、ゴールドもつかわれています」

まだ、窓がある……。黒い櫃はこが見えた。もう、A3判ばんくらいの大
きさだ。

「漆塗うるしぬりです。

文字が金泥きんでいで、筆盛ふでもられています。繊細流麗せんさいりゅうれいな、仮名かなの文字です。

その上に、漆うるしがかさね塗ぬりされています。

さて、これら4つの聖櫃アークに象嵌ぞうがんされた文字はすべて『kOO』に
書ぶんしょうかれている文章と同じです。4つをあわせると、聖なる書物しよもつの内ない

容ようのすべてになります」

そーゆーことかあ。

いや、つてゆーか、ま、まだ、窓があるンですけどお……

絹きぬの裂きれが見えた。

ハデないろづかいだ。

金糸きんしの龍りゅうの刺繡ししゅう、あざやかな蒼あおさの龍りゅうの染めそ、織りこまれた漆黒しっこくの龍りゅう・深紅しんくの龍りゅう・純白じゆんぱくの龍りゅう……

絹きぬはなにかをくるんでいた。そのくるみは、なかばほどかれてい

て、和綴わとじの冊子さっしが見える。

解説僧かいせつそうの説明がつづく、

「原書げんしょとは、作者さくしやが設計せつけいし、こまかく指示しじしてつくらせた手書きてがの装丁本そうていぼんをいいます。

じつは、一概いちがいに原書げんしょといわれますが、2種類しゆるいあって、装丁そうていがちがいます。皮革ひかくの装丁そうていと、いま、あなたがたが見ている和綴わとじの装丁そうていの、

2 種類しゅるいです。

和綴わとじのものは、おもに祭祀さいしのためのもので、素材そざいもすべて入念にゅうねんに吟味ぎんみされています。

繊維せんいの長い手すきの和紙わしに、最高の墨汁ぼくじゅうをつかい、老練ろうれんな書家しょかの手で、精妙せいみょうに筆がはこばれ、絹きぬを綯なった紐ひもで、綴とじられているのです。

よくごらん下さい。

ぎやくに、皮革装丁本ひかくそうていぼんは、人の手にふれさせるためにあるといつてもよいでしょう。

だいせいどうふぞく ぶんしよかん さつ ひかくそうていぼん
大聖堂附属の文書館に1冊、皮革装丁本があります。だれでも手にして、閲覧えつらんすることができます。ただし、持ち出しは厳禁げんきんですが。

機会きかいがあれば、そちらも見てみるのがよいでしょう」

あたしは、説明のつかない、不安ふあんと動揺どうりょうとおぼえた。

本は無表情むひょうじょうにも、自喪じそうしているようにも、憤懣ふんまんが鬱積うつせきしている

ようにも、苦渋くじゆうの表情のようにも、默然もくねんとしているようにも、ただ、物質ぶつしつでしかないようにも、……見えた。

なんだろう、この不安ふあん……

なんとなく、視線が第2の聖櫃せいひつの彫りへ、うつった。

大理石の櫃はこの蓋ふたに、浮き彫りにされている聖句せいく。そのなかで、ひととき大きなスクリプト体たいで、RW (Real World) と、会社のロゴがあ……

……るはずなんだけど、それがどうしても、そうは見えなくて、うす暗いせいじやなくて……

どう見たって……だって、これ、……RWの『W』が……

「ねー、これ、われてなあっていい？」

ミーシャが解説僧かいせつそうにきいた。

顔をしかめて、僧がのぞく。

「は？」

そんなはずが」

しかし、言葉は止まった。部屋に入ってくる人の出入りも、止まった。

「ほんと、これって、はんぶん欠けてなくねー？ WがVみたいだわ」

エリコも、無遠慮にいう。

イスがうしろからのぞき、

「ほんとうだ、おかしい。以前に見たときは、……：……：こうではなかった」

ANKAも、立ち止まったまま、

「どうしたの？ ここは、最もセキユリテイの強い、IEの心臓部。
事故が起こるわけじゃないよ」

その言葉のたすけで、蒼白になっていた解説僧も、息を吹き返したように、

「おおつ、そーですとも、おそらくは、たぶん、いや、きつと、かならずや、ぜったいに、たんなる老朽化ろうきゅうかによる、その、自然な、いわゆる、人為的な損壊じんいてき せんかいなどではない、経年けいねんによる、自然な崩壊ほうかいというか、それ……あれ……これ……」

衛兵えいへいが2人、まえにすすみ出た。

「立ち止まるなかれ。さあ、いけ。」

とどまるは無為むい」

A N K Aが急に眼めをさました人のように、

「そうよ。さ、いこうか」

「うん」

あたしも、いった。エリコが、

「なんかあやしーわね。まあ、いいわ。わたしがそのうち謎なぞを解といてあげるから」

そのうち、わすれるくせに……

部屋を出ると、ふたたび、まっ暗な廊下を手さぐりし、来たときとは、べつの階段を上がって、うす暗い通廊にもどり、あたしたちは、写本を受けとって、大聖堂を出た。まぶしい。

あたしたちは、無口になっていた。路地を歩き、寮にもどる。

「それよりさー、わたし、気になってんだけど」

エリコの言葉に、なぜかムツとしたあたしは、

「なにがよ？」

「あんた、そうおもわないの？ 信じらんない」

「だから、なにが？」

「うそー、まじわかんないの？」

「わたしも、わかんない」

ミーシャが口をはさんだ。

「あんたは、なんにも、わかんないでしょー」

イスがしずかにいう、

「^{アー}聖櫃のことだろ」

あ、あれかあー。たしかに……

って感じで、しばらくは、WがVになっていたことが話題^{わだい}で、も
り上がった。けど、写本をしまつて、食堂^{しょくどう}へいくころには、わすれ
られた。食べ物や、飲み物をならべ終えると、

「ねー、クドク・ポイント見てみない？」

エリコがとーとつに、そういった。

イスも、うなずいて、

「そうだね、基本講座^{きほんこうざ}のポイントが加算^{かさん}されているはずだしね」

あたし、びっくりして、

「え、そーなの」

ANKAが笑う、

「そうよ、あたりまえじゃん。正義^{せいぎ}の叡智^{えいち}をさずかったのよ。とう
ぜん、クドクはアップするわ」

ケータイで見てみた。

AnkaQDDQ : 26

EurekaQDDQ : 26

EricoQDDQ : 23

IearthQDDQ : 27

MeasyaQDDQ : 25

す、すごい。プラス20ってこと？　ただ、きいていただけなの
に…………。

エリコは、数字をにらんで、腕ぐみしながら、

「へー。わたし、ビリじゃん！

まー、いいわ。専門講座でも、クドク・ポイントつくのよ。

最高の講座を受けて、最高の成績でアカデミアを卒業して、ダン

トツ1位になってやるわよ」

ミーシヤも、

「ほんとー、わたしも、専門講座、期待しちゃうー」

そんな感じで、みんなのきょうみは、専門講座へと、うつつていった。

「どれにしようか？」

パンフを見ながら考える5人。

ミーシャが飽きて、

「ねー、ヨセフって、なんか気になるー」

パンフをおいて、エリコがミーシャをにらみ、

「うざい、つーの」

ANKAが笑って、

「わたしは、ヨセフのこと、よく知ってるよ。」

彼は、天才だね。現実の世界でもね。オーストリアの古い貴族に
つらなる血筋で、まあ、いい家のお坊ちゃんってとこね」

「オーストリア？」

って、ミーシャ。

「オーストリア！ 首都しゅとはウィーン！

ヨーロッパだよ」

「ウィーン？」

って、あたし。

「オーストリアの首都しゅと？」

って、また、ミーシャ。

「そうだよ。どのレベルから、話しはじめたらいいのかな？」

あたし、あたまかきながら、

「なんで、ANKAは、そのヨセフって、知ってるの」

「まあ、ちよつとね」

それ以上、なんにもいいたくないの表情ひょうじょうになっちゃった。

「ふーん」

あたし、なんか、おさまらないけど……ま、しかたないか。

「でさー、専門講座、どーする？」

エリコがパンフを手にして、首をかしげる。あたし、眠くなる。

暖炉だんろって、あったかくって、木の燃える匂においがよくって、パチパチ
って音がして……なごむなー。ふあー。

zzz… ヤバイ、眠っちゃうよー。

食事をすませ、5人で食堂を出る。食事のすんだ人たちで、ワイ

ワイしていた。

「少し散歩さんぽしよう」

ANKAがそういった。寮りょうの外そとに出る。

風はないけど、雪がはげしく降りはじめ、まえが見えなくなるほど
になっていた。それでも、ANNKAは、やめようとはいわなかつた。
エリコがなにかいいそうだったけれど、イースが唇に指をあてた。

歩きながら、ずっと考えこんでいたANKAが急にいう、

「ねえ、このさきにカフェテリアがあるよ」

イスがすぐに、

「ああ、それなら、ぼくも知ってる。こっちだよ」

その店は三角形をしたブロックのかどにあった。Y字のまたにな
つていて、鋭角をなしていた。

「へー、変わってるねー」

つていいながら、エリコ、ちゃっかり、いちばんさきに入る。扉
のない、オープンなお店なので、さきに入れば、そのぶん奥おくに入
れ、あったかいからだ。

店には、あたしたちみたいな学生が多い。

カウンターに立って、あたしたち、よこにならんだ。席すわに坐ると、
ちよつと、値段ねだんが高くなるからだ。

カフェテリア、パブ、バルは立って飲み食きいが基本きほん。それはいい
んだけど、背せがとどかないのが、ちよつと問題。

イスなら、ひじをのせられそうだけど、ANKAや、あたしは、あごをのせるのが、せいっぱい。

エリコが暖房だんぼうのきいた奥おくの場所を、さつさとじぶん用にキープして、

「こつちだよ、はやく来なよ。おせえーな」

「あーん、いま、来てるじゃーん」

ミーシャが素晴らしいながら、エリコのとなりに坐すわる。

あたしは、ANKAのあとに入すわって、坐すわった。

同じカウンターにならぶんだけど、小さいスペースだから、奥おくからつめていくと、あとから入ったあたしや、イスは、外の寒風かんふうにさらされる席になる。

けつこう、寒さむいけど、これも、クドク、クドク……さいきん、さぼってたから、がんばらなくっちゃ。などと計算けいさんする。

これだよ、IEのいいところは。

こーゆー打算的な行為でも、善行として評価されることだ。動機が不純じゃいけないとか、ダルいことや、めんどくさいコト、ぐだぐだいわない。

だいたい、意識しなきゃ、なんにも、できないわけでしょ？ 少しくらい下心があつたつて、とうぜんじゃん。ナイなんて、どうやるの？

純粹な善行、つてムリすぎるよ。机上の空論。意図して行動、それが事実でしょ？

それにしても、イースは、ANKAとともに、先頭を歩いてたのに、みんなにゆずつて、カウンターの、いちばん、はじっこにいる。

からだがはんぶん外に、はみ出す場所だ。んゝゝ。エライっ！

まあ、イースのばあい、剣に手をそえながら、いちばん、外がわの席にいと、クドクつつーか、どっちかつーと、護衛つばい感じだけど……

あったかい飲みものすすりながら、みんな、しばし沈黙。ちんもく

エリコがとうとつに、

「でさー。」

あんたたち、専門講座せんもんこうざ、決めたの？ わたしわねー」

もったいぶって、少し間まをおき、あたしたちの顔を見まわしてか

ら、「商学講座しょうがくこうざにしたわ、どお？」

あたし、おもわず、

「あんた、まさか、ここで、カネもうけ考えてンじゃないでしょーね？」

「わるい？」

きよく、ただしく、モウければ、クドクになるわ、ユリイカ。

で、ミーシャ、あんた、なんにしたの？」

「えー」

「なによ、じつは、もう、決まきってンでしょ？」

「うん。装飾神学講座」

「なに、それ？」

4人が同時に、そういった。

ミーシャが、

「教会や、カテドラルの装飾、絵とか、彫刻とか、インテリアとか、建築デザインとか、庭園デザインとかするの。」

お城や、お濠や、橋も、デザインするのよ。

すごーいの」

エリコが眉を上げて、

「なんで、あんたが」

「なんか、パンフがきれいだったし、笑わないでよ。ANKAは、なんにしたのよー」

ANKAが笑いながら、

「わたし、じつは、ここに来るまえから、決めてたんだ。」

へいがく
兵学よ。

この世で、いちばんシリアスで、実践的な学問だわ」

な、なるほど。

あたしがいわないのを見て、イースが、

「ぼくは、聖人伝詩学講座。」

きよう
今日、眼がさめたら、決心がついていた」

あたし、イミフで、ぽかーん。ANKAですら、かげんそうに眉を
まゆ
しかめた。

「なに、それ？」

「聖人の伝記を多くの吟遊詩人が歌いつたえている。」

いままで、詩人たちが伝承した詩を学ぶとともに、聖人の生涯を
せいじん
しょうが
も学ぶのさ。

せいじん
しょうがい
聖人の生涯を、日ごろから唱えていれば、魂が浄化される。

……ような気がしてね。

思考で到達できないものにたつするには、こういうやりかたがよいとおもったんだ」

エリコがよこ眼であたしを見る。

「ユリイカ、あんた、まさか決まっていんじゃないでしょうね？」

「ふん」

寮に帰って、夜、あたしは、独り消灯時間になっても、ベッドにいかず、暖炉のそばにいた。パンフを見ながら。

あたしのキヤラは叡智。だったら、やつぱり、これなのかな。でも、なんかヘンな感じがするんだよねー。

わるい予感っーか（笑）。

『真実への叡智を学ぶ講座』

講師　タカフシ・ヒラエ。

マコトヤ・アマヤスの友人。叡智えいちの最高権威者さいこうけんいしや

の1人。

募集定員ぼしゆう

1名。

コメント

至高しこうの叡智えいちをきわめたい人に、ぜひおすすめ♡』

だから、そのハート・マーク、なんなんだっつの！ つーか、
こんなに、うたい文句もんくがすごいのに、いまだに定員ていいん（1名）にたっ
していない、って、どーゆーこと？

あたしが心配しんぱいすんの、ムリない、ふっーだよね？

くやしいけど、エリコの攻略本こうりやくぼん、見せてもらおうかしら。んー、
こまった。

でも、今日は、眠いねむいし、エリコ、寝てねるし……

8 ありがとお、タカフシ師……

『真実しんじつへの叡智えいちを学まなぶ講座こうざ』の教室きょうしつは大聖堂だいせいどうのちかくにある、古く
て、小さなアパートの1室だった。

建物は石づくり。石のかたちがそろっていない。風雪ふうせつになぶられ
た壁かべには、冬枯ふゆがれの蔦つたがびっしり。蔦は雪をかぶっていた。

3階まで、せまい、暗い階段を上る。カビ臭くさいわー。

廊下ろうかがあつた。

部屋へやの扉とびらがならんでる。

あたしは、『真実しんじつへの叡智えいちを学まなぶ!?』（∴っーか、「!?」って、
どーゆーことなんだよ）と書かれた扉とびらをノックした。

「どーぞお」

なんつー気きのぬけた返事へんじ。あたし、これ、まちだいいじようぶ？

扉とびらをあけると、部屋へやは正方形せいほうけいだった。机つくえが1つと、椅子いすが2つあ

ったけど、タンスも、本棚ほんだなもない。本ほんぐらないのかよ。

四角いストープの上で、ケトルが湯気を吐いている。

シューシュー。

その音しかない。

しずかだ……

タカフシ師は、奥の椅子に坐っていて、手まえの椅子に坐るよう、

あたしにすすめた。

「ユリイカさんだね」

「はい」

あたしは、あっけにとられてた。

タカフシ師は、20代半ばくらい？ 不精髯で、毛糸編みの帽子、

モコモコにふくらんだダウンジャケットを着て、ヒザがやぶけたデニムのパンツに、ハイカットのバスケット・シューズ、つてゆーいでたちだった。

まぶたが大きな二重で、はんびらき、ぼんやり、とろん、つて感

さんぽくがん
じの三白眼。

かるくめまいを感じたけど、あたし、氣をとりなおして、ともかく、^{すわ}坐った。

これじゃあ、生徒^{せいと}、来るわきやねーわ。

「じゃーねー、さっそく、授業^{じゅぎょう}に入^{はい}ります。いいかな？」

「え？ あ、はい」

「えー、つと。まず、諸行^{しよぎやう}とはー、無常^{むじやう}です」

「せんせー、いきなり、ちつとも、わかりませんけど」

「そー、だよね。では、では」

まちで、きもいんですけど？ きもー、キメー、キンモーっ!!

「んー、なんていったら、いいのかなあ」

ほ、ほんとに教^{おし}えられるのか？ いままで、どんなふうにしてたんだよつ。

「まあ、あれだよね。」

わかるよね」

「へ？」

なんなの？」

「というか……そのう。

わかんない、って、なんですか？」

「わかりません（きっぱり）」

「では、わかる、って、なにかな」

「だから、わかりません」

「で、そのわかんない、って、なんですか」

「知りません」

「そーそー。意外いがいに、才能さいのうあるね。大々大々大正解だいだいだいだいせいかい」

「は？ まぢ、なんなの？」

「ってか、なんで、意外いがいなんですか？」

「いーから、気にしない。」

ブラボー」

……どこの国くにの人だよ。

「あなたは、天才てんさいかもしれない。

じゃー、諸行無常しよぎやうむじやうは、わかりましたね」

「え？ ぜんぜん、わかってないんですけど」

「いや、じゅうぶんです。

むしろ、それ以上、考えてはいけません」

といって、へらへら笑う。

「ではね、ユリイカさん、この机つくえの上に、お茶わんちや、おきます」

ポケットから大きな茶わんちやを出した。

てか、よくそんなもん、入ってたナあー……………

「これは、志野焼しのやきの、お茶わんちや、です。

今日きょうから、これを毎日まいにち見て、無常むじやうの練習れんしゆうをしましょう」

「だから、無常むじやうってー、なんですか？」

「いや、だいじょうぶです」

「はあ？ それじゃ、なんも、わかんないよー」

「そういうことです」

「はあー？」

「そう、すばらしい。」

「というか、わかるというのは、なににも、わかっていないんだから、知らなくても、同じなんです。」

「さとした人も、おろかな人も、みんな、だれでも、レベルは同じ」

「そ、それがムジヨー、ってことなの？　じゃあ、勉強しなくても、いーんじゃん」

「そーそー、意味ないんです。」

「意味なんて、イミナインです」

「なんか、そーゆーことなら、まえから、知っていたよーな……気もしなくもないケド……」

「そうですか。」

やはり、天才だったんですね。

ちなみに、これは、白志野焼しろしのやき、といいます。

岐阜ぎふ県けんの南東部なんとうぶ、すなわち美濃みのの東部とうぶ、東濃地域とうのうちいきのもので、いわゆる『美濃陶みのとう』の類たぐい。

淡黄白色たんおうはくしよくの素地きじに、長石釉ちようせきゆうで白濁はくだくした、深みある、しつとりした光沢こうたくがあります。

長石单味ちようせきたんみの乳濁にゅうだくした釉薬ゆうやくを、たっぷりかけて焼成しょうせいすると、釉くすりが半透明はんとうめいの白斑しろむらをなして、こんなふうになるんです。

ポツポツこまかい穴あながあるのは、陶土とうどにふくまれていた空気がぬけた痕あとです。小孔しょうこうといいます。

表面くすりに見える釉かんにゆうのヒビは貫入かんにゆうです。

いずれも、焼いている段階だんかいでできちゃうものですが、これが味あじわいなんです」

「あのー、ちょーつまんないンですけど？」

「そーら、ふくまれた鉄分てつぶんが赤い斑文はんもんになって、表面あらわに幽玄あやれるのが、火ひいろ（または緋ひいろ）です」

「……………で？」

これで、どうしろと？」

「じゃ、がんばって」

「えー？」

「私は、ちよっと、出かけます」

「シナ、バカな？ あたし、なにしたらいいのか、ぜんぜん、わかんないし、ここに独りひとでのこって、茶ちやわん、見てろってーの？ は

あ？ もう帰る！

そんなとき、エリコからのメールが、

『あんたの講座こうざ、けっこー難関なんかんらしーねー。

高望たかのぞみやめて、現実げんじつ、見みなよ（笑）』

ちよーーーームカつくうーーーっ！ うぎやあああー
ーっ！

ふん。なによ。かんたんじゃん。先生は、才能あるっていつてく
れたもん。やってやるわ。

なに、やるんだか、わかんないンダケド。

けつきよく、その日は午前中、じいーつと白志野を見てた。

はあゝあゝゝアホらし。

午後、サブ専門講座に行く。

冷たい手を吐息で、あたためながら。

もう1つの専門講座『文学における司法史講座』。って、なんの
ことか、わかんないんだけど、ANKAと同じにした、ってだけ。

「で、どう、ユリイカ、初日は」

さっそく、その日、となりに坐ったANKAにきかれた。茶わん
を：：って、なんて、こたえたら、いいのよー？

「ぜんぜん、わかんないよ。てか、それ以前いぜんなのー。

あたしも、ANKAと同じにすれば、よかった」

「へー。そうなんだ。

わたしは、今日きょう、ハンニバル・バルカ(Hannibal Barca、紀元前きげんぜん247年ー紀元前きげんぜん183年。カルタゴの将軍しょうぐん)と、ローマ軍の戦闘せんとう(ティキヌスの戦い、トレビアの戦い、トラシメヌス湖畔こはんの戦い、カンナエの戦い)について学まなんだわ」

おわあ！ わかんねー。あたしにや、どっちでも同じかあ……ちつとも、わからんわ。

夕方ゆうがた、寮りょうにもどって、大食堂だいしょくどうで食事しょくじ後、部屋へやで暖炉だんろのまえに、みんな、集あつまる。

気のせいかな、だれもが調子ちようしよさそー。それぞれの専門講座せんもんこうざのことはなしで、話はなしがもり上がる。あたしのメンタル、ついていけない。

なんでよ、あたしだけなのお？

つぎの日、雪が降^ふって、窓^{まど}ガラスくもって、タカフシ師^しは、

「どうです？」

どおつ、て、なんもないよ。つーか、それ以前^{いぜん}。どーも、こーも、ないよ。

「じつと、見ていると、ムジヨーがわかってきます」

まち？

じつと、見る。ほんとか？

んー、なんか、わかるのかなー。

わからん。

つぎの日も、つぎのつぎの日も、雪をふんで、アパートまで来て、階段^{すわ}を上がり、坐^{すわ}って、茶^{ちや}わんをにらむ。

んー………んん………めそめそ

「どうですか？」

「たぶんさー」

「たぶん？」

「100年ぐらいかかるとおもうよ」

「ほう。そんなに、はやいですか」

「あたま、だいじょーぶ？　だからさー、やりかた、よく考えたほうがいいんじゃないか、と」

「ほお。たとえば？」

「そーね」

つて、いったものの、なんも、おもいつかなかった。

寮りょうに帰かえってからも、食事しょくじのあとの暖炉だんろのまえでも、会話かいわに参加さんかせず、あたしつて、ムツツリ考えつづけていた。

ゆれる炎ほのおを見つづける。ふしぎなきぶんになってくる。

なんだか、すべてが光ひかりと影かげ、幻まぼろしのようにおもえる。瞑想めいそう的な、現げん実じつ逃避たいひ的てきなきぶんに墮おちていく……………

ああ、もうこんな時間なんだ、つておもって、今宵こよいもまた、眠ねむ

る……

そして、翌日^{よくじつ}、また、肩^{かた}をおとして、帰って来る。

深い黄昏^{たそがれ}のなかを……あーあ。

そんな日々、なんか、老けた気がする。髪白^{かみしろ}くなっていないか？ シ

ワできてないか？ 鏡^{かがみ}見る。同じか。変わってナイ……

同様に、そのつぎの日も、くり返^{かえ}した。茶わん^{ちや}をにらむ。

そして、いつもと同じく、寮^{りよう}に帰って、ムツツリ。

ANKAが気にしはじめた。

「どーしたの？」

あたし、事情を話した。

「それって、さすがに難問^{なんもん}ね。想像^{そうぞう}もつかないわ」

イスも、うなずいた。

「おそらく、IEのなかでも、最高級^{さいこうきゅう}の超難問^{ちやうなんもん}だろ。

なにしろ、講師^{こうし}が、あのタカフシ師^しだし」

あたし、やっぱ、高望^{たかのぞ}みしすぎたってこと？　そういうつもりじ

やなかったんだけどなー。ただ、なんにも、知らなくて……グスン。

^{なみだ}涙まぢで出てきた。

もしかして、受講^{じゅこう}希望^{きぼう}がなかったのって、レベル高すぎて、みんな、敬遠^{けいえん}したってことかもって、いまごろ、気がつく。

^{しっぱい}失敗したより。

エリコが、

「ばかね。なんで、わたしに相談^{そうだん}しなかったのよ。

まあ、こうなったら、基本^{きほん}にもどってやるしかないわね」

「基本^{きほん}って、なによ」

「そんなの、じぶんで考えなよ」

「なに、それ。よーするに、エリコだって、わかんないんじゃないん」

ミーシャがいう、

「わたし、こまったときは、『kOO』、見てるよ。イクシユヴ

アーン学長がいったもーん」

写本^{しゃほん}か。じつと見るが。

なんも出て来^こん。ため息^{いき}。今日も、憂鬱^{ゆううつ}なまま、寝^ねる。

そのつぎの日も、正方形^{せいほうけい}のアパートの部屋^{へや}で、あたし、茶^{ちや}わんを
ながめてる。グスン。

だめ。

時間がすぎていくだけ。

毎朝^{まいあさ}、鏡^{かがみ}見ても、暗^{くら}い、鬱^{うつ}のあたしがいるだけ。顔いろ、青い。

髪^{かみ}ぬけてねー？ 加齢^{かれい}臭^{いしゅう}ねーか？ んなコト、ナイ……

はあ……

で、2週間^{そつぎようかん}が終わって、卒業^{そつぎよう}の日。

みんな、いまごろ、卒業^{そつぎよう}許可^{きょか}、もらってるんだろーな……。あた

し、落第^{らくだい}して、2週間、そう、少なくとも2週間、ここに独^{ひと}りのこ

されるんだ……。ANKAも、みんないっちゃうのに。エリコ、笑^{わら}う

だろーな。あーあ……

そーおもって、椅子いすに坐すわったまま、がつくりうなだれて、先生が口をひらくのを待まっていた。

9

サヨナラ……

アカデミア

「卒業そつぎょうおめでとう」

「え？」

「許可書きょかしよ、ここにあります。たいへん、がんばりました。

やはり、天才てんさいでしたね」

「え？ えー？ 先生つ、あたし、意味、わかんないんですけど、ぜんぜん！」

あたし、これっぽっちも、わかってないし、できないし、なんにも、おぼえられなかったし。

なんで、卒業そつぎようできるんですか？」

「だから、卒業そつぎようです。

あなたは、卓越たくえつした天才てんさいです。

私の講座こうざなど、ひつようがなかったんです。

いろいろなことが卒業そつぎようしてから、わかつてくるでしょう。許可書きょかしよの言葉をよく読よんで、よく考えましょう。

私は、あなたに、龍りゅうの称号しょうごうをさずけます。

では、さようなら」

あたしは、ぼうぜんとしたまま、先生が手書てがきした羊皮紙ようひしの卒業許可書そつぎようきょかしよを受けとった。おじぎもできなかったし、お世話せわになりました。たも、ありがとも、いえなかった。

あたしは、魂たましいのぬけたまま、階段おを降り、路地ろじを歩いた。そのあと、もう1つの専門講座せんもんこうざの卒業許可書そつぎようきょかしよを、どんなふうにもらったか、ぜんぜん、おぼえていない。

寮りょうに帰るとちゅう、裏路地うらろじのどっかの建物たてものの階段すわに坐すわつて、リボンほどいて、卒業許可書そつぎようきょしよをひろげた。お尻しりの冷つめたさなんて、気がつかなかった。

『貴殿きでんが『真実しんじつへの叡智えいちを学まなぶ講座こうざ』の学がくを究きわめ、修得しゅうとくしたことを、ここに証しょうする。

この言葉を胸むねに、これから、よく励はげめ。

清明せいめい在躬ざいこう氣志きし如神にょしん（心身しんしんが清明せいめいであれば、大いなる働はたらきをなすことができる）

付記あわ 併あわせて『青き龍りゅう』の称号しょうごうを授与じゅよする
』

青龍せいりゅうの称号しょうごうってなんだろ。

そのほかに書いてあることも、よくわかんない。わかんないから、

あたし、ただ、感激かんげきしかなかった。

なみだ

涙が出てきて、止まらない。ああ、センサー、ほんとに、ありがとう。まぢ、意味わかんねーけど。

事務局じむきょくに寄よった。

そつぎようきよか

卒業許可が出たら、事務局じむきょくに寄よれ、という指示しじだったからだ。

いくと、事務じよせいの女性きよかしよが許可書しやうめいに、証明いんじの印璽おを捺おしてくれた。

「さ、これでアカデミア公式こうしきの証明しやうめいがついたわ。

許可書きよかしよはね、この証明印璽しやうめいいんじがあつて、はじめて証書しやうしよとして世間せけんに

通用つうようするのよ。

アカデミアを出るまえに、大聖堂だいせいどうのアユ礼拝堂れいはいどうにある天啓てんけいの壇だんに

いって。そこで、I Y Eイーの聖しなる徴しるしに、この証書しやうしよをかさねるのよ。

それによつて莊嚴しやうげんされ、卒業じゅよくがあなたたちに授与じゅよされ、クドクの

レベルが上がるわ」

へー、知らなかった。

ンなこと、いったたつけ？

寮りように帰ると、もう、みんながいた。

「なんだよ、やつぱ、落第らくだい？ きやはは。

泣なくなよ、ユリイカ」

すげームカつく、エリコの声。

「かつてなこと、いわないでよ、見て、ちやーんと、卒業そつぎようしたわ。

あんた、読よめないんだつけ？」

ミーシャが入ってきて、

「えー、すつごーい、やったねー、ユリイカ！

おめでとー」

「やめときな、ミーシャ。ぐーぜんだよ、あんましほめると、ちよ

ーし乗るから、ユリイカって」

オメーじゃねー、つーの。

ANKAも、来た。

「ほら、いったとおrijゃん。だいじようぶだつて。

まじ、すごいとおもうよ。自信じしんを持たなきや、ユリイカ」

イスも、しずかにいう、

「ほんとに、そうだ。タカフシ師しの講座こうざを卒業そつぎようしたんだよ。

超難関ちようなんかんのエリート・コースだ。

マスター級きゆうの荣誉えいよだよ。就職しゆうしよくも、ひく手あまたじゃないかな」

就職？

あたし、ぜんぜん、考えてなかった。つか、わすれてたあ。あ

たしたちつて、就職しゆうしよくすんだよー。

「わすれてたみたいだね」

エリコがすかさず突つこんできた。

「職しよくなしで、どうやって生きていくつもりだったんだよ？ あんた、

あたま、だいじようぶ？」

イスが笑わらい、

「まあ、いいじゃないか。

勤めさきには、こまらないよ。この理想世界では、真理を探究する哲学が最高の実用的学問なんだから。

オファアが事務局に来てるかもしれない」

かなあ……えへへへ

けど。……それでもなかった。

ケータイで、事務局学生部就職課に連絡したけど、『真実への叡智を学ぶ』の卒業生への求人は、まったくないとのことだった。

けつきよく、そのあとも、数日間、待ったけれども、どこからも、

オファアなんか、なかった。

求人が多い講座の卒業生以外は、はやくから就職活動しとかないと、就職浪人になってしまいうらしい。

先生が就職活動を指導してくれるばあい（タカフシ先生って……、やりそうにないよな）とかも、あるらしく、そのへんは、先生

によつて、かなりちがうらしい。

エリコなんかも、じつはないしよで、就職しゅうしょくや、面接めんせつの申しこみを、はやくからしていたらしいけど、けつきよく、どこもだめだった、つてことも、わかった。ホつ…

数日すうじつ、あたしたち、いっしょうけんめい、就職活動しゅうしょくかつどうした。

「ミーシヤ、どうだった？」

「えー、ぜんぜん、だめー。

今日も、いまから面接めんせついくー」

へいぜんとしてるけど、イースは？

「ぼく？

いや、ぼくは、ゆっくりさがすよ。

ANKAと、とりあえず、いっしょにいつて、なんかの役やくに立ちたい。

そうやってくうちに、ぼちぼち、やりたいことがわかるだろうと

おもうし」

そう、就職しゅうしょくさきがあつたのは、ANKAだけだった。

もともとは、彼女も、ゆつくりするつもりだったらしい。

けど、兵学講座へいがくこうざの卒業者そつぎょうしゃは、人気がある。

毎回まいかい、多数たすうの卒業者そつぎょうしゃがいるにもかかわらず、ひく手あまたで、むしろ、足りたないくらいらしい。

やっぱ、ユーザーのほとんどがゲーム的なたのしみがしたくって、IEさんかに参加へいがくしてくるから、兵学へいがくにかぎらず、バトルとか、戦争とかにつかえる人には、いつでも、たくさんのニーズがあるらしい。

しかも、ANKAは、トップ・クラスでの卒業そつぎょうだったから。

就職しゅうしょくさきは、レオン・ドラゴ王国おうこく。

国王付属こくおうふぞくの戦争担当補佐官せんそうたんとうほさかんで、陸軍参謀りくぐんさんぼうつつー肩書かたがきらしい。スゲー。

就職しゅうしょくが決まったその日から、ANKAは、独りひとで考え、いろいろ

な計画けいかくに没頭ぼっとうし、ずっと、いそがしそうにしていた。

図書館としよかんに出かけて、なにかをしらべているときもあれば、ずっとケータイをにらんで検索けんさくし、ブックマークしたり、ダウンロードしたりしていた。あちこちに電話したり、手紙を書いたりしていると、きもあつた。

登録とうろくしたり、申請しんせいして許可きょかをとったり、パスワードを新たあらに取得しゅとくしたりしている。

絵や、図面ずめんを書いて、ケータイ・カメラで撮とって、画像がぞうデータにしておくったり、いきさきも告つげずに出かけて、なん時間も帰かえって来きなかつたりしたときもあつた。

図書館としよかんで借かりた地図ちずをひろげて、ずっと、考えているときもあつたし、ネットで地理ちりや、気候きこうをしらべていたこともあつた。

あたしは、がまんしてたけど、やっぱ、いう、

「ねえ、ANKA、あたしも、ついていっていいかな。

てか、あんたと離れる考えなんて、まるでなかったから、就職してバラバラになれて、急にいわれても、こまっちゃうよ。

それに就職自体、ぜんぜん、決まもないし、あんたの付き人で雇ってよー」

「いいわよ。」

身のまわりの世話する人や、ブレインになる人や、SP（要人警護専従警察官Security Police）を、公費で雇っていいことになってるから、そういうことにして、いっしょにいこうよ」

ANKAは、支度金として、すでに、大金をもらっていた。

「じゃ、あたし、秘書で、イースが護衛ね」

「ふふ」

そうと決まれば旅立ちのしたくを急がなくちや。

ANKAは、個人レベルの旅したくを、急きよ、キャラバンのしたくに変更した。

翌日、いそがしそうにしているあたしたちをよこ眼めでにらんでいたエリコがいった。

「あんたらさー、いったい、じぶんたちだけで、やっていけるつもりなの？」

イースは、ともかく、ユリイカなんて、なんの役やくに立つのよ。

あたまがよくて、決断力けつだんりよくや、行動力こうどうりよくがある人間がひつよーじやないかしら？」

ANKAが笑った。

「そういうやつがいれば、ひつようね」

「あーら、ずいぶんじゃん。

ANKA、あんたは、たしかに、優秀ゆうしゅうだけど、あんたにないものを、わたしは、たくさん、持ってるわ」

いらないものばかり、いっぱいな……

イースがふりむいた。

「エリコ、いっしょにいきたいのなら、すなおに、いったほうがいいよ」

「んまーっ、じょーだんじゃないわっ。

なんで、わたしがそんなこと、いわなきやいけないわけ？」

「あ、そう？」

なら、好きにしなよ。ミーシャといっしょに、どっかに旅立たびだつの？」
あたし、いってやった。

「んまー」

そういって、しばらく、ふくれっ面つらのまま、だまっていたエリコが、

「ふうーっ。

そー、ミーシャね。

ま、わたしがあいつのめんどろ見てやんなきやなんないんだけど、ミーシャがねー、どーしても、あんたらについていきたがってるの

よねー。

まー、しかたないかー。

彼女のためだもん。

わかったわ。あたしも、あんたらに、ついてってやるわよ」

ついに、そういった。

あたし、イス、ANKAは、おもわず、プツ。

エリコは、話が決まると、あわただしく旅のしたくを^{たび}はじめた。

しばらく、どたばたしているな、とおもったら、ケータイを^{かたて}片手に、

みんなにむかって、いう、

「ねー、あんたたちさー、アバターを、もう1つぐらい、つくって
おこうとか、おもわないの？」

服をつめていたミーシャが顔を^あ上げて、きく、

「えー？

どーゆーことお？」

あたしも、手を止め、

「そんなこと、できんの？」

イースが深くうなずき、

「なるほど。」

たしかに、アバターの数に制限せいげんはない」

しかし、ANKAが異議いぎを唱となえて、

「入力画面にゅうりよくがめんにもどれば、つくることができんだろうけど、新しい

アバターがここに到着とつちやくするのを、待たなくちゃいけないんじゃない

の？

それとも、このステージまで、ひっぱれるの？ わかるとおもう

けど、わたしたち、とてもじゃないけど、待ってなんかいられない
のよ」

エリコがわざとらしく、眼めをまるくした。

「えー、ANKAまで、そんなこというの？ わたしをバカにして

ない？

そのぐらい、考えてるわよ。

見て、このフリー・ソフト。『アデション・オブ・キャラクター

(Addition of character) 』ってのよ」

ANKA、笑う、

「キャラの追加？ アデション そのまんまのネーミングだねー」

「なんだっていいじゃん。

キャラ追加のアプリよ。ついか

これをつかって、独りでバンドとか、サッカー・チームとかを、ひと
つくって、うごかしているユーザーがいるのよ。

知らないのー？」

「へー、じゃ、ダウンロードしょ。URLは？」

みんな、旅たびじたくをやめて、それぞれ、アバター製作せいさくに入った。はい

「わかつてる、ミーシャ？ じゆういし 自由意志設定にしとくのよ。

あんた1人で、2人ぶんも、操作そうさできないでしょう」

「わーったあ。」

でもね、わたし、いま、なまえ、どーしよか、まよってるのー」
イースがあたまを上げた。

「おっと。」

みんなー、今日は3時になったら授与じゅよにいくつて、予定よていじゃなかったか。もう、2時半だ」

「いけない、エリコがおもしろいもん見つけるから、わすれちゃつてたわ。」

さあ、出かけよう」

ANKAの言葉で、あたしたち、出発した。

巨大きょだいな大聖堂だいせいどうは到着とうちやくしてからも、内部で歩かせる。やっと、見つ

けたアユ礼拝堂れいはいどうに入ると、四角しかくい背せの高い祭壇さいだんがあつて、下のほう

に、IYEの徴しるしがあつた。

「はやく、だれか、やんなさいよ」

「では、ぼくがやろう」

せい　しるし　そつぎようし　しょうしよ
聖なる徴に、卒業証書をあてて、かさねる。

しるし　こうせん　はつしや　そつぎようし　しょうしよ　なないろ　す
徴が光線を発射し、卒業証書を七色に透かした。

すると、それに感応したように、イースのからだから、光の文字
が泛かび上がり、しみこむように消えた。

消えたと、おもったら……

こんどは、大きな光になって、イースのからだの内がわから、い
ちどだけ強くかがやき、余韻をのこしながら、じよじよに消えてい
った。

それは、高貴な黄金の霧のようだった。

QDQ : 38

「すつごーい」

ミーシャが息を飲んだ。

「じゃ、いくわよ」

こんどは、ANKAがすすみ出た。

ぴかーつ。

QDQ : 39

うわ！ やっぱり！

みんな、つぎつぎと、じゅんばん順番にやっっていく。

EricoQDQ : 35 MeasyaQDQ : 34

あたしも、かさねた。

ひかり光があらわれると、からだがかかるく、すっきり気持ちよくなる。

なにかが、すうつとしみこんでいく。あたまがひんやりして、そうかい爽快。

あたし、眼には見えないけど、青いりゅうもん龍の紋が青白くかがやいてか

らだに入り、せい か たんでん臍下丹田に降りるのを感じた。あたしのこころの眼が

それをしずかに見つめていて、りゅうす龍が巢にもどったように、たんでん丹田にお

ちつくのを感じる。

ふと眼を上げた。

世界がひろがって感じられる。

ああ、自由だ、じゆうって腕を蒼穹に、うで あおぞらおもいつきり伸ばしたいきぶん。

なにげに QDQ を見る……

え？

なに、これ？

うそ？ うそでしょ？

だって！

1036
!/? ーーつつつつ !!

うえーーーーーーーーー！ QDQ : 1,036 !!!!!

うわあつ、ぷ、プラス 1000 かよっ……スゴスギルわ。

「す、すごいね」

さすがの ANKA も、声がうわずっていた。

エリコも、ひきつつている。なにも、いえないらしい。
(あたし

も、同じくだけど：：)

イースは、感嘆かんとんし、

「さすが、タカフシ師しの講座こうざを受けただけのことはある。それにしても、予想よそう以上だ」

「すごい、すごい」

なぜか、ミーシャは、テンションあがっておおさわぎ？　なんなんだ：：

そんな感じで、泛うかれながらも、夢ゆめみたいに、ぼんやりしながら、寮りょうまでもどった。

しばらく、大さわぎで、足が地ちに着ついていない感じだったが、やがて、現実にもどって、ふたたび、アバターづくりに専念せんねんしはじめた。

これって、こり出すと、さいげんない。まだまだ、手を入れたいきぶんが止まらなくなる。

あたしだけじゃなくて、みんなが同じような気持ちらしく、今日、ムリに完成かんせいさせないで、旅立ちの日までに、つくり上げあよう、その日になったらおたがいに見せあおう、ってことにした。

明日は、もう、出発しゅつぱつという日。ミーシャがとーとつに、いった。

「附属文書館ふぞくぶんしよかんは、どーするの？

いこうよおー」

おお、それがあつたか。

「そうだよ。わすれていた。いつてみようか」

イスがそうこたえた。

エリコがほほをふくらませ、

「じょうだんじゃないわ、こんなに寒いさむいのに！

それに、もう午後3時ごごよ、じきに、しまっちゃうわよ。『k O O』

イジってる時間なんか、とれっこないわ！」

それでも、ミーシャは、

「でもさー、エリコ、手にとって、さわれるんだよー。ちよつと、見てみよーよ」

「来たくなきや、来^こなきやいーじやん。あんただけ寮^{りよう}にいれば、いい話じやん」

あたし、いつてやった。

「みんな、いくの？」

エリコが見まわすと、一同^{いちどう}、うなづく。

「わたし、1人をのこして？　じょーだんじやないわ。いつてやるわよ。しかたないわね。クドクのために、つきそってやるよ」

そのいいかたー、ムカツクーっ！

イースがいう、

「そうそう、クドクといえは、『kOO』の原書^{げんしょ}にふれれば、それ

だけで、クドクのポイントがアップするらしい、つてきいたことがあるな」

エリコが眼を睜く。みひら

「さ、いくわよ、あんたたちって、どうして、いつも、そんなにトロいの？」

さっさと、したくしなさいよ、ミーシャっ」

あたしたちは、階下かいかに降りて、文書館ぶんしょかんへの道を舎監しゃかんから教わった。

ラクシヤは、さげすみの眼で、あたしたちを見おろす。

「なんだ、おまえたち、いまごろ、いくのか。

ほかの者ものは、みんな、とつくに、いつておる。

大聖堂だいせいどうの附属施設ふぞくしせつだ。ウパニシャッド大聖堂だいせいどうのちかくにあるに決き

まってる。

この地図ちずを見ろ。ほら、ここだ」

「なんだ、大聖堂だいせいどうのすぐちかくじゃん。あんたたち、気がつかなか

ったの？」

エリコが唇をとがらせる。おまえもだろっ！

見えなかったのは、しかたがない。どこもかしこも、高い建物ばかりで見えないんだから。

いってみると、大理石で純白の建物だった。

ごてごてした、ネオ・バロックふうの建築様式だったけど、雪との区別ができないくらいに白い。

IYEのマークが尖塔に高らかにかけられている。ファサードの黄金の上に、赤と青と緑とで、聖人をえがいたアイコンがかがやいていた。

門衛が2人、立っている。黒い鎧で身を装甲し、濃い赤のたてがみが兜に飾られていた。

ANKAが、

「入れますか」

衛兵えいへいがいう、

「だれであろうとも、こばまない」

はあ？　こばまないなら、なんで、衛兵まもが立へいしつてのよ。ま、
いいか。

エントランスの中央ちゆうおうに、巨大きよだいな天球儀てんきゆうぎがあつた。

その奥おくに、カウンターがあり、黄金おうこんの甲冑かちゆうを着きた女の司書ししよが3人
坐すわっている。兜かぶとに鳳凰ほうおうの金細工きんざいくが飾かざられていた……

「『k O O』が覧みたいんですけど」

A N K A がきく。

「どうぞ。案内あんないします」

蔵書室兼閱覧室ぞうしょしつけんえつらんしつに入った。

日が大きくかたむく時刻じこくで、黄昏たそがれの光ひかりがななめに濃こいオレンジい
ろでさし、物の陰翳いんえいがバイオリンの低音部ていおんぶの弦げんをゆつくり弓ゆみでひい
たときのような、深い闇やみをなしている。

不安ふあんにさせるコントラストだった。

本棚ほんだなが列れつをなして、たくさん、ならんでいて、迷路めいろみたいだ。ひ

ろい。穹窿型きゅうりゅうがたの天井てんじやうも高い。人影ひとかげがまったくない。

いや、1人閲覧机えつらんづくえで、頬杖ほおづえついて、羊皮紙装丁ようひしそうていの書籍しょせきに深く耽ふけっている男おとこの人がいた。

小さなふちなしメガネをかけて、とがった鼻はなが猛禽類もうきんるいっぽい感じ
で、ノーブル。髪かみがまつすぐ、肩かたの上あたりで切りそろえられてい
る。

「普蕭ふしょうさま、明日あすは、ご出発しゅつぱつですか？」

あたしたちを案内あんないする司書ししょが歩きながら、声をかける。

男へんじは、返事へんじもしない。

「あのかたは、天平普蕭あまひらふしょうさま、といって、大司教だいしきやうイタルさまのバン
ドで、ドラムをたたいていたおかたです。

IEの最も古いユーザーの1人で、RWの草創期そうそうきから、ずっとい

らしやる、とても有名なかたです。4神しじんのうちの、1人です」

エリコがいった、

「へー、わたし、そんなの、きいたことないわ。」

でも、いくらエライからって、あんななまいきな態度たいどはないんじゃない？

おまえもな……

つかつかと、普ふ蕭しょうのまえにいつて、いう、

「あんた、稲穂いなほは実みのるほど頭こうべを垂たれる、って言葉ことば、知しってる？

えらくなつた人間こしほど、腰こしがひくいもんなのよ」

それでも、普ふ蕭しょうは、顔かおを上げず、つぶやくように、

「なにもかも、脳神ニューロン細胞インパルスを走る電氣的現象でしかない。

ふ……」

そういつて、不敵ふてきな微笑びしょうを泛うかべる。

ぽかーんとするエリコ。

ふんぷんして、もどつて来た。

「やってらんないわ！ 相手にすんのもバカらしー」

しずかだ。

ほかにも、人がいるのかもしれないけど、たとえ、いたとしても、
本棚ほんだなで見えない。

高さが3階建てがいでての建物ぐらいあるから。

「これです」

司書ししよがとつぜん、足を止め、手のとどくところにある冊子さっしを、ひ
よいっと、つかみ出す。

え、それなの？ なんか威厳いげんも、重厚じゅうこうさも、もったいぶりも、な
さすぎて、そんなもんなの？

「えー、すごい」

そういつて、ミーシャが飛びつく。

「ちよっと、ミーシャ、どきなさいよ、見えないじゃないの」

エリコ、おまえはー。

「どうぞ、手にとって、ごらんになってください」

それは、ありふれた茶いろのなめし皮で装丁された冊子だった。

革のベルトがついている。

ひらくと、和紙に筆で書かれていた。

なんじゃ、こりや……

「ふーん」

みんな、反応はびみようだ。なにがありがたいんだか、わからな

い。

「では、ゆっくりごらんになってください」

そういいのこして、司書は、カウンターのほうへ、もどつていっ

た。

ゆっくりもなにも……聖なる書物がエリコの手に持たれていたのは1分ですらなかった。ミーシャの手にわたっても、その20秒後に

はANKAの手に、40秒後にはイース、55秒後に受けとったあたしは、もとの位置いに、そつともどした。

Anka QDQ : 49

Eureka QDQ : 1046

Erico QDQ : 45

Iearth QDQ : 48

Measya QDQ : 44

かんとんに、10ポイント・アップ？

これでいいのかと、おもいながらも、ここでは正しい叡智えいちこそが最重要事項さいじゅうじこうなのだと、強く再確認さいかくにんした。

翌日、朝4時。

寮りょうの部屋へやをかたづけ、来た日と同じにする。

なつかしく見えた。

もとの位置いに、もどされたベッドや、火のないさみしげな暖炉だんろや、

小さな窓まどを見て、あたし、なんだか、悲かなしい気持ちになってきた。

「なんかあ、なごりおいしいねー」

ミーシャが涙なみだぐんという。

「ばかね、なんで泣なくのよ、あんたってば」

エリコがいった。でも、あたしも……泣なきそう。

イースは、だまつてうなずくと、荷物にもつをしょって、背せをむけ、扉とびらをあける。

A N K Aが、

「さ、いこうか」

そういつて、イースにつづく。長い廊下ろうかを、あたし、歩く。

階段かいだんを下おりる。暗鬱あんうつなエントランス。玄関げんかんを出る。ふり返りかえ、雪

をかぶった古い建物を見上げた。逆光ぎやっこうにそびえ、ただ、じいっと、だまつているだけだ。

「さよなら、パルメニデス寮りょう……」

日陰ひかげの凍こった雪をふんむ。路地ろじを歩き、事務局じむきょくに出立しゅったつのとどけをしてから、門もんにむかった。大聖堂だいせいどうのまえまで来た。

巨大な聖堂きよだいは朝日せいどうを浴びて、蒼穹あさひへ、せり上がる山脈さんみやくのようにいかめしく、空そらのはんぶんをかくしている。

鐘かねがひびいた。この音声おんじやうをきくことも、もう、ない。

これがムジヨー、あたし、そうおもった。タカフシ先生、さようなら。

あいさつにいかうとしても、先生は、つぎの受講生じゅこうせいの講座こうざがあるからといって、会ってはくれなかった。

あたし、じぶんから、積極的せつきよくてきにお礼れいのあいさつにいかうなんて、殊勝しゅしょうなことを考えたのは、はじめてだった。

「やばい、あたし、おとなじゃん」

なんて、おもいつつも、泣なきたいきぶんは、ここから離はなれない。

アカデミアの門もんまで来た。

トンネルのような門^{もん}。門^{もん}をぬけると、雪が降り^ふはじめていた。しんしんと降^ふっている……

あいかわらず、無表情^{むひょうじょう}なシールド部隊^{ぶたい}ウォール。列^{れつ}を乱^{みだ}さず、凜^{りん}と立っている。

バリユースは、数人しかいなかった。そのうちの1人があたしたちを、じつと見ている。

あたし、ふり返^{かえ}った。降^ふる雪に、そびえる非情^{ひじょう}の城門^{じょうもん}。イタルのまなざしを感じた。城壁^{けい}のいろ、なにも、変わっていない。

同じように、ふり返^{かえ}っていたイースがいう、

「みじかいあいだったけど、愛着^{あいちゃく}がわいたのかな。

なんだか、さみしいね」

Act 3.

Zero
- Every

Act 3. Zero seconds experience - Everyone knows, anyone not know.

10 龍。麒麟。海馬。そして、海賊旗

エリコがあざけるように、
「ふん、どーしたのよ、あんたら、センチメンタルになつてさー。
笑わせるわねー。

未来を見なさいよー、未来をー。ねえ、ANKA」

「いいじゃない、エリコ。そういうときもあるわ、それよりさー」
「素晴らしいながら、ANKAは、指さし、

「これ、わたしのよういした馬車を見てください？ まー、馬車つ

ていつていーのか、びみょうなンだけどねー」

その言葉にうながされ、停^とまっている乗りものを見たあたしたちは、あぜんとした。な、なんなの？　こんなのあり？

A N K A が説明する。

「むかしの車を参考にしたわ。

1900年代のクラシック・カーをね。

ただ、あの当時の車は、オープンカーに折りたたみ式の幌^{ほろ}がついているような感じものが多かったけど、さすがに、ここじや寒いから、しっかり箱^{へこ}にしたわ。

それと、ほんらいなら、ボンネットがあってエンジンのおさまる車体のまえの部分^{ぎょしゃせき}を馭^{ぎょ}者席にしたわ。

バルコニーみたいなんで、わたしは、バルコニーってよぶことにしたの」

「あ、あの一、ぜんぜん、わかんないんだけど、どんな車を参考に

したの？」

でも、ほんとにふしぎなのは、そこじゃなかった……

「たとえば、」

ANKAは、いう、

「1910年型チャドウィック Chadwick とか、1909年型ホワイト White やロジエ Lozier やフォード Ford やビュイック Buick とか、1907年型トーマス Thomas とか」

きいたこともないなまえの車ばかり。いや、でも、そこじゃなく
つて……

「1905年型ピアレス Peerless とか、それから、1901年型メルセデス Mercedes とか……参考にしたのよ」

ちつとも、わからんけど、あのー、そうじゃなくって……

「フェンダー（車輪の泥^{どろ}よけ）と、サイド・ステップがつながって
いて、はばがかなりひろいでしょう？ 歩けるようになっていて、

デッキとよぶことにしてるわ。

歩く人がおっこちないように、柵もつけてあるでしょ。

フエンダーは車輪に沿って大きく山なりもり上がっているから、歩いてもいいように、ステップをつけてあるわ」

たしかに、手すりもついていて、船のデッキに見えなくもない。

たしかに、船みたいだ、てゆーか……

車体が^う泛いて……いや、^{しず}沈んでいる！

どこにつて？ ^{みち}路に！ そう、石だたみに！

車体の4分の1が^{しず}沈んでいる。うまつてるんじゃない、^{しず}沈んでいる。こういうことなのか、さいしょのうちは、わかんなかった。

よく見ると、石で舗装された路がそこだけ液体みたいになっっている！ なんじゃ、こりゃー！

ともかく、海に^う泛かんでいる船みたいな感じだった。

ほんらいなら、車の影ができるはずの部分の、^{みち}路の石が^{えきたい}液体のよ

うになっている！

車輪が蒸気船の外輪がいりんみたいに見えた。

液体状えきたいじょうになっている路面ろめんを漕ぎ出しそうに見えるし、じつさい、

そうであることがうごき出してからわかった。

けど、さらに、おどろかせるのは、この船みたいな車をひつぱる
いろんな動物だ。

見たこともない生きものだった。

「なんなの、あれ、う、馬じゃないよね、つか、先頭のは……」

龍りゅう？

「先頭につながれているのは、翼つばさのある龍りゅうだ。

應龍おうりゅうっていうのさ。

東洋とうようふうの龍りゅうって、翼つばさがないのが多いんだけど、こういう龍りゅうもい

るんだよ」

イスがそう教えてくれたあとに、エリコがまたしやしやり出る。

「應龍^{おうりゅう}については、龍^{りゅう}のなかでも位^{くらい}が低いものという説もあれば、龍^{りゅう}の最高位^{さいこうい}だ、っていう説もあるのよ。

べつの説では、龍^{りゅう}と鷲^{わし}との混血^{こんけつ}、ともいうし」

ふーん。ときどき、もの識^しりになるよな、こいつ。

「そのうしろは、なーに？」

ミーシャがきいた。1匹^{おっぴつ}の應龍^{おうりゅう}のあとには、2匹^{おっぴつ}の（2頭^{おつ}っていうべきなのかしら？）龍^{りゅう}のような、馬^{うま}のような、ふしぎな生き物が。

イスが、

「麒麟^{きりん}だ。はじめて見たな。

動物園とかにいるキリンじゃないよ。伝説上^{せいじゆう}の聖獣^{せいじゆ}さ。

龍^{りゅう}と牛^{うし}とのハーフだともいわれてる。むかしの中国^{ちゆうごく}では、麒麟^{きりん}が

世^よにあらわれることが瑞兆^{ずいちよう}（幸運^{きんうん}のしるし）だとされていた。

そして、そのうしろにいる4頭^{おつ}は、海馬^{かいば}だ」

青黒くぬれたように、つやつやとぬめり光る生き物で、上半身^{かみみ}が

馬、下半身が魚だった。その4頭は、まるで鰐いしたたみが海であるかのように、半身をちやふちやふと沈めしず、ときおり尾びれをはね上げさせている。

ちようど、この海馬かいばのまわりから馬車ろめん（つていえるのか？）の車体の周辺しゅうへんのところまで、路面が液体状えきたいじょうになっていた……

「さいしよは、ふつうに龍馬りゅうばにしようかとおもっていたんだけどね、それじゃおもしろくないんで」

「龍馬？」

龍馬りゅうばというのは、たてがみが流旗りゅうきのように長くて、ふつうのサラブレッドよりもひとまわり大きく、飛ぶように何千キロも走りつづけることができるすごい馬のことだと、イースが教えてくれた。

車体には、海賊旗ジョリーロジャー（Jolly Roger）がかかげられている。

ANKAが満足げにいった。

「お遊びよ。」

名づけてジョリー。

ぜんたいに航海こうかいをイメージしているの。海馬かいばと車のまわりを液状えきじょう化かさせて、海をわたるみたいに漕こいですすめるよう、設定してもらったのよ。

先頭の應龍おうりゅうは、独立どくりつして活動できるから、偵察ていさつなんかにもつかえるし、いざとなれば、空からの攻撃も可能なのよ。まあ、切り離はなせば、麒麟きりんも、海馬かいばも、みんな個別こべつに活動できるんだけど」

イースがきく、

「でも、この動物たちを操作そうさする馭者ぎよしゃが必要じゃないか？」

ANKAが笑って、

「なんのためにアバターをつくったとおもうの？」

見て、ジャジュよ」

どこからともなく1人のかしこそうな褐色かつしよくの髪の少年があらわれて、バルコニーぎよしやせき（馭者席）に坐り、手綱たづなをにぎる。

「彼が龍りゅうをあやつって、聖なる獣けものたちを統率とうそつするわ」

眼がきらきらしてる。あたし、おもわず、

「へー、イケメンじゃん」

エリコがまたまたしやしやり出て、

「あーら、わたしのエチカも見てよ」

すると、金髪で日焼けした、碧い眼の、背の高い筋骨隆々の少年があらわれる。剣を腰に佩いていて、革の鎧の上にマントをはおっていた。

あたし、

「ふんいき、グラディエーター（古代ローマの剣闘士）っぽいねー」

「そーよ、そーゆるコンセプトだもん。」

つつーけどさー、あんた、グラディエーターってネーミングの由来、知ってんの？

古代ローマのコロシウム（円戯場）なんかで闘う剣闘士たちがローマ軍団の武器だったグラディウスって剣をつかってたから、そお

よばれてんだよ。

ちなみに、グラディウスは刃わたり70センチくらいの両刃の剣で、
さがするどくとんがってる、とか知ってんの？」

「知らん。きょうみもない」

ほんとは、そうでもなかったんだけど。意外に歴史好きなあたし。

ミーシャもさわぎ出し、

「えー。わたしのユくんも見てー」

すごい細身で、美少年んだけど、ぜんぜん役立ちそうもない、
繊細そうな緑の瞳、白皙のきめこまやかな肌、マスカラつけて金い
ろの長い髪をした、ビジュアル系の少年が出て来た。まちっすか？

ちや、イースは？

「迦楼羅っていうんだ。」

なんでもこなせる器用なやつさ。寡黙だしね。

つきあいやすいよ」

おだやかそうだけど、眼がするどくて、表情のない、やせて冷た
そうな感じの少年だった。

つきあいやすいって、そりやあ、イースただけだお……………

「ユリイカのは、どおよ？」

あんのじよう、エリコがきいてきた。

「あたしのは、彼よ」

あたし、非録斗を指さした。

白つばいさらさらした髪に、うすい蒼い双眸、チュニックとズボ
ン、頬あてのように、青い龍の刺青が頬に彫ってあって、眼の下に
5ポイントのサイズで細緻な梵字のタトゥーを入れている。金泥い
ろで。

その梵字を七宝（金、銀、瑪瑙、赤珠、瑠璃、玻璃、蝦蛄の7つ
の宝石に由来するらしー。金・銀・瑪瑙以外は、どおゆるもんだか、
昨日まで知んなかった……ハハハ）を鏤めて飾ってみた。

どこか翳^{かげ}のある少年ふうにしあげて、なんか、いーじゃん。つて
自画自讃だお。

コウキくんなんざ、眼じゃねーぜー、つて、まだ依存^{いぞん}粘着^{ねんちやく}してる
じぶん、情けなくね？

「なんかさ、暗くねーか？」

ケチつけんじゃねーよ、エリコ。

で、あたしは、もちろん、シカト。

「さあ、さあ」

A N K Aがみんなをうながし、

「まだ説明したいことがあるから、荷物をうしろのトランクにつん
で。そして、なかに入って」

車体のうしろにまわった。

後部に大きな革製^{かわせい}のトランク・ケースが固定されており、荷物を
入れる。最後にイースが荷物を入れた。

「あれ？」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない……」

イースは、トランク・ケースをしめた。

「あ、見て、きれいなね。金いろぴかぴかのランプがつるしてあるー。

すごいよー」

見上げてミーシャがいう。イースも気をとりなおしたようにうなずき、

「美しいね。漆塗^{うるしぬ}りみたいにつやがある」

ANKAがステップに片足をのせながら、ふりむいて、

「あ、そう、そう、軽量^{けいりょう}自家発電機^{じかはつでんき}があつて、パソコン使用可だから」

あたし、おどろいた。

「ネットつながるの？」

「ここをどこだとおもってる？」

あ、そうそう、ユリイカ、冷暖房れいだんぼうつきだからさ、携帯用カイロもトランクにしまっているよ」

門の外では、たくさんの人たちが出立しゅったつしようとしていた。

すでに隊列たいれつをととのえて、道を下っていく人たちもいる。たぶん、もう見えないくらい、とおくへいつている人たちもいるんだろう。

まだアカデミアのなかで寝ぼけまなこのまま、旅じたくさえ終えてない人たちもいるんだろうし……なんて考えてみる。

留年りゅうねん（いや、学年じゃないから、留年りゅうねんとはいわないよな？）し

て、アカデミアにまだ数日（数週間か？）のこる者だっているだろうし、あたしたちよりあとに来た人たちは、ふつうに寮りょうで、まだ寝ているだろうし……。

「ねー、あれ見て、ジンよ」

ミーシャがいう。

あたしは、ミーシャの指さしたほうを見た。

ほんとだ。

あたし、ANKAをふり返り、

「彼女、どこに就職しゅうしょくすんのかな」

「あら、わたしたちと同じよ。レオン・ドラゴ。

精鋭部隊せいえいぶたいの指揮官しきかんだってきいたわ」

「ANKA、そーゆーことわ、はやく教えてよー、あたしたち、いつしよなわけ？」

「べつにこまらないでしょ？　なんではやく教えてほしかったのよ？」

「もー」

ジンたちは、例の5人組で、あたしたちの右50メートルくらいのところにいた。

みんな、さまざまな彫りほりもので飾かざられた鞄かぶ、大剣さやを佩はいて、旅用たびよう

のかるい装甲そうこうをしている。

あたしもこの3週間あまりのあいだに、彼女たちのなまえと顔をおぼえた。

褐色かつしよくの肌、いつも鋼はがねの装甲そうこうを脱ぬがない、長身ちようしんで長く黒い髪がストレートストリートのアンジェラ。

色白いろじろで青く深いまなざしに、血いろの唇をした、気味わるい微笑ほほえみのメアリー (Bloody Mary)。

髪かみを突き立ててクサリのネックレス、やせ細ほそったからだに革かわジャン、瞳孔どうこうが紅あかいイヴィラ・ヴィシヤス。

青白あおじろい顔に、いつも半ばとじたような眼つきで、どこを見ているかわからない魔女のようなエピタフィラ。

背の高い5人の女の子軍団は、大きな鳥に乗っていた。太くて長い2本の脚あしで歩くが、ダチョウウではない。

つか、恐竜きょうりゅうっぽい。

トゲのついた長い尻尾^{しっぽ}あるし。翼^{つばさ}には、とがった5本の爪^{つめ}がついている。

馬のようにいなくなきながら、その翼^{つばさ}をひろげると、右のはしから左のはしまで、5メートルくらいあった。飛べそうだ。あたし、おもう、

「なんだお、あれ。見たことないよ、鳥？」

エリコが、

「たぶん、オリジナルじゃない？ だいたい、神話・伝説やファンタジーを参考^{さんこう}につくるもんだけど、どこからもイメージを借り^かないで、じぶんたちのアイデアだけでつくるやつもいるからねー。そおゆうんじゃない？」

そーいわれて、あたしは、ちと感心した。

「へえー、こったことするんだねー。

んーなアプリがあるんだあ」

そして、ジンたちのかたわらには、龍馬りゅうばに乗った重装騎兵じゅうそうきへいが10人
ついていた。騎兵きへい全員が鉄てつの鎧よろいで全身をおおっていかついけど、女
かもしれない。従者じゅうしやも全員、女の子だけにするとかって、彼女たち
なら、やりそうな気がするし。まあ、からだつき見ると、男まちが
いなしだけど……

こっちに気がついていいのか、気づいてないのか。見むきもしな
い。ムシ！って感じだった。

「やあ、出発かい、ANKA」

あたしたち、いっせいに、声のほうをふりむく。

「あ、ヨセフ？」

まるで知りあいであるかのように、あたしがこたえてしまった。

なんとなく気まずくて、あたし、ANKAのほうを見る。

ANKAは、気にとめてなくて、ふつうにヨセフのほうを見てい
た。ホッ。

彼は、バイクに乗っていた。

馬の鞍くらみたいな革製かわせいのシートで、ボディ全体が戦闘用に装甲そうこうされている。フロント・フォークが長くて、前輪ぜんりんがかなりまえのほうにあつた。

ハンドルは山羊やぎの角つのみたいに大げさに湾曲わんきよくしている。

車高がすごく低くて地を擦するような感じだ。燃料タンクは筋肉のようにもり上がっていた。

エンジンから出たエグゾースト・マニホールドが流線りゅうせんをえがきながら美しくからみあい、太い排気音はいきおんをとどろかせている。

座席ざせきの後部に荷物が山づみになっていて、ちようどいい背もたれになっている。

見かけによらずワイルドなのね☆ ANKAがかるく微笑ほほえんでか
らいう、

「シルヴィエの戦略顧問せんりやくこもんになったんだってね」

「ああ。だが、モスコール駐在軍勤務さ」
ちゆうざいぐんきんむ

「モスコール？」

「ああ。ユヴィンゴ王国の首都だ」
しゅと

帝国の傀儡政権（他国にあやつられ、実権をもたない政権）がある国さ。

神聖シルヴィエ帝国に完全にあやつられていることは、国民のだけれども知っている。だが、どうにもならない。

あつとうてき
圧倒的な軍事力の差があるからな」

「けど、レジスタンスがいるってきいてるわ。

いつまでも傀儡政権のままではいけないでしょう」
かいらいせいけん

じつさい、隣国のクアバでは、革命家のファルコが軍事政権をた
りんこく かくめいか ぐんじせいけん

おして革命に成功してるわ」
かくめい

民衆に支持される正義が勝つのがI Eの鉄則のはずよ」
みんしゅう しじ てつそく

負けたドミゴ政権の中枢にいた者たちは、しばらくI Eには、
せいけん ちゅうすう

ENTERでなくなっているはずよ」

「クアバの件をいうなら、革命政権の命運は時間の問題さ、とおこう。」

いまだに剣や弓、せいぜい、大砲をつかって戦争するぐらいがやつとの彼らが、自動照準装置のついた砲台を持つ装甲戦車や、50キロメートルの飛距離を持つミサイルや、雲の上を飛翔する戦闘機に敵うとおもうかい」

「ふしぎね。」

I Eで兵器が発達しなかったのは、それなりの理由があるのよ。知識がなかったわけじゃないくらいわかるでしょ。

ここにいる人間は、だれでも現代兵器のことを知っている。パソコンやケータイをつかって、ここまで来るんだから、とうぜんでしょう。

知ってはいても、だれも開発しなかった。

大量殺戮兵器など開発したら、この世界では、不利になるからよ。

ここでは、勝つために、最も必須のアイテムは『正義』だったわ。

ただ現実的に勝てばいいのだという、なりふりかまわない考えでは、クドクが減じて、むしろ、命とりだった。

シルヴィエとほかの国とで、科学の発達のレベルに差があるのは、とうぜんよね。

どこの国も、そんなことをしようとは、夢にもおもわなかったからよ。

なぜシルヴィエのような国が世界の覇権をねらえる超大国に成長できたのか、意味がわかんないわ」

「さあね。

どっちにしろ、贅沢になれた坊ちゃん育ちの、高貴な生まれの僕には、きょうみがないな。

ただ最もすすんだものの、最もすぐれたものの、最も高度で強く美し

く、新しいものに関心があるだけだ」

「ふうーん。」

勝ち組のところに行ったってつまないんじゃないかなー」

「そうでもないさ。」

進化することが人類の命題^{めいだい}だから。よりすすんだもの、すぐれたもの、高度で強く美しいものにこころ惹かれて、とうぜんさ。

じゃあ、急ぐから、これでお別れだ。

さあ、出発しよう」

彼は、もう1台のバイクと装甲車^{そうこうしゃ}とに分乗^{ぶんじよう}しているなかま4人に声をかけると、エグゾースト・ノートをひびかせ、タイヤをスピンさせながら車体をまわし、立ち去る。

装甲車は大きな径^{けい}のタイヤがボディの四隅^{よすみ}ギリギリに着いていて、車高が高く、人の乗る箱の部分は平べったくて、まよこから見ると、腹のへこんだ獐^{どう}猛^{もう}な獣^{どう}みたいだった。

「さあ、わたしたちもいこうか」

沈黙ちんもくのあと、ANKAは、微笑ほほえんでいった。けど、眼がちょーき

びしー。

んで、ジンたちも、いつのまにかいなくなっていた。あたしたちも旅立たなくっちゃ!!

ジョリーに乗ると、良さがすぐにわかった。

そうこうろ

えきじょう

おうとつ

走行路を液状にしてしまうから、地面の凹凸が乗り心地にまった

く影響しない。海みたいな波があるわけでもないし、ラクで気持ちよい。

おうりゅう

ジャジュがバルコニーで應龍を中心に麒麟きりんや海馬かいばをあやつった。

かいば

海馬は、海面をゆくクジラカイルカのように、上下にうねりなが

ら黒いからだを黒光りさせてすすむ。

きりん

麒麟は、かろらかに地を蹴る。

おうりゅう

應龍は、すいすいと泳ぐ蛇のように、宙に泛ういてすすむ。

迦楼羅^{かるら}がジャジュのとなりに坐る。

そのわきに、見はりのようにイースが剣を突いて立つた。

あたしの非録斗^{ひろと}は、エリコのエチカといっしよに、ジョリーの後背部を見はるために、トランク・ケースのおかれている後部デッキにいる。

んー、冒険^{ぼうけん}にいくふんいき満載^{まんさい}だあー。おー。

あれ？ 彼女は、どこ？

ANKAは、カーテンでしきった奥の小書斎^{しょうしよさい}（ほんと小さいよ。だって、このジョリーのなかにあんだもん）で、なにか研究中だった。

ちなみに、エリコとミーシャとは、いま、ラグジュアリーな休憩^{きゆうけい}室^{しつ}にいる。

そこは、繻子^{しゆす}のクッションのある、本草ばりのソファシート、木目の美しいマホガニー、真鍮^{しんちゆうせい}製のランプに照らされ、シルクのカー

テン、小さなタペストリー、壁龕へきがんふうの棚たながあつて、コーヒーカットとか、クリスタルグラスとかがおさまつてゐる。

ン、リラックスできそう。

安らぐには最高かも知んない。

けど、休憩きゆうけいタイムの意味わかつてんのかよ、ミーシャ、キッチンでなにかはじめてる。そう、台所つきなんだよね。

しかも、シャワーも水洗すいせんトイレもある！ これで冒険、つていえるかつて感じなんだけど。まあ、ラクだし。（笑）

繊細せんさいというか、たよりない感じのユウは、ミーシャのそばで彼女の作業を手つだっている？ ようだった。

はあ。

で、あたしは、なにしているかつてゆーと、あたしたちのまわりを映し出うつしているディスプレイをにらみ、周囲しゅういの状況を監視かんししている。

あたしがいるのは、操縦席コックピットとよばれるスペースで、位置情報いちじょうほうをもとに、ジョリーの周囲しゅういに敵がいなかったか監視かんしする場所ばしょなんだけど、ジョリーの操縦そうじゅうはバルコニーの人がするので、コックピットついていくなまえが的確てきかくかというところでもない。

きつと、もともとのコンセプトは、周囲しゅういの情報をもとに、進路しんろや速度を決定する司令塔しれいとう的な役割やくわりをする場所ばしょだったんだろうなっけもう。

ただ、あたしとかに、その能力がないから、いまは、ただ、周囲しゅういの状況を監視かんしするだけにとどまっている……みたい。

けど、これで敵を見おとしたら、あたしの責任？ でもさー、そんな危険あるのかなー？ ムダな仕事してる気がするなー。

ちなみに、この映像はナビゲーションもかねていた。

だから、もし道をまちがえそうになったら、右にいったとか、左だよねとか、あたしがいわなくちゃいけない。

あたしたちは、コックピットや小書斎や休憩室やキッチンやシャワーやトイレや倉庫など、ジョリーの居住スペース全体をキャビンとよんだ。船の客室キャビンにたとえたつてこと。

きこう
気候は荒れて、吹雪ふぶきだった。

まるで、あたしたちがイデア山を下りるのがゆるせないみたい。

来たときとは逆に、絶壁ぜつぺきのミゾみたな道を下りていく。あいかわらず暗い。あたし、ぼうつとした、空想的な気分になって、独りの世界に入っていた。

だいたい、乗りものに乗るとものおもいにふけてしまうことが多い。

しかも、監視画面かんしがめんを見ても、なあんにもないしー。

はあ。

あたし、通学でバスに乗ってたときをおもい出した。

山を下り終わると、じかに吹雪ふぶきにさらされる。いくさきもよく見

えない。

さつきまで、あたしたちのまえにいた馬車も、見えなくなっていた。いきさがそれぞれにちがうから、あたりまえなだけ……

ここからさきは、来たときは、ちがう道をいくことになる。

いよいよなんだ、とリアルにおもった。

「あれ？」

どこからだろ、はげしく鐘かねが鳴っているのがきこえた気がした。

いや、きこえる。吹雪ふぶきのせいできこえにくいけど、きこえている。

もちろん、アカデミアにちがいない。ほかにない。

ディスプレイを見る。

「え？」

重装甲じゅうそうこうの騎士たちがせまって来ていた。

「ANKA、たいへん。これ、なに？」

エリコとミーシャがあたしのほうをむく。カーテンをめくって、

A N K A が出て来た。

「どうしたのよ」

「見て」

外で鐘かねの音をきいたイスも入ってきて、

「どうしたんだろう。きこえるかい？ いったい、あの鐘かねの音は」

A N K A が顔をしかめ、

「なんだろう。アカデミアの最強戦闘士、重装機甲騎兵じゅうそうきこうきへいだ。

まるで、なにかを追っているかのように疾駆しゅくしている」

そのときだ。

底ひびきする大声がとどろく。

「待て、そこのふらち者、待つんだ。

待たんと、悲鳴ひめいを上げるひまもなく、殺すぞ！」

5 人とも顔を見あわせた。エリコがヒステリーぎみに、

「どういうこと？ ふらちって、わたしたちのことをいつてるの？」

イースが冷静れいせいにいう、

「ともかく停とめよう。ぼくらに、なにもあやまちはないはずだ」

A N K Aもうなずき、

「そうだね。きつと、なにか誤解ごかいだ。わたしが出るよ」

「ぼくもいく」

停とめた。

あたしたちは、窓から外を見る。

A N K Aとイースが外を歩く。

非情な鋼鉄製の装甲を身にとつて、大きな楯たてに腕をおし、ま

っ黒な長い槍やりを、あたしたちにむかって突き立てている、からだの

大きい12騎きの騎兵隊きへいたい。

息が湯気ゆげになり、けわしい形相ぎようやうでこつちをにらんでいるのが、鉄
の兜かぶとや頬ほほあてごしにもわかる。

なんでよー？ こわいよー。

A N K A がたずねる、

「いったい、どうしたんですか。なぜ、わたしたちをよび止めたのですか？」

1 騎^きがすすみでる。

「とうぜんだ。しらばつくれるな、ふらち者！」

さあ、返すんだ」

イースが問う、

「なにをでしょうか？」

大音^{だいいおんじょう}声をひびきわたらせ、

「決まっておろうが！」

きさまらが文書館から盗んで持ち出した『k O O』だ！」

ええーっ！ そんなばかな！ ひどいぬれぎぬだわ！

A N K A は、さらに1歩すすみ、

「わたしたちは、そんなことはしていません」

「いや、少し、待つ……」

イースがそういいかけたとき、重装機甲騎兵たちがいっせいに大剣を鞘さやからぬいて、斬きりかかってきた。あたし、ジョリーを飛び出した。

「うわあ！」

ANKAがころがつてよける。眼に止まらぬはやさでイースが攻撃をかわしながら、大剣をぬく。

剣の長さは彼女の背丈せたけを超え、刀身とうしんのはばのいちばんひろいところ彼女の腰のはばくらいなのに、すばやくぬく神技。

イースは、剣の平たい腹ひらのところでたたき、6、7人の甲冑かっちゅうを破は損そんさせた。

ふつうの兵士なら、これで昏倒こんとうしたにちがいない……

強靱きょうじんな兵たちは、すぐに起き上がった。

「しかたない」

そういうと、こんどは、刃やいばをむけてぶあつい鉄鋼てつこうの鎧よろいごと腕うでや脚あし
ふかでに深手を負わせはじめる。

かるやかに重力を無視して、地に足をつけることなく、枝から枝へ飛ぶ鳥のように、つぎつぎ斬り裂く。アカデミア最強の精鋭である重装機甲騎兵がなすすべもなく、止まっているかのように見えた。

じゅうそうきこうきへい

いったい、イスよりも強い人間っているんだろうか。

でも、あのメタルハートに殺されたことがあるっていつていたけど……

重装機甲騎兵たちは、たおれて意識を失い、うごけなくなる。

「力が入りすぎたな。手ごわい相手だったから、かげんがでなかつた。」

しやべることが出来るやつをのこしておきたかったが」
 そういいながらも、イースは、（へいせい）平静だった。

ようやく立ち上がったANKAは、

「なぜだ。」

説明をきこうとしなかった。あきらかにおかしい」

エリコとミーシャも出て来る。

「どうということなのよ！」

エリコは、ヒステリーぎみだった。

「わからない……」

ANKAがつぶやくようにこたえたとき、イースが、

「いや、わからなくもないかもしれない。」

これを見てください」

トランク・ケースをあけた。

ジョリーの後部、あたしたちの荷物が入った皮革ひかくケースだ。

「ぼくが荷物を入れるとき、この箱をふしぎにおもったんだ」

イースがとり出したのは、桐きりの箱だった。毛筆もうひつの箱書はこがきがある。

いつのまに!? ふしぎにおもってとうぜんだ。あたしたちのうちで

こんな箱をつかう人は、だれもない。

「そうだとおもった。あけてみよう」

あけた。なかにあったものの、それは、ひかくそうていぼん皮革装丁本の『k O O』だった！　ありえねーっ！

「なんでよ、なんで、これがここにあるの？　ありえないでしょっ！　これ、ちよーやばいよっ！」

エリコがさけぶ。

さすがのANKAもがくぜん愕然としてる。

「わたしが荷物入れたときにはなかったわ。どうして……」

ANKAがいった。

「わたしもよーっ！」

すかさずエリコがいう。ミーシャもいった。あたしだって同じく見ていない。

イースがいった、

「では、見たのは、ぼくだけなんだ」

あたし、青ざめた。だって……

「でもさ……、文書館で最後にさわったの、あたしだよね？」

エリコがいきなりあたしをにらみ、

「あんた、なにしたの？」

「ざけんなよ、あたしじゃないよ」

イスがあいだに入り、

「わかつてる。」

ユリイカじゃありえない」

ANKAもうなずき、

「そうよ。しんぱいしないわ、ユリイカ、わたしたち、信じあわなく
ちゃ。」

だれかが荷物を入れるときそばにいなかった？」

「だれもわたしたちのあいだに入りこまなかったよー」

ミーシャがいったので、あたしも、

「たしかにそーだよ、あたしも知ってる……」

って、あたしもいった。ANKAも眉根まゆねを寄せ、

「たしかに理不尽りふじんだ。

こんなことができるのは」

「運営アドミニストレーターサイドよ、管理者 (Administrator) ー」

エリコが声を上げた。

「いや、管理者は、人じゃなくて、プログラムで動く中枢ちゆうすうシステムだ。

こんかいのことはどう考えても人為的だ。バーチャル・システムのプログラムをいじったのであれば、運営者（作者とそのなかま）だろう」

イスがそういい、「いずれにせよ、シレオーノ行で、きみたちにつきまとったバリエースの行動も、ウィルス・チェック以外の

意味におもえてくる」

A N K A、

「でも、なんで……」

あたし、

「つてか、これから、どーしたらいいの、それ考えよー」

エリコ、

「そーだよ、ユリイカのいうとおりだよ。」

『現実以外の真実はない。そしてつねに選択せんたくをせまる。』（聖者イサの

伝記…クレモントス・グレゴルゴン著）『つてゆーじゃん』

イースが反論し、

「いや、どうしてこうなったかもわからずに、つぎになにをするかは、決められないよ」

A N K Aがうなずく、

「そうだよ。これが、いったい、なにを意味するのか……」

ミーシャがいった、

「返さなくていいの？」

ANKAは、はっとした。しかし、また考えこみ、

「ミーシャのいつていることが、いちばんシンプルで強い正論だわ。

でも、わたしたちは、なんの弁明べんめいもゆるされず、処刑しよけいされる」

イースが、

「どうしてこうなったかわからず、考えるいとまらない……

ANKA、こういうばあい、ストレートな正論せいろんでいくべきだよ。

クレームを出すんだ」

「そうよ！」 エリコが急に活気かつきづく。「そうすべきだわ。わたし

も、ずっとおもっていたのよ。

でも、どこへいったらいいの。いったん、ログアウトするとかい

わないでよ」

イースが冷静れいせいに、

「むろん、管理局 (Administration) だ。

各大陸に、いくつか設置されている。

それが敵だとしても、まずは、そこへいくしかない」

ANKAは、もうケータイで検索けんさくしていた。そして、いう、

「とおくない。

アカデミアの領域内りょういきないにあるわ。いってみるべきね」

あたしもなんか興奮してきて、

「よし！ いこうよ。

あたしたち、わるくないんだっていおうよ」

さあ、出発よ、ってふんいきになったところで、エリコが、

「ちよっと待って」

といって、意識を失ってる重装機甲騎兵じゅうそうきこうきへいのふところから、つぎつ

ぎケータイをとり出し、ふんで粉碎ふんさいする。

「これでアカデミアへの連絡がおくれるわ。ねー、あんたたち、も

つとさー、したたかになるーよ」

そーゆーところ、ほんと、すっかりしてるよなー。

管理局の位置いをナビで確認かくにんし、出発した。

ふぶき吹雪はあいかわらずだ。ディスプレイを見ながら、

「右の道をいって」

あたしは、ケータイで外にいるイースとジャジュとにつたえる。

「あやしい影は見えないか」

イースがそうたずねた。

「ないよ、だいじょーぶ……のようにおもわれる……みたい」

いわれると、よけいに緊張する。あたしたちには、リアルに危険があるんだ……

ホンキで気をつけなくちゃいけない。いつまたつぎの追手おってが来るか、わからない。

「アカデミアの追手おってが来るまで、かなり時間があるはずよ。

おちついてよ、ユリイカ」

ANKAは、そーゆーけど……

アカデミアをとおく離はなれても、草木くさきのない、岩ばかりの山岳さんかくがつづいていた。

左右をけわしい山にはさまれてる。岩が迫せまってくるようなせまい道だ。

ジャジュも應龍おうりゆうも麒麟きりんも海馬かいばも降りつもる雪で白くなっている。それでも、イースは、微動びどうだにしない。迦楼羅かるらもだ。どんな気持ちなんだろか、こんな状況で寒さのきびしい外にいるのって。

「吹雪ふぶきひどいね」

そういいながら、ANKAがあたしのわきに来て坐り、

「敵のことは、ともかく、少なくとも道をはずれていないか、しっかり位置いちかくにん確認かくにんしていて」

「はずれようにも、ほかに道ないじゃん。て、わかったよ、だいじ

ようぶだよ」

といいつつ、ほんとな、と自問自答。じもんじどう

そろそろ、交替こうたいなんだけど、ミーシャにこの仕事できるのかなー。

っっておもつてると、おいしそうなおいが。あれ？

「おやつ、できたよー」

昼飯もまだなんですけど？ まぢ、こいつ、やれんのか？

あたしは、ホットケーキをムシヤムシヤしながら、ディスプレイ
見る。

「ユリイカ、食べるのに夢中になりすぎて、監視かんしをおこたらないで
ね。こんな場所で襲おそわれたらたまらないから。

とくに、上から攻撃されたらね」

あたし、おもわず窓から切り立つ左右の岩壁を見上げた。た、た
しかに………

ANKAが笑う、

「さあ、画面になにも映ってなきや、心配いらないんだから。青い顔しないで」

でも、じつは、気になっているものがあつた。

「ねえ、見て、ANKA、これ。

毛皮で着ぶくれた人たちが雪の穴から出入りしてるみたい。

ほら。

で、この人は、岩の上に登ってる」

「山賊さんぞくね。

こんなのは、放置しておこうよ。来たら撃退げきたいするまで」

ハイマツか、低い灌木かんぼくが目立ちはじめてきた。

さらに下ると、ダケカンバ（岳樺）らしきものが雪になかばおおわれて立っている。木が増えてくると、なんとなく安心する？

あ、シラカンバ（白樺）だとおもった瞬間、まわりは森だった。

トウヒ（唐檜）とか、樹皮じゅひが暗褐あんかつで鱗状うろこじょうのカラマツ（唐松）、ト

ドマツ（榎松）、黒褐こっかつでなめらかなややあわいいろのエゾマツ（蝦夷松）とかの針葉樹しんようじゆにかこまれている。

でも、道はまだまだ下り坂だった。

イースが雪をはらいおとしながら、入ってきた。

「ふう、こごえたよ。ひどいもんだ。ふうつ。

そろそろ、休憩きゆうけいにしないか。ホットケーキじゃ、おなかもあたたまらないし」

あたしたちは、ジョリーを停とめて昼食にすることにした。

とりにく
鶏肉スープがあたたまるまで、ミルクたつぷりのコーヒーを飲だんしょうんで談笑。

ANKAとジャジュとが外で、ジョリーの前後に立って見はりをしている。

あたしも、いちおう、ディスプレイをよこ眼で見てる。異常いじようなし、と。ん、あれ？

小さなディスプレイのひとつに、なんかバリユースに似た人が見えたような気がした。森のなか、雪に吹かれて立って……でも、そんなことって……。

それは、すぐに見えなくなった。消えていた。やっぱ、錯覚か。おびえすぎてシのかなー。

食べ終わると、ANKAたちと交替して、あたしと非録斗ひろとが外に立つことに……

外に出たとたん、びゅーっ！ さぶっ！ きゃあつ、イースとか、よくいられたわ、まち。

アカデミアの古着屋で買った極寒地仕様きよくかんちしょうの軍用コート着たけど、たまんない。眼もよくあけられないし。

非録斗ひろとは、あたしを見た。

「だいじょうぶかい、ユリイカ」

きやー、やさしいのね。じぶんのつくったじぶんのためのアバタ

ーって、最高。

あたしは、ANKAから借りた剣を持って立つ。はやくどこかで剣を買わなくっちゃ！ どんなのがーかなあ？ やっぱ、かわゆいやつ？ あー、寒い。

30分くらいがんばって、ANKAから、

「さあ、出発しよう。ユリイカは、ミーシャと交替こうたいだから、乗って休んで」

たすかったあ。

デッキに上がって、コックピットに入る。そこから、休憩室きゅうけいしつへいくために仕切りの幕まく（緞帳どんちよう）？ これ1枚あると、温度がちがう）をひく。室内で、エリコがケータイをいじっている。

「もー、寝すぎちゃってさー、眠くないんだよー」

んなこと、きいてねーだろ。第一なー、だれも休憩中きゅうけいちゆうは寝なくっちゃいけないって、いってないし。

あたしは、なにもこたえず、なかに入る。

後部座席には、やわらかくてプリーツの入った白い革かわばりソファ。

四角いクッションがたくさんおかれている。繻子しゅすばりで4つのすみ

に房飾ふさかざりがついていた。

窓の外を見ると、森の樹木のなかに、モミやシラビソの木がまざ

って、鬱蒼うつそうとした感じになっている。

あたし、よこたわった。

「疲れたから、こっちは寝るよ」

「かつてにどうぞ。じゃましないから」

ほんとに眠い：：朝から緊張してたし。おなか、いっぱいだし。

すぐ眠りにおちた。夢を見ていたとおもう。どういう夢かおぼえてないけど、夢を見ていた。まあ、ここでのことも夢みたいなものだけ。

眼をあけてみた。眼が覚める。

眼が覚めても、なんにもわかんない。なあんにもわかんないでいることに気がつき、つぎに暗いことに気がつき、ジョリーのなかにいるじぶんに気がついた。気がつくのに、数秒かかっていたことにも気がつく。

リアルがよみがえり、現実のストーリーにつながった。

あたしは、ユリイカ。ここは、I E。そうか。

……ああ、ほんとに、そーなんだ。

さいしよに、そうおもった。

なにをどうおもったかは、言葉でうまく説明できない。すべては、こころ、想い、感覚、意識でしかない？ つーことかな？

暗さが深くなっている。たぶん、夕方……雪降りだから、はつきりしないけど、暗さがちがう。

からだがだるくて重い。

エリコは、すでにいなくて、ミーシャがスヤスヤ。

でも、ここは、なれ親^{した}しんだ寮^{りよう}じゃない。アカデミアのことをおもい出す。

タカフシ先生、まち意味^{イミ}不^フで、変わった人だった。

なんか、笑^えみがこぼれる……ふふ。

急に、ジョリーが止まった。

ジャングルの怪鳥^{かいちょう}のような甲^{かん}高いさけび？

もしかして、應龍^{おうりゅう}？

それにつづく低いいなきと唸^{うな}り。それが海馬^{かいば}だとすれば、戦^{いくさ}いを告^つげるラッパのような鳴き声は、麒麟^{きりん}？

なに？ なにごと？

ぶあつい緞帳^{どんちょう}をひいて、あたし、エリコにきく、

「ねえ、どうしたのよっ？」

「わかんないねーよ、イースが止まれって」

あたしは、窓の外に目を凝^こらした。

吹雪のなか、夕闇ゆうやみの暗さにつもった雪がぼんやり泛うかんでいる。

ぶあつい防寒着すがたの9人の男がかすかに見えていた。こちらにむかつて来る、ゆつくり歩きながら。

雪をふむ足音が風や應龍おうちりゆうや麒麟きりんや海馬かいばの鳴き声のあいまにきこえていた。

「エリコ、あんた、監視かんししていて気がつかなかったの？」

「失礼ね！　こんなやつら、映ってなかったよ」

A N K Aが入ってきていう、

「山賊さんぞくだよ。

たぶん、旅人が来るのを、じっと待ちぶせしていたんだろう。かくれていたのだから、気がつかなかったのもムリない。

ともかく、イースと男の子たちにまかせよう」

イースと迦楼羅かるらは、すでにバルコニーぎよしやせき（馭者席）から降りていた。

A N K Aが窓から顔を出し、うしろにむかつてさげぶ、

「エチカ、非録斗、持ち場をはなれないで、そっちは、たのんだよ」

男たちのうち1人が首をのばしてこちらを見る。

「へー、ガキばかりみてえーだな。」

おとなしく銭や食いものをよこしな。へへ」

「クドクがなくなる。」

やめておけ」

イスは、まったくへいぜんとした顔で、そういい放った。

もう1人が顔をしかめ、

「へっ。クドクだ？ そんなものがなんの役に立つ？」

「ばかな。」

ここは、IEだ。そんなことも知らないのか」

背の高いやせた男が笑い出す。

「とバカが申しております。ひやはあ、あひやひやひや。お疲れー。」

この世にあるのは、ただ俺がいて、俺が剣をにぎってる、ってい

う現実だけさね。それ以上でも、それ以下でもないわ」

イスが冷厳れいげんにいう、

「やはりそうか。」

そのように感じつづけてはいたが……

ふ。

きさまらは、すでに人間ではない。きさまらになんのえんりよもするひつようがないわけだ」

「ぬあわあぬいーい？　くわつ、ほぎくなや。」

いつくでえ、やろーども」

3人の男がイスに、それ以外の3人が迦楼羅かるらに、鞘さやから剣をぬいて襲おそいかかる。

のこりの3人がこつちにむかってくる。そのうち1人は、應龍おつりゆうの爪つめにとらえられて、ひき裂さかれた。あと2人がせまって来る。

「あー、あー、あつあつ、来るよ、なんとかしなさいよ」

エリコが声を上げると同時に、ANKAがレイピア（刺剣）をぬく。

イスにむかった3人の山賊は、ほとんど同時に斃れた。首が落ちた者、あたまからたてに裂かれて、からだがふたつになった者、タスキ掛けに斬られた者、悲惨。

イスは、大剣を眼に見えないはやさでたくみに縦横にひるがえした。

迦楼羅も1人を斃すが、2人相手に苦戦。

イスが迦楼羅の助太刀に入る。

ANKAが外へ降りた。1人の山賊がつぎつぎとふり下す剣をたくみによける。またよける。よけながら、突きのチャンスをねらっている。

もう1人がデッキに上がってきた。背の高いやせた男だ。扉をあけて入って来る。

「おお、ほお、あつたけーや。外とは大ちがいだあり、ひやひや。

ぬへへへ、お嬢さんがたばかりじゃーん。ほによお。ひやひゅひや、でっへっへっへ」

エリコがぶちギレてさけぶ、

「なんなのよ、あんた！

ルール違反^{いはん}だわ。大人の男のくせに女の子に暴力ふるうの、最低だわ。

あたまおかしいんじゃないのっ、出ていけよっ」

ほんとだよ。バカな男。そんなこと^{そんな}しても損^{そん}するだけだよ。

こんなムナシイことしてなんの^{なんの}かいがあるの……

「うぜーや、ブサイクが」

「な、なんですってー、ちょームカつくっ、だれが不細工^{ぶさいく}よー」

「へっ、いいから、殺されたくないや、^{ぜに}銭と食いもんよこせや。

おらあ、この剣が見えねーか。この現実をどーにもできねーだろ

ーが。

これで、なん人もぶち殺して来たんだぜえー。命乞い^{いのちがい}してヒイヒイいうやつらをよー。女やこどもだって容赦^{ようしや}しねーや。

おめーらの命乞い^{いのちがい}なんざ、一文にもならねーってな」

「ひどい、命乞い^{いのちがい}する者を殺すなんて」

あたし、怒りがこみ上げた。

「じょうだんじゃねー、命乞い^{いのちがい}がなんだってんだ。腹の足しにもならねーや。へっ。

俺は、リアリストなのさ。この剣を見ろや、これがリアルだ」
やいば
刃のはばがひろい、大きな剣を見せびらかす。

リアリストだって？　ばかばかしすぎ。

「そんなのリアルじゃない。

そんなもん、なんのあてにもならない。

シヨギョーはムジヨーなのよ」

あたし、いった。

「はあっ？」

あたまおかしいのは、この嬢ちゃんじょうちゃんのほうじゃねーか？

あへ、あへ、あへへ？」

「そんなこと、いつていいの？

あたしは、青龍せいりゅうの称号しょうごうを持つ者なのよ。

ムジョーあなどを侮あなどったわね」

あたし、これまで青龍せいりゅうの称号しょうごうを意識した記憶はないけど、なぜか、

その言葉ことばが出た。称号しょうごうの意味もわかってないのに……

「ムジョー？」

無常むじょうのコトくわ？」

あたしは、あわれみのまなざしで彼を見た。ほんと、わかってない。あわれだよね。

人は、おもうかもしれない、正義をまもることなんか意味がない

んだ、って。じっさい、どんなにいいことをしたって報^{むく}われないし、不幸や病氣や死は善人にも悪人にも平等に来る。だから、むなしいんだ、って……

正義をまもることは、ムナシイの？

そのこたえは、イクシュヴァーン学長が基本講座ではつきり教えた。ムナシクはない。真の生命があるって！

むしろ、ムジョーなのに、私利私欲^{しりしよく}のために正義をやぶるのはムナシすぎる。

そんな人は、いらない。ひつようない。

少なくとも、このIEには、あわない。

IEが排斥^{はいせき}するはずの人。

願^せわくば、青龍^{せいりゅう}の叡智^{えいち}が、この男にムジョーをさとらせることが

できますように。なぜならば、そうすることが義^{ただ}しいから。義^{ただ}しい

なら、実現^{じっげん}して。

せめて、ここ、IEでは。

あたしのなかの青龍せいりゅうがうごいた。

叡智えいちがあたしのあたまのてっぺんに、天啓てんけいの光のように、舞い降

りて来た。てっぺんから喉のどをとり、胸にたっして、強く光った。

強く光ると、白熱はくねつし、白い光の炎となり、熱くミゾオチをつたわっ

て、臍せいかたんでん下丹田へとつながる。

そうだったんだ。そうだよ。わかった。わかったよ。すごいよ。

これって、なんなの？

わかるって、こんな感じだったんだ。こんなにすごいことだったんだ。

あたし、生まれてはじめて、わかるということを経験した気がした。

すごい、リアル。

あたし、眼のまえの男をあらためてにらんだ。

そうよ。そうだわ。

このおろかな男は、ほろぼされるべき。おろかさは罪だからだ。おろかさって、勉強できないとかじゃない。うまく説明ができないけど、そーゆうんじゃないかって……。だって、あたしだって、勉強、ぜんぜん、できないし。

『ムジョー』を念じてつぶやいた。あたし、意識することもなく、日常茶飯事にちじょうさはんじであるかのように、その神咒マントラをとなえていた。

「へっ？」

男が異変いへんに気がついて、顔に手をあてる。

「えっ？ えっ？」

男の心臓の鼓動こどうが力を弱める。あたしには、あきらかにわかった。

「はあつ、はあつ、く、苦し」

皮が腐敗ふはいし、肉がただれていく。

「え、ええつ、なんだ、なんだよ、これっ！」

恐怖にみちて眼を見ひらき、男は、あたしをまじまじと見つめなおした。

「おまえか、おまえがこれをやってるのか」

「そうかもね」

あたしがこれを起こしてる？ ぜんぜん、ちがうわ。ほおんとに、わかってない。

「すぐやめろ、さもないと」

「さもないと、なに？ つか、あんたに、なにができるの？ やりたいなら、好きにやれば？ はい、どうぞ。

あんたは、みずかのぞ自ら望んでほろんでいるのよ。あたしのせいじゃないわ」

男の肉がくさって骨からおちる。恐怖と苦痛で、その形相がすさまじくなる。きょうしやう

「やめろ、もう止めてくれ。これじゃ、死んじやう、まじありえね

―

「そうなの？ そんなこというの？ あんたが！」

あたし、涙があふれてきた。

「じゃあ、あんたは、いままで、あんたに命乞いいのちごをした人をたすけて上げたの？

あんたが殺してきた人間は、だれも命乞いいのちごをしなかったとでもいうつもりなの？

あんたは、『殺さないでください』って懇願こんがんした、罪のない女やこどもや、かわいそうな人たちを、たとえ、いちどでもいいから、殺さないで上げてあげたことがあったの？

あんた自身がしてもいいことを、どうしてあんたがしてもらえらるとおもってんの？

わかる？ それがおろかさなのよ。

たすけるのって、ムリ」

男は、必死^{ひっし}であたしにすがろうとした。

「お願いだ、お願いだっ！」

ご慈悲^{じひ}をつ、ゆるしてください、た、たすけてください、死んじやう、これじゃ死んじやうつ、あは、ああああーつ、つあ！　つあ！　うぎやあ、うぎや、あがががが、ごぼつ、ごぼつ、ぐひ、ぐぎやあああああああ！

つうぐひ！」

バラバラにくずれて、風に吹かれる砂のように、夜明けの霧^{きり}のように、消えてしまった。

11 ムジョー

エリコは、凍^こりついたように、ひきつって口もきけなかった。

いつのまにか、敵^{てき}をぜんぶたおして入って来ていたANKAやイ

イスも言葉をうしなっている。

ぜんぜん、あたりまえのこととして、これを受けいれてるじぶん
が、まちふしぎ。

テレ笑いするしかなくね？　だよな？

「やっちやったお」

「ウソでしょ、あんたがやったんじゃないでしょ？」

エリコがわれに返ってさけぶ。

「ウソっていわれても……まあ、あたしがやったんじゃないんだ
けど……」

「どっちよ！」

「いったい、彼になにが起こったんだ」

イスがつぶやくようにいった。

あたし、説明できない。

「だから、シヨギョーはムジョーだから、そのとおりになったのよ、

ちよつと、はやいスピードで」

ANKAが理解りかいしがたいってゆう表情で、

「けど、どうやって」

「他力本願たつきほんがん……かな？」

「なんなのよ、意味いみ不ふだわ」

わめくエリコ。

「んー、説明できねーし」

イスが微笑びくしょうし、

「ともかく、かたづけよう。」

ムジョーか。

凄いすごい技だ。タカフシ師の講座を卒業しただけのことはある。もし

かしたら、この技は史上最強しじょうさいききょうかもしれない。

諸行無常しよぎようむじようというくらいだ。なに者もうち勝つことはできない」

あたしもそんな気がする……

「ユリイカが史上最強……」

エリコは、そういつて、ショックを受けたような顔をした。

「なかよくしよーな。ユリイカ」

「なんなんだ、エリコ、あんたつて」

こんなときも、ミーシャは、まだ奥ですやすや眠りつづけている。

賊どもがドタドタ入ったせいで、雪でよごれた部屋を少し掃除す

ることにした。ミーシャがやつと起きる。掃除しながら、ANKA

が、

「けど、わたしは、確信したよ。」

ぜつたい、おかしい。

キャラ的に山賊をたのしむことはあっても、ほんとにひどいこん

なことが、このIEでゆるされるはずがない。

システムが正常にうごいていない」

イスもうなずく、

「ぼくも気がついていた。アカデミアにむかうとちゅうでオークに襲おそわれたときも、きみたちに、そういったとおもうけど。」

なるほど、システム異常いじようか……」

けど、ANKAが眉をしかめる。

「そうおもいたいんだけど、それなら、修正しゅうせいプログラムが自動的に起動きどうしなければおかしい」

エリコがわざとらしく、大袈裟おおげさに腕をくむ。

「だとすると、あれしかないわねー」

「あれって？　なーに？」

「ミーシャ、あんたねー、少しは考えろ、つーの」

「あたしもわかんないけど？」

わざと、そういつてやった。イスがエリコに同調どうちようし、

「そうだね。このばあい、考えられるこたえは」

エリコが味方をえて得意げに、

「ウイルスよね」

「ウイルスうーっ？ あんだけバリユースがウザくかぎまわっているのに！」

あたし、おもわず声上げちゃったけど、ANKAがため息とともに同意し、

「でも、ウイルスってのが、いちばん妥当なアンサーね、残念なから。」

ここのセキュリティはかんぺきだっておもってたけど、まあ、これだけ人気サイトになっちゃうと、やっぱりだめなのね。

どうして人間って集まるとロクなことをしないのかしら。

人がともによりよく生きていくのって、ほんと、むずかしいわ」「たしかにそうだね。ともかくも、ウイルスに感染してるとなると、しまつがわるいな。」

居場所を特定して駆除するか、隔離するかしないと、どんどん、

ひどくなつていく」

イスも表情が暗くなる。

沈黙。
ちんもく

ANKAが手をたたいた。

「ごめんね。いま、ここで考えこんでもしょうがないわ。

とりあえず、わたしたちは、管理局かんりきょくにいく。まずは、そこからク

リアしようよ。

できることから、かたづけよう」

森の道をいく。どこまでも下り坂だった。

雪の質が変わっていた。人がうまるほど深い。

木々は高くなり、密度みつどをさらに増してきていた。

オオカミの遠吠えとおほにまじって、気味のわるい吠え声ほもきこえる。

なにかがひき裂けるさような甲高い声かんだかと、気味のわるい哄笑こうしょうのような

声が。

「こんな場所じゃ、とても停車^{ていしや}して就寝^{しゅうしん}、ってわけにいかないわ。1時間^{きゆうけい}ごとの休憩^{きゆうけい}以外は休みなくいくしかない。ともかくはやくこの森をぬけよう。いいかな？

じゃ、さっそく徹夜^{てつや}ね」

ANKAがそういった。

食事は運^{うん}行^{こう}しながら、ミーシャがユユといっしょにつくることになった。交替^{こうたい}で休憩^{きゆうけい}時に食^きべる。

あたしは、またデイスプレイをにらむ役にもどった。

夜の監視^{かんし}であつても、解析^{かいせき}画像^{がぞう}で、まるで昼間^{ひるま}のようによく見える。

オオカミの遠吠^{とおほ}えのすがたも見たし、オークが集団^{いどう}で移動^{いどう}しているらしいのも見える。

ゴブリンが略奪^{りやくだつ}品^{しん}らしきものを奪^ういあっている。なかまわれか？

オークより3倍くらい大きな、人型の怪物がしゃがんで、鹿しかをむしりながら食べているのも見た。

さっきの山賊さんぞくとはちがう山賊さんぞくが火をかこんで酒盛さかもりしているのも見た。その山賊さんぞくたちは、山賊さんぞくの衣装いしょうを着ているけれど、どれも化け物のようなキャラで、人間の顔かたちをしている者は、1人もいなかった。

幽霊のようなキャラもいた。ぼんやり光って、浮遊ふゆうしている。表情あおものない蒼い顔で独りひと、森をさまよっている。

いろんな趣味の人がいるんだなおもう。

ときどき夜空を、大きな鐘かねの音声おんじょうのような不思議な音がひびきわたった。それがなんなのかわからない。

馬うまのからだと口の裂けたオオカミの顔、鷲わしのような爪つめを持っている人喰い馬ひとくの群れむが、ライトに照らされた夜の海の魚のように、幻想げんそう的に光りながら去りゆくのも見た。

深夜、エリコと交替こうたいした。

休憩きゅうけいルームに入ると、ミーシャが寝てる。

あたしは、ミーシャのつくったシチューをなめた。

ひろと 非録斗は、まだ應龍おうりゆうに乗って前方ぜんぽうを警戒けいかいしている。馭者ぎよしや席せきでは、

ジャジュが手綱たづなをにぎっているはずだ。エチカは、男子用休憩室きゆうけいしつ（倉庫そうこ）で寝てる。

窓を見れば、ランプに照らされた吹雪ふぶきの雪粒ゆきつぶが、瞬間的にあらわれては夜の闇に消え去っていく。ものすごいはやさで。

あのユユがイースといっしょにキャビン後部に立ってるかとおもうと、心配になる。

ANKAもジャジュのとなりで、剣を持って立ってるはずだった。

迦楼羅かるらが入ってきた。あいかわらず無関心むかんしんっぽい無表情。

「おつかれー。シチューあるよ。食べる？」

って、あたし。

「ありがとうございます。じぶんでやります」

鍋なべからすくって皿もに盛る。

「ユリイカ。」

急に变なことをきくけど……。

卒業しゅうぎふのときに、称号しょうごうをもらいませんでしたか？」

「え？」

もらったよー」

「どんな称号しょうごうですか？」

「青龍せいりゅう——う」

迦楼羅かるらの眼が少し大きくひらいてから、眉まゆがわずかにしかめられた。

「龍りゅうの称号しょうごうだ。」

知ってますか、叡智学えいちがくはアカデミアの、いや、IEのなかでは最も意義いぎのある、最も現実的な、最高の学問です」

「知ってるよ」

「叡えいちがく智学の最高位にたつた人、最高の叡えいち智にたつた人をパーリとよびます」

「へー」

「その次は、グル。タカフシ師は、グルです」

「知らなかった！ すごーい」

「そして順に、龍りゅう、天てん、ラハン、サットウヴァ、ヴァドゥン、となつています」

「で、あたしのは、その次くらい？

って、ンな、エラくはないか」

あたし、笑った。迦か楼る羅は、また顔をかすかにしかめた。

「龍りゅうです。」

青龍せいりゅうは龍りゅうです。

あなたの位階いかいは第3位です。タカフシ師の次ですよ」

あたし、意味がわかんなかった。一瞬、意識が止まっちゃった。

ぶち氣絶？　で、正氣にもどって、

「うつそーお。まち？　ありえねーよっ」

「事実です。

大きな力がつかえる人は、龍りゅうの位くらい以上の人だときいていました。

だから、称号しょうごうをうかがったんです。

さつきイースとも、その話をしていたんですよ」

そんなバカな……信じらんねーよお……なんか、怖い。

いい終わると、迦楼羅かるらは、黙々もくもくとシチューをすすった。冷さめてん

なー。あたし、シヨックなんだけど……

ま、寝るか。

「えっ、なによ、これ？」

エリコのさけびがきこえた。あたし、仕切りしきの幕まくをひく。

「どうしたのよ！」

「これ、見て」

「あっ！」

黒い鎧よろいに身をかためた騎馬隊きばたいがちかづいていた。5騎きいる。

「黒いから気がつかなかったのね」

ANKAが入ってきていった。

「そーよ、さすがのわたしもちかづくまで気がつかなかったわー」

……またかー、こいつの見おとし。

「スピードがちがう。まもなく追いつかれるな。停とまってむかえ撃うつたほうがいいね」

ジョリーを停とめると、レイピアを持ったANKAと金剛杵ヴァジュラを手にした迦楼羅かるらが外に出た。

ANKAがイースたちにむかっていう、

「戦いの準備よっ！」

あたしは、デイスプレイのモードをきりかえて、ジョリーの周囲

360 度が見られる画面にする。

すでに、あたしたちは、かこまれていた。非録斗ひろとがブロード・ソードをにぎって應龍おうりゅうから降りる。休憩室きゅうけいしつからエチカもグラディウスを片手に外へ出ていた。

黒騎士くろきしたちは、なにもいわずに、いつせいに斬りきかかってくる。兜かぶとで顔は見えない。雪を蹴けちらす音さえ立てない。

後部でイースとユユが闘っているが、ユユって、ほとんど足手あしでまとい。

側面でエチカが応戦していたが、かなり苦戦している。

前面で迦楼羅かるらとジャジュが闘っているが、ジャジュは、すぐに剣をたたきおとされた。

イースが後部の2人の剣を折りお、たおした。たぶん、アカデミアの重装機甲騎兵じゅうそうきこうきへいで後悔こうかいしているせいかな、あまり重傷じゅうしょうを負わせていない。見ていて、それがわかった。

ANKAとユユがたおれた2人に剣を突きつける。

「抵抗するな、おとなしくしろ」
ていこう

イースは、すばやく移動。エチカの敵の剣をたたきおとし、ふみくだき、剣で兜かぶとの上をはたいてたおす。そのあいだに、エチカは、ジャジュの応援おうえんにまわる。イースもすぐに前面にむかい、迦楼羅かるらの敵を剣の柄頭つかがしらでうち、昏倒こんどうさせる。

勝つかに見えた。

しかし、ジャジュと闘っていた黒騎士くろきしは、エチカもジャジュもなぎたおし、イースと剣をまじえた。その大剣は漆塗りうるしぬのように黒光くろびかりしていて、こまかい魔法文字が彫ほられ、それが黄金おうごんいろに燃えかがやいている。兜かぶとには血のようにぬれた感じの緋ひいろの小さな羽飾はねかざりがついていた。

強っ！

信じられない。イースが相手の剣を受けきれずに、剣をおとし、

蹴^けりたおされた！

黒騎士^{くろきし}がとどめを刺そうと大剣をふりかぶる！

あたし、『ムジョー』をつぶやいた。あたしもイースをみならつて、剣にだけ意識を集中する。

黒い大剣が粉雪^{こなゆき}のようになって、吹雪^{ふぶき}のなかに舞いちって消えた。

「ううつ、これがムジョーか！」

黒騎士^{くろきし}がかすれる小声でうめいた。

そのとき、とつぜん巨体の黒騎士^{くろきし}が10人あらわれ、関^{とぎ}の声を上げた。ああつ、とおもわず、あたしたちが気をとられたすきに、さいしよにエチカと闘っていた黒騎士^{くろきし}がとつぜん立ち上がり、ANKAとユウをはらいのけて、トランク・ケースをあけて、『k O O』を手につかみ、かかげ、

「とつたぞ！」

それをきいて羽飾^{はねかざ}りの黒騎士^{くろきし}が口笛^{くちぶえ}を2度鳴らす。

たおれた黒騎士^{くろきし}たちも立ち上がって馬に乗り、巨軀^{きよく}の黒騎士^{くろきし}とも
に、あつというまに去ってしまった。

「イース、だいじょうぶか」

A N K A がイースをたすけおこす。

「ああ、たいしたことはないよ」

エリコが、

「いったい、なに者なの？ アカデミアの騎士^{きし}には見えなかったわ」

「奥が深いな」

そうつぶやくイース。

エリコがA N K A にきく、

「どうする？ 追う？ 敵は、ムジョーを怖れてるわ」

あたしはべつのことが気になって、

「そう。」

でも、なんで知ってるんだろー」

エリコもうなずき、

「やっぱり管理者かんりしやか、運営サイドってこと？」

A N K A が結論し、

「どっちかっていうと、運営者サイドだね。でも、わからない。さあ、いこう。どうせ、やつらを追っても、追いつけないし。起こったことのありのままを、管理局かんりきよくでうったえよう」

イースも賛成し、

「履歴ログ (Data log) の開示請求かいじせいききゅうをしよう。

どうして『k O O』がトランクにあったか、はつきりする」

エリコが腕ぐみし、

「うーん。開示かいじしてくれるかしら。運営サイドが敵だとしたら」

ミーシャが反論、

「ウイルスとはかんけーあるのかなー？」

A N K A がむずかしい顔をし、

「それも、わからないな」

あたし、

「管理者と、運営者って、どーちがうの？」

「管理者は、運営中枢システムだけど、運営者は、それを監督する人間なんだよ。つまり、作者か、そのなかまってわけ。

こんかいの聖典略奪^{りやくだつ}は意図的な人間の行為だ。ウイルスにやられたシステムじゃない。

敵は、人間だ。運営がわにいる人間か、さもなければ作者がおかしくなったか、だ」

エリコ、

「わたしも、ウイルスと聖典略奪^{りやくだつ}がべつとおもえないなー。

なんだかつながってる感じするよね。

でもさー、作者や運営がわの人間がウイルスをはこぶって、おかしい。だって、彼らなら、プログラム変えればいいだけの話だもん

ね。ウイルス侵入じゃなくっていいはずよねー。

外部者だとすれば、ハッカーか……」

イスがいった、

「そうか、ウイルスと聖典略奪りやくだつが同じ黒幕だとすれば、ハッカーしかないってことになるんだな。

まったく理解できないよ。せつかくの理想の世界が、現実となにも変わらない世界になってしまう」

ANKAが、

「現実か……

ジンみたいな強さがすべてのやつには、むしろ、ちょうどいいんだろうけどね」

あたし、もう1つ気になることがあって、

「ねー、それでおもいだしたんだけど、あの黒騎士くろきしのなかで1人だけ気になったンだけど」

エリコがあたしをにらみ、

「なによ」

A N K A もいう、

「わたしもよ。あの黒騎士^{くろきし}、ジンのような気がした」

イースがきびしい表情で、

「彼女の太刀^{たち}すじは、ぼくには、はっきりとわかる。

まちがいない、十中八九、ジン・メタルハートだった」

一瞬、だれもがだまった。

エリコがいう、

「それは、彼女も承知^{しょうち}の上よね。つまり、太刀^{たち}すじで正体がバレる

」とは

A N K A ふたたび決然^{けつぜん}と、

「だったら、深追^{ふかお}いしなくて、なおさら、よかったわ」

そうだ。どんなワナがあるかわからない。でも、あたし、シヨツ

クだった。

ジンって、イースよりも強いんだ！

エリコは、あたしたち1人ひとりの顔を見ながら、

「ってかさー、わたしたちの居場所とか、行動ってさー、かんぺきにバレてくない？」

：：たしかにそうだわ。イースも考えこみ、

「そうだな。もし敵が運営がわだと、ログが閲覧えつらんされている可能性がある。そうだとすれば、どこにかくれたって見つかる。

うつ手はないが、正規せいぎのルートからは外れよう。もしかしたら、少しはましかもしれない。

効果があるうが、なからうが、最善をつくすしかない。

ほかにどんな選択肢せんたくしもない」

そういい切った。

あたしたちは、雪と岩だらけで道のない、氷雪ひょうせつの樹木じゅもくのあいだを

すすむことになった。路面ろめんの状態に影響されない乗りものなので、苦勞くろうは少なかった。岩があるうが、くぼみがあるうが、なめらかに通過する。

ただし、そういうところは、少々上下にうごくので、連続すると、波の荒れた海をわたるみたいな感じに、ちよつと酔う（笑）。おえつぷ。

馭者ぎしやは、迦楼羅かるら。

ジャジュが剣をかかえて、そのとなりに坐る。

エチカと非録斗ひろとは、男子休憩室で休んでいる。

ユユとミーシャが食事のしたく。

エリコは、食事中。

ANKAがディスプレイをにらんですすむべき方向を検討けんとうしつつ、周囲の状況を監視かんしする。

あたしも、休憩きゅうけいの時間じかんだったが、眠れなかったので、サンドイツ

ちつまみながら、ANKAのとなりに坐って、見ていた。

イスは、独りでうしろのデッキに立って警戒^{けいかい}していたが、急にキャビンにもどって来て、

「なにかがぼくたちを追いかけているようだ。なにかがついてきている」

「なにかって、なによ！」

って、あたし。

「わからない。」

雪を蹴^けちらす音や、息づかいがきこえるような気がするんだ。

かすかで、ほとんど実体^{じったい}のない、けはいだけの存在みたいな感じ
なんだけど」

ANKAがディスプレイをさらによく見る。

「なにも見えないわ。夜でも光の不足を補正^{ほせい}するから、暗いせいで見えないんじゃないわ。」

なに者だろう」

「怖いよー、A N K A。」

だってー、音も立てず、すがたも見せず、このスピードのついて
来られるのって、なに者？ ゆうれい 幽霊？」

イースは、ふたたび外へ、

「ともかく背後の警戒けいかいをつづける。それしかないようだ」

怖くないの、この人？ 恐怖も怒りも哀しみもなく、たん
たんとなすべきことをなす人だ、イースって……

A N K Aがエリコを起こす。

「わるいけど、ジャジュと交替こうたいしてくれない。

で、ユリイカは、ディスプレイ見てて。あたしもイースのところ
へいくわ。

さあ、ユユ、エチカを起こして。

ジャジュとエチカには、左右のデッキにいつでもらうわ」

緊張きんちようして、画面をにらみつづけた。なにも起こらなかった。

しだいに疲れてくる。緊張きんちようがゆるむ。からだはポカポカしてるし。

「うわっ」

迦楼羅かるらのその声で眼がさめた。

ディスプレイを見ると、應龍おうりゆうが止まっている！ あたし、いつの

まにか、寝ちゃっていた。や、やばーい、やっちゃったよー。

すでに夜は明けていた。雪はやんで、黄金の朝日がかがやいていた。

キャビンの外に立っていたエリコがさげふ、

「なによ、いったい、どーしたのよ!？」

あつ、ちよー怖えー」

あたしもあわてて外に出た。

「ごめーん、寝ちゃったおー」

風もやんでいた。日射ひざしのせいで雪がすごくまぶしい。

せまくて深く切りこんだ谷のまえにいた。

迦楼羅かるらがいう、

「あぶなかったよ。気がつかなかった。

ずーっと、木や岩だらけのせまい場所だったのに、とつぜんひらけた！まぶしいっ！っておもったら、こんな場所だったんだ」

谷のむこう、正面は切り立った山で、1キロメートルくらい離れはなている。垂直すいちよくにそそり立つ絶壁ぜつぺき。

あたしもジョリーを降りて谷底をたにぞこのぞきこむ。ゾツとした！眼がくらしそうだ。

イースは、淡々たんたんと、

「ぼくたちは、ずっとつけられていたし、いまはかこまれている。しかし、これまでのふんいきからおもうに、襲おそわれる可能性は低いだろう。

彼らは、おそらくIEの『眼』だ。ぼくらの位置いちを報告してるん

だ。

だから、彼らに襲おそわれないうってても、このままじゃだめだ。彼らをまこう。飛ぶしかないよ。

ジョリーの4か所をロープでむすんで、應龍おうりゆうの首と腰からつるして飛ばばいい。

4頭の海馬かいばは同じように、2頭の麒麟きりんにつるす。

さあ、エチカ、ジャジュ、迦楼羅かるら、ユユ、非録斗ひろと、手つだつてくれ。

まず、ロープを出そう。みんなでやれば、5分とかからない」

ANKAが手を翳かざして日射ひざしをさけながら、むかいの山頂さんちようをあおぎ見て、

「それがベストだね。

飛ぶほうがはいし。

管理局はその眼のまえの断崖絶壁だんがいぜつぺきの山をいくつか越えて、そのさ

きにある山の頂……のはずよ」
いただき

いいんだけど、怖くない？　って、やっぱりおもったとおりで、
「やばい、やべー、ちよつ、ちよーやばいよつ、うわつ、うわつ、
うわああああーっ！　エリコ、なにすんのよつ、あぶないっ」
「うざいつ、わ、おちるつ、うぎやああーっ、うぎやああーっ、
うぎやああーっ、うぎやああーっ、ユリイカ、あんた、どきな
さいよーっ」

「わあー、すごい、すごい」

「ミーシャ、窓から顔出さないで、しっかりつかまってなさい！」
「ぎやーぎやーぎやー」　「こわいよ、こわいよ、こわいよーっ！」

ってなことになった。だって、ゆれる、ゆれる！　はやいし！

ようやく、断崖絶壁だんがいぜつぺきまで着くと、岩棚いわだなを見つけて着地ちやくちし、こんど

は、その垂直の岩壁を登りはじめた。應龍おうりゆうと麒麟きりんは駆けるように垂すい

直ちよくに飛び、海馬かいばは絶壁を液状化して滝を登るようにながっていく。

いいんだけど、ジョリーのなかのあたしたちは、たいへんなことに。前部の壁にぶら下がったり、後背部こうはいぶの内壁うちかべに坐ったりだ。デッキにいたイースは、キャビンの外壁がいへきに坐ってるし。

頂上までいくと、つぎの山があらわれ、その山も断崖絶壁だんがいぜつぺき。こんどは、その絶壁ぜつぺきへ、飛ぶ。そのくりかえしだ。

山をいくつ越えたの？ 2、3じゃない。なんかANKAのいいかただと、2つ、3つ越えればいいみたいな感じだったけど？

眼もくらむような高さの峰みねと峰みねとのあいだを、すれすれに飛ぶ。

雪と岩しかないのがった山は威圧的いあつてきだった。青黒く深く光つていて、きびしい。

山脈さんみやくをすすむうちに、山がどんどん高くなる。もう、雲なんて、はるか下の下だ。

すさまじい高さの山いちぐんの一群のまえに来た。

そのうち1つが異様いような高さで、成層圏を越えて、宇宙にまでとど

きそうだった。

「北大陸^{ノルデ}の最高峰カム・イ・アレスヲ山だ。^{さいこうほう}

管理局はあの頂上にあるらしい」

こうしてあたしたち、着地^{ちやくち}した。

エリコもまつ蒼^{さお}になっているし。なんで、ミーシャって、たのし
そうなわけ？ ジェットコースターじゃないっつーの！

舢^{へびき}に剣を立てて、ゆうぜんと立っていたイースって、ハンパじや
ない。

雪はない。寒さは凍^{いて}てつく寒さ。風もない。

管理局とおもわれる建物は……………

ふぞろいな自然の石を、てきとーにつみ上げたものの上に、藁^{わら}や
茅^{かや}を葺いた（つか、かぶせた？）だけの粗末、てゆーか、原始的な
家。

なんだ、こりやあ。

ありえねーだろ？

こんな家じゃ、寒くて、とてもここじゃ生きていられないような
気がするけど、気のせい？

『I E 異議申立受付所』

風雪？に朽ちたふうの木製の看板がぶら下がった建物のまえに、

あたしたち、立つ。しずかすぎる。人気はない。空気が純粹、てゆ
ーか、すごく希薄だ。

そもそも異議を申し立てる人の便宜をもうちよつと考えたほうが
よくない？ こんなところにあるって、とうてい、受けつける気が
あるとおもえない。

「ごめんください」

ANKAがいった。

いびつで、ゆがんで、ガタガタの扉があつた。

しずかにあく。だれもないのに……

「いこうか」

A N K Aが歩み、すすむ。

なかに入る。

がらん、としてる。

古びた質素な木の床。暖炉には香りのよい木が燃えている。毛皮

の敷物はなん百年もまえから、ふまれつづけたように、いろあせて

くたびれている。

奥には葦を編んだ簾があった。

意外に、まともだ……………

中央に机があり、羽ペンが立っている。羊皮紙が1枚おかれてい

た。

「異議申立書だ」

A N K Aが手にとって、いった。

「これに書けばいいんだな」

イースがペンを手にながら、そういう。

「待て！　そして、希望せよ」

すだれ
簾をめぐって人が出て来た。

「え？」

「いくら言葉を綴つづつても、インクと羊の皮でしかない。精神がそれをささえて実存じっぞんとなる。約束やくそくごとをまもうとする人々がいなければ、無味乾燥むみかんそうな、物的ぶつてきなものではない。

なにを書こうが、一昨日おとといのタブロイド紙どうぜん（笑）」

あらわれたのは、まかふしぎな男だった。

大きくハデなカフスのついた水いろの縐サテン子地じで、ひざたけの口

ング・ミリタリー・コートを着ている。

カフスは螺鈿らでんのボタンでとめられ、レースの飾かざりをひるがえす。

肩飾かたかざり、房飾ふさかざり、金の飾かざりひもで満艦飾まんかんしよく。黒い帽子ぼうしはウィザードハ

ット。山（クラウン）が高くたって鰐つば（ブリム）がひろい。しか

もクラウンはとちゅうで折れてたおれている。

片眼鏡モノクルをかけ、腕時計にブライトリング [CHRONOMAT BOI ミラージ
ユレッド／ゴールド・インデックス]、口髭顎鬚頬髯くちひげあごひげほおひげを伸ばし、ヘソに
とどくくらい長い……

スキニーなジーンズをはいてて、マッチ棒ぼうみたいな脚あしがさらに棒ぼう
つぽい。けど、リーバイスのデニムは16オンスのヘビーなやつ。蛇へび
皮かわのロング・ブーツが型くずれしすぎて、むかしのルーズ・ソックス
みたいになってる。

キャラバッシュ・パイプ「キャラバッシュ（南アフリカ産ヒョウタン）
をボディにし、タバコを入れるボウルにメシヤム（海泡石かいほうせき）をつかったも
の」を片手に持つてる。

「ふ。

さあさあ、はやくここを去りなさい。

一瞬も止まってはならない。一刻の猶予ゆうよもならん。

IEの特別高等警察がせまっているから。異議をとなくても、ム
ダだ。力のまえに、すべてがむなしい。色即是空だ。

力は、ただ力であって、いつさいの正しい考えもなく、ほしいもの
を力で奪い、弱き者をふみにじり、優しき者をだましておとし
れ、欲望のままに手をひろげ、つかみ、とり入れ、吸収し、大
きくなる。

ふ。

なんの根拠も、理由も、意味も、正義もない。

ただ、なにもない、ネヴァーモア―

「シヨギョー、ムジヨード」

あたしがこたえた。彼は、愉快そうにあたしをながめた。

「青龍のユリイカだね。」

きみには、窮極的な問題解決の糸口となる奥義を、いまのうちに

あたえておこう。

なに、むずかしいことではない。だれもが知っていて、それゆえ、だれにも知りえないことだ。

小生は、それをこ^{あら}ういい表^{あら}わす」

ジーンズのポケットから^{ブルース} Blues ^{ハーブ} Harpをとり出し、両手でくるむようにつかみ、唇に強くあてて^{ほほ} 頬をふくらませ、^{はんおんさ} 半音下がってちよつとミュー^{ぶつ}トしたような、^{きんぞくてき} 金属的な、^{かんそう} 乾燥した、^{しきさい} 色彩のない、^{そく} 即物^{ぶつ}な音^{サウンド}を出す。

手でつかめそうだ。

「つてことさ。これが『k O O』の真^{しんずい}髓^{ずい}だ」

「あなたにそんなこと、いいきる資格^{しかく}があるの？ それはタカフシ先生^{はつげん}クラスか、それ以上の人の発^{はつげん}言^{げん}よ。

だいたい、『k O O』の真^{しんずい}髓^{ずい}つて、なによ」

「いま、きみがきいた^{ハーブ} Harpのなす^{きんぞくへん}金属片^{きんぞくへん}のふるえさ。

それ以上でも、それ以下でもない。『k O O』は、

和綴冊子本、粘土板、羊皮紙、皮革装丁上製本、岩壁彫、
卷子本、蒔絵、象嵌、貝多羅葉（椰子の葉の綴）、竹簡、

かな料紙ちらしがき etc、

つてことさ」

「どーゆーいみ？」

「『k O O』は本（*a book*）なのさ」

「『k O O』わ、本なの？ そりゃー、ホンでしようケド」

「書いてある内容じゃないってことだ。」

内容が正解でも誤謬でも、真実でも虚仮でも、是でも非でも、同じだ。

同じであろうが、ちがつていようが、同じだからだ。だから、ちがうでも、いいんだ。同じだ。考概はカラカラに乾いたトカゲの皮膚だからだ。

つまり、ただ、本（*a book*）なのさ。

どこにでもある、ただの *book* だ。

それが『k O O』の卓越性だ」
たくえつ

「……あ、あのさー。

まあ、いいや。なんだか、なんとかってゆーお坊さんとお弟子さんの会話みたい」

「同じじゃない。

だが、ちがうと同じは同じだ。だから、同じといってもいい。わかりにくいか。

いや、わかるはずがない。わからなくて正解だ。

誤謬は正解なのさ（笑）。

だから、だれでもわかっている。すなわち……

理解できないもの、最もカンケイなさそうなものが、ハマるであらう」

「あなたは、なに者？」

エリコがきいた。

「小生か！」

おお、小生は、RWから委嘱いしよくされた監視委員かんしいいいんの任にんにある者。

サイト内で不適正ふてきせいなことがおこなわれていないか、監視かんしするのが
役わりにてそーろー」

イースがすすみ出て、

「ならば、IEのこの現状げんじょうを調査てきはつして摘発てきはつし、しかるべき措置そちをと
るべきでは？」

「さよう、IEは作者の意図いとにそぐわないウイルスに感染かんせんしている。
作者もウイルスをさがしている」

「リアル・ウイルス……さがしても、見つからないのか。作者もさが
せない。どうしたらいいんでしょうか？」

ANKAがそういった。

「きみたちは、ウイルスの存在そんざいに気がついた者、眼ざめた者だ。多

くの者たちは、罰がなくなつたので、つぎつぎと罪をおかすようになった。なんという愚劣ぐれつさか。

きみたちにとくべつな権限けんげんをあたえよう。

IEの運営中うんえいちゆうすう枢は、ウイルスにおかされている。ふつうに考えれば、ハッカーによる干渉だとおもわれるが、そうすると、きみたちがいつどこにいても見つかるのが、おかしい。

それは、管理者システムか、運営者でなくてはできない。

事情はあきらかではない。だが、とりあえず見つからないようにすべきだ。小生は、きみたちに監視委員かんしいいいんの権限けんげんを一部を委託いたくしよう。

これでもう、IEの運営サイドからさえも干渉かんしょうされることはない。居場所いばしょをたちどころに察知さつちされてしまうこともなくなる」

「ありがとうございます。

IEの履歴りれきが見たいんですが。方法はないでしょうか」

「クドク・ポイントが高い者には、アクセス権があるはず。」

いまは、説明の時間はない。光陰矢のごとし。時間がない。急いでここを立ち去れ。

いくがよい。是非もない、真の現実の世界へ!!」

外に出ると、すでに特別高等警察の先陣が到着していた。

こいつらも黒い鎧兜の騎士だ!

けど、彼らの剣は深紅の刃だった。楯には正義をしめす光輪の紋が浮彫されていた。

「突撃せよ!」

ふるう剣で雲が集まり、雷霆が山をゆるがす。地面がわれた。

イスは、拔剣し、

「こいつらは環境的人物だったね、ANKA」

「そうだよ」

「じゃ、あわれみはいらないね」

イスは、ぶあつい鋼鉄の鎧が飴でもあるかのように、つきつ

ぎと切りきざむ。容赦なくたてに裂き、よこに断ち斬る。あざやかな血がほとばしる。

しかし、非情なる特高警察は、腕を斬られても、足を切られても、すぐに立ち上がり、ずいずいせまってきた。

「あつ！」

エリコがさけぶ。

「なによ」

「あれ見て、特高の飛行部隊よ」

「え？」

空を見ると、大きな鉄の翼をはばたかせ、マシンガンやバズーカ砲をそなえた漆黒の騎馬に乗った重装甲騎兵の一団がせまっていた。

「戦闘機みたいな馬ね」

「あの翼は機械なのよ。イカルスってよばれてるわ」

「じゃ、正義の太陽のまえでは墜落する運命なのね。ってゆうか、あれをこわせばいいんだ」

あたしは、意識を澄すました。翼に集中し、ぼんやりムジョーをと
なえた。翼がうごきをぎこちなくし、パーツがポロポロおちはじめ、
ばらばらに裂ける。もはや飛行はつづかず、驚愕の表情をなす特高
どもがあわてふためきわめき、手足をばたばたさせながら、つぎつ
ぎ墜落する。翼の崩壊は止まず、もっとこまかく砕け、砂や塵ちりとな
って風に飛ばされ、消える。

「さあ、いまのうちに出発しよう」

あたしたちは、ふたたび飛んだ。

「履歴りれきを見られるかどうかためしてみよー。見るには、どのくらい
クドクがひつようなのかしら？」

条件は QDQ1000 だった。あたし、OK じゃん。

エリコがいう、

「つーことわさー、敵がわに QDQ1000 以上のやつがいたら、あたしたちがどこにいても、居場所がわかつちやって、襲撃したり、監視したりすることが、かんたんにできちゃうってことじゃん。」

もし、ジンがそういうやつらとつるんでいたら……そうよ、だから、ジンは、わたしたちを襲うことができたんじゃない？」

イスは、うなずくが、

「たしかにそうだ。」

しかし、そんなに QDQ が高い者は、なん人もいないのではない
か」

「でも、その数人がどんなやつか、わかってないじゃん。なにたくらんでいるやつか、わかってないじゃん」

「うむ」

A N K A がいう、

「待って。」

敵は、ただ、ログを見ることができるだけじゃないわ。それ以上に、プログラムに干渉できるし、ウイルスとも関係している可能性があるのよ。

プログラムをいじることができるなら、ログを見るなんてこどもだましでしょう」

あたし、

「ともかくさー、見てみようよ、履歴ってやつ」

あたしのケータイからアクセス。

アクセス後の操作は、そうきANKAにまかせた。彼女がいう、

「履歴りれきからさぐるには、かなりようりよくやっても、時間がかかるわ。それまで待っていらんない。

ともかくレオン・ドラゴにむけて飛ばしましょう。ジンは、レオン・ドラゴにむかうはず」

夜になった。山々の峰々みねみねがさらに威嚇いかく的に見える。

高いところにいるせい、月光がちかい。窓からながめながら、あたしたちは、語りあった。

「ジンは、だれの指示しじで動いているのか。なにかたくらんでいるのか。

いずれにせよ、わたしたちをおとしいれようとしている黒幕くろまくと、とりひきしてるのよ。ぜったい」

エリコがそういった。あたしも、そうおう。

「だよねー。

アバターは、あたしたち人間そうさが操作するんだから、環境かんきやうてきじんぶつ的人物とちがつて、ウイルスから、ちよくせつ影響をうけるはずない」

しかし、ANKAは、

「でも、まったく受けないかどうかは、よくわからないわ。

なにしろ、脳せうにちよくせつ接続せつぞくしているのと同じだからね」

イースは、異議いぎをとねえ、

「だが、洗脳されることは考えにくいな。

もしそうなら、もっとまえに問題化しているはずだ」

「そうね」

ANKAは、おもいにふけりながらも、そううなずく。エリコが話をもともとの議論にもどし、

「ともかく、ジンよ。」

ジンのやってることは、盗賊連中とうぞくれんちゅうみたいみに、世の中が物欲主義ぶつよくしゆぎに変わったから、なんとなく金かせぎに魅せられてみいるってのとは、わけがちがう」

「まちがいなくね。あきらかに、なにかをねらい、たくらみ、ぼくらから『kOO』を奪うばった」

ミーシャ、きく、

「だれが指示しじしてるの？」

「あんた、バカね。ウイルスをはこんだやつに決まってるじゃん」

そのいいかた、あたし、他人ごとならムカつき、

「だから、だれよ」

「あんたねー、なん万人ユーザーがいるとおもってんの？

わかんないわよ。少なくとも、いまは。時間をかけなくっちゃ、
わかるわけないじゃん」

「あたしー、もー眠いよー」

エリコのいうのは、もつともだと思った。憂鬱^{ゆううつ}になる。

「でも、なんで。なんで、あたしたちがねらわれるの？

シーレオーノ行きの列車^{れっしゃ}で見はられていたのも、けつきよくは、
こういうことだったんじゃないの」

ANKAもうなずき、

「そうね。バリユースのうごきも、ジンの行動と無関係ではないか
もしれない」

イースも考えこんで、

「とすれば、バリユースの行動には、どんな意味があるのだろうか」

「うーん。なにかなー。わたしたちがウイルスをはこぶからじやないよねー」

「そりゃーそーよ、ミーシヤ。

むしろ、ウイルスを持って来たのって、わたしたちをねらっている連中のほうなんじゃない」

「うん」

それ以上、いうべき考えがだれにもない……

ジョリーは山脈さんみやくを越え、高度こうどを下げた朝、山間やまあいの、ひろい場所に出た。

さいしよは、平原へいげんいっぱい雪だとおもった。まっ白さがきつくて、ものすごくまぶしい。眼が痛い。

「塩よ、シュッドレヒトっていうのよ」

ANKAがいった。

「ぜんぶいちめん、塩なのよ。」

すごいでしょー。ここは、むかし、塩分えんぶんの濃い湖だったの。それが干上ひあがって、このシュッドレヒトになったのよ。

ここだけは、ふしぎと、雪も雨も降らないの」

見わたすかぎり、地平線のむこうまで、まったいらで、ぜんぶまっ白な塩なの」

あたし、飽あきることもなくながめつづけた………

ふたたび山岳地帯さんがくちたいに入り、いくつか丘を越えると、樹齡じゅれい数千年すうせんねんの大木たいぼくがしげる暗鬱あんうつな森があり、そのはるかむこう、とおくに大きな平原へいげんが見える。

そこは緑みどりいろでどこまでもひろかった。

「あれがハン・グアリス大平原だいへいげんだよ」

イースがそういった。

12 ハン・グアリスの平原^{へいげん}

「なにもない、緑^{みどり}の草^{くさ}の大海原^{おおうなばら}さ。

むきを変えよう。なぜなら、あそこはレオン・ドラゴの王アルハ
ンドロ^{りょうない}世の領内^{りょうない}だ。

さあ、ちかくに街道^{かいどう}があるはずだ」

イスの言葉で、あたしたちは、進路^{しんろ}を変え、ハン・グアリスには
むかわず、森のほうへ、低く飛んだ。

天候^{てんこう}が雨に変わっていた。

IEに来てから、はじめての雨だった。

ANKAがカーテンのむこうから出て来た。あたしのケータイ持
つて。

「わかったわ。やはりジンたちは、レオン・ドラゴにむかっている。

ルートと進行方向から推定して、街道^{かいどう}ぞいにあるイ・エンジェー

口村に宿やどをとる可能性が高い」

イスが剣にそつと手をおきながら、

「もう、ぼくらのうごきは気がつかれていないはずだよね。

奇襲きしゅうをかけられる」

エリコがケータイ片手におきあがつつて、

「それでもないみたいよ。これ」

見た。

ニュース版だ。

『 叡智学の高位取得者 『kOO』を略奪りやくだつ』

先日、高名なタカフシ師の講座を修得しゅうとくし、アカデミアを卒業して

青龍せいりゅうの称号しょうごうをえた高位取得者こういしゅとくしやユリイカは、傲慢ごうまんにも自ら『kOO』

を所有しよゆうするにふさわしい真理くきようしやの究竟者しきやうしやと称しょうして、文書館所蔵しょうしょくかんしよざうの『k

OO』を奪うばつて逃走とうそう。

ただちに追跡ついせきにおもむいたアカデミアの重裝機甲騎兵じゅうそうきこうきへいおよび特とく

べつこうとうけいさつじゅうそうきこうきへいくうていぶたい
別高等警察重裝機甲騎兵空挺部隊の手をたくみに逃れ、現在も逃走
中。
ちゅう

現在、各地で連続している『k O O』盗難事件と関連あるものと
して、司法当局で調査中とのこと。
しほうしゅうきよく

以下に逃走中のユリイカとその仲間4名の画像を公開する』
とうそうちゅう

あたしたちの写真がデカデカと掲載されていた。
けいさい

「ひどい。

しかも、傲慢にも、つてなによ！ あたしが首謀者つてこと？」
ごうまん

あたし、シヨックだった。エリコもぶんぶん、

「でしょ？ さいあくだわ。だいたい、手を逃れつて、なによ、み
ごとに撃退したんじゃない。こいつら、じぶんに都合よく話してる
げきたい
んだー」
つごう

「そこじゃないんだけど」

と、あたし……

ミーシャだって、さすがに憤慨^{ふんがい}し、

「さいあくー、ひどいよー」

イスも表情をくもせ、

「これでは、うかつに外へ出られないな。

考えたもんだね。ぼくたちのうごきが確認^{かくにん}できなくなったものだ

から、公開^{こうかい}にふみ切ったんだ」

あたし、リアルに憂鬱^{ゆううつ}だった。サイトでたたかれるなんか比^ひじや

ない。理由すらわかんないし。

「気にするな」

ひろと
非録斗^{ひろと}がよこに坐った。

「気にするよー。ムリいわないで。なんでねらわれたり、誹謗中傷^{ひぼうちゆうしょう}さ

れたりしなきゃなんないわけ？ しかも、さいしょッからだよ。運

営サイドから、なんだよ」

「いまのIEは正常^{せいじょう}に機能^{きのう}していない。

ユリイカは、なんにもわるくない。病むなよ。僕がまもるから」
非録斗、最高！　なんか、きげん直っちゃったあ。かな？

「さあて、これからどうするかよね」

ANKAが地図をひろげて考えこみながら、皮肉に微笑み、

「イ・エンジェーロにむかおう。覆面でもするか（笑）」

村は平たい石をつみ上げただけの粗野な塀でかこまれ、櫓の木のがんじょうそうな門にまもられていた。

扉は閉ざされている。

フードつきのポンチョを深くかぶり、ジャジュがバルコニーから降りて門をたたいた。声を上げる。

「旅の者です。村に入れさせてもらえませんかー」

しばらくは雨音だけしかなかった。とうとつに、のぞき窓がひらいた。ギョロギョロした眼だけが見える。

「なに者だ。どこから来た？」

ジャジュは、努めてほがらかに、

「アカデミアからです」

いうひつようないよぶんなことはしゃべらない。ジャジュには、
そういうかしこさがある。アカデミアっていえば、相手も安心して
し（就職さきにむかう新人がほとんどだから）・・・

げげんそうに眉をつり上げて、門衛の男は、

「言葉だけじゃ、信用できん。いうだけなら、だれにでもできるわ
い。」

ぶっそうな世のなかじゃ。せっぱつまった難民がアカデミアから
来たなんて嘘いわねーともかぎらんしな」

「難民だって？ このIEで難民なんているもんか……」

仮にそうだとしても、難民は、救うべきではないか」

「じょうだんじゃねーや。」

餓えて凍えて、追いこまれて、なにするかわからん連中じゃ」

「ひどいことを。」

苦しんでいるから、やむにやまれずに道に外れたこともするの
しょう。

だから、そんなことになるまえに、あなたの持つ食糧しよくりょうや衣服いふくをあ
たえればよいではないですか。そうすれば、あなたは、大きなクド
クがえられます」

「はははっ。クドクなんて、このご時世じせい、なんの役に立つもんか」

「ばかな、ここは、IEだぞ」

「それがどうした。とつとといつちまいなっ」

そのようすを見ていたイースがマスクをして降り、ジャジュに替か
わっていう、

「おつとめ、ごくろーさんです。なんみん難民ではない証あかしをお見せしまし
う。

どうか、おちかづきのしるしに」

手になにかにぎらせた。もちろん貨幣だとおもう。門扉はあいた。

門をすぎてから、ジャジュが、

「なんてことだ。腐りきってる」

吐き棄てるようにいった。

イースがなだめる。

「気にすることないさ。これからは、きつとこういうことによく遭うことになるかもしれないし」

A N K A が冷めた顔で、

「どこ国の、どこの地域の人たちが、どういう理由で難民になって、どこに、どれくらいいるか、あとでしらべよう。」

いまは、なにもしてあげられなくても、なにかできるときがくる」

ジャジュがうなずいた。

「たしかにそうだね」

村にある旅籠は1軒だった。

「ここしかないね」

1階が食堂で、2階が宿泊室しゅくはくしつになっている。2階の窓はぜんぶとじられていた。人影ひとかげは……なさそうだ。

「上から見られている可能性はない」

イスがつぶやく。

ジャジュが旅籠はたしの車寄せくるまよにジョリーをよせた。ANKAがささやく、

「じゃ、ジョリーを裏の厩うまやにまわしながら、エチカと迦楼羅かるらとで厩うまやのすべて、建物のすべて、周囲のようすを見て来て。

ジンたちのあの、ダチヨウみたいな龍りゅうがつながれていないかとかね」

エチカと迦楼羅かるらがすばやくジョリーを裏へまわす。

ANKAが降り、食堂の扉とびらのまえに立った。

「いい？　いくわよ。」

くれぐれも、しんちょうにね。

いきなりジンたちと出つくわしたくないからね」

ジャジュとイースがつづいた。エリコとミーシャとユユ、そして、

あたしと非録斗^{ひろと}。

入ったとたん、肉を炙^{あぶ}るにおいにつつまこまれる。

「あーん、おなか空いたー」

ミーシャが小声^{こしえ}でいった。エリコがにらむ。トイレをさがすよう

なふりをして、ジャジュが奥にある部屋をのぞき、なにげない顔で階段をのぼりはじめた。

店の中央にはレンガを組んだ上にのせた大きなグリルがあつて、

肉や野菜が炙^{あぶ}り焼きされていた。

お客は少ない。男の人が3人だけ。あたしたちは、目立たない席をめざした。

奥の窓ぎわ。ちよっと、すきま風寒い。けど、外のうごきがよく

わかる。

おくれて来た迦楼羅かるらがイースの耳にささやく。

「厩うまやには、あの生きものはいなかった」

エチカは、ジャジュを追うように2階へ。

エプロンすがたのオジサンがニコニコしながら、注文をとりに来る。

エリコが声をおさえてオーダー。太ったおばさんが来てフオークとスプーンとナイフとをならべる。そのあと、イースが、

「難民なんみんがこのあたりにいるらしいってきいたが？」

かなしそうに眉まゆをしかめて、オジサンが話し出した。

「ええ、そうなんですよ。大きい集団や小さな集団が平原のあちらこちらにいます」

「いったい、どこから来た難民なんみんですか」

「ヴォゼヘルゴですよ。あの国の民族みんぞくや宗教しゅうきょうが複雑ふくざつなこと、ご存ぞんじ

でしようか」

その問いに、ANKAがこたえた、

「知っています。

ヴァルゴ教、シルヴィエ聖教^{せいきょう}、ジゼルス教、ゾドア教がおもな宗教^{しゅう}だ。

ヴォル人、ゼエリ人、ロゴ人、レオン人、ドラゴ人、アッシーラ人、セリヴィド人がおもな民族^{みんぞく}」

2人の少年が茹^ゆでたジャガイモと焼いたシカ肉を盛^もった大皿^{おおざら}を持つて来た。水の入った瓶^{びん}と木製のコップが卓上^{たくじょう}におかれる。

イスがそつと、席を立つ。

「そのとおりです。

ヴォゼヘルゴのデヴォキサ・シロワテル・ボダシェヴィ大統領は、ヴォル人で、ヴァルゴ教正統派^{きょうとうはい}。

強硬^{きやうごう}な原理主義者^{げんりしゆぎしや}でもあります。

にゆうとう
入党からわずか1年でV A V（ヴォル人正統ヴァルゴ教徒党）の
とうしゅ
党首となったボダシェヴィは、さらにその2年後の大統領選挙で
あつしやう
圧勝しました。

大統領となった彼は、ヴォゼヘルゴの土地はヴォル人の祖廟の安
せんぞでんらい こゆう りやうち みんなく こんばく
らぐ土地、先祖伝来の固有の領地、民族の魂魄が眠る場所と主張し
い みんなく れいぐう
て、異民族を冷遇、いや、排斥する政策をはげしく、徹底して強行
はいせき せいさく てつてい きやうこう
しました。

土地を奪われた人々は、ボダシェヴィを恨み、抗議運動を起こし
うば
ましたが、大統領は、はげしくこれを罵り、武力で鎮圧し、死者は30
のし ぶりよく ちんあつ
万人を超えました」

イスとジャジュがもどつて来た。

「2階に人気はない」

「推測があやまっていたかな。それとも、これから来るのかしら……」

「それ以来、ボダシェヴィは、ヴォル人以外の民族の主張を、いつ
いらい みんなく しゅちやう

さい受け容れず、言論や活動の自由を制限したんです。

政治的なことだけじゃなくて、宗教や学問や芸術、すべてについてです。

すぐに、民族間で貧富の格差が大きくなり、地下に潜伏した抵抗運動は他国と通じて武装しました。

そのため、ヴォゼヘルゴでは、テロが頻発し、ついに虐殺と報復の連鎖から武力闘争が勃発、内戦が起こったのです。

戦火と政府の拷問と大虐殺とを逃れるために、ヴォル人以外の人々は、難民となって、近隣諸国にあふれるようになりました」

「よくある話ね」

エリコが口をモグモグさせながら、そういった。

ANKAは、即座にその言葉を否定し、

「現実世界ではね。」

でも、ここは、IE。そういうことが起こるはずのない場所よ」

「とくに、シュツドレヒトのセリヴィド人は、徹底した迫害を受けています。」

難民のうち、シュツドレヒト・セリヴィディアンが占める割合は、ほかの民族とは比較にならないくらい高いのです」

「シュツドレヒトか……あの干上がった塩湖」

「そうです。北大陸最大ともいわれる塩の大生産地です」

「なるほど。民族の問題だけじゃなくって、現実的な利益をむさぼろうとしているやつらもいるってことね」

エチカもどって来るなり、おおげさに腕をくんでうなずき、

「まことに、なにごとにつけ、原因が1つということはありえないものだ。なにごとも、かならずや複雑系的に理由がからみあっている。この問題もまた奥が深い。ふんふん」

ユユがミーシャにきく、

「これは、なんの肉かな？」

「知らないよー」

「羊ひつじだとおもうけど」

エリコがそうこたえる。

非録斗ひろとが尋ねて、

「テロはどんなことが、どのあたりで起こるんですか」

「人が多く集まるところです。」

お店の多い大通り、市場いちばがひらかれる場所、祭日さいじつの広場ひろば……です。

つかわれるのは火薬かやくを集めた爆弾ばくだんです。無差別むさべつに女もこどもも殺

されます。怖ろしいことです。殺戮さつりくです」

ミーシャがかなしそうな顔で、

「ひどい」

エリコがよこ眼むごんで見て、無言。モグモグ。

あたし、ANKAにきく、

「どうすべきかしら」

「ムリね。いまは、ジンを追いましょう」

イスがうなずきながら、

「いまのぼくらにできることは、たかが知れてる。

なんみんきゆうさい

こっか

難民救済は国家レベルのプロジェクトだ。大きな組織と経済力が

そしき

けいざいりよく

なくてはできない」

エリコがせせら笑った。

「王さまたちがやってくれればね」

あたし、ムカつく。

「あんたねー、性格、わるすぎだよ。そんなことよくいえるねー」

「ねー、あれさー、ちょっと見てー」

ミーシャが窓の外を指さして、そういった。

かるら
迦楼羅が憂鬱な表情で、
ゆううつ

「いや、事実は事実。リアル・ウイルスにおかされたいまの情勢で

じょうせい

は、たしかにエリコのいうとおりかも」

エリコが得意げに鼻をふくらませる。

「ユリイカ、あんたには、なんにもわかりやーしないのよ。

もし王がなんの得とくもないことしたくないっていったら、どーすんの？」

「知んねーよ」

って、あたし。

ミーシャが、

「ねー、あれさー」

「ミーシャ、どうしたの？」

ユユがやつと気がついてそう尋たずねた。

「ねー、あれよ、ちゃんと見てよー！」

「うざいわねー、マジな話してんのよ」

窓の外、凍いてつく雨が降っていた。風は冷たさをましているようだった。

旅籠の庭で、ジン・メタルハートたちの鋼鉄の頬あてを撃ち、鎧の飾りをひるがえさせている。

「うわっ、やばいじゃん！」

鳥のような龍に乗ったジンと4人のなかま、そして龍馬に乗った10人の重装騎兵たちがいま到着したところだった。それが窓から見えていた。

「ばか、ミーシャ、はやくいいなさいよ」

「いつてたもーん」

イスは、なにもいわず席を立って、扉にむかった。

エチカと非録斗が調理場にまわる。

迦楼羅とジャジュは、2階に上がった。

ユユも調理場の裏口から、そっと抜け出す。

「あんたは、ここにいて、ユリイカ。わたしたちをまもるのよ」

ANKAがそういつてウインクする。

「ジンのうしろのボックス、あれに入っていそうね」

エリコがそういいながら、窓に顔をちかづけて、じつとにらむ。

イースが庭に飛び出し、するどくさけぶ、「ジン、覚悟しろっ！」

まっしぐらに突撃だ。

メタルハートがすさまじい形相ぎようそうでふりむく。佩はいていた大剣をす

でにふり上げている。

2人の剣がぶつかるとき、電光でんこうが走り、地面がゆれた。

装甲そうこうを脱ぬがない女、褐色かつしよくの肌に黒髪ストレートのアンジェラが背

後からせまる。青く深いまなざし、色白いろじろで血いろの唇をしたメアリ

ーも。ひきようだわ！ あたし、つぶやく、

「ムジョー」

アンジェラとメアリーの剣がくずれる。ジンの手が一瞬、止まった。

イースは、その機に乗じ、ジンの大剣をはらい落とし、とおくへ蹴飛けと

ばす。

ジンの眼が剣のほうへいく。その瞬間、イースは、鳥龍ちようりゆうの背後にまわって、箱を手にとる。

それと同時に、迦楼羅かるらとジャジュが2階から飛び降り、瞳孔どうこうが紅いイヴィラ・ヴィシヤスと青白い顔でどこを見ているかわからない魔女のようなエピタフィラに襲おそいかかる。

裏庭からそっとまわって10人の重装騎兵じゆうそうきへいたちの背後にあらわれたエチカが長さ5mの大槍おおやりをふるって大暴れ。非録斗ひろとがあらわれ、イースの投げた箱をキャッチ！

同時に、ユユがジョリーをたくみにあやつって登場！ 非録斗ひろとは、箱をジョリーのキャビンに投げこむ。

「さあ、いまよ！」

ANKAの声であたしたちはいつせいに飛び出す。

イースは、短剣をぬいたジンと戦いながらも、ハンマーや戦鬪斧せんとうふ

で襲^{おそ}おうとするアンジェらとメアリーをたくみにかわす。

ジャジュがイヴィラとエピタフィラに押しまくられてあぶない。

迦楼羅^{かるら}とエチカと非録斗^{ひろと}が重装騎兵^{じゅうそうきへい}にかこまれていた。

エリコ、ミーシャ、あたし、ANKAの順に飛び乗る。非録斗^{ひろと}が

たおれた。あつ！ あたしおもわず、「ムジョー」

非録斗^{ひろと}の上におおいかぶさろうとする重装騎兵^{じゅうそうきへい}がそのまま砂塵^{さじん}

のように消えた。どうせ、こいつら、自由意志設定のアバターだ。

非録斗^{ひろと}に命には代えられない。

ユユが弓^{ゆみ}で重装騎兵^{じゅうそうきへい}をつぎつぎ射る。弓矢^{ゆみや}うまかったんだ？

迦楼羅^{かるら}、エチカ、非録斗^{ひろと}が解放される。

「さあ、はやく！ 乗ってよ」

ANKAがそうさげんだ。

「よし、撤収^{てっしゅう}だ」

そういって、イースは、ジンのシンガード (shin guards: すねあ

て）がくだけるほど強く脚をうって彼女をたおす。返す刀で、アンジェらとメアリーをはらい飛ばし、3人を飛び越えて、ジグザグにうごいて鳥龍ちようりゆうの翼つばさを斬きる。ジンが憤怒ふんぬの形相ぎようそうで立ち上がった。

非録斗ひろとがジョリーに飛び乗ってユウの代わりに手綱たづなをにぎる。手が自由になったユウは、弓ゆみを自在につかつて、つぎつぎと鳥龍ちようりゆうの脚をねらう。

エチカと迦楼羅かるらがジャジュをたすけ、イヴィラとエピタフィラを押し返し、すきを見て身をひるがえし、3人でジョリーにむかう。

ユウが弓矢をはなって援護えんごし、イヴィラとエピタフィラが3人を追えないようにする。

「さあ、ジョリーを走り出させなさい、飛ぶのよ」

ANKAがそうさけぶ。

非録斗ひろとが手綱たづなをひくと應龍おうりゆうが咆哮ほうこうし、翼つばさをひろげる。麒麟きりんも強くいなく。海馬かいばとジョリーがひっぱられて持ち上がった！

「さあ、はやく！」

身のかるい迦楼羅^{かるら}とジャジュが飛び乗り、エチカがぶら下がる。

まにあったっ！ あ、イスはっ？

イスは、ジンとアンジェラとメアリーとイヴィラとエピタフィラにかこまれている！

迦楼羅^{かるら}とジャジュとユユとエチカが弓矢を射まくった。ANKAがロープを垂らす。

イスが飛びすがり、應龍^{おうりゅう}と麒麟^{きりん}が大きく咆哮^{ほうこう}し、さらに高く上がった。

重装騎兵^{じゅうそうきへい}の矢が飛んだがもうとどかない。

ギリギリセーフ！ ちょーヤバかったー。

「ふう」

イスは、キャビンまではい上がり、ひたいの汗をふく。

「あぶなかったよ。ありがとう」

ジンたちの鳥龍^{ちようりゆう}は、羽を切られているので、翼^{つばさ}をバタバタさせるだけで飛べない。

「これで、しばらくは時間がかせげるな」

みんな肩で息をしている。

應龍^{おうりゆう}と麒麟^{きりん}が速度をおとさないでぐいぐいひっばる。

そのひっぱりだけで4頭の海馬^{かいば}とジョリーが空をすすんでいる。

14本の太い綱^{つな}がピンとはっていなきや、あたしたちは、墜落^{ついらく}しちゃう。
う。

しばらくはだれもしやべらなかったが、イースが、

「あれを」

あたしたちは、はからずもハン・グアリスの平原^{へいげん}を見下ろす場所に出ていた。レオン・ドラゴの王アルハンドロ^{りようはい}世の領内に、あたしたちは、入ったのだ。

「ああっ」

「ひどい。信じらんないよ」

「こんなことって……」

なん万人もの人が、着^きの身^み着^きのままで、なにもない平原^{へいげん}に吹きさらされている。手荷^{てにもつ}物^{もの}1つさえ持^もってない。なにも持^もち出^ですよゆうもなく、そのまま逃^にげて来^きたことがわかる。服^{ふく}はよこれ、やぶれ、くたびれきつた状態^{じょうたい}で、とほうにくれ、絶^{ぜつ}望^{ぼう}の眼^めで、天^{あめ}を仰^{あお}いでいる。

ほんとに信じらんない光景^{こうけい}だった。あたしたちは、上空^{うくう}を旋回^{せんかい}する。

「ひどいわ。ひどすぎる」

「どーしたら、いいのっ。」

なん万人もいるよっ」

さえぎるものもない平原^{へいげん}は風^{かぜ}が強^{つよ}く、身^みを切^きるよう^{よう}に冷^{ひや}たい。うたれるまま、さけられない氷雨^{ひさめ}に震^{ふる}えている。

「だれも、なにもしないのか」

イスが語氣ごきを強めた。

「なんで、こんなことがゆるされるのよ」

あたしも、いわずにいられない。

ずっと、だまって、けわしい表情をしていたANKAが決断けつだんしたように、口をひらいた。

「いこう。」

いまは、どうにもできない」

「やむをえない。」

つらいが、それ以外の選択肢せんたくしはない」

イスも、そういつてうなずく。

「わかった。さあ、いこう」

迦楼羅かるらがいった。應龍おうりゅうのむきを変える。あたしたちは、暗澹あんたんたる

気持ちでふたたび出発した。

暗くなるころ、ブナや榎かしの木の森にかこまれた草地くさちを滑走かつそうして、うまく着地ちやくちする。かるい衝撃があつて、ちよつと痛かつたし、ジョリーにキズがついたけど。

そのあとは、雨のなか、道なき道をひたすらすすんだ。

ともかく、急がずにいられなかった。なにをするかが決まっていなくとも。

あたしは、がんばってディスプレイを見ていたが、交替こうたいの時間になつて、休憩室きゆうけいしつに入ると疲れ切つて、すぐに眠りにおちた。

13 涯はてなき闘い

どこにいくべきか、決まっているわけじゃない。

位置情報いちじょうほうを見ると、いまだレオン・ドラゴの領内りょうないだった。

けど、レオン・ドラゴへはいけない。雇やとってくれないだろうし、

それどころか、だほ拿捕されるにちがいない。

アカデミアにもどって『kOO』をかえしても、同じだとおもう。

ぜったい、信じてもらえないだろう。

かんりきよく

管理局をたよっても、できることはなにもない。だって、ちゆうすう中枢の

うんえいきのう

運営機能は狂ってし、作者もこまってるぐらいだし……

がむしやらにすすんだけど、どこにもあてはない。けど、どこかへむかわずにはいられない。

とまれば追いつかれるし。

眼をさましても、まだ夜中だった。疲れはとれていなかったけれど、コックピットで話しあう声がしたので、あたしもそこへ出る。

ANKAは、あたしのアクセス権をつかって履歴ログをしらべ、文書

館の『kOO』が、どういう経緯けいゐで、あたしたちのトランク・ケー

スに入ったかを突きとめていた。

なんてこたあナイ、ネット上のことわすべて現象げんしょうでしかない。

だから、文書館からカットして、あたしたちのトランク・ケースにペーストしただけのこと。カット&ペーストだ。

なんの答にもなンない。

けど、やっぱそうかっておもったのは、ウイルスがこんなことするはずない、だれかがIEをイジっている、ってことだ。それだけは、あたしにも、はつきりとわかった。

A N K Aが、

「作者でなければ、なかまの運営者よ。あるいは、このていどなら、システムに侵入^{しんにゆう}できるハッカーという可能性もある」

しかし、その言葉に、イースは、

「そうとはかぎらない。運営者を脅迫^{きょうはく}か、買収^{ばいしゆう}かすることができ
やつということもありうる」

エリコが不満げに、

「ウイルスとつながってるって考えるなら、やっぱ、ハッカーよね。」

そうだとすると、ますますはんいひろくなってお手上げだけど」

でも、あたしは、

「でも、あたしたちを見はれるのは、ハッカーじゃないんでしょ？」

「そこよね。ほんとこんがらがってくる！ ウイルスと聖典せいいてんとうなん盗難はべつのことなのかなー」

「でもさー、少なくとも、聖典のほうは、あたしたちを知ってるやつだよ。だって、ピンポイントじゃん。限定げんていされない？」

A N K Aが首をふり、

「いや。こつちが知らなくとも、むこうが知ってるばあいがあるし、わたしたちを知らなくとも、ぐうぜん、えらんだのかもしれないし」

エリコがなかばキレぎみに、

「じゃ、なんもわかんないンじゃーん。五里霧中ごりむちゆうってわけえ？」

降りしきる雨のなか、黒い森をどこまでもすすんだ。

太い樹木じゅもくをよけながら、もの凄いいスピードで。よぎる樹影じゅえいが眼に

止まらないくらいだった。

「少し應龍おうりゅうや麒麟きりん、海馬かいばを休憩きゅうけいさせよう。

もう、3、4千キロくらい走っているよ」

イスがいった。

ANKAもやむなくうなずき、

「わかった。

でも、もう少し走ろう。休むのは夜があけてからだ。

ま夜なかの深淵しんえんで立ち止まるべきではない。亡者もうじやの声が地獄じごくから

わき上がって、とり憑つかれてしまいそうだ」

病んでるなー。だいじょぶかなー、ANKA？

なあーんて、ぼーんやりおもったりしてる…

え？

なにか声がした。

声ほというより吠え声だ。

あうわあああああううん、ぐわあああうわん。きみのわるい、長くのびた断末魔だんまつまのような咆哮ほうこう。

「なんなのっ！」

あたし、さけんじやった。

「わかんねーよー、いきなし出て来たんだおー」

監視用ディスプレイのまえでエリコがほほをふくらませて息まく。

……ハア、またまた、こいつの見おとし？ もり上げてくれるよな、いつも。

「人狼じんろうのようだね」

イスが平静へいせいにいう。ANKAは、もう少し深刻しんこくだった。

「1匹むじゃない。群むれているね」

あたし、不安。

「逃げきれるかな？」

「だいじょうぶだよ」

そのときキャビンに入って来た非録斗ひろとが微笑ほほえむ。もー、ステキい！
ずぶぬれの迦楼羅かるらもキャビンに入って来た。

「ジャジュが手綱たづなをにぎってる。だいじょうぶさ」

「なんのなのー」

ミーシャも起きて来る。

あたし、教えて上げる、

「じんろ」

「ジンロー？」

エリコがあたしたちをにらみ、

「は？ 発音きんろうしっかりしてよ。人狼じんろうでしょ？ 凶暴きようぼうな森の殺し屋、

環境かんきやうてきせいぶつ的生物……きやあーっ！」「いやーあつ」「わっ」「あぶない」

とつぜん、ジョリーが大きくゆれた。4人ともたおれた。

「体たいあたりされたようだな」

イースと迦楼羅かるらは、まったくバランスをくずさない。

彼女は、剣をぬき、雨のデッキに出る。

「どーすんのよ、やばいじゃん、たっくんいるの？」

「わめくな、エリコ！」

窓の外をのぞいた。よく見えないけど、うごきを感じる。なにかがたっくん走っている。光っている眼がときどき見える。迦楼羅^{かるら}がふたたびデッキに出ると、ビュッ！　ビュッ！　ユユとともに弓矢を射^いる音。

ぶうん！　ぶうん！　というのは、エチカが弩^{いしゆみ}を発射^{はっしや}するにぶい音。

ガラスがわれそうなくらいはげしく音を立てて、ジョリーがゆれる。また人狼^{じんろう}の体^{たい}あたりだ！

窓ガラスに牙^{きは}をむき出し、眼をひんむいた顔がはりつくのが一瞬、見える。怖いよーっ！

「じゃ、僕もいつてくる。きみたちは、ここにいて」

非録斗も剣をぬき、大きな楯を持つてキャビンの外へ。手綱をにぎるジャジュを防御する役をするためだ。

人狼がデッキに上ろうとしてなんども飛び上ってくる。イースは、もの凄いいスピードで走るジョリーのデッキの上で体勢をくずすことなく、つぎつぎ人狼を斬る。神技だ。

夜明けまえになると、人狼がすうつといなくなった。速度をおとし、非録斗がジャジュと交替して手綱をにぎる。ミーシャは、すでに眠っていた。エリコもうつらうつら……

「どうやら、もういないらしい。

さあ、ちようど朝が来たし、休憩しよう」

疲れきった顔でキャビンに入るなり、ジャジュがいった。雨はやんでいた。

ジョリーを深い森のなか、木々や岩にかこまれたくぼ地に停める。

あたしたちは、朝日を浴びて休息した。

正午にちかいころ、あたし、眼がさめる。

となりでエリコとミーシャが寝ていた。カーテンをあげると、ANKAもデスクにむかつて眠っている。デスクに出た。

ジャジュと迦楼羅かるらがならんで坐り、眠っている。非録斗ひろととエチカは後部にいるにちがいない。

イスだけが目ざめていて、デツキを降りて100メートルくらいのところを歩いている。

あたしは、非録斗ひろとのところにいきたくなかった。デツキを歩いてうしろへまわる。エチカ、ユユ、非録斗ひろとがしゃがんで眠っていた。

しずかな森。あたし、なにげにむこうの大きな岩を見た。あれ？
なんだか、岩が少しうごいているような気がした。

ここについたときは、まだうす暗かったから、よく見えなかったけど、いま、見ると、その岩のところどころに、2、3本ずつ太いこげ茶いろの毛が生えている。

岩がふくらむように少し動いて、またもとにもどる。

呼吸こきゅうみたい。

え？

岩がぬうつと、こっちをふりむいた。

あたし、悲鳴ひめいが出そうだったけど、こらえた。つか、悲鳴ひめいがち
ぢんだ。声も出ないってやつ。

巨大でごつごつして、剛毛の生えた石みたいな皮膚、岩に見えた
のも、とうぜんだ。

あたまが小さくて、鼻と耳が大きい。眼はくぼんで・てんみたい。ぱ
つと見、顔が顔に見えなかった。

怪物が立ち上がる。立ち上がったって、背の高さがほとんど変わら
ない。

「トロールだ」

いつのまにかイースがそばに来ていた。

「トロールって？」

「北欧の妖精さ」
ほくおう ようせい

「妖精——っ？ 見えないよ」
ようせい

「妖精といっても、国によっていろいろあるからね。」
ようせい

「粗暴なやつだから気をつけたほうがいいな。こっちに来るようす
そほう

はないが」

「だって、さっきふりむいて、こっち見たよ！」

「たぶん、わかってないとおもう。」

「さあ、したくをしようか」

そこへエリコがケータイ片手にやって来た。

「ねー、あんたたち、こんなところでんびりしてるばあいじゃないわ。いま世界中で『k O』があるのは、こことアカデミアぐらいなもんよ。25の都市は、今日、発覚した2件でぜんぶ持っていかれ
と し はっかく
たことになるわ。」

いーえ、アカデミアだって、神軍舎しんぐんしゃ（アカデミアを守護する重装じゅうそう機甲騎兵隊やファイアーウォール部隊の住んでいるところ）の時計とけい塔とうに安置あんちされていたのは盗まれたそーよ。のこっているのは、学長がくちょうの所有するものと大司教だいしきょうの所有するものと地下の聖櫃せいひつにあるもので、アカデミアですらあわせて3冊よ……え？…

うきやあつあああああああああーっーっつ
っ！ なっ、なに、あれわっ！

トロールは、無表情にまたこっちを見た。こんどはじつと見つづけた。

「ばかつ、大きな声出すんじゃないよ、エリコってばあ！」

「なにいつてんの、もうこんなちかくに居んのよ、のんきなこといつてないでにげるわよ！」

「もー、気づかれていなかったのにーっ」

「さあ、来るよ。みんなを起こして。出発だ」

そういつて、イースは、馭者席へむかった。ぎよしゃせき

トロールは、大きな棍棒こんぼうを持って、ゆっくりちかづいて来る。

「あつ、来た、来ちゃったよ！」

ふり下ろされた棍棒こんぼうの影があたしたちの上で太陽をさえぎった瞬間、ジョリーがうごき出した。ズォーン！

「ひゃあー」

地面がゆれる。あたし、風圧ふうあつでころんじやった。危機一髪ききいっぱつ！

「うわ、追いかけてくるよ」

エリコがさけぶ。

エチカが来て 弩いしゆみを射放いはなつ。

トロールの肩にあたるが、ぜんぜん、動どじない。

また棍棒こんぼうが！ スピードが出たジョリー、かろうじてかわす。

イースがANKAといっしょにもどって来た。

「もう、これで追いつけないよ」

A N K Aがいう、

「さあ、キャビンにもどつて。話したいことがあるから」

あたし、イス、エリコ、ミーシャ、そしてA N K A。5人がキャビンのなか、コックピットで円をつくるように坐つた。A N K Aが口をひらき、

「考えたんだ。」

このままでは、わたしたちは、どこにもいけない。いるべき場所がないからだ。身をおちつけられる居場所がないからだ。

だから国家をつくろうとおもう」

「ええー……っ！」

あたし、さけんじやったんだけど？ エリコだつて眼をまるくしてるよ。

「国？ 国つて、どうやってつくるのよ？ っーか、意味がわかんない」

けど、ミーシャは、

「いく場所が世界のどこにもないから、いく場所をつくるのね。

わたしたち、まちがつていないし、みんないつしよにいられば、

そこがわたしたちの居場所よ！」

イスもうなずく、

「ミーシャのいうとおりだ。くわしくきかせてくれ、ANKA」

「いいわ。

場所はどこでもいい。できれば、だれのものでもない土地がいいわ。だれかの土地だったら、ゆずってもらうか、買いとらなければならぬ。

土地を決めたら、こつか 国家のしゅけん 主権をしゅちよう 主張する。

そうすれば、やたらにわたしたちをおそ 襲えないわ。主権をしゅけん 侵害しんがい すれば、

すじのとあった理由がないかぎり、しゅうげき 襲撃して来たほうがわるいことになるから」

エリコがいぶかしげな顔で、

「かつてに国つくって、それで主権^{しゅけん}って主張^{しゅちよう}できるの？

それじゃ、だれにでもできちゃうじゃん。そんなわけないわ」

「むろん、条件^{じょうけん}はあるよ」

「やっぱねー」

「クドクさ」

あたし、クドクってきくと、きょうみしんしん、

「どのくらいあればいいの？」

「1人で100以上なら王さまになれる。50以上の人間が5人以上いれば、共同^{きようどう}で統治^{とうち}する国家^{こっか}ができる」

イスが口笛^{くちふえ}を鳴らし、

「いまの状況なら、ユリイカを王とする国家^{こっか}の樹立^{じゅりつ}が可能だ」

エリコ、眼をむき、

「ユリイカが王さま——っ！」

あたしも、びっくり、

「えーっ、あたしがーっ?! 女王じゃないの?」

「そこじゃなくって!

……まあ、いいわ。ANKAのいうことにも一理あるわね。じゃ、ユリイカ、あんたには、名ばかりの王になってもらうわ」

「女王だおーっ」

ANKAは、あたしたちを相手にせず、

「べつに王政^{おうせい}じゃなくてもいいのよ。政治^{せいじ}形態^{けいたい}はえらべるわ。

共和制^{きやうわせい}がいいとか、共産主義^{きやうさんしゆぎ}国家^{こくか}がいいとか、民主主義^{みんしゆしゆぎ}がいいとか」

イスも、

「さあ、では、場所をえらぼう。

だれの土地でもない、新しい運命^{うんめい}の土地をさがそう」

「じつは、もう、候補地^{こうほち}があるのよ、わたしのなかではね。それほ

ど、とおくないわ」

「でも、ここは、レオン・ドラゴがちかいよー」

「なんでダメなのよ？」

侮蔑ぶべつの表情でエリコがあたしを見て、

「わかんないの？ ジンがちかくにいるってことじゃん！」

「そっかー。彼女、あのあと、レオン・ドラゴに着ついたのかしら」

A N K A が立ち上がり、

「それは確認かくにん済み。」

もう、国に入っているわ」

イスも立って、扉とびらにむかい、

「では、ちかいうちに軍勢ぐんぜいをつれて、ぼくらをさがしまわるな。まあ、監視委員かんしいいんの権限けんげんを委託いたくされているから、『眼め』の追跡ついせきはまぬが
れているけれども、しらみつぶしにさがされたら時間の問題だ」

あたし、あせる。

「やばいじゃん……」

「だから国をつくるのよ。そして、闘いぬくしかない。

それしか選択肢せんたくしはない。終わりが見えなくてもね。

さあ、いこうか」

ジョリーは森をぬけて、峡谷きょうくをわたり、山を越えた。むろん、まっすぐ走れる道などいらない。もの凄いスピードで木をよけ、岩をよけ、激流げきりゅうを飛び越え、谷を下り、斜面しゃめんを駆け上かがる。たてになったり、よこになったり、回転したりもするし、いままで乗ったどんなジェットコースターよりマヂでこわい。

「『kOO』を盗むことにどんな意味があるの？」

あたし、ANKAにきいた。

「『kOO』は、IEのハートよ。真理しんりの精髓せいずいだし、究極きゅうきよくの奥義おうぎだし、IEの精神なの。

それを盗むことの意味は、IE精神せいしんの弱体化じやくたいかだわ。つまり、リアル・ウィルスの仕事がしやすくなるのよ」

「たいへんなことだったのね？」

「国家こっかを樹立じゆりつして、『kOO』をまもる。この聖典せいてんは、もう、どこにも返さないわ。どこも安全ではないから。

国をつくるのは、そういう意味もあるのよ。正義と真実のために国をつくるの」

「……ANKA。あんたって、ほんと、いろいろ考えてるんだねー。尊敬そんけいするし、うらやましいよ。なんで、そんなあたまがいいの？」

「叡智学えいちがくの巨匠きよしやうから、そんなこといわれるなんておもわなかったわ。

あんただって、青龍せいりゆうの称号しょうごうを持つマスターなのよ」

「それ、まちで実感ないんだけどー」

「じっさい、ムジョーのつかい手じゃん（笑）」

「そーなんだけど……」

でもさー、ほんとに、だれなんだろう、盗みやってるのは？」

「だれかがやってるんだよね。」

システムを狂わせているのはウイルスだけど、盗難とうなんは人間のしわざよね」

あたし、

「狂ったプログラムが、つてのは、やっぱ、考えられないの？」

「そうね。ウイルスにやられて聖典を盗む、つて。とくに、わたしたちのトランクに移動させる、なんて考えにくいでしょ？」

ログも見ても、だれがやったかまでは解明できない。少なくとも、わたしにはできなかったよ」

「そっかー。だれかがやってるんだよね。」

でもさー。なんでだろうー」

「いつかナゾも解とけるさ。」

いまは、できることをがんばろう」

大きな谷（Valley）に出た。

ANKAがえらんだ場所は、どう考えてもふさわしくない場所だった。

「なんで、ここなの？」

そういうエリコと、あたしも同じ気持ちだった。数少ない意見の一致だ。別荘にでもするならいいかもしれないけど。平和的すぎるっていうか、無防備におもえた。

そこは、日本人的には、谷というよりは川をはさんだ盆地、山にかこまれた平野って感じの場所。

小さな小さな丘がある。

じつさいは、丘ではなくて、青草の生えた大きな石、磐、つていうものだった。だいたい直径が30メートルに足りないくらい。草におおわれて見えないが、さぐると、石のいろは黒だった。

頂点に亀裂があつて、一本の木が根をはつていた。亀裂から泉が

わいているからだ。

木はその水を糧かてにして育っていた。

なん千年もまえに種たねがここにおとされた（という設定な）のか。

ビーチパラソルみたいで雨が降っても屋根やねになつて、ここにいれ
ばぬれなさそう。

根元ねもとに洞ほらがあり、泉いずみはその洞ほらのなかにあった。

ジヨリーを洞ほらのまえに停とめた。

洞ほらは南をむいている。

老樹ろうじゆの北に、2頭の海馬かいばを配はいした。

そして、東に1頭、西に1頭、海馬かいばを。

南に2頭の麒麟きりんを坐らせる。ジヨリーのまえに。

こうして四方をかこみ、国家こっかの城壁じやうへきとした。

應龍おうりゆうは木の上で休む。

城壁じやうへきの内がわに絨緞じゆうたんをひいた。木の葉が屋根やねのようにしげってい

るので、雨にぬれるしんばいはない。

なんとなく公園こうえんで幼児ようじがやる砂場のお城づくりつぽかった。

南が出入り口で、出入りのときは麒麟きりんに動いてもらう。だから、

あたしたちは、麒麟門きりんもんとよんだ。

ジョリーが宮殿きゆうでんだ。

洞ほらは宮殿きゆうでんの奥になる、聖なる場所として、『k O O』を安置あんちした。

「さあ、国家登録こっかとうろくしましょう」

A N K Aは、あたしのケータイから登録とうろくする。そのさい、正式せいしに

『k O O』を保管ほかんしていることを宣言せんげんした。きちんと理由をそえて。

返信へんしんが来る。受諾じゅだくされた。

あたしのクドク・ポイントは権限けんげんの委託いたくを受けたのせいもあって、

QDQ:1066 になっていた。もう、完全かんぜんに実感ない。

ともかく、手つづきは終った。

「国家こっかって、こんな小さくていいの？ ゆっくり歩いても、1分か

からないで外壁をまわれるよ」
がいへき

「大きさは関係ない。」

住む人々がしあわせのためのルールをまもらなければならぬ集団、そのしあわせが外の人におびやかされない場所、それが国家だ。
こっか

国が大きくなるのは、だれのものでもないひろい場所があったか、
クドク・ポイントで買ったか、わるい王さまの国をほろぼしてじぶんの国に吸収したか、
きゅうしゅう だいたい、そのどれかだ」

「神聖シルヴィエ帝国とかゆーのも、そうなの？」

「ああ。」

あれは。たぶん、リアル・ウィルスのせいだよ。ほんとうならば、
あんなに繁栄できるはずはないんだ。
はんえい

帝国は科学的な武力にすぐれ、武力でまさっているからつぎつぎ
国をほろぼし、ほろぼした国を吸収して、大帝国になったんだ
きゅうしゅう

「やっぱ、そういうことなんだ……」

いちれん
一連の事件にシルヴィエがからんでる可能性はある？」

ANKAがあたしを見た。

「その可能性はあるかもしれない。ウィルスの恩恵おんけいにいちばんあやかっている国だ」

「シルヴィエに『kOO』はあったの？」

「あるわけないじゃん」

「じゃ、もし、シルヴィエに『kOO』があれば、無敵むてきになっちゃうのね」

ANKAは、急にだまると、彼女の小書斎しょうしよさいに入ってしまった。

あたしたちは、せまい国をてきとうにくぎってじぶんの領土りょうどにした。
た。

「わたし、公爵エリコね。ここは、先祖代々の所領しよりょう」

「あー、あたし、ミーシャ伯爵はくしやく！」

あたし、ただゴロンとよこになった。

ジョリーって、ゆれの少ない乗り物だったけど、さいきん、猛ス
ピードで走ることが多かったし、ゆられないわけではなかったし、
こうしてひさびさに地面にしゃがんでくつろぐと、なんかほっとし
た。

「らくだわー」

なんとなくおもちゃの家か、箱庭はこにわっぽい。

イースは、ちかくの石や木材をひろってきて足場あしばをつくり、海馬かいば
や麒麟きりんの背せなか越こしに外が見られるようにした。海馬かいばのまわりは液えき
体たいになるので、木の板いたを泛うかべるようにして、その上に足場あしばをの
せていた。

「まわりのようすが見えるようにつくったんだ。

さあ、迦楼羅かるら、木の上に物見台ものみだいをつくりたいから、手つだつてく
れないか」

イースと迦楼羅かるらは、森から木を集めて物見台ものみだいをつくり、はしごを

かける。

周辺の川や森や丘陵地帯が見わたせた。

物見台の、さらにその上では、應龍が休んでいる。

風がこちよい。あたし、おもわず、

「のどかな風景だね。

こんなところで見はりなんて、ほんとにひつようなのかなー」

エリコがタブレット型のタッチパネルを手に憂鬱な表情で、

「あんたたち、のんきなこといつてるわね。

ねー、この記事、見なよ。

ジンは、レオン・ドラゴに着いて早々、人をふるえ上がらせるよ

うな武名をとどろかせたらしいわ」

記事の内容は、南部地方の農民の暴動をおさえて、ジンが武勲を

上げたというものだった。

しかし、エリコが語る、

「ただ、ほかの掲示板とか読むと、農村の13歳の娘が暴行されて殺され、容疑者の若者2人が逮捕されたけれど、逮捕された加害者のうちの1人が警察署長の息子だったとかで、即日釈放され、村人が大反発したってことらしい。

それで、数日つづく暴動になったのよ。

そんな事情をあえて無視して、ジンは、強引に軍武力をもって、抗議するの農民たちを激烈に弾圧したらしい。

そうとう残酷な仕うちをしたらしいよ」

ジンって…

「そのうち決着をつけてやるさ」

イスが暗くつぶやいた。

翌日、ちかくに館を持つ男爵が3人の騎士をつれ、葦毛のりつばな馬に乗ってあらわれた。

「余は、マクシロー・ドルトン男爵である」

大きなうす茶の口髭くちひげをたらし、セイウチっぽかった。

「この谷にながれる川、エジンバールは」

彼は、情感じょうかんをこめ、芝居しばいがかった口調くちようで言葉を区切くぎった。

「北大陸ノルテを南下して大河たいがローマンの激流げきりゅうとぶつかり、裂大陸間海洋ラ・マル・メディテラーノへとながれこむ。

おお、偉大なる、母なる海へ。

しかるに」

エリコが麒麟門きりんもんから出ていった。

「で？

なんなのよ、要件ようけんをいつてくんない？ 詩の朗読ろうどくには、あいにく

きよーみがないんだけど？」

男爵だんしやくの表情が険悪けんあくになる。

「すなわち、この谷は、余よが塩しおやオリーブオイルを荷揚げにあし、羊ひつじの毛をつみこむための、だいじな交易こうえきのかなめ」

ただの小さな舟着き場じゃん（笑）。

「されば、まもなく申請してこの谷一帯を、余の領地としようとしていたところ、どこからともなくあらわれないやしき者たちが余にことわりもなく、余の領地となるべき土地を略奪、あさましき欲望で谷の一部を不法にも占拠し、国家を名乗るしまつ」

「ようは、あんたがグータラしてて、手つづきがおそかっただけじゃん。さかうらみだよ。」

「だいたい、あのへっぽこ棧橋を、まるでものすごい貿易港みたいにいわないでくれる？」

「そもそも、わたしたちの国はここだけなんだから、なんの支障も影響も、……関係すらないじゃん」

「よって、余は、宣戦布告する」

「かなり後悔するとおもうよ？ いいの？」

「貴族に二言はない」

「負けたほうは賠償金ね。^{ばいしょうきん}

いっとくけど、わたし、商学講座出身だから。^{しょうがくこうざしゅつしん}もし支払いがおくられたら、延滞利息つけるよ^{えんたいりそく}」

翌日、蹄の音をとどろかせ、マツクンローが15人の騎士をひきいてあらわれた。^{ひづめ}

海馬の背なか越しに、あたしたちは、ながめる。^{かいば}

「きらびやかだねー。鋼鉄の戦士って感じー」^{こうてつ}

あたしがそういうと、エリコが、

「じつは、意外に貿易でもうかつてるのかねー。^{ぼうえき}田舎の舟着き場^{いなかふなつば}みたいだったけど。あなどれないわ(笑)」

「陣形がない。^{じんけい}

とうてい、プロではない」

そういうと、イースは、麒麟門をあけて歩く。^{きりんもん}

いちど、立ち止まり、騎馬の軍を見すえる。^{きば}つぎの瞬間、風のよ

うに走り、飛び、騎乗きじようの戦士数十人をたおした。

彼女のまえでは、なみの騎士きしなど、案山かかし子みたいなもんだ。

たいがいは、刃身のひらたい部分でなぐられて、騎馬きばから落下らっかさせられる。起き上がろうとする者は、さらになぐられ、気絶きぜつする。

氷こおりの炎ほのおとなつてかがやく剣に、敵のだれもおそれをなした。

「どうした。立ちむかつて来る者はないのか。勇気のある者は、いないのか。」

ぼくらの主権しゅけんをおかす者は、その罪つみを知れ。

おまえたちは、この」

イースが言葉につまった。ヘンな沈黙が起こつたが、彼女が1歩ふみ出すと、マクンロー軍が恥はじもわすれ、見栄みえも捨てて、バラバラになつて、脱兎だつとのごとく退却たいきやくした。

もどつて来たイースは、意気揚々いきようようどころか、むしろ、元気がないくらいだ。

「どうしたの？」

「ぼくらの国には、なまえがない。

国のほまれをたたえて名をいおうとおもったら……ないことに気がついたんだ！」

14 新国家の名わ!?

「むろん、考えていなかったわけじゃないわ」

ANKAが不満げにいった。そうだとおもっていたあたしは、

「やっぱ、そうなんだー。知りたーい。たとえば、どんな、なまえ？」

「……いろいろ考えたわ。最終的には」

「なんにしたのー？」

そういつて、ミーシャも会話に加わる。

「まだ決めてないよ」

「どんなの考えたの？」

「いいたくないよ。いいのがおもしろい泛かばないのよ」

3人、考えこむ。

.....

エリコが着替えて出て来た。

「あんたたちヒマね。わたしは、賠償金ばいしょうきんの請求せいきゅうにいつてくるわ」

そういつて、エリコは、エチカと迦楼羅かるらとジャジュと非録斗ひろとを連れて出ていった。

しばらくして、ケータイが鳴った。

「ユリイカ？ わたし、エリコよ」

「どーした？」

「男爵だんしゃくの館やかたへいこうとしてたのよ」

「知ってるよ」

「そしたら、なんと、ハグレーポルガの正規軍せいぎぐんがいるじゃないの」

「ハグレーポルガ？」

「そうだよ、あの男爵^{だんしやく}の領地^{りょうち}は、ハグレーポルガの国の一部なのよ、知んなかったの？」

んで、もって、ハグレーポルガは小さな国だから、ヴオゼヘルゴの属国^{ぞっこく}なのよ」

「ゾツコク？」

「ほかの国に支配^{しはい}されちゃって、まあ、ご主人さまと召使^{めしつかい}、みたいな関係になっている国のことよ」

「へー」

「まじ、信じらんない、大嘘^{おおうそ}つきなんだよー。

賠償金^{ばいしょうきん}がおしくなったんだわ。どケチよね。

つーか、ま、いま、そーゆー感じなの。館^{やかた}にむかおうとしたら」

「そーかー。館^{やかた}にいくとちゅうで、こっちにむかって来るハグレー

ポルガ軍に出会っちゃったってわけね。

それにしてもはやいわね。まるで、さいしよから軍が待機して
いたみたいな感じで……

エリコ、いま、どのへんなの？」

「川をわたって、森に入って、一つめの丘に立ったら、見えたのよ。
たぶん、3キロメートルくらい離れてるわね。見た感じは、歩兵200、
騎兵30くらいね。」

わたしたちは、急いで退却するわ」

「帰って来るとき、男の子たちに、橋をこわすようにいって」

「いわれなくても、わかってるよ」

電話をきると、ANKAが、

「さあ、準備しようか」

「どうするの？」

イスが物見台から降りて来た。

「ぼくが應龍に乗っていく。麒麟をつれていこう。そうすれば、み

んな乗れる」

A N K Aが、

「川のむこうに、2つの丘にはさまれたせまい道があったね。おびき寄せて、殲滅作戦で料理しよう」

「わかった」

あたしには、なんのことかわからなかった。A N K Aは、ただ、

「兵学講座卒業だからね」

4頭の海馬かいばに四方しほうをまもらせ、ミーシャだけをおいて、あたした

ちは、出発した。

おうりゆう

應龍おうりゆうにイースとユユが乗り、1頭の麒麟きりんにA N K Aとあたしが乗る。

川のこちらがわで、エリコたちを見つけた。だれも乗っていない麒麟きりんにエチカ・迦楼羅かるら・非録斗ひろとを乗せ、ジャジュを應龍おうりゆうに乗せた。

ジャジュとユユがイースを、さいしよの丘を越えた場所で降ろし、

そのあと、エリコを應龍おうりゆうに乗せて、ミーシャの待つ国に送る。

留守番役だ。
るすばん

ちようど、そのころ、イースが敵軍の正面に独りひとで立つ。

「ひきよう者。」

わずかな人数のぼくたちに対するのに、宣戦布告せんせんぷこくすらせず、こんな大軍たいぐんをよこすのか！」

男爵配下の騎士きしがイースを指さし、
だんしやくはいか

「あいつだ、油断ゆだんするな。いつせいに攻撃しよう」

「問答無用で突撃か！ さあ、来るがいい。よこしまな者どもよ」
もんどうむよう

すると、たてがみのついた鉄兜の戦士がサーベルを手にし、声を上げる、

「なにをいうか。」

われこそは、ハグレーポルガ軍に名をかがやかせるストイーク少尉しょうゐである。

きさまらのような、『k O O』を盗んだ賊に、ひきよう者よばわりされるいわれはないわ！

ニュースにも顔が出ておるぞ！

よつて、正義の名のもとに、きさまらを成敗する。天誅を受けよ！

「逆だ。」

ぼくらは悪の手から、聖なる書物をまもっているのだ。おまえたちは、なにも知らない。

どうやら、なにをいつても、ムダなようだな。いいさ、さあ、来い！」

そういいながらも、イースは、逃げるように、敵に背をむけて走りだした。

「おおつ、さすがに大軍に怖れをなして逃げるぞ！

それ、追えっ！」

そのあいだに、エチカ・迦楼羅・非録斗を乗せた麒麟が敵軍の背

後にある小さな森に着陸する。ちやくりく

イースは、2つの丘にはさまれた道に入った。

せまくて、人が2人ならぶのがやっと、馬なら1頭がやっとおれる道だ。

敵の全軍がイースを追って、そこに入る。

そのとたん、敵の背後にかくれていたエチカ・迦楼羅・非録斗かろらひろとが出て来て、道の入り口をふさぐ。

イースもせまい道の出口で身をひるがえし、出口をふさぐようににおうだ仁王立ちする。

どんな大軍でも、歩兵2人か、騎兵1騎きへいずつしか対面できない。

数の意味がなくなった。これがANKAの作戦だ。さくせん

ハグレーポルガ軍は、イースにつぎつぎ斬られる。まったくまえにすすめない。しかし、うしろにも逃げられない。せまい場所ですニツクが起こる。

そんな状況じょうきようのさなか、追いうちをかけるように、ジャジュのあやつる應龍おうりゆうに乗ったユユが空から火矢ひやをはなつ。パニックはさらにはげしくなる。

「撤退てったいだー。ここから出るんだー」

けど、出口もふさがれているのだ。エチカや迦楼羅かるらや非録斗ひろとに近づきとたおされる。

イースは、斬きって斬きって斬きりまくり、敵をじわじわ追いこむ。とうとう入り口のところまで到達とうたつしてしまった。

立っている敵は、もう1人もいない。

ANKAは、たおれている兵士のなかから、マクンロー・ドルトン男爵だんしやくとストイーク少尉しょういを見つけると、問いただす。

「ハグレーポルガ軍の本隊ほんたいはどこ？

どこかに本隊ほんたいがいるのよね？

まさかわたしたちをやつつけるためだけにハグレーポルガが軍を

こんなにはやくよこすわけがないわよね？

もともと、べつの目的があつて、ハグレーポルガ軍が進軍^{しんぐん}していったとしかおもえないわ！」

そっか。たしかにそうだよ。ANKAなんて、あたまいいの！

さすがに少尉^{しょうい}の口はかたかったが、男爵^{だんしゃく}は、もう半泣きで、

「知りません、けれど、ゴルガスト峠^{とうげ}のふもとに数千のハグレーポルガ軍がいます。

そのなかには、ヴォル人がまざっていて、ヴォゼヘルゴの将校^{しょうこう}がいます」

どういうこと？ でも、わかっていないのは、あたしだけみたいだった。

ANKAがいう、

「いこう」

だが、エチカが、

「いや、いったん、国へ帰ろう。エリコやミーシャをのこして長い時間、国をあけるのは、あまりに不_ぶ用_{よう}心_{じん}だ」

イスも同意し、

「エチカの心_{しん}配_{はい}はもつともだ。国に帰ろう。

しかし、ふたたび行_{こう}動_{どう}するならば、はやいほうがいいかもしれない。

ゴルガストは、ヴォゼヘルゴの国境にある峠_{とうげ}で、そのさきはハ
ン・グアリス平原だ。

わるい予_よ感_{かん}がするよ……」

あたしたちは、もどった。ジョリーを旅_{たび}の状_{じょう}態_{たい}にもどして、すぐ
出_{しゅつ}発_{はつ}する。

ANKAがとうとつにいう、

「クラウドつてのは、どう？

国のなまえよ。だって、こんなに自由で、かたちのない、あるよ
うな、ないような、空_{そんざい}気_きのような存在_{そんざい}なのよ。

クラウドしかないわ」

異論いろんはなかった。

あたしたちは、ゴルガストへむかう。風が強くなる。

「イースがさつき、わるい予感よかんがするって、いったでしょ？

なんで、やばいの？」

あたしは、デッキに坐って、エリコにきいた。冷つめたい雨が降りはじめている。あたし、フードを深くかぶった。

「あんた、考えてごらんよ、ハン・グアリスには難民なんみんたちがいるのよ」

「知ってるよ」

「ボダシェヴィ大統領は、ヴォル人で、ヴァルゴ教正統派きょうせいとうはで、難民なんみんたちは、邪魔者じゃまものなのよ」

「？」

ANNAがいった、

「いまは、推測すいそくしてもしょうがない。いけば、きつとわかる」

峠とうげがちかくなつたあたりで、あたしたちは、ジョリーを街道かいどうから

はずし、山林さんりんを走つた。

敵の見はりがあるかもしれないからだ。

「ねー、こんなふうに戦争したりしてると、すぐに、ジンに見つか
つちやうね」

あたしがそういうと、イースが、

「避けさられない運命さだまだからしかたない」

そういった。

雨がさらにひどくなっていく。

あたしたちは、ジョリーを停とめ、キャビンに入つて、監視用かんしようデイスプレーで軍隊ぐんたいの位置いちを確認かくにんした。

軍のようすがくわしくわかったのに、イースは、

「ぼくと迦楼羅かるらでいってこよう。じっさいに見たほうが、いろいろ

とよくわかるだろう」

といって、出ていこうとした。ANKAが、

「待^まって。

ユリイカのケータイを持っていつて。これならサーバーにアクセスできる。

AR (Augmented Reality かくちようげんじつ 拡張現実。現実の情報にさらに情報を

付^ふ加^か提示^{ていじ}する技術)がつかえるから、カメラをむければ、位置^{いちじよう}情報^{ほう}や、その周辺の情報や、映^{うつ}ったものの解^{かい}析^{せき}結果^{けつ}が付^ふ加^かされて映像^{えいよう}に出^でてくる。

さらに情報^{しゆうしゆう}が収^{しゆう}集^{しゆう}できるわ。

収^{しゆうしゆう}集^{しゆう}能力^{のうりよく}が数倍になる」

「わかった。ありがとう。

じゃ、かりるよ、ユリイカ」

そういつて、出ていった。

エリコが電子書籍リーダーを小わきにはさみながら、タブレット型PCで、なにかしらべている。

「見て。」

さいきん、このあたりのあっちこっちで難民が襲撃される事件が多発してるわ」

「あっちこっちって？」

「おもにハン・ゲアリスよ。ほとんどね。」

けど、それ以外にも少しあるみたい。ま、ハン・ゲアリスの周辺だけだね」

「やっぱ、ヴォゼヘルゴの兵隊が襲ってるってことかな？」

「ニュースでは、過激なヴァルゴ教徒の民兵がやってる、って書いてあるけどね」

「民兵？」

「政府の正規の軍隊じゃない、民間人を軍事要員として編成したも

のを民兵みんべいっていうの。

ただし、ふつうは政府せいふが編成へんせいしたものをいうんだけど、このばあいは、ヴァルゴ教会きょうかいが編成へんせいした軍隊ぐんたいなのよ」

「なんで教会おそが襲おそうの？」

「そらー、じぶんたちの宗教しゅうきょうがいちばんだと考えるからさ。

じぶんたちの民族みんぞくが生きのこるためってのも、あるとおもうけど」

ANKAがいう、

「けど、事情じじょうはいろいろ複雑ふくざつだよ。なにこともそうだけど、一概いちがいにはいえない。

それに、もしかしたら、民兵じゃないかもしれないわ」

エリコ、うなづく。

イスと迦楼羅かるらが帰って来た。イスがいう、

「4千人くらいだろう。おもったとおりだったよ。

兵は、たしかにハグレーポルガだ。だが、指揮官は、ヴォゼヘル

ゴの将校で、事実上、ボダシエヴィ大統領の軍隊だ。

それだけじゃない」

エリコがなにかを期待するように、

「なによ、どうしたの？ もったいぶらないでよ」

迦楼羅がこたえた、

「荷馬車にたくさんぐんぶくの軍服がつまれていたんだ」

あたし、なんでそれが気にかかったのか、理解できず、

「べつにふつうじゃない？」

イスがあたしのほうをむく、

「正規軍の軍服ならね。しかし、つまれていたのは、ハグレーポール

ガでも、ヴォゼヘルゴでもない軍服だった」

エリコが声を上げ、

「それって！」

イスもきびしい表情になり、

「そうだ。おそらく民兵みんべいといわれている者たちの正体しょうたいは彼らだ」

ミーシャが泣きそうな顔で、

「ひどい、じゃ、難民なんみんを虐殺ぎゃくさつしているのは」

かるら迦楼羅もうなずく。

「ハグレーポルガ、いや、ボダシェヴィの指示しじでうごいているヴォ
ゼヘルゴ正規軍だ」

A N K Aが憂鬱ゆううつな表情で、

「これだからくりが見えてきたね」

あたし、きく、

「どうする？」

エリコがさげすむような眼で、

「ねー、たぶん、からくりはそれだけじゃないよ」

「え？」

「ボダシェヴィが、なぜ短期間たんきかんで強い権力けんりよくを構築こうちくすることができた

とおもうの？」

「そんなに、はやかったの？ ぜんぜん知らないンけど」

って、あたし。

「イ・エンジェーロ村で、話、いつしよにきいてたじゃん。わすれちゃったのかよ」

「あう」

A N K Aも顔をさらにくもらせ、

「エリコの指摘しできはまちがってないね」

エリコ得意げ、

「でしょ？」

いろいろネット上の書きこみとか、情報を集めてみると、ボダシ

エヴィは、帝国とつるんでいるわね」

ぜんぜん、わかんない、あたし、

「帝国って？」

エリコ、イラつきながら、

「ノルデ北大陸の覇者、はしや軍事宗教国家、ぐんじしゅうきょうこく超大国、ちやうたいこくシルヴィエに決まってるじゃん。

ボダシェヴィの政敵をだまらせたり、せいてき失墜させたり、しつつい暗殺したり
していたのは、シルヴィエの特殊工作員だったらしいのよ」とくしゅこうさくいん

イースが腕をくみ、

「ふーん、なるほど。

けつきよく、しんせいいていこく神聖帝国が世界征服をするための戦略の1つなんだ。せかいせいふく

ボダシェヴィは、ある意味、利用されているんだな」

あたし、わかんない……

「なんみん難民殺して、シルヴィエになんのトクがあるの？」

イースが考えこみながら、こたえる、

「ボダシェヴィは、帝国の力で政権をとったんだ。せいけん帝国にはさからえない。ボダシェヴィが権力を掌握すれば、しやうあくヴォゼヘルゴは、シル

ヴィエの属国状態になる。シルヴィエが難民虐殺に力を貸せば、さらにボダシェヴィは、シルヴィエと離れられなくなる。

それに、ボダシェヴィの政治は、過激すぎてあやうい。難民虐殺がエスカレートすれば、国際的な非難をあびてボダシェヴィ政権は瓦解する。

そのとき、シルヴィエが混乱の調停者として、軍事介入し、事実上、ヴォゼヘルゴを制圧する、ってストーリーかな」

ANKAは、スマート・ブックをひらきながら、

「『kOO』を盗んでいるのも、帝国シルヴィエの可能性が高い。だとすれば、ウイルスも、帝国にいるユーザーがしくんだ可能性はある」

あたし、やっぱわかんない、

「でも、待って、世界のあっちこっちで『kOO』を盗むことができたのは、データをいじったからじゃないの？」

イースがうなずく、

「たしかに、げんじゅう 厳重な警戒のなかにある聖典を盗んだのは、データやプログラムをいじることができるユーザーだ。

シルヴィエにそんな者がいるとは考えにくい。というより、プログラムをいじれるユーザーなんてありえるのか」

エリコも考えこみ、

「うーん、そうだね。それにさ、データいじったとすれば、なんでアカデミアはぶじなの？」

イースが反論、
はんろん

「いや、文書館や兵舎はぶじじゃなかった」
へいしや

そうなんだけど……あたし、

「でも、ウパニシャッド大聖堂は？」
だいせいどう

うん、と、イースも同意し、
どうい

「そうだった。なぜだろうね。あそこには、さらになにかとくべつ

なしくみがあるのかもしれない。

なにしろ、心臓部しんぞうぶのなかの心臓部しんぞうぶだ」

ANKA、スマート・ブックを操作しながらも、あごに手をあてて、眉まゆをしかめ、

「いろいろしらべていておもうんだけど……

やっぱり、ジンのこともふくめて、すべてがシルヴィエの策略陰謀さくくりやくいんぼうだとすれば、つじつまがあうよ。

戦国時代みたいな殺伐さつぱつとした世界が好きなジンをとりこむなんて、帝国ならかんたんでしょう。

たとえば、こういうのは、どう？

まず、ウイルスを蔓延まんえんさせ、プログラムに侵入し、クドク・システムを狂わせる。

そして、なりふりかまわず軍事力で周囲を制しても、マイナス・ポイントにならないようにIEを変える。帝国を強大にする。

その上で、こんどは金や権力で、クドク・ポイントをふやし、特権をえて、セキュリティに干渉かんしょうできる地位を手に入れ、プログラムをいじり、聖典『kOO』を盗み、リアル・ウイルスのはたらきをさらに強める。

あとは、ログを確認して、わたしたちの居場所をつねに把握はあくし、バリユースに見はらせる。で、ジンにわたしたちの位置情報を教えて、『kOO』を奪わせる。どうかな？」

あたし、なんかしっくりこない。

「少し話に飛躍がくない？」

だいたい、なんで、あたしたちにからむのか、わかんないよ。

それに、いくら特権だったって、プログラムをいじるなんてことができるものかなあ？」

A N K A がブックをとじ、

「たしかに、プログラムをいじれる、ってのは疑問だね。

わたしの説じゃ、なんで、わたしたちにからむかも説明できていないし」

あたし、

「それにさ、そんなことしちゃったら、IEの意味がまったくないじゃん。

おかしいよ。そうなら、そのユーザーは、ほかのワールドへいけばいいんじゃない？　なんで、ここなの？

あるいは、じぶんでワールドをつくっても、いいんじゃないの？　だってさー、リアル・ウイルスをつくれるくらいの技術があるんだもの！」

ANKAも眉根まゆねを寄せ、

「謎だね。まあ、人は、いろいろだから、一概におかしいとはいえないかもしれないけどね……

そういえば、今日になって、もう1つ気になることがある。いま、

ジンのうごきがログでとらえられなくなっているのよ」

イスがへいぜんという、

「なるほどね。」

では、そろそろ、ぼくたちがログを見ていることに相手が気づいている可能性があるってことだね。

ともかくも、問題はウイルスだ。ウイルス・プログラムのある場所をさがすのが、いちばん現実的で、かつ重要だよ。

それだけさ」

